

多賀城跡

外郭跡Ⅰ —南門地区—

宮城県教育委員会
宮城県多賀城跡調査研究所

2017・3

序 文

本書は、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査報告書として政庁跡に続く総括編の第2冊目、外郭南門の正式報告書です。

多賀城跡調査研究所は、昭和44年の開設以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を事業の両輪として継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を詳細に解明し、その成果に基づき、環境整備事業によって分かりやすく多賀城の特徴を現地に表現し、県民に親しまれる史跡公園として活用されることをめざしています。

外郭南門跡の発掘調査事業は、昭和45年の第7次調査以来、これまで7回実施して参りました。当初、位置の確認などを目的として開始した調査は、今世紀になり、南門本体の構造と変遷の究明のみならず、築地塀の構造や変遷の再確認、周辺の様相や政庁南大路との関係の把握などを課題として実施してまいりました。平成14、15年に実施した第74次調査では政庁南大路上で八脚門を検出し、その後の周辺の調査により、創建以来一貫して同じ位置にあったと思われていた外郭線が、創建期にはおよそ120mも内側にあったことが明らかとなったことは、広大な遺跡における全体像の把握が一筋縄ではいかないことを改めて実感させるものでした。多賀城第Ⅱ期以降の南門につきましても、遺構の検討と解釈、そしてその検証調査を重ねることによりようやくその構造や変遷といった全体像や周辺の様相が明確になりました。本報告書は、その長年にわたる調査研究の成果をまとめた総括編として公表するものです。

多賀城はあと7年で、創建1300年を迎えます。その記念事業の一環として多賀城市が計画している南門立体復元事業の基礎資料を得ることも一つの契機として実施した調査でしたが、政庁の南面という古代官衙の正面玄関とも言うべき場所の実態を解明し、県として進める政庁南面地区の環境整備事業にも必要不可欠なものでもありました。今後は、これらの成果をもとに県民の皆様が歴史や自然環境に親しめる空間を創造し、地域の誇りとなる歴史資産となるべくこれからも所員一丸となって取り組んで参ります。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた多くの方々に対し、所員一同感謝を申し上げます。

平成29年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所 長 須田良平

例 言

1. 本書は、宮城県が国庫補助を受け、多賀城跡調査研究所が発掘調査を実施した多賀城外郭跡・南門地区の正式報告書であり、外郭跡発掘調査報告書の第1集にあたる。
2. 本書には、多賀城跡の外郭区画施設の解明および整備に係る資料を得ることを目的として発掘調査を実施した多賀城跡第7・48・72・73・74・79・87次調査（1969・1985・2001・2002・2003・2007・2014年度）の成果を掲載した。なお、第74・79次調査については外郭南辺の区画施設に関わる遺構のみを扱った。
3. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会（旧多賀城跡調査研究指導委員会—平成17年の条例改正によりに改称）の指導と承認のもとに行っている。
4. 本書掲載の遺構実測図・写真は、各次調査の担当職員が実測・撮影したものである。
5. 出土遺物の整理・復元・拓本等は、各次調査の年報作成時に臨時職員の補助を得て行っているが、本書作成に当たってその内容確認を行い、瓦埴類については再整理を実施した。各次調査および本書作成に係わる関係者については、第Ⅱ章－3（第7表：p 24）に記載した。
6. 出土遺物の実測は、主として各次調査の担当職員が行ったが、本書作成に際し、新たに瓦埴類については三好秀樹、金属製品については廣谷和也が追加資料の実測を行った。
7. 遺構・遺物のトレースは佐久間順子・高橋里枝が行い、遺物写真は廣谷・高橋透が撮影した。
8. 本書は、所員で討議と検討を行い、三好が執筆・編集した。
9. 本書と、当研究所がこれまでに刊行及び執筆・編集に関わった出版物とで見解が異なる場合は、本書の記載内容が優先する。
10. 調査で得られた資料は宮城県教育委員会が保管している。土器・土製品・石製品・瓦埴類については調査回数ごとに登録し、通し番号を付した平箱に順次収納している。ただし、貿易陶磁器・漆紙文書・木簡・木製品・金属製品については、調査回数に関わりなく抽出し、遺物の種別ごとに登録番号を付して収納している。

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。】

目 次

第Ⅰ章 緒言	1
第Ⅱ章 調査の経過と方法、組織	
1. 調査の経過と概要	7
(1) 第7次調査	7
(2) 第48次調査	9
(3) 第72次調査	12
(4) 第73次調査	13
(5) 第74次調査	15
(6) 第79次調査	16
(7) 第87次調査	18
2. 調査の記録方法	21
(1) 写真記録の方法	
(2) 図面・写真などの整理保管方法	
(3) 東日本大震災による基準点移動の対処法	
3. 調査組織	23
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 政庁南面地区	26
(1) 地形と層序	
(2) 発見遺構と出土遺物	30
i. 門跡と区画施設	30
ii. その他の遺構	36
2. 南門地区	38
(1) 地形と層序	
(2) 発見遺構と出土遺物	39
i. 南門跡と周辺の遺構	43
ii. 南辺築地塀跡と周辺の遺構	71
iii. 南門跡北側の遺構	122
iv. 横穴墓	134
v. 基本層序各層の出土遺物	151
第Ⅳ章 総括	
1. 外郭南門と南辺区画施設	178
(1) 遺構期の設定	178
i. 政庁南面地区	178
ii. 南門地区	179
iii. 政庁南面地区と南門地区の遺構期の対応関係	183
(2) 出土遺物と遺構期の年代	187
i. 出土遺物	187
ii. 遺構期の年代	193
iii. 帰属期が不明の遺構	199
(3) 外郭南門の構築工程と推定規模	200
i. 第Ⅰ期南門_SB2776	200
ii. 第Ⅱ期南門_SB201 A	201
iii. 第Ⅲ期南門_SB201 B	211
(4) 外郭南門と築地塀の所用瓦	214
i. 第Ⅱ期南門・築地塀に葺かれた瓦	214
ii. 第Ⅰ期南門に葺かれた瓦	225
iii. 第Ⅲ期南門・築地塀に葺かれた瓦	226
iv. 第Ⅳ期南門・築地塀に葺かれた瓦	227
(5) 外郭南門と南辺区画施設の変遷	228
i. 第Ⅰ期	228
ii. 第Ⅱ期	229
iii. 第Ⅲ・Ⅳ期	230
2. その他の遺構	231
(1) 南門跡北側の遺構	231
(2) 横穴墓	232
付記 第Ⅱ期多賀城改修前後の陸奥国	
1. 8世紀半ば頃の陸奥国と多賀城の改修	237
2. 天平後半・天平勝宝年間の陸奥国	237
3. 天平宝字年間の陸奥国	240
4. 第Ⅱ期多賀城の改修	243

凡 例

1. 本書で用いた遺構番号は、多賀城跡遺構登録台帳に登録した番号であり、南門以外の地区での番号も合わせた通し番号となっている。また遺構の種別により以下の略号を使用している。

SA (堀跡・柱列跡)、SB (建物跡)、SD (溝)、SF (築地堀跡)、SH (広場)、SI (竪穴住居跡)、
SK (土壌)、SP (横穴墓)、SX (道路跡・整地層・削り出し面等その他の遺構)

2. 政庁跡では、遺構の変遷が第Ⅰ～Ⅳ期の4時期に捉えられており、この変遷は多賀城跡全体でもほぼ有効である。その表記方法と年代根拠は以下のとおりである。

第Ⅰ期：養老・神亀頃(717～728)～8世紀中頃 藤原朝獺による修造

※ 多賀城碑銘文によれば創建は神亀元年(724)、修造は天平宝字6年(762)

第Ⅱ期：8世紀中頃～宝亀11年(780) 伊治公皆麻呂の乱による火災

第Ⅲ期：宝亀11年(780)～貞観11年(869) 陸奥国大地震による被災

第Ⅲ-1期：火災後の暫定的な復興、第Ⅲ-2期：本格的な復興

第Ⅳ期：貞観11年(869)～11世紀前半頃

第Ⅳ-1期：震災後の暫定的な復興、第Ⅳ-2期：北方建物の付加、第Ⅳ-3期：終末期

3. 調査の測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の発掘基準線と定め、その延長線を含めて政庁中軸線と呼ぶ。南北の基準線は真北に対しておよそ1°04′東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標値は、昭和61年の改測・改算結果、東日本大震災後(平成24年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。なお、震災による基準点座標値、標高の変動と対応については第2章-2に記した。

政庁正殿(原点)

日本測地系(第10系) X座標：-188276.1240 m、Y座標：13857.2850 m、標高：33.268 m

世界測地系(昭和61年) X座標：-187967.2834 m、Y座標：13557.1698 m

世界測地系(平成24年) X座標：-187968.3530 m、Y座標：13560.4850 m、標高：32.964 m

政庁南門

日本測地系(第10系) X座標：-188345.2560 m、Y座標：13856.1160 m

世界測地系(昭和61年) X座標：-188036.4147 m、Y座標：13556.0025 m

世界測地系(平成24年) X座標：-188037.4930 m、Y座標：13559.3150 m、標高：29.799 m

※ 日本測地系は旧日本測地系(T.D.)を、世界測地系は日本測地系2000(J.G.D.2000)を意味する。

4. 本書における遺構の位置の表記は、上記測量原点からの平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)によって示している。(例：W5=原点から西に5m、S3=原点から南に3m)
5. 平面図では、複数回の調査範囲が重なる部分について基本的に最終調査の図面を黒線で示し、必要に応じてそれ以前の調査図を赤線で補足している。震災以前に実測した断面図の標高値は、赤字で補正表記した。
6. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖11版』日本色研事業株式会社(1996年)にもとづく。
7. 瓦罫類、土器類の名称・型式分類の基準や年代観等は、『多賀城跡 政庁跡 図録編』、『多賀城跡 政庁跡 本文編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』による。
8. 当研究所の過去の刊行物については、以下の例のように略称を用いる。

『多賀城跡 政庁跡 図録編』 → 『図録編』 『多賀城跡木簡Ⅰ』 → 『木簡Ⅰ』

『多賀城跡 政庁跡 本文編』 → 『本文編』 『多賀城跡木簡Ⅰ 図版編』 → 『木簡Ⅰ 図版編』

『多賀城跡 政庁跡 補遺編』 → 『補遺編』 『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第36冊』 → 『関連36』

『宮城県多賀城跡調査研究所年報2015』→『年報2015』

(複数年の場合は『年報2000・2001』、『年報2011～2014』など)

9. 本書に掲載した遺構・遺物写真の登録番号は、第24表(p236)に示した。

第I章 緒 言

多賀城跡は、宮城県多賀城市市川・浮島の両地区にわたって所在する奈良・平安時代の陸奥国府であり、奈良時代には鎮守府も併置されていた。標高 10～50 m の起伏に富んだ低丘陵上を中心に、南と西で一部沖積地（標高約 4 m）を取り込んだ遺跡の周囲は、一辺が 660～1,050 m の歪な四角形に築地塀もしくは材木塀で画されており、ほぼ中央に政庁が置かれている。

多賀城跡

多賀城跡が歴史的に重要であることは古くから認識されており、多くの学者の研究対象となると共に、地元の人々によって大切に護られてきた。大正 11 年（1922）には史蹟名勝天然記念物保護法により、高崎廃寺跡（後に多賀城廃寺跡と呼称）と共に「史蹟」に指定され、外郭線をも含む多賀城跡の大部分が法的に保護されることとなった。

史跡指定

昭和 35 年（1960）、宮城県教育委員会は多賀城町（当時）、河北文化事業団と共催して多賀城跡とその附属寺院と考えられる高崎廃寺跡の学術調査を実施するため、東北大学文学部の伊東信雄教授を委員長とする「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、発掘調査 5 カ年計画を策定した。

調査開始

多賀城跡発掘調査委員会は、事業初年度の昭和 35 年に多賀城跡と高崎廃寺跡の航空写真測量による地形図作成と遺跡の現況調査を行い、昭和 36 年度から本格的に発掘調査を開始した。昭和 36・37 年に高崎廃寺跡、昭和 38 年から昭和 40 年まで多賀城政庁跡の発掘調査を実施し、廃寺が多賀城の附属寺院で、その伽藍配置は大宰府観世音寺と同様であること、政庁跡が朝堂院的な建物配置をとることなどを解明している（第 1 表）。

これらの成果を踏まえ、多賀城跡と多賀城廃寺跡は昭和 41 年（1966）に特別史跡に指定された。この指定を受けて両遺跡の環境整備計画が企画されたため、多賀城町では「特別史跡多賀城跡附寺跡環境整備委員会」を組織し、環境整備に先立つ発掘調査を、昭和 41・42 年には多賀城廃寺跡、昭和 43・44 年には多賀城政庁跡を対象として実施している（第 2 表）。

特別史跡昇格

年 度	回数	発掘調査対象地区	調査の目的・対象地
昭和35年		測量調査	1/500、1/1000の地形図を作成
昭和36年		高崎廃寺	金堂・講堂・中門・西倉・築地塀
昭和37年		高崎廃寺	塔・僧房・経楼・鐘楼・東倉
昭和38年	1次	多賀城政庁跡	正殿・後殿・中門（南門） 石敷広場・東第一殿・石組溝
昭和39年	2次	多賀城政庁跡	西第一殿・西第二殿・西門 西翼廊・石組溝
昭和40年	3次	多賀城政庁跡	西門・後殿・北門

第 1 表 調査委員会による発掘調査の開始

年 度	回数	発掘調査対象地区	調査の目的・対象地
昭和41年		多賀城廃寺跡	僧房東部・築地塀・金堂西基壇 参道・西方建物・西南建物
昭和42年		多賀城廃寺跡	多賀神社移転地・掘立大房 経楼・西倉
昭和43年	4次	多賀城政庁跡	東西第二殿・東翼廊
昭和44年	6次	多賀城政庁跡	正殿・東楼・東辺築地塀 北東地区建物

第 2 表 多賀城町による発掘調査の継続

昭和 44 年（1969）、宮城県はこれら一連の調査成果を継承し、急速に都市化が進む多賀城跡周辺地域での遺跡保護に万全を期す目的で多賀城跡調査研究所を設立し、特別史跡の調査研究と環境整備事業を直営で推進することにした。発掘調査は、史跡の総合的な研究を目指して設置された「多賀城跡調査研究指導委員会」（平成 17 年度条例改正により「多賀城跡調査研究委員会」へ名称変更）の指導を受けながら 5 カ年計画を策定し、これを積み重ねる方法をとった。その後、昭和 45 年に環境整備事業を開始し、昭和 51 年には多賀城市教育委員会による『特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画』の策定を受け、これとも連動するかたちで発掘調査および環境整備事

研究所の設立

5カ年次数	年 度	対 象 地	発 掘 面 積	調 査 の 目 的
第1次	S44～S48	政庁・外郭・実務官衙地区	30,033㎡	政庁・外郭線・実務官衙域の実態把握
第2次	S49～S53	城内実務官衙・廃寺南地区	21,800㎡	城内・城外南方・廃寺の実態把握
第3次	S54～S58	政庁・外郭南門・作貫地区	12,330㎡	政庁南大路・作貫地区の実態把握
第4次	S59～S63	外郭門と外郭線	7,470㎡	外郭の各門と外郭線の実態把握
第5次	H元～H5	東門・大畑地区	11,820㎡	大畑地区の遺構確認
第6次	H6～H10	東門・大畑地区	12,850㎡	大畑地区西部の遺構確認
第7次	H11～H15	政庁南面地区	8,300㎡	城前官衙の遺構確認・外郭南門の検討
第8次	H16～H20	政庁・政庁南面地区	7,590㎡	政庁・政庁南大路の検討
第9次	H21～H25	政庁正殿・外郭線	3,330㎡	政庁正殿と外郭南面・東辺の検討
第10次	H26～H30	政庁南大路・外郭南門と外郭線・南北大路	(4,580㎡)	政庁南大路の補足調査、外郭南門と外郭南面・西面・北西隅の検討、南北大路の確認

* ()内は予定込面積

第3表 多賀城跡発掘調査事業5カ年計画一覧（宮城県多賀城跡調査研究所）

業の5カ年計画を積み重ねてきている（第3表）。

保存管理と整備

また平成28年3月には、平成23年7月に改定された『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』で示された保存管理の基本方針を踏まえ、多賀城跡を東北地方の古代史上の貴重な歴史遺産として、また県民の憩いの場として整備するための目標と基本方針、実施計画を定めた『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』を策定した。

現在、特別史跡の指定範囲は総面積で1,076,834.83㎡に及ぶ。史跡内の土地は多賀城市が公有化事業を進めており、平成28年3月末で、指定地の57.35%（617,589.84㎡）まで公有化されている。このうち発掘調査を実施した面積は、平成27年度までで114,708㎡であり、総面積の10.65%、公有化面積の18.57%を占めている。

調査の進捗状況

多賀城跡調査研究所は、政庁跡から開始した多賀城内の発掘調査事業を四至の外郭施設やその内部に点在する五万崎・金堀・六月坂・大畑・作貫・城前などの実務官衙地区へと対象を拡げながら継続しており、十分に調査資料が蓄積された政庁地区についてはその成果を総括した正式報告書（『図録編』：1980、『本文編』：1982、『補遺編』：2010）を刊行している。とりわけ、『本文編』は各分野の研究成果をも集約した報告書であり、現在に至るまで多賀城跡調査研究の礎となっている。

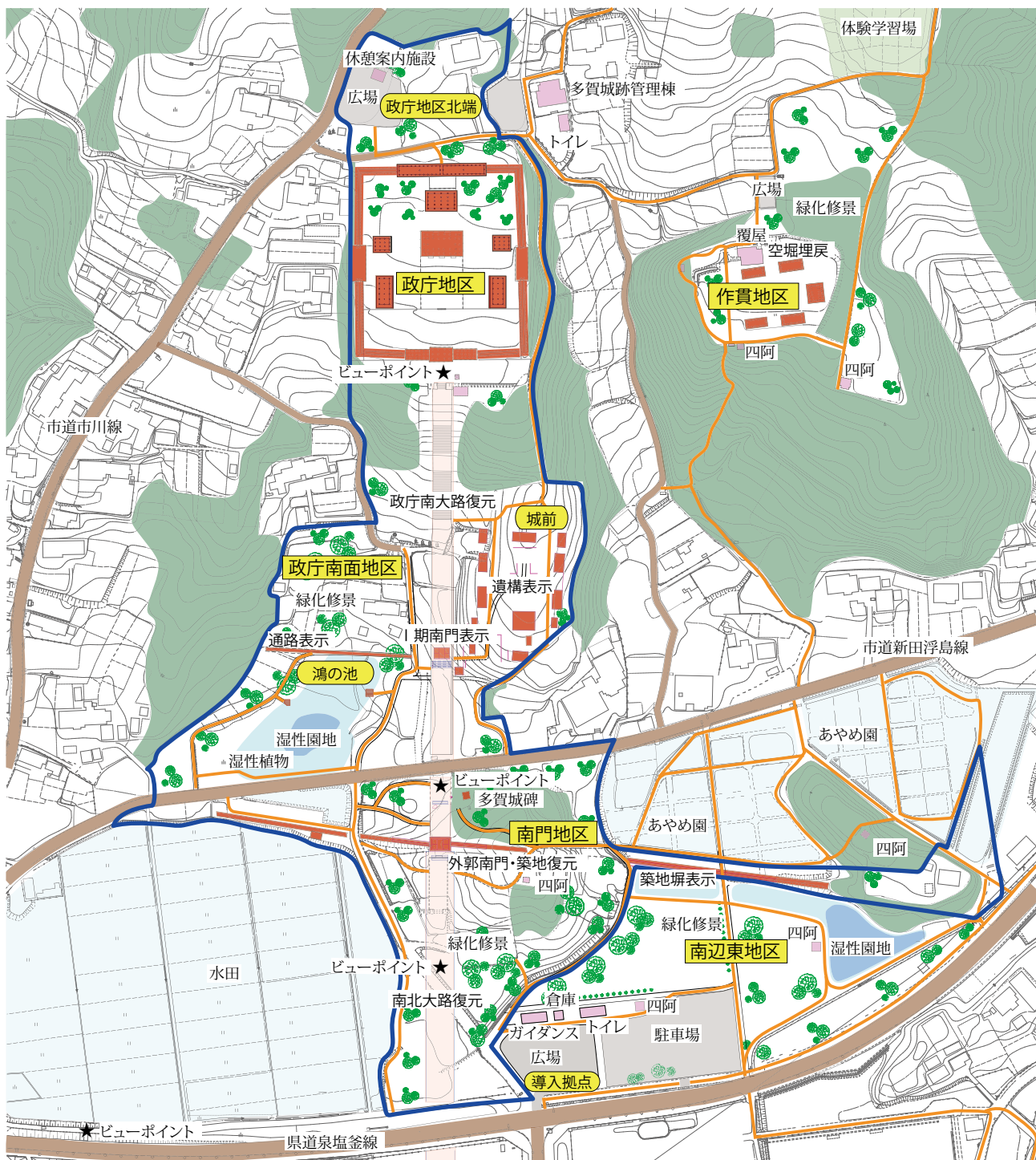
南門復元と

S重点地区整備

一方、外郭区画施設や城内道路、実務官衙地区などについては調査成果の蓄積が進むものの、未解明の課題も多く、正式報告書の刊行には至っていない。このような状況の下、多賀城市は第3次保存管理計画の中で、諸事情によって凍結していた外郭南門（多賀城南門）の建物復元とその周辺整備を当該計画期間中に実施する中心的事業と位置付け、平成24年度に多賀城南門等復元整備事業を再開した。これに呼応するかたちで多賀城跡調査研究所でも外郭南門から政庁にかけての区域（S重点遺構保存活用地区）を重点的に整備する内容に長・中期計画を改め、平成27年度から政庁南大路および城前官衙等を対象とした新たな環境整備事業の5カ年計画を進めている（図版1）。また当研究所では、この整備計画と並行して、S重点遺構保存活用地区の正式報告書を作成することとしており、本書はそのうちの南門地区の正式報告書にあたる。

城外の調査

加えて、特別史跡内における計画的な発掘調査と並行して、史跡周辺での開発行為に関わる遺跡の緊急発掘調査も行われている。これら特別史跡外の発掘調査は宮城県文化財保護課と多賀城市教育委員会・多賀城市埋蔵文化財センターが分担して実施しており、膨大な調査成果が蓄積さ

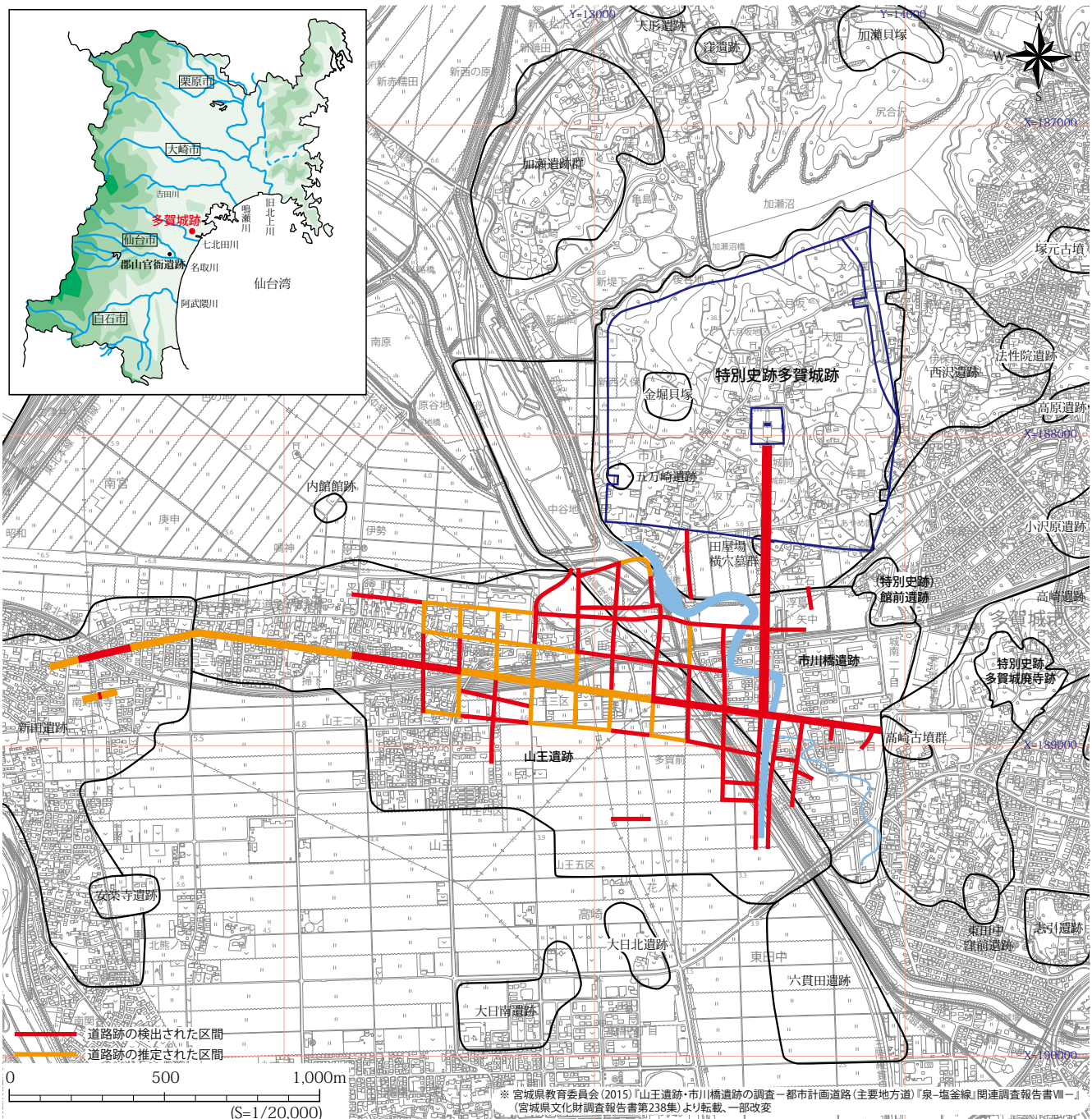


図版1 多賀城跡S重点遺構保存活用地区_整備基本計画図

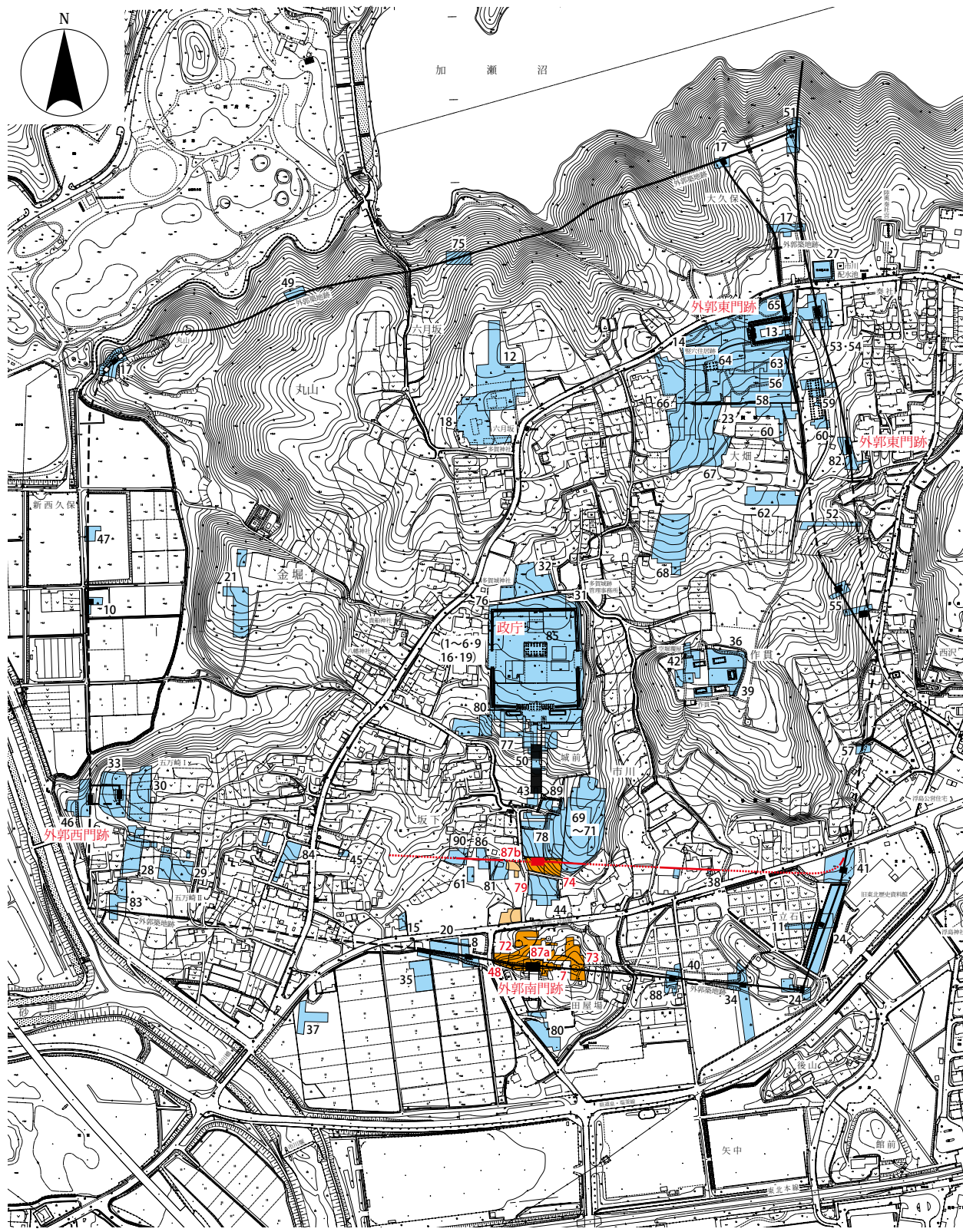
れている。特に、城外南面に位置する山王・市川橋遺跡では多賀城政庁南大路から南に伸びる城外南北大路と外郭南辺築地堀に並行する東西大路を基準とした方格状の地割が展開し、多賀城とその関連施設に係わる人々が居住する都市的な空間の存在が明らかにされている（図版2）。

本報告書の
収録調査

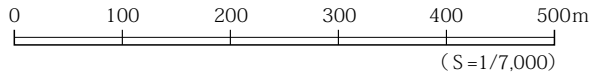
本書で扱う SB201 外郭南門跡が築かれた南門地区は政庁跡から南へ伸びる緩やかな丘陵の南端にあり、この地区を対象とした調査は第7・48・72・73・87次調査（1969～1970・1985・2001・2002・2014年度）となる。また、SB201より約120m北側の政庁南大路上で検出し、創建当初の外郭南門の可能性が考えられるSB2776門跡およびこれに関連する遺構についても本書に収めた（政庁南面地区）。該当するのは第74・79次調査（2002～2003・2007年度）で検出した遺構の一部である（図版3、第4表）。



図版2 特別史跡多賀城跡と周辺の遺跡



- 過去の調査区 (数字は調査回数)
- 本報告書の対象調査区 (第7・48・72・73・74・79・87次調査区)
- 遺構が検出されなかった報告対象区 (第72・87次調査区の一部)



図版3 多賀城跡全体図と調査区の位置

なお、「遺跡の概要」・「研究史」については『本文編』p7～40を参照のこと。

調査年	回数	調査対象地区	調査年	回数	調査対象地区
1960	S 35	航空測量	1984	S 59	45 坂下地区（緊急調査）
1961	S 36	多賀城廃寺跡	1984	S 59	46 外郭西門
1962	S 37	多賀城廃寺跡	1984	S 59	47 外郭西辺中央部
1963	S 38	1 政庁地区	1985	S 60	48 外郭南門・南辺中央部
1964	S 39	2 政庁地区	1985	S 60	49 外郭北辺西部（外郭北門推定地）
1965	S 40	3 政庁地区	1986	S 61	50 政庁南面（政庁南大路）
1968	S 43	4 政庁地区	1986	S 61	51 外郭北東隅
1969	S 44	5 政庁地区南東部	1987	S 62	52 大畑地区・外郭東辺中央部
1969	S 44	6 政庁地区北東部	1987	S 62	53 外郭東門
1969	S 44	7 外郭南門・南辺中央部	1988	S 63	54 外郭東門
1970	S 45	8 外郭南辺中央部	1988	S 63	55 外郭東辺中央部
1970	S 45	9 政庁地区南西部	1989	H 1	56 大畑地区北半部
1970	S 45	10 外郭西辺中央部	1989	H 1	57 外郭東辺南部（西沢地区）
1970	S 45	11 外郭東辺南部	1990	H 2	58 大畑地区中央部
1971	S 46	12 六月坂地区	1990	H 2	59 大畑地区中央部東側
1971	S 46	13 外郭東門	1991	H 3	60 大畑地区中央部
1971	S 46	14 大畑地区	1991	H 3	61 坂下（鴻ノ池）地区
1972	S 47	15 坂下（鴻ノ池）地区	1992	H 4	62 大畑地区南半部
1972	S 47	16 政庁地区北半部	1992	H 4	63 大畑地区北半部
1972	S 47	17 外郭北東隅・北西隅等	1993	H 5	64 大畑地区北部
1972	S 47	18 六月坂地区	1994	H 6	65 外郭東門
1973	S 48	19 政庁地区北西部	1995	H 7	66 大畑地区北西部
1973	S 48	20 外郭南辺中央部	1996	H 8	67 大畑地区西部
1973	S 48	21 金堀地区	1997	H 9	68 大畑地区西部・多賀城碑
1973	S 48	22 高平遺跡（緊急調査）	1998	H 10	69 城前地区南部
1974	S 49	23 大畑地区	1999	H 11	70 城前地区南部
1974	S 49	24 外郭南東隅	2000	H 12	71 城前地区南部
1975	S 50	25 多賀城廃寺跡南大門推定地	2001	H 13	72 外郭南辺中央部（南門の西・北側）
1975	S 50	26 多賀城廃寺跡中門前方地区	2002	H 14	73 外郭南辺中央部（南門の東・北側）
1975	S 50	27 奏社宮西隣（緊急調査）	2003	H 15	74 城前地区（南門・政庁南大路）
1976	S 51	28 五万崎地区	2003	H 15	75 外郭北辺中央部
1976	S 51	29 五万崎地区	2004	H 16	76 政庁地区（東脇殿・後殿・北辺）
1977	S 52	30 五万崎地区	2005	H 17	77 政庁地区（東楼・西脇殿・南面）
1977	S 52	31 政庁北方隣接地区	2006	H 18	78 政庁・政庁南面・城前地区
1978	S 53	32 政庁北方隣接地区	2007	H 19	79 城前地区（南門・政庁南大路・坂下）
1978	S 53	33 外郭西門	2008	H 20	80 政庁南西・田屋場地区（南北大路）
1979	S 54	34 外郭南辺東部	2009	H 21	81 坂下（鴻ノ池）・政庁南西地区
1979	S 54	35 外郭南辺中央部の南側	2010	H 22	82 外郭東辺中央部（伊保石地区）
1980	S 55	36 作貫地区	2011	H 23	83 外郭南西隅・五万崎地区
1980	S 55	37 城外南方（砂押川東岸）地区	2012	H 24	84 五万崎地区（外郭南辺）
1981	S 56	38 作貫地区（南端低湿地）	2012	H 24	85 政庁地区正殿
1981	S 56	39 作貫地区	2013	H 25	86 坂下地区（鴻ノ池外郭南辺）
1982	S 57	40 外郭南辺東部	2014	H 26	87 外郭南門・南辺中央部、坂下地区
1982	S 57	41 外郭東辺南部	2015	H 27	88 外郭南辺東部（立石地区）
1982	S 57	42 作貫地区	2015	H 27	89 政庁南大路・城前地区
1983	S 58	43 城前地区（政庁南大路）	2016	H 28	90 坂下地区（鴻ノ池外郭南辺）
1983	S 58	44 城前地区（政庁南大路）			

※ 調査対象地区の名称は、調査当時のものを使用

第4表 多賀城跡_調査地一覧

第Ⅱ章 調査の経過と方法、組織

1. 調査の経過と概要

政庁跡から南へ伸びる丘陵の末端部に位置する南門地区では、これまで第7・48・72・73・南門地区
87次調査（『年報1970・1985・2001・2002・2014』）を実施し、SB201外郭南門跡とそ
れに接続する南辺築地塀跡の構造と変遷を明らかにしている。加えて、第74次調査（『年報
2003』）ではSB201より約120m北側の政庁南大路上で新たにSB2776門跡を発見し、第79
次調査（『年報2007』）でこの門に接続するとみられる遮蔽施設（SX2909積土遺構）を検出し
た（図版3・4、第5表）。

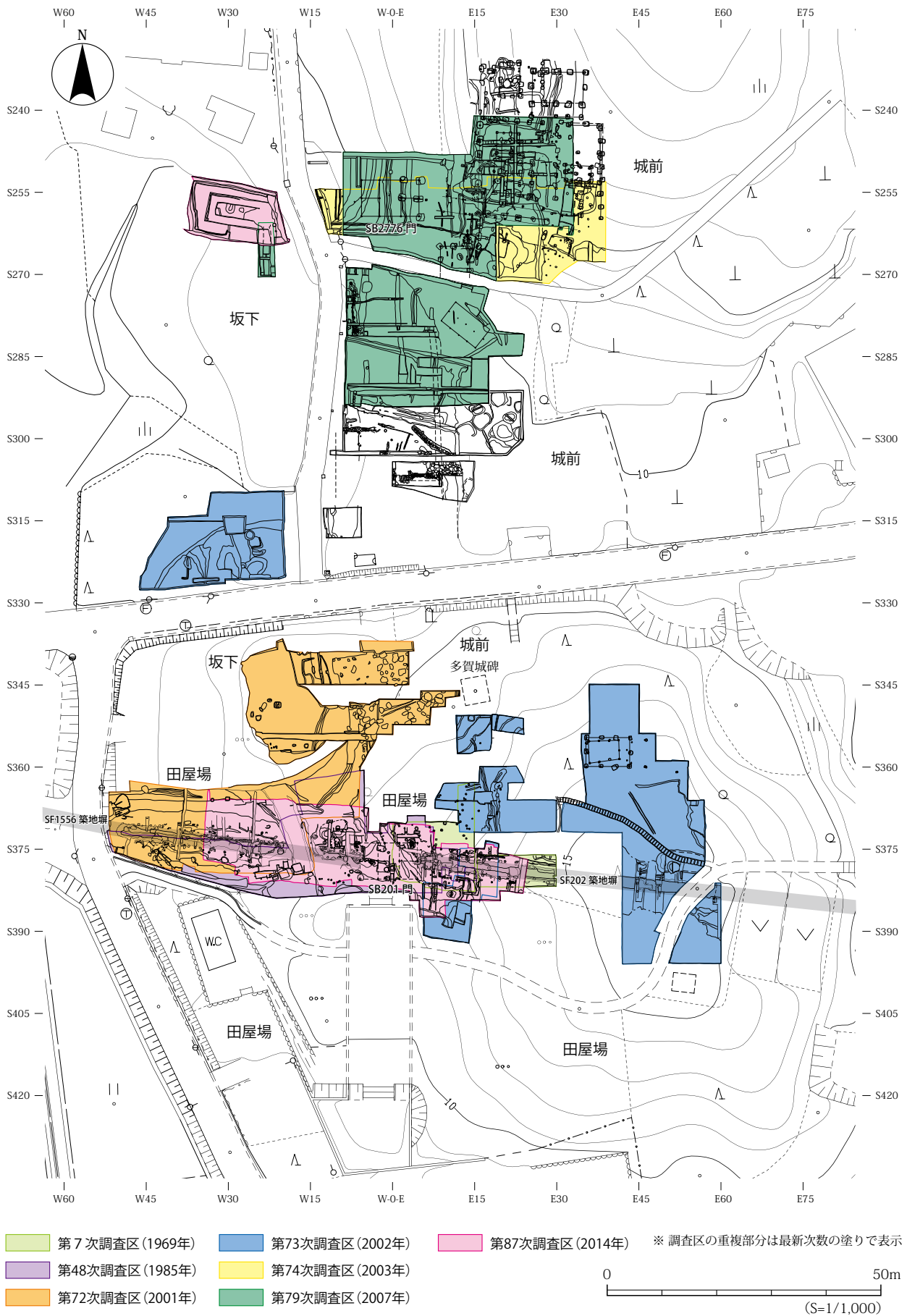
また、外郭南辺築地塀については、第8・20・34・40・88次調査で低湿地に基礎盛土をし 外郭南辺の調査
て築かれた築地塀の実態を解明し、第24・83次調査でその東・西端部の状況を把握している。
北側の南辺については、第38・41・81・86・90次調査および平成18年（2006）の現状変更
に伴う調査でSX2909と一連のものと考えられる区画施設を検出しており、低地部ではその構
造が材木塀であることが判明した。丘陵部での構造やその区画範囲、造営年代などの解明を現在
も継続して進めている。これら南門地区以外の調査成果については稿を改めて総括し、正式報告
書を作成する。

調査次数	調査地点	調査面積	調査期間	主な調査対象遺構	調査主目的
第7次調査	南門東半とその東側築地塀	約264㎡	昭和45年(1970) 3月17日～4月7日	SB201門跡 SF202築地塀跡	南門の位置確認
第48次調査	南門とその西側築地塀	約800㎡	昭和60年(1985) 4月22日～11月22日	SB201門跡 SF202・1556築地塀跡	南門の規模・構造・変遷の解明 築地塀の構造・変遷の把握
第72次調査	南門の西から北側	約1,000㎡	平成13年(2001)4月24日 ～平成14年(2002)2月28日	SF1556築地塀跡	南門西側の築地塀の再検討 政庁南大路の変遷と南門への取り付 き方の検討
第73次調査	南門の東側と北方	約1,800㎡	平成14年(2002) 5月13日～10月31日	SF202築地塀跡	南門東側の築地塀の再検討 南門の南北両側の状況把握
第74次調査	政庁南大路と城前官衛	約1,000㎡	平成14年(2002) 9月11日～11月15日 平成15年(2003) 5月6日～9月24日	SB2776門跡 SX1411道路跡	政庁南大路の路幅と変遷の再検討
第79次調査	政庁南大路と城前官衛 鴻ノ池の北東縁辺	約1,375㎡	平成19年(2007) 5月28日～11月30日	SB2776門跡 SX2909積土遺構 SX1411道路跡	政庁南大路の変遷の再確認 城前官衛南西隅の状況把握 政庁南大路から湿地への移行状況の 確認
第87次調査	南門と東西両側の築地塀 鴻ノ池の北東縁辺	約910㎡	平成26年(2014) 5月19日～12月25日	SB201門跡 SF202・1556築地塀跡 SX3250道路跡	第Ⅱ期南門および築地塀の規模・構 造の再確認 北側南門跡(SB2776)西側の区画施設 の様相把握

第5表 外郭南門跡調査の次数別概要

(1) 第7次調査（図版5・6）

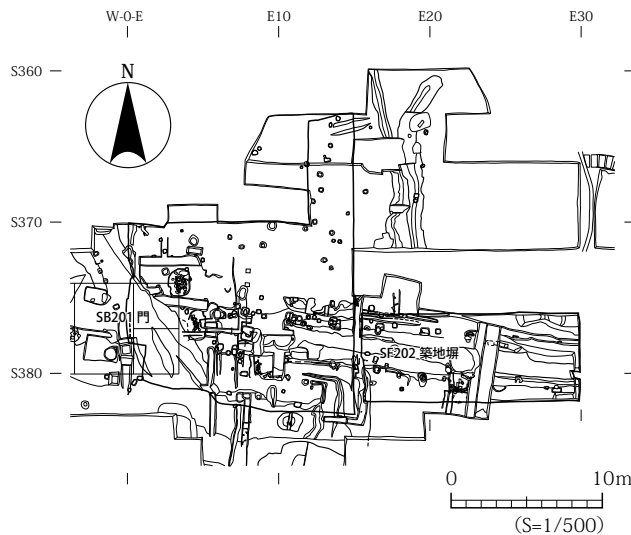
第7次調査は南門地区を対象として行った最初の調査である。この地区は政庁地区の南東部から南へ伸びる細い尾根の南端にあたり、政庁南門跡からは約309m南に位置する。調査区は私有地（当時）との境界に近い政庁中軸線上を西端とし、そこから東へ約30mの幅で設定した。調査期間は昭和45年（1970）3月17日から4月7日までで、調査面積は約264㎡である。対象地と期間



図版4 調査区全体図と各次調査の範囲

この調査では、外郭南門跡（SB201）の東端部とそこから東へ伸びる築地塀跡（SF202）を検出した。SB201については、東妻とみられる礎石据穴3箇所を検出し、2時期の重複があることを確認しており、両時期の門とも政庁中軸線を基準に東西対称のものとすると八脚門になると想定した。また、その東では築地塀本体や寄柱穴、寄柱礎石などを検出し、SF202に3時期の重複があると考えた。

南門と
築地塀の発見



図版5 第7次調査区



図版6 第7次調査区_全景写真

変遷の見解

これらの組み合わせの検討により、外郭南門と東側南辺築地塀の変遷は以下のように捉えられた。

- ① 門跡不明+SF202 A 築地塀跡(築地塀本体と寄柱穴)
- ↓
- ② SB201 A 門跡(礎石式)+SF202 B 築地塀跡(寄柱礎石のみ、SF202 A 本体をそのまま利用か?)
- ↓
- ③ SB201 B 門跡(礎石式)+築地塀跡不明
- ↓
- ④ 門跡不明+SF202 C 築地塀跡(瓦列から推定)

①～④の変遷はそれぞれ多賀城政庁跡遺構期の第Ⅰ～Ⅳ期（以下、多賀城政庁跡遺構期を略す）に対応するものと考えられたが、調査区の制約により②・③の南門の規模・構造は推定に留まり、①・④の南門を把握することはできなかった。

(2) 第48次調査 (図版7～9)

第48次調査は外郭南門周辺およびその西側約50mの範囲を対象として、昭和60年(1985)4月22日から11月22日まで実施した。調査面積は約800㎡である。

対象地と期間

調査の目的は、第7次調査で十分な把握ができなかった外郭南門跡の西側も含めて調査し、その規模・構造・変遷を解明するとともに、門の西方に残る南辺築地塀跡とみられる土手状の高まりの構造・変遷を把握することにあつた。

調査の目的

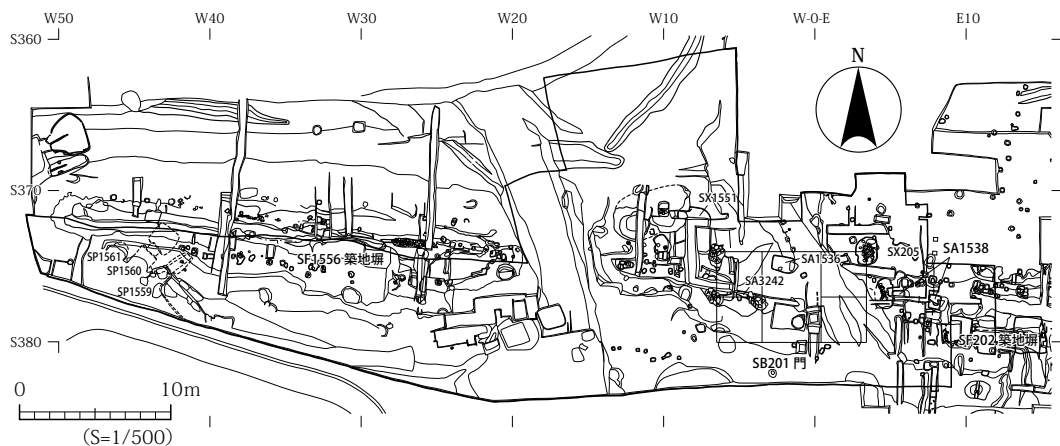
南門跡(SB201)の精査では、新たに3箇所の礎石据穴を検出し、SB201 Bが想定通り八脚門であることが判明した。これより古いSB201 Aについては、礎石据穴が第7次調査で検出し

SB201 門跡
の構造と規模

た1箇所以外に遺存しておらず、規模推定は困難かと思われた。その後、門跡検出面の検討を進める過程で、東半ではSB201 Aが「凹」字形のSX205 掘込地業上に構築されていること、西半にも掘込地業が存在することが分かった。門西半の掘込地業の輪郭がはっきりしなかったため、さらに精査を進めた結果、西半の掘込地業には「凹」字形のものと、この西に接してかみ合うように掘り込まれた「凸」字形のものがあることを確認した。前者は門東半のSX205 と対称の形をなすことからこれと一連のものとして判断し、SB201 Aの基礎地業として全体形を「凹」形に捉え、これをSB201 Aの規模推定の根拠とした。後者は前者より新しく、その西に新たに継ぎ足すかたちで行われていることを重視し、SB201 Bの基礎地業（SX1551）と考えた。

SA1538 柱列 また、これと並行して進めた門東側のSF202 築地塀跡の再検出で、第7次調査の際に第I期とみた築地塀本体の下から東西に並ぶ2個の大きな柱穴(SA1538)を発見した。このことにより、第I期とした築地塀より古い区画施設が存在する可能性が生じたが、門西半の精査でSA1538 柱列と一連とみられる柱穴^(註1)を検出し、これがSB201 Bの礎石掘穴に切られることを確認した。その結果、SA1538はSB201 AとSB201 Bの間の時期のものであること、創建期とみた東の築地塀本体^(註2)がSA1538以降のものであることが判明した。この他、門の周辺で多数の土壙や溝などを検出している。

SA1536 柱穴 さらに、SX205を部分的に除去した下層の地山面で柱穴1個(SA1536)を検出した。創建期の南門跡の可能性を考えたが、築地塀との位置関係が不自然で、残存状況も悪いため、その位置付けを留保した。



図版7 第48次調査区

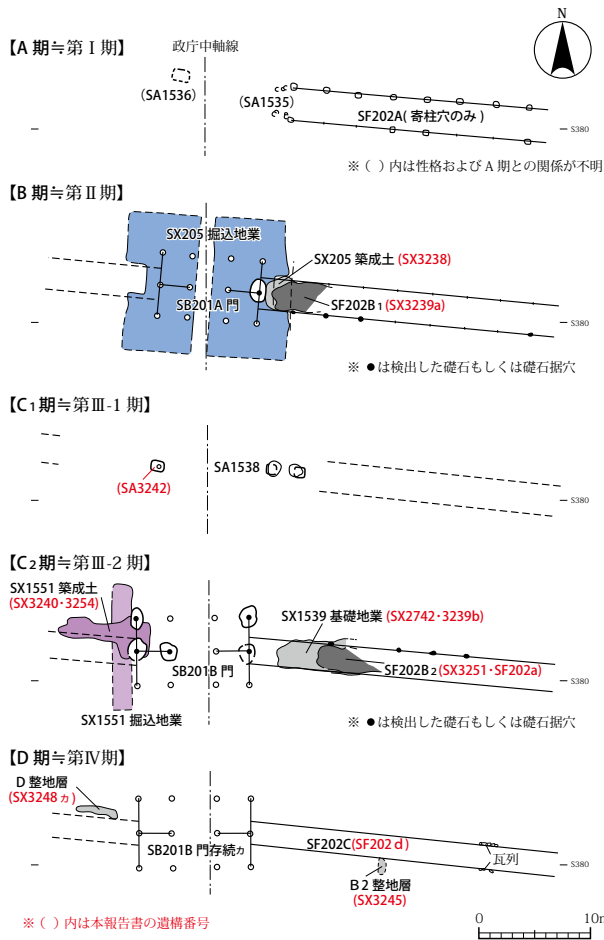


東半部 (南から)



西半部 (南東から)

図版8 第48次調査区_全景写真



門東側では、築地塀の変遷および南門との関係を把握するために調査区を東側へ拡張し、その精査および築地塀本体の断ち割りを実施した。その結果、築地塀には地山面に構築されたSF202 A（積土が削平により失われ、寄柱穴のみ）→SX205 基礎地業（築成土）上に構築されたSF202 B 1（築地塀本体と南側寄柱礎石）→SX1539 基礎整地上に構築されたSF202 B 2（築地塀本体と北側寄柱礎石）という変遷があること、SA1538 柱列はSF202 B 1 とSF202 B 2 の間の時期のものであること、SF202 B 1 積土下の地山面に性格不明の小柱穴群がみられることなどが知られた。また、SF202 B 1 が南門SB201 Aと同様にSX205上に構築されていることから両者は同時期のもものと理解され、これより新しいSF202 B 2 は南門SB201 Bと組む可能性が高まった。その後、第7次調査

SF202 築地塀跡

で検出していた築地塀との関係を整理するため、さらに東方に小地区を設定して補足調査を実施し、南門と東側築地塀の調査を終了した。

この調査成果を踏まえて、外郭南門と東側南辺築地塀の変遷は図版9のように捉え直された。

南門と築地塀の変遷

各期の年代については、B期の門が火災に遭っていると考えられることや出土瓦の特徴などから、A期を第I期、B期を第II期、C1期を第III-1期、C2期を第III-2期、D期を第IV期にほぼ対応するものと位置付けている。

一方、門西側を対象とした西半部の調査ではSF202に対応するSF1556 築地塀跡の存在を確認し、この築地塀がSX1562 基礎整地上に構築されていることや、本体に2時期の変遷（A→B）があること、寄柱穴と思われる柱穴の存在などが捉えられた。

SF1556 築地塀跡

また、調査区の西端では築地基礎整地の下層から横穴墓3基を検出している。横穴墓の発見は多賀城内では初めてで、西端のSP1561は遺存状況が極めて悪いが、東側のSP1559・1560では玄室と羨道が遺存していた。両横穴墓の羨道前方に堆積した炭化物層の上面からは完形の土器、下層からは鉄鏝がまとめて出土し、SP1560の羨道床面では上下に重ねられた完形の須恵器平瓶と土師器杯を発見した。しかし、玄室内に遺物はみられなかった。

横穴墓の発見

なお、この横穴墓群の名称は小字名をとって田屋場横穴墓群とした。

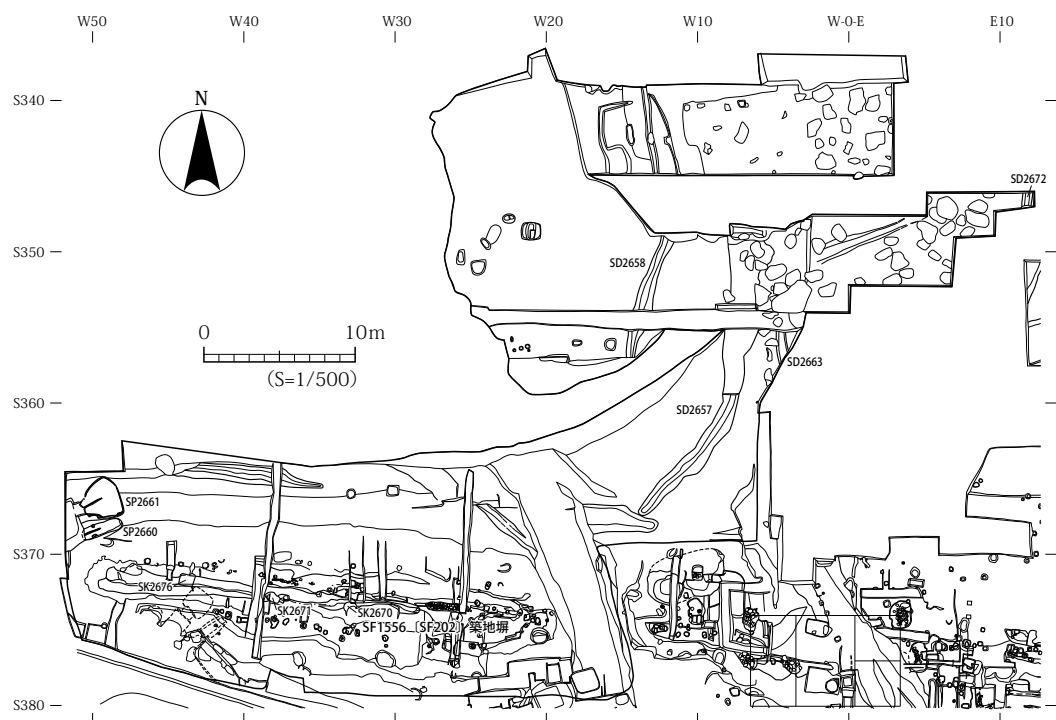
(3) 第72次調査 (図版10・11)

対象地と期間 第72次調査は外郭南門の西から北側を対象として逆「L」字状に調査区を設け、平成13年(2001)4月24日から平成14年(2002)2月28日まで実施した。調査面積は約1,000㎡である。

調査の目的 調査の目的は、第48次調査で把握した外郭南門西側の南辺築地塀跡の構造・変遷を再検討するとともに、政庁南大路跡の変遷と外郭南門への取り付き方を検討することにあった。

南門西側の築地塀 南辺築地塀跡の現況は、高さ1.5m、幅3m前後の土手状の高まりが30mにわたって残っている。表土を除去すると、その南半部は削平を受けていたが、北半部は築地塀本体から崩壊土まで良好に残存していた。その後の精査を経て、この築地塀が基礎整地(SX1562)上に構築されていることを再確認し、築地塀本体には計4回の補修の痕跡があることも確認した。築地塀本体の補修が部分的であることから、その基底幅に多少の変化は生じるものの、位置や方向については造営当初から廃絶まで変化していないと判断した。但し、外郭南門との接続部分は削平により築地塀本体がほぼ完全に失われていたため、細部を検討することができなかった。

築地塀の変遷と補修 外郭南門西側の南辺築地塀については、第8・20次調査で「SF202」、第48次調査では今回再検出した部分に「SF1556」の番号を付してきたが、本調査では一連の外郭南辺築地塀であることを重視して「SF202」に番号を統一し、その変遷と補修についてはアルファベット小文字a～eで表記している。SF202 a・cではそれぞれに伴うとみられる寄柱穴、SF202 b・eでは嵩上げ整地層を確認しており、SK2670・2671・2676土壌との関係や過去の調査成果を踏まえてSF202 aが第Ⅰ期、SF202 bが第Ⅱ期、SF202 c・dが第Ⅲ期、SF202 eが第Ⅳ期に位置付けられる可能性を指摘した。なお、SK2670・2671・2676土壌は規模・形状・堆積土の特徴が類似し、ほぼ等間隔で並ぶことから一連の遺構とみられ、築地塀上部を削り取る大規模な改修であることを踏まえて、伊治公皆麻呂の乱後の暫定的な復旧に関わる遺構と推定している。



図版10 第72次調査区



図版 11 第 72 次調査区_全景写真

調査区東部にあたる南門北側一帯では、近世以降の遺物を含む堆積層が岩盤直上を覆っており、古代の遺構の残存状態は悪かった。検出した遺構は溝 5 条と整地層 2 箇所、その位置関係から城内の主要道路である政庁南大路の側溝と路面下の整地層の可能性が考えられた。

南門北側の状況

また、調査区西端の築地基礎整地下で新たに横穴墓 2 基 (SP2660・2661) を確認した。いずれも玄室から羨道部にかけて遺存しており、SP2661 の玄室・玄門床からは完形の須恵器提瓶や広口壺、鉄製品が出土した。第 48 次調査で発見した 3 基を合わせると計 5 基の横穴墓を検出したことになり、周辺の地形からは築地塀本体の基礎整地下や本調査区の北西にさらに複数の横穴墓が埋没している可能性がある。

また、調査区西端の築地基礎整地下で新たに横穴墓 2 基 (SP2660・2661) を確認した。

新たな横穴墓

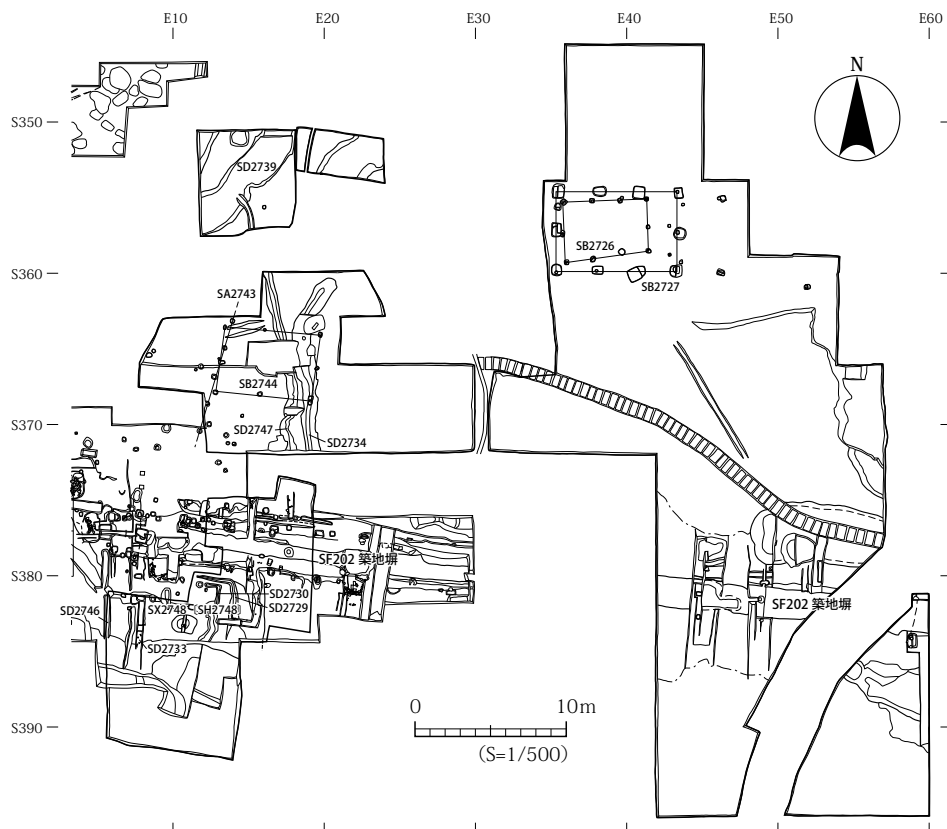
(4) 第 73 次調査 (図版 12 ~ 15)

第 73 次調査は外郭南門の東側と北方を対象として 2 つの調査区を設け、平成 14 年 (2002) 5 月 13 日から 10 月 31 日まで実施した。調査面積は約 1,800㎡である。

対象地と期間

調査の目的は、第 7・48 次調査で捉えた外郭南門東側の南辺築地塀跡の構造・変遷をさらに

調査の目的



図版 12 第 73 次調査区 (南門地区)

範囲を拡げて再検討するとともに、外郭南門東部の南北両側の状況を把握することになった。なお、北方の調査区（政庁南面地区の南端部）は通称「鴻ノ池」の低湿地部分の南東岸を検出する目的で市道新田－浮島線の北側に設定したものである。



図版 13 第 73 次調査区 _ 全景写真

SF202 の再検討

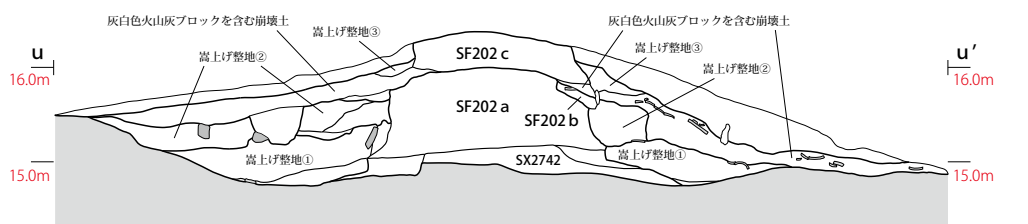
南門東側では、調査対象地が多賀城碑覆屋に近接し、年間を通じて見学者

が多く訪れる史跡公園内であるため、園路や石碑、説明板などの公園施設や樹木を避けて調査区を設定した。外郭南辺築地塀については、第 7・48 次調査と重複する E 12～19 区間（南北の発掘基準線の東 12～19 m の区間）と E 42～60 区間（同東 42～60 m の区間）の 2 箇所を調査し、双方の築地塀跡（SF202）に 3 時期の変遷（a～c）があり、積土の特徴や補修部位、嵩上げ整地の状態などがほぼ対応することを確認している。

解釈の修正点

また、過去の調査成果と今回の成果を比較検討し、以下の点について修正を加えた(図版 14)。

- ・第 48 次調査で SF202 B 2 と一括した SX2742 基礎整地上の築地塀本体は a～c の 3 時期に分かれ、a と b・c の積土間に灰白色火山灰を含む崩壊土が介在している。また、築地塀の南北両側には 3 時期の嵩上げ整地層が残存しており、嵩上げ整地①は b 築地塀、嵩上げ整地③は c 築地塀に伴うものとみられる。
- ・第 48 次調査で SX1539 基礎整地とした層は、E 11 の東西で異なる層であることを確認した。E 11 以東は SX2742 基礎整地、E 11 以西は SF202 a（第 48 次調査の SF202 B 1）築地塀本体の一部と改める（SX1539 は欠番扱い）。さらに E 11 以西のこの層について、第 48 次調査では SA1538 柱列と重複し、その抜取穴を覆っているとみたが、再検討の結果、逆に抜取穴に切られていると判断した。
- ・第 48 次調査で SF202 A とした寄柱穴のうち、第 7 次調査の E 11 以東で検出した寄柱穴の検出面は、地山面ではなく SX2742 基礎整地上面である（E 11 以西の検出面は地山面）。つまり、これらの寄柱穴は少なくとも嵩上げ整地②以前で、SF202 a に伴う可能性が高い。
- ・第 48 次調査で SF202 B 1・B 2 築地塀跡の寄柱礎石としたものは、いずれも嵩上げ整地上面との高低差からみて、地上に露出していた礎石ではなく、柱穴掘方内に埋置された礎盤であった可能性がある。その場合、SF202 B 1 の寄柱礎石は SF202 b に伴う寄柱穴の礎盤、



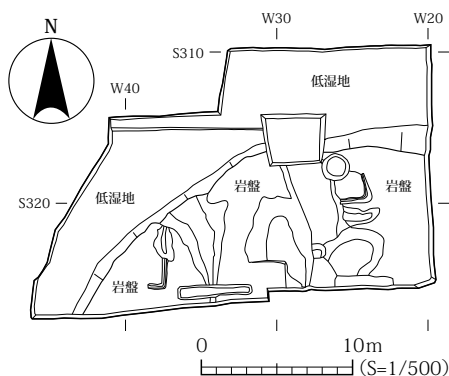
図版 14 第 73 次調査における築地塀層序の見解

SF202 B 2 の寄柱礎石は SF202 b 以後で、SF202 c より古い築地塀に伴う寄柱穴の礎盤と理解される。

その結果、第 48 次調査で寄柱穴の存在から設定した A 期の築地塀 (SF202 A) は存在しないこととなり、南門東側で最も古い築地塀はこの寄柱穴を伴う SF202 a (SF202 B 1) となる可能性が高まった。この SF202 a の年代については、崩壊土に多量の焼土が含まれることから第 II 期以前との考えを示し、灰白色火山灰 (T o-a) 粒を含む崩壊土上に築成されている SF202 c については第 IV 期以降で、灰白色火山灰降下以後に位置付けた。

南辺築地塀の南北両側では、表土直下が基盤の岩盤であることが確認され、古代の堆積層は残っていなかった。検出した遺構には北東部の掘立柱建物跡や南門周辺の溝などがあり、門の南側では岩盤を削り出した平坦面も確認している。この平坦面については、北東隅で排水施設とみられる溝 (SD2729・2730) を検出し、第 48 次調査で平坦面上の A 3 層上面が焼け、その上に焼土を含む層が堆積することを確認していることから広場^(註3)と認定した。門北側の平坦面についても南北溝 (SD2734・2747) を東辺とし、その西側に広がる広場の存在を想定しているが、判然としない。なお、門南側では南北大路の東側溝の可能性のある溝 (SD2733・2746) を確

南北両側の状況



図版15 第73次調査区(政庁南面地区)

認したが、北側では政庁南大路の東側溝を検出できなかった。

政庁南面地区の南端部に設定した調査区では、南東部の表土直下が基盤の岩盤であることを確認し、鴻ノ池の低湿地部分の南東辺が明らかになった。しかし、岩盤上は宅地造成の際に大規模な削平を受けていて古代の遺構は検出されなかった。また、低湿地部分の掘り下げも行っていないため、本報告書では説明を省略する。

鴻ノ池

南東部の調査

(5) 第 74 次調査 (図版 16・17)

第 74 次調査は政庁南面地区東半に位置する城前官衙が載る丘陵の南端を対象として、平成 14 年 (2002) 9 月 11 日から 11 月 15 日まで、平成 15 年 (2003) 5 月 6 日から 9 月 24 日までの 2 カ年にわたって実施した。調査面積は約 1,000m²である。

対象地と期間

調査の目的は政庁南大路の路幅と変遷を再検討することであったが、平成 14 年度の調査で道路上に位置する掘立柱建物跡 (SB2776) の柱穴を検出し、周囲を広く調査する必要性が生じたため、調査を翌年度に繰り越している。

調査の目的

平成 14 年度の調査では、SB2776 の柱穴を政庁中軸線の東側で 3 個検出した。西側は削平のため残存しておらず、南への伸びを確認するために部分的に調査区を拡張したが、柱穴は検出されなかった。SB2776 は道路上にあることから門の可能性があり、門とすれば接続する区画施設や東側の城前官衙との関わり等の解明など様々な課題が生じたため、次年度に調査区を拡大して再調査することとし、一度埋め戻しを行った。

SB2776 門跡

平成 15 年度は調査区を前年度より東側へ拡張し、城前官衙の第 69 次調査区と一部重複するよ

うに設定し、SB2776の南北両側も拡張した結果、北側でSB2776の柱穴を新たに2個確認した（うち1個は一部のみの検出）。SB2776は東西1間以上、南北2間の建物で、東から1間目の建物内部にも柱穴が存在することが判明し、この建物を門跡と仮定して検出した柱穴を政庁中軸線に対称に折り返すと東西棟の八脚門に復元できる。この

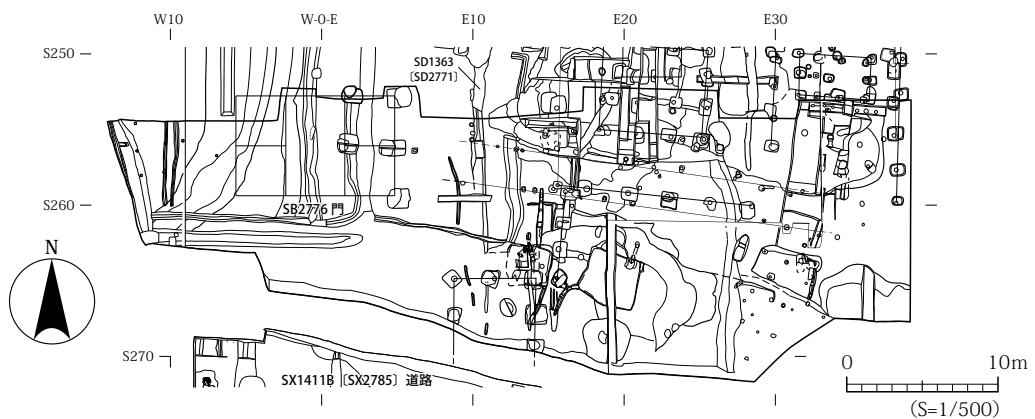


図版 16 第74次調査区_全景写真

門跡は政庁南門の南約190m、外郭南門の北約120mに位置することとなり、帰属期については第Ⅲ・Ⅳ期のSX2785道路跡^(註4)より古いと考えられることや門の構造が掘立式であることなどから第Ⅰ期の可能性を指摘している。なお、門と接続する区画施設については明らかにできなかった。

周辺の検出遺構

また、政庁南大路の盛土が失われてほとんど遺存していなかったため、道路跡の変遷を再確認する目的は果たせなかったが、第Ⅲ・Ⅳ期の道路東側溝とみられるSD2771^(註5)や城前官衙の建物跡と堀跡の一部、竪穴住居跡などを検出している。これらの遺構と出土遺物については、政庁南大路もしくは城前官衙の正式報告書で詳細を述べることとし、本報告書では説明を加えない。



図版 17 第74次調査区

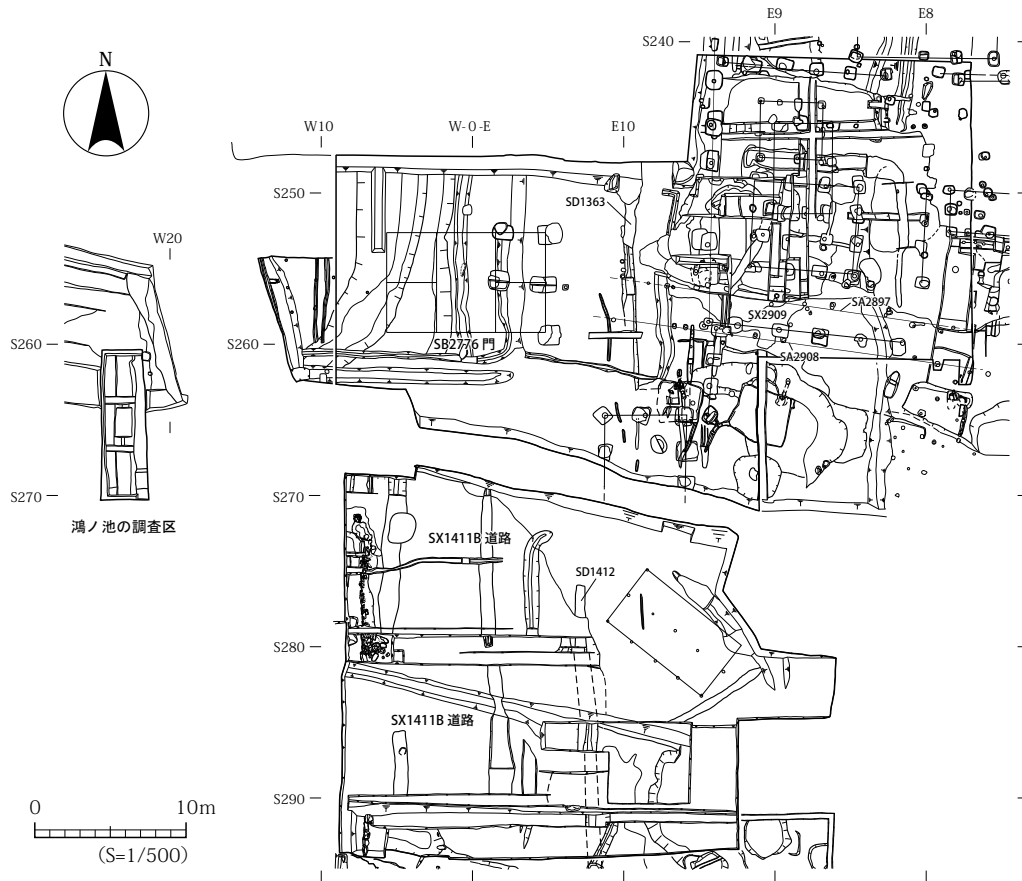
(6) 第79次調査 (図版 18・19)

対象地と期間

第79次調査は政庁南面地区の城前官衙建物群と鴻ノ池の北東縁辺を対象として2つの調査区を設け、平成19年(2007)5月28日から11月30日まで実施した。調査面積は約1,375㎡である。

調査の目的

調査の目的は、政庁から外郭南門までの区域を重点的に環境整備する計画に先立って主要な遺構のデータを収集することであった。政庁跡の南250～290mに設定した政庁南面地区では、鴻ノ池の低湿地が西から沢状に東の丘陵部へ入り込む地形となっており、この場所にかかる道路跡の様相を連続的に捉えてその変遷を再確認することと、城前官衙南西隅部分の状況を把握することを調査の主眼としていた。一方、鴻ノ池の調査区は道路から湿地への移行状況を確認する目



図版 18 第 79 次調査区

的に設定した。

城前官衙の調査では、政庁南大路の道路上で門跡 (SB2776) を再確認し、北側柱列の東から 1 間目の柱穴全体を検出した。また、その東側で約 2.2 m の間隔で平行して東西に伸びる柱列の間に積土遺構 (SX2909) を発見し、SB2776 に接続する区画施設の可能性が窺われた。SX2909 はこの地区で最も古い遺構の一つであり、他に同時期の遺構として整地層、土壇、据石などがある。

SX2909 積土遺構

この場所の政庁南大路跡の様相をみると、大規模な盛土によって道路が造成されており、第 I・II 期の約 13 m 幅道路では西端に石垣を伴うこと、第 III 期に約 23 m に拡幅された道路を含めて当初から政庁中軸線を基準に造られた直線道路であることなどが判明している。城前官衙について

政庁南大路
と城前官衙



(北から)



鴻ノ池の発掘区 (南から)

図版 19 第 79 次調査区_全景写真

ては、A期官衙（第II期）→B期官衙（第III期以降）の変遷が捉えられた。第78次調査の成果と合わせてA期官衙の計画性の高さを再確認し、B期官衙の南西隅の様子や入口の位置が明確になった。

鴻ノ池
北東部の調査

鴻ノ池の調査区では、11世紀頃以降の溝4条（うち1条は近世以降）を確認したが、それ以前の遺構は検出されなかった。近年まで宅地となっていた対象地には、その造成時の盛土が50cm前後の厚さで残存しており、以下の堆積層最下位では東側の政庁南大路跡を覆う土と一連の灰黄褐色シルト層（政庁南面地区基本層序第III層）が直接地山の岩盤を覆っていた。この層からは11～12世紀頃の白磁が出土しており、旧表土が全く認められないことも踏まえると、11世紀以降に政庁南大路を含めた周辺部は大きく削平を受けていると考えられる。

報告対象の遺構

本報告書では、第79次調査区の北半部^(註6)を対象とし、この場所で検出した第I期の外郭南門の可能性のあるSB2776とそれに接続する区画施設とみられるSX2909、周辺の同時期の遺構について詳細を述べ、他の遺構については必要に応じて概要を説明する。

（7）第87次調査（図版20～23）

対象地と期間

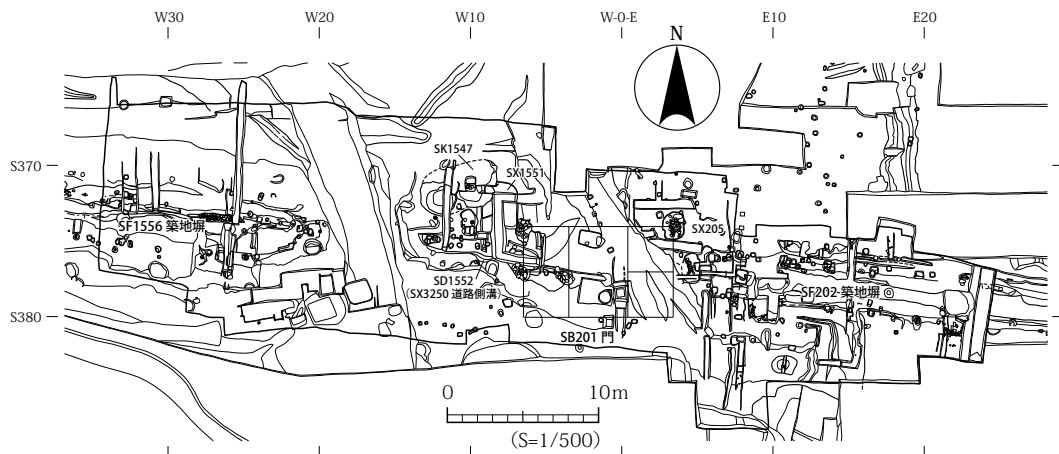
第87次調査は南門地区のSB201外郭南門跡とその東西に接続する南辺築地塀跡、および政庁南面地区のSB2776門跡西側の丘陵部（鴻ノ池の北東縁辺）を対象として2つの調査区を設け、平成26年（2014）5月19日から12月25日まで実施した。調査面積は約910㎡である。



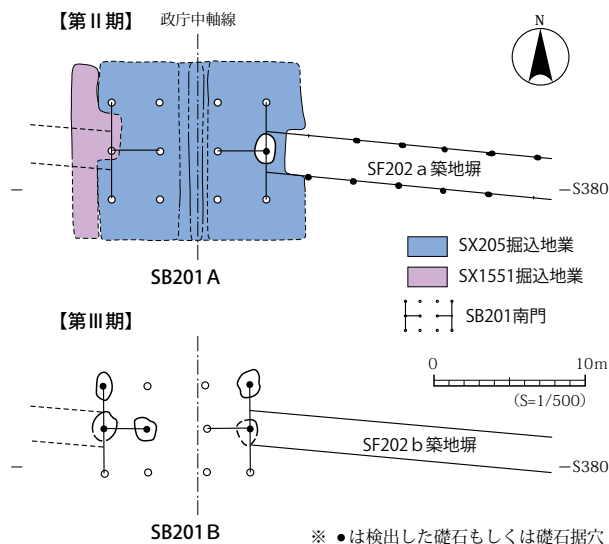
図版20 第87次調査南門区_全景写真

調査の目的

調査の主目的は、多賀城市が計画している多賀城南門の建物復元に向け、南門部分を中心に復元の対象となる第II期南門および築地塀の規模や構造を再確認することであった。一方、この南門の約120m北側にあたる政庁南面地区の丘陵部では、近年の調査で第I期と考えられる掘立式八脚門（SB2776）とその東側の



図版21 第87次調査の南門調査区



図版 22 外郭南門と掘込地業_第 87 次調査の見解

区画施設 (SX2909) を検出しているが、門西側は未調査であった。そこで、門の西脇に取り付く区画施設の様相を把握する目的でこの場所に調査区を設定した。

南門地区の調査では、SB201 外郭南門跡の構築に伴う 2 回の掘込地業 (SX205・1551) の方向がともに政庁中軸線とほぼ一致すること、いずれの掘込地業の埋土にも焼土は含まれないこと、第 III 期とみていた西側の SX1551 掘込地業が、多量の焼土と炭化物粒を含み、第 II 期終末の伊

治公弣麻呂の乱による火災の後片付けをしたと考えられる SK1547 土壌より古いことなどが捉えられた。これらの成果によって、従来は築地線の方向と同一とみていた第 II 期南門の方向が修正されるとともに、SX1551 が第 II 期に遡ることから、当該期南門の規模をより大きく推定することが可能となった。また、東西の築地堀跡についても、そのあり方や変遷に従来とは異なる解釈の余地があることが判明している。

第 I 期の南門については、本調査区内に SB201 A より古い掘立式の南門跡は存在しないことを確認している。併せて、SB201 A より古い道路跡 (SX3250) が存在することを把握した。

鴻ノ池の調査では、まず対象地内の南側を掘り下げた。これは区画施設の想定線上にあたる北側に雨水管が埋設されており、その安全性を考慮しながら調査を進めるためであった。その結果、この場所では第 I 期の区画施設に関連する遺構を含め、遺構自体がほとんど検出されず、旧地形は東から西へ向かって比較的急傾斜で下っていることが判明した。地山は凝灰岩の岩盤で、その傾斜角は政庁南大路に近い東端部で約 25°、それより西は 10～15°である。

区画施設関連の遺構はより北側に存在するとみられるが、テラスを設けて階段状に掘り下げた西端部の地山面の標高は 4.5 m で、地表面からの深さは約 3.0 m に達した。遺構の検出には予想以上に深い掘り下げが必要であり、雨水管と隣接する民有地の安全を確保した上で北側の調査を進めることは難しいと判断し、今回は南側の地形と埋没状況の把握に止めた。

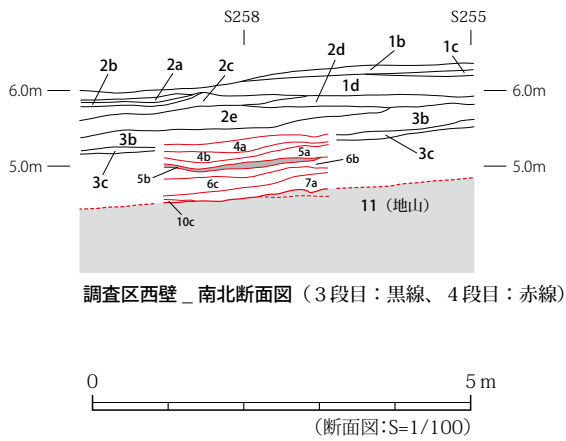
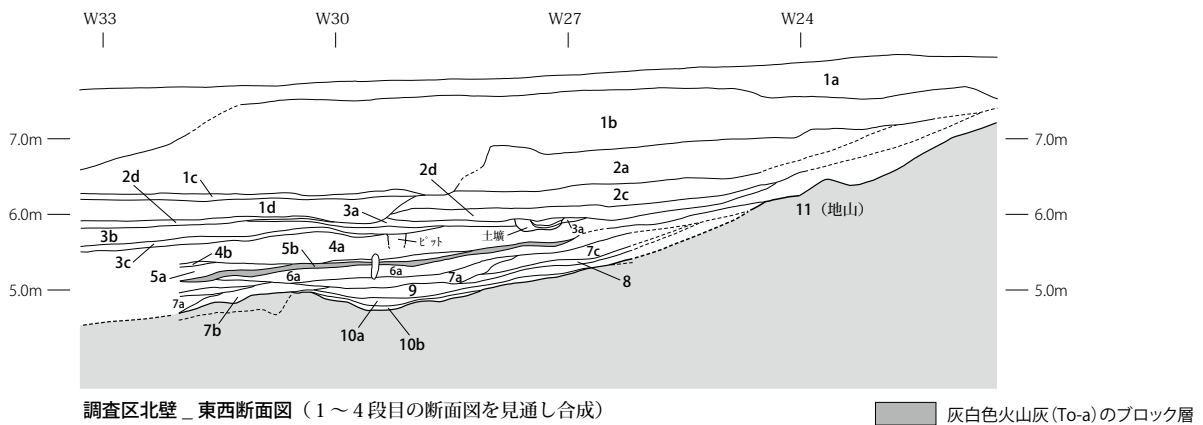
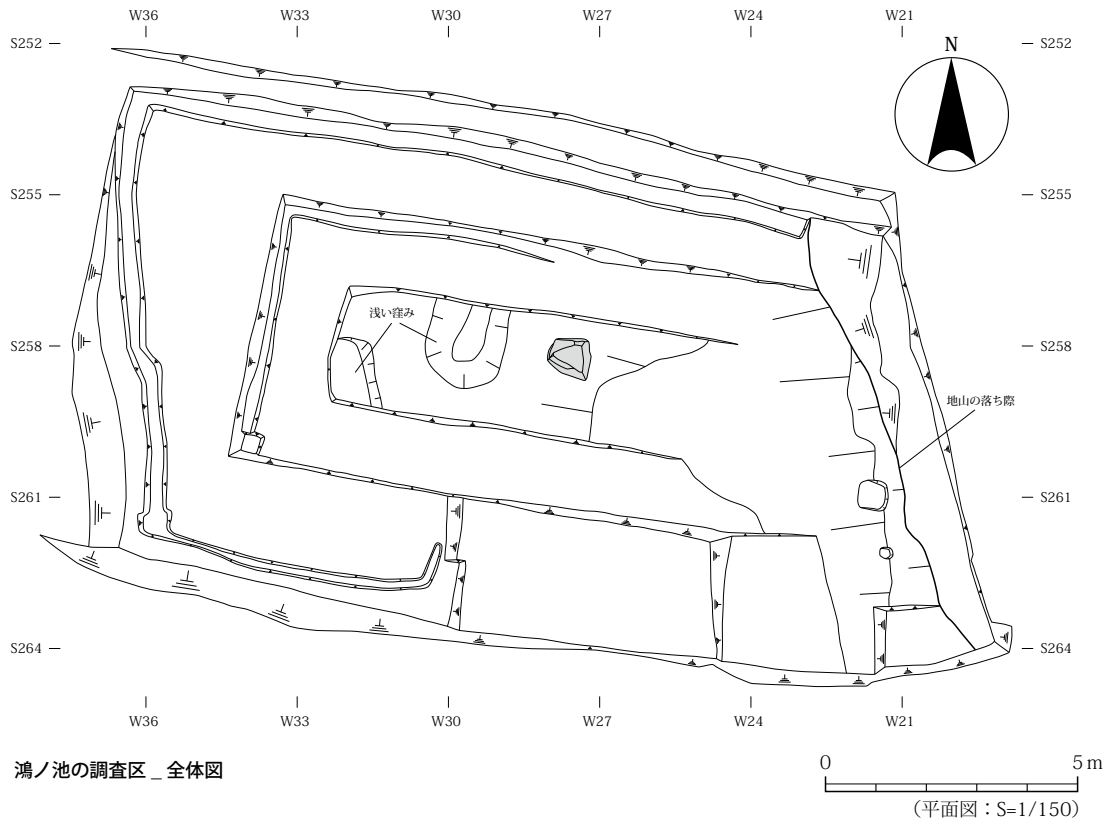
堆積土は 11 層に大別され、第 1 層は盛土とそれ以前の表土・耕作土、第 11 層は地山岩盤である (図版 23)。第 2～10 層は地形に沿って斜面に堆積した自然堆積土で、第 2 層は政庁南面地区基本層序の第 III 層に相当し、第 5 層には灰白色火山灰 (To-a) がブロック状に含まれる。遺物をみると、灰白色火山灰降下以前の第 6 層から 9 世紀後半～10 世紀前半頃の土師器坏・甕と須恵系土器坏が出土しているが、総じて遺物量は少なく、まとまりもない。

この調査区については、遺構が未検出でまとまった遺物も出土していないため、上記の内容をもって本書の説明とする。

再調査の成果

第 I 期の南門

鴻ノ池
北東縁辺の調査堆積層と
出土遺物



図版 23 第 87 次調査の鴻ノ池調査区_平・断面図、写真

2. 調査の記録方法

多賀城跡は標高 4 m の沖積地から 50 m を超す丘陵地にかけて立地し、広大な面積をもつ単一遺跡であることから、長期間にわたる調査を円滑に、しかも一貫して高精度に遂行するためには遺構・遺物の調査と記録の方法を統一しておく必要がある。当研究所の遺構・遺物の調査および記録化の方法は、『本文編』p70～74 に示した通りであるが、写真記録の方法と記録資料の整理保管方法に変更点が生じている。

(1) 写真記録の方法

写真による記録は、これまで 35mm モノクロ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、主要な遺構・遺物についてはブローニー判を併用してきたが、第 73 次調査（2002 年度）から試験的にデジタルカメラを導入し、第 79 次調査（2007 年度）以降はデジタルカメラのみで撮影を行っている。使用しているデジタルカメラは一眼レフで、記録画素数は 4928 × 3264 ピクセル（有効画素数 16.2 メガピクセル）を基準としており、通常の撮影では JPEG、主要な遺構・遺物については RAW と JPEG で画像を記録している。

デジタルカメラ
の導入

(2) 図面・写真などの整理保管方法

遺構の実測原図（平面図・断面図・立面図）は従来どおり、縮尺 1/20 で作成し、整理保管しているが、原図を基にアルミケント紙を用いた 1/100 の縮小原図の作成は現在行っていない。代わりに、実測原図をスキャナーで取り込み、歪みを補正したデータ（解像度 300dpi）およびそれをデジタルトレースしたデータを専用の外付けハードディスク（ミラーリング機能搭載）と DVD に保管している。撮影した画像データについても、登録番号を付して同様の保管方法をとっている。

デジタルデータ
の保管

(3) 東日本大震災による基準点移動の対処法

本報告書に関わる遺構原図の作成にあたっては城内に埋設された基準点のうち、南門地区では「南門」・「南門 X」・「南門 Y」、政庁南面地区では「城前 1」・「城前 2」・「城前 3」を用いて 3 m 四方のグリッドを組み、遣り方測量で行っているが、東日本大震災（平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震）の前後で基準点の位置・標高にずれが生じており、その対処法について記載しておく。

震災の影響

多賀城跡に 35 点、多賀城廃寺跡に 3 点設置している基準点については、東日本大震災後の平成 24 年度（2012）に世界測地系平面直角座標の再測量を実施している。その結果、主な基準点の地震前（各基準点設置時）と比較した地震後の座標の変動量は第 6 表の通りである。各基準点は地震後に南北方向では南に 106.6～110.6cm、東西方向では東に 320.2～344.9cm、総合的には真東に対して南に 17° 28'～18° 38' の方向で 346.1～361.6cm 動いており、標高は 30.4～32.3cm 沈下していることが判明した。但し、基準点間の相対的な変動の差をみると、南北方向では 4.0cm、東西方向では 24.7cm、総合的には 1° 10' の範囲で 23.5cm、標高は 7.9cm の幅に収まり、変動差は小さい。特に同じ地区内では、最大で南北が 1.6cm、東西が 9.7cm、総合的には 18' の範囲で 1.4cm、標高は最大でも 0.3cm の差にすぎない。史跡全体が概ね同じ方向・距離で動いており、各基準点の相対的な位置関係はさほど変化しておらず、それが狭い範囲ほど顕著であることがわかる。なお、標高は大部分で 31.0cm 前後沈下している。

基準点の変動量

地区	基準点名	変動値				
		南北	東西	方向	移動距離	標高
政 庁	内城(原点)	108.0cm南	331.6cm東	E-17° 53' - S	348.3cm	-30.4cm
	内城W	107.5cm南	331.8cm東	E-17° 56' - S	348.7cm	
	内城E	106.6cm南	331.6cm東	E-17° 49' - S	348.2cm	
	内城S	107.3cm南	331.2cm東	E-18° 01' - S	348.3cm	
外郭南門	南門	110.0cm南	328.9cm東	E-18° 38' - S	346.9cm	
	南門X	110.6cm南	328.0cm東	E-18° 38' - S	346.1cm	-32.3cm
	南門Y	110.6cm南	328.2cm東	E-18° 20' - S	346.4cm	
五 万 崎	五万崎 I	107.9cm南	329.9cm東	E-18° 06' - S	347.1cm	-31.1cm
	五万崎 I X	107.1cm南	329.4cm東	E-18° 00' - S	346.4cm	
	五万崎 I Y	108.5cm南	320.2cm東	E-18° 10' - S	347.8cm	-31.3cm
外郭東門	東門	108.8cm南	344.8cm東	E-17° 30' - S	361.6cm	
	東門S	108.6cm南	344.9cm東	E-17° 28' - S	361.6cm	-31.6cm
六 月 坂	六月坂 I	108.2cm南	341.7cm東	E-17° 34' - S	358.3cm	
	六月坂 I N	108.2cm南	340.8cm東	E-17° 36' - S	357.6cm	-30.7cm
	六月坂 I W	108.2cm南	341.0cm東	E-17° 36' - S	357.8cm	-30.4cm

最小値	最大値
-----	-----

基準点の変動

- ・南北方向では 106.6 ~ 110.6 cm南に移動。(最大-最小=4.0 cm)
- ・東西方向では 320.2 ~ 344.9 cm東に移動。(最大-最小=24.7 cm)
- ・総合的には、真東に対して 17° 28' ~ 18° 38' 南の方向に 346.1 ~ 361.6 cm移動。
(方向：最大-最小=1° 10' 距離：最大-最小=23.5 cm)
- ・標高は 31.0 cm前後の沈下が主体。外郭南門はやや大きい。

		南北	東西	方向	移動距離	標高
政 庁	平均値	107.4cm南	331.6cm東	E-17° 55' - S	348.4cm	-30.4cm
	最大-最小	1.6cm	0.4cm	12'	0.5cm	...
外郭南門	平均値	110.4cm南	328.6cm東	E-18° 32' - S	346.5cm	-32.3cm
	最大-最小	0.6cm	0.9cm	18'	0.8cm	...
五 万 崎	平均値	107.8cm南	326.5cm東	E-18° 05' - S	347.1cm	-31.2cm
	最大-最小	1.4cm	9.7cm	10'	1.4cm	0.2cm
外郭東門	平均値	108.7cm南	344.85cm東	E-17° 29' - S	361.6cm	-31.6cm
	最大-最小	0.2cm	0.1cm	02'	0	...
六 月 坂	平均値	108.2cm南	341.2cm東	E-17° 35' - S	357.9cm	-30.6cm
	最大-最小	0	0.9cm	02'	0.7cm	0.3cm

地区ごとの様相

- ・同じ地区内の基準点の移動した距離の差は 1.4 cm以下である。
- ・同じ地区内の基準点の移動方向の差は 18' 以下である。

第6表 特別史跡多賀城跡附寺跡の基準点変動の様相

対応方法

このような特徴を踏まえ、『年報 2012』でその対応を以下のように示している。

- ① 原点以下、各基準点の座標値は最新の測量結果に基づく世界測地系の数値で示す。
- ② 発掘調査における平面測量(縮尺 1/20)と報告書等での表示は、従来どおり、政庁正殿跡身舎南側柱列中央の原点と政庁南門の中心とを結ぶ線を南北の基準線とする任意の局地座標(多賀城座標)で行う。
- ③ 標高は基準点の最新の測量結果に基づく絶対標高で示す。

南門地区の対応

この方針に則って、南門地区では震災以前に作成した平面図(第7・48・72・73次調査分)を震災後の平面図(第87次調査分)の座標に合わせて表示している。いずれの調査でもグリッド設定の基準とした点が「南門」であることから、多賀城座標でみたこの点の移動分(北へ 6.5 cm、西へ 1.3cm)をずらすことで震災前後の図面を重ねた。また断面図等で震災以前の標高を使

用する場合は、南門地区の沈下状況に鑑みてその値から 30cm 差し引いた値を現在の標高とみなし、赤字で表記している。

政庁南面地区では、呈示する平・断面図（第 74・79 次調査分）はいずれも震災以前のものである。グリッド設定の基準とした点の多賀城座標値が震災後もほとんど変わらないことから、平面図の位置補正は行っていない。断面図等の標高値は、南門地区と同様に当時の標高から 30cm を差し引いた値を現在の標高とみなして赤字で表記している。

政庁南面地区
の対応

3. 調査組織

今回、総括報告する各次調査の主体は宮城県教育委員会であり、発掘調査、年報作成は宮城県多賀城跡調査研究所が担当した。その組織および調査・整理の参加者は第 7 表の通りで、本報告書作成に係る関係者についても含めて示している。

組織と構成員

当研究所は、古代史学・考古学・建築史学・建築デザイン学・庭園史学・造園学・植物学等の専門家によって構成される多賀城跡調査研究委員会（旧多賀城跡調査研究指導委員会）を組織し、その指導・助言を受けながら発掘調査事業を含む各事業を実施している。多賀城跡調査研究委員会の委員一覧を第 8 表に示した。

調査研究委員会

註

- (1) 第 87 次調査および本報告書では、この柱穴に SA3242 の遺構番号を付し、東側の SA1538 とは別に扱っている。
- (2) 第 7 次調査では SF202 A としたが、第 48 次調査で SF202 B 2 に修正している。
- (3) この岩盤を削り出した平坦面については、第 73 次調査で広場跡と認定して SH2748 の番号を付したが、部分的な検出状況であったことから第 87 次調査で面的に再検出して検討を行い、SX2748 削り出し面と改めている。
- (4) 第 79 次調査の概要を示した『年報 2007』では、過去の調査で政庁南大路跡とその側溝に対して個別に付された遺構番号の対応関係を整理し、番号の統一を行っている。この中で、第 74 次調査の SX2785 は SX1411B に統一されている。
- (5) 註 4 と同様に、第 74 次調査の SD2771 は SD1363 に統一されている。
- (6) 第 74 次調査区は、この範囲内にほぼ含まれる。

氏名	分野	職	在任期間
◎伊東 信雄	考古学	東北大学名誉教授	S44～S61 (1969～86)
飯田 須賀斯	建築史学	東北工業大学教授	S44～S45 (1969～70)
太田 博太郎	建築史学	東京大学名誉教授	S44～S49 (1969～74)
坂本 太郎	古代史学	東京大学名誉教授	S44～S56 (1969～81)
井上 光貞	古代史学	国立歴史民俗博物館長	S44～S57 (1969～82)
関 晃	古代史学	東北大学名誉教授	S44～S60 (1969～85)
◎高橋 富雄	古代史学	東北大学名誉教授	S44～H3 (1969～91)
青木 和夫	古代史学	お茶の水女子大学名誉教授	S44～H13 (1969～01)
◎芹沢 長介	考古学	東北大学名誉教授	S44～H13 (1969～01)
坪井 清足	考古学	奈良国立文化財研究所長	S44～H13 (1969～01)
橋崎 彰一	考古学	名古屋大学名誉教授	S44～H13 (1969～01)
牛川 喜幸	造園学	奈良国立文化財研究所平城宮発掘調査部計測修景調査室長	S45～S52 (1970～77)
坂田 泉	建築史学	東北大学名誉教授	S45～S62 (1970～87)
横山 光雄	造園学	東京大学名誉教授	S45～H1 (1970～89)
横山 浩一	考古学	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長	S50～S52 (1975～77)
塩田 敏志	造園学	東京農業大学教授	S53～H13 (1978～01)
笹山 晴生	古代史学	東京大学名誉教授	S57～H15 (1982～03)
吉田 孝	古代史学	青山学院大学教授	S59～H9 (1984～97)
渡辺 定夫	都市工学	東京大学名誉教授	S60～H15 (1985～03)
田中 琢	考古学	奈良国立文化財研究所長	S63-H2, H6-H8 (1988-90, 94-96)
宮本 長二郎	建築史学	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	S63～H2 (1988～90)
岡田 茂弘	考古学	東北歴史博物館長	S63～H15 (1988～03)
今泉 隆雄	古代史学	東北大学名誉教授	S63～H23 (1988～11)
◎須藤 隆	考古学	東北大学名誉教授	S63～H26 (1988～14)
井手 久登	緑地学	東京大学名誉教授	H1～H18 (1989～06)
町田 章	考古学	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所長	H11～H16 (1999～04)
平川 南	古代史学	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館長	H14～H24 (2002～12)
進士 五十八	造園学	東京農業大学学長	H14～H26 (2002～14)
進藤 秋輝	考古学	東北歴史博物館館長	H16～H18 (2004～06)
近江 隆	都市工学	東北大学名誉教授	H16～H24 (2004～12)
田辺 征夫	考古学	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所長	H17～H22 (2005～10)
飯淵 康一	建築史学	宮城学院女子大学特任教授	H3～H28 (1991～16)
◎佐藤 信	古代史学	東京大学大学院教授	H10～ (1998～)
鈴木 三男	植物学	東北大学名誉教授	H19～ (2007～)
松村 恵司	考古学	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	H23～ (2011～)
熊谷 公男	古代史学	東北学院大学教授	H25～ (2013～)
小野 健吉	庭園史学	和歌山大学教授	H25～ (2013～)
櫻井 一弥	建築デザイン学	東北学院大学教授	H25～ (2013～)
阿子島 香	考古学	東北大学大学院教授	H27～ (2015～)
粟野 隆	造園学	東京農業大学准教授	H27～ (2015～)
古瀬 奈津子	古代史学	お茶の水女子大学基幹研究院教授	H27～ (2015～)

※在任年順、◎印は委員長経験者を表す

第8表 多賀城跡調査研究委員会委員一覧

第Ⅲ章 調査の成果

調査成果については、政庁南門の約 190 m 南で発見した SB2776 門跡およびこれに関連する周辺の遺構（第 79 次調査区の北半部が対象）を「政庁南面地区」、さらにその約 120 m 南に位置する SB201 門跡およびその周辺の小丘陵上にある遺構を「南門地区」としてまとめ、この 2 地区に分けて基本層序と主要な遺構、出土遺物を説明する。

1. 政庁南面地区

(1) 地形と層序 (図版 27・31)

周辺の地形 この場所は、政庁地区東部から南へ延びる丘陵上に位置しており、城前官衙が展開する南端部にあたる。西側では通称「鴻ノ池」と呼ばれる低湿地から続く沢が北へ延び、城前官衙の北西部へ入り込むかたちで東へ膨らんだ後、政庁西側まで達している。また、すぐ南側にはこの低湿地から東へ派生した沢状の地形が SB201 外郭南門跡のある丘陵端部（南門地区）との間に入り込んでいる。

調査区内の地形 調査区は東西に長く、東から西へと北から南へ大きく傾斜している。東端の標高は約 16.5 m、西端の標高は約 8.2 m で、東半部には城前官衙が展開し、西半部は政庁南大路 (SX1411) 上にあたる。両者の間には、SX1411 B 道路跡の東側溝 (SD1363) を境とした段差が認められ、東側の丘陵斜面を削り出して SX1411 B の路面を造成した結果と考えられる。

基本層序 政庁南面地区の基本層序は 8 層に大別される。官衙域にあたる東半部では最初に旧表土 (第Ⅶ層) から地山岩盤 (第Ⅷ層) まで掘り込まれた大規模な SK2891 土壌の窪みがあり、それを一部埋め戻して整地した SX2893 整地層の上部に第Ⅵ層、土壌を SX2841 整地層で最終的に埋め戻し、その北側を削り出して造成した SX2890 平場跡の上部に第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層が堆積している。西半部の道路部分は、著しく削平されて堆積層はほとんど残存していない。調査区全体を覆う表土 (第Ⅰ層) 下には数枚に細分される自然堆積層 (第Ⅲ層) があり、これらを除去して古代の遺構を検出した。以下に層序の特徴を記す。

【第Ⅰ層】黒褐色 (10YR3/2) もしくはにぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトの表土層で、調査区全体を覆う。厚さは 10～30cm あり、東半部の官衙域では現代の畑耕作土となっている。

【第Ⅱ層】灰黄褐～褐色 (10YR4/2～10YR4/4) 砂質シルト層で、主に東半部に分布する。本層は数枚に細分されるが、大きくは炭化物粒を含む比較的均質な上層 (第Ⅱ a 層) と、炭化物粒が多く、焼土粒も含む褐色や暗赤褐色土が互層をなす下層 (第Ⅱ b 層) に分けられる。厚さは上層が最大 25cm、下層が 10cm 弱である。

【第Ⅲ層】灰黄褐～にぶい黄褐色 (10YR4/2～10YR5/4) シルト層で、西半部の道路上に分布する。この場所は路面の削平が著しく、本層はその削平後の地山面 (第Ⅷ層上面) に直接堆積している。表土 (第Ⅰ層) 以外の層と重複していないため他の層との前後関係は不明であるが、比較的新しい時期のものと思われる。厚さは最大で 50cm で、数枚に細分される。

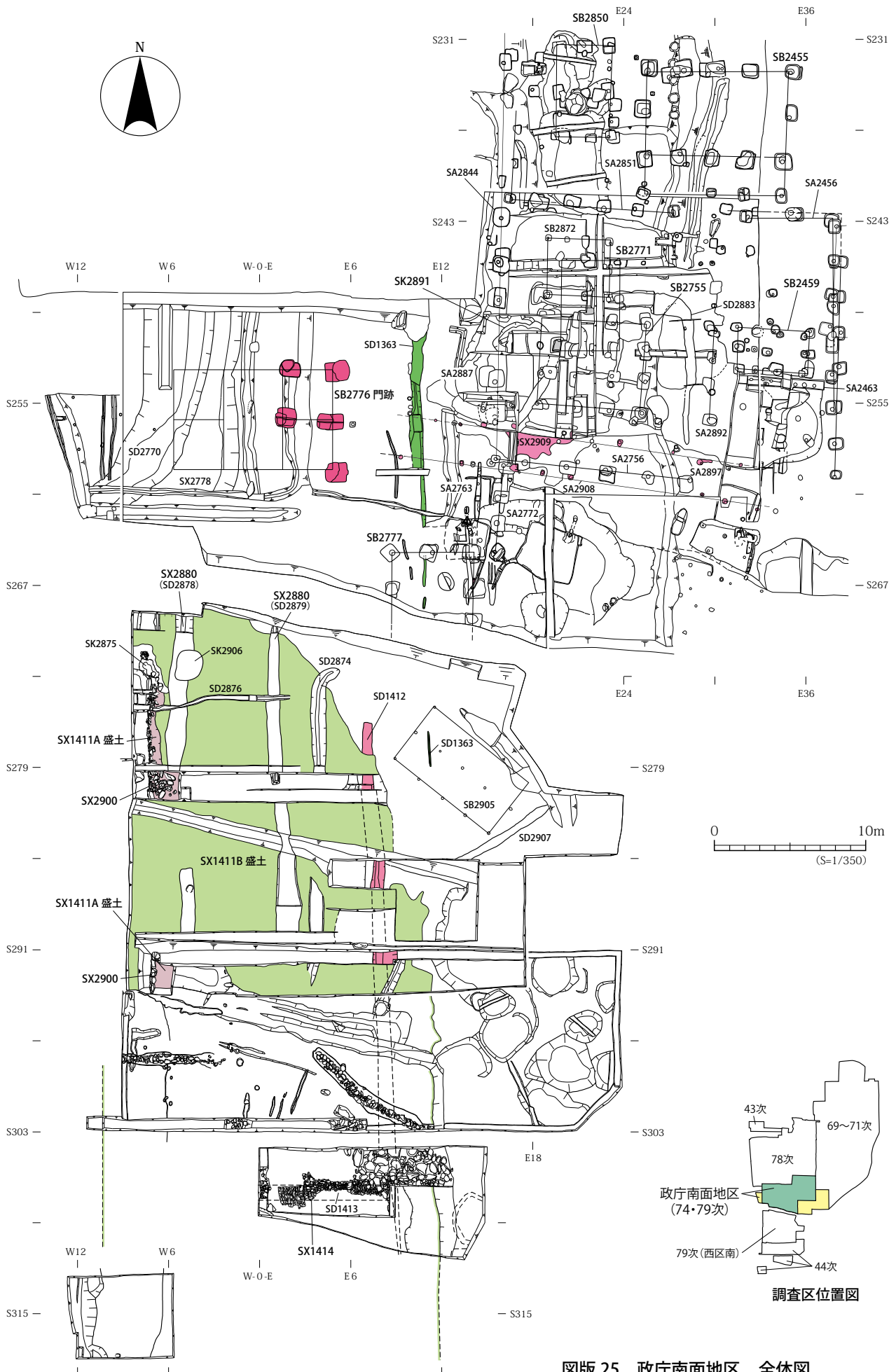


第 87 次調査空撮（南から）



第 87 次調査空撮（南西から）

図版 24 政庁南面・南門地区_遠景写真



図版 25 政庁南面地区_全体図



第 79 次調査空撮（南西から）



第 79 次調査空撮（俯瞰写真、上が北）

図版 26 政庁南面地区_全景写真

【第Ⅳ層】灰黄褐～にぶい黄褐色（10YR4/2～10YR4/3）の砂質シルト・粘土層で、東半部に分布する。本層の上面では、掘立柱建物跡の柱穴、溝、土壇などの掘り込みを確認している。本層は数枚に細分されるが、大きくは均質な砂質シルトと粘土で構成される上層（第Ⅳa層）と、炭化物・焼土粒を含む下層（第Ⅳb層）に分けられる。下層の下位では、薄い炭層を主体に粘土・砂が焼土粒を含んで互層状に堆積している。厚さは上層が25cm前後、下層が35cm前後である。

【第Ⅴ層】褐色（7.5YR4/3～7.5YR4/4）の砂質シルト層で、主に東半部の北寄り地山を削り出し、SK2891土壇を最終的に埋め戻して造成されたSX2890平場跡の北～東端付近に堆積している。数枚に細分され、下位には地山土の小ブロックが含まれる。厚さは最大で40cmある。

【第Ⅵ層】褐色（7.5YR4/3～7.5YR4/4）や灰黄褐色（10YR4/2）の砂質シルト層で、SX2891土壇北壁から南に残存する。SX2893整地層の直上に堆積し、SX2841整地層で覆われている。数枚に細分され、下位では砂のラミナ状堆積が認められる。厚さは最大で55cmある。

【第Ⅶ層】灰褐色（7.5YR4/2）シルトの旧表土で、やや粘性がある。官衙域の南部にあたる本調査区南西隅に僅かに分布が認められる。厚さは5cm前後である。

【第Ⅷ層】主ににぶい黄褐色（10YR5/4）や明黄褐色（10YR6/6）のシルトで、地山土である。これより下は岩盤となる。

（2）発見遺構と出土遺物

i. 門跡と区画施設（図版25・26）

検出遺構 第74・79次調査の際に、政庁南門（SB101）の約190m南でSB2776門跡を検出した。従来知られていたSB201外郭南門跡より約120m北で、政庁南大路上に位置している。また、第79次調査ではその東側で東西方向に伸びるSX2909積土遺構を確認しており、この門に接続する区画施設と考えられる。

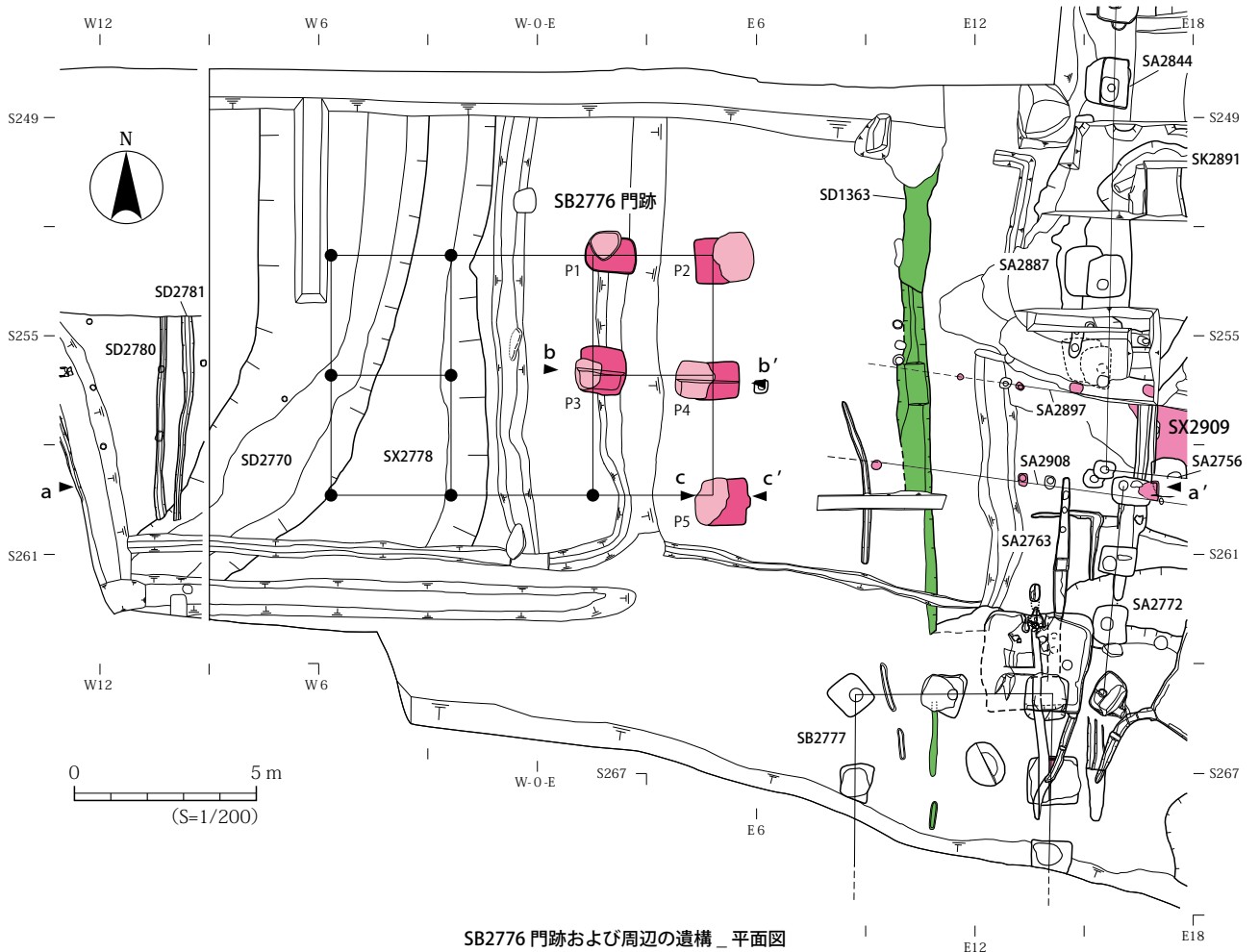
以下、順に記述する。

【SB2776門跡】（図版27・28）

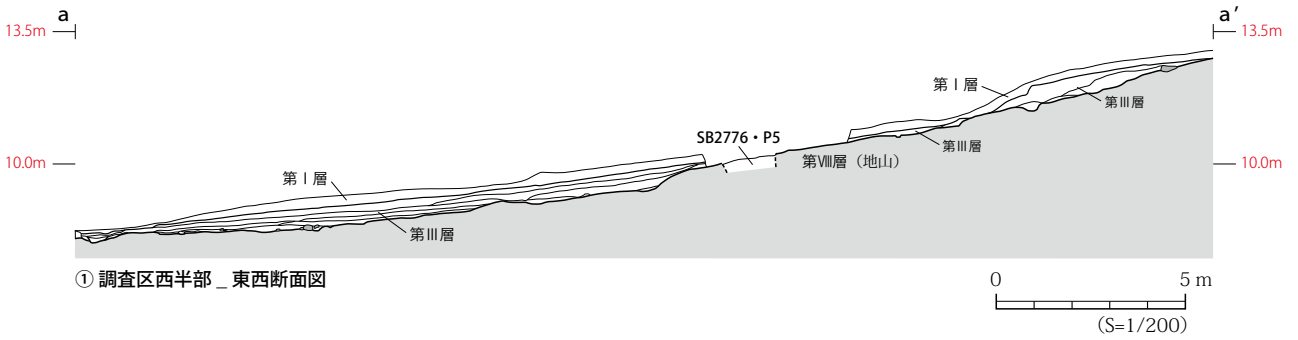
検出状況 西半部（S251～260・E1～7）の地山面で検出した東西1間以上、南北2間の掘立柱建物跡である。東妻の柱穴全部とそこから西へ1間目で2個、計5個の柱穴を確認しており、そのすべての柱穴に柱抜取穴が伴う。

重複 これより西側は本建物より新しいと思われるSX2778道路跡、SD2770溝によって壊され、遺構面も著しく削平されていることから、柱穴が失われたと考えられる。また、政庁南大路であるSX1411A・B道路跡^(註1)とも重複し、その東半部に本建物の柱穴が残存する状況であるが、削平により路面や側溝が失われているため、新旧関係は不明である。

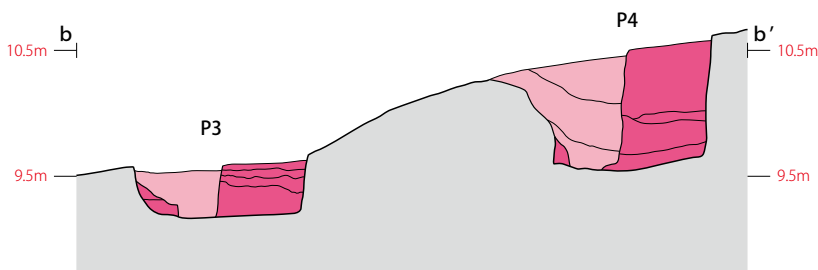
構造 この建物は政庁南大路上に位置し、その方向が発掘基準線にほぼ一致すること^(註2)、東から1間目の建物内部にも柱穴が存在することから、門跡の可能性が高いと推察される。その場合、検



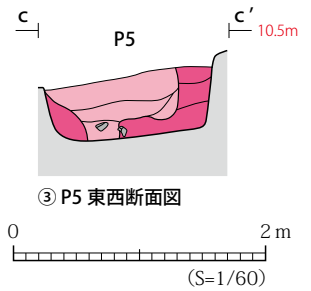
SB2776 門跡および周辺の遺構_平面図



① 調査区西半部_東西断面図



② SB2776 門跡_P3・4 東西断面図



③ P5 東西断面図

■ SB2776門跡(掘方) ■ SB2776門跡(抜取穴) ■ 礫

図版 27 SB2776 門跡_平・断面図

出した柱穴をSX1411 A・Bの路心上にもあたる政庁中軸線を軸として対称に折り返すと東西3間、南北2間の掘立柱八脚門となる。

面 断ち割った柱穴では、柱抜取穴の下部に柱痕跡が認められるものがある。これを参考に柱位置を推定すると、梁行は東妻で総長 6.6 m、柱間が 3.3 m 等間となる。桁行脇間については、北側柱列で約 3.3 m、棟通りの柱列で 3.15 m とやや差が認められるが、最大で 3.3 m とみておきたい。想定される桁行総長は、東妻の柱列を政庁中軸線で折り返すと概ね 10.5 m である。

柱 穴 柱穴は一辺 1.0 ~ 1.3 m の方形で、深さは残りが良いもので約 1.0 m である。断ち割った柱穴の底面標高をみると、P 3 は 9.2 m、P 4 は 9.6 m、P 5 は 9.6 m で、建物内部の柱穴が他の柱穴よりも深く掘り込まれていたとみられる。

埋土は地山ブロックを多量に含む暗赤褐色や褐色、黄褐色シルトの互層で、丁寧に突き固められており、この付近の地山土には存在しない暗赤褐色のシルトが多く使われているのが特徴的で



SB2776 門跡_全景 (79 次、俯瞰写真で上が北)



SB2776 門跡_P3 断面 (74 次、南から)



SB2776 門跡_P4 断面 (74 次、南東から)

図版 28 SB2776 門跡_写真

ある。柱抜取穴の下部に残る柱痕跡は、径 0.3 ～ 0.4 m の円形を呈する。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

【SX2909 積土遺構 (SA2897・2908 柱列)】 (図版 29 ～ 31)

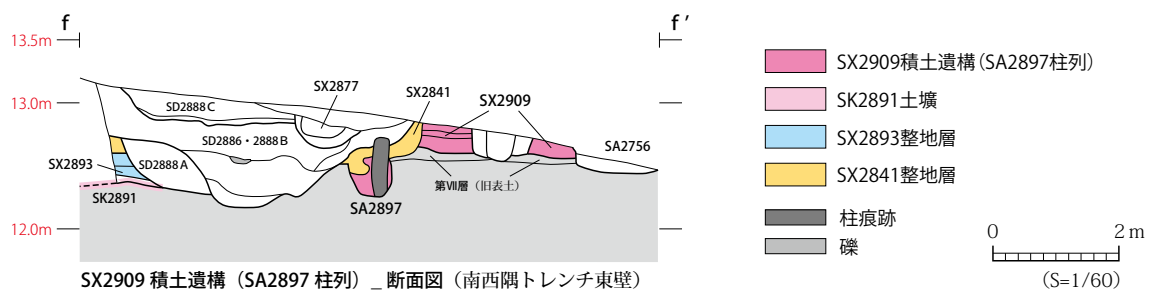
東半部 (S 256 ～ 262・E 9 ～ 33) の旧表土面 (第VI層上面) で検出した。約 2.2m の間隔で平行して東西に延びる柱列 (北側: SA2897、南側: SA2908) の間に積土が残存する遺構で、第 41 次調査で確認した SX1339 積土遺構と同種のものである (『年報 1982』)。

積土と北側柱列の間には 0.1 m 前後の段が付き、北側柱列では柱と柱の間が溝状に窪む箇所もみられた。

SA2756 堀跡、SD2764・2888 溝より古く、積土や柱列の一部が SX2841 整地層に覆われている。北側柱列では、柱抜取穴埋め戻し後の最終的な窪みに SX2841 の整地土が入り込む状況も認められる。SA2763・2772 堀跡とも重複するが、残りが悪いため新旧は不明である。

積土は E 18・S 258 付近の柱列の間に東西 4.6 m 分が残存している。厚さは残りの良いところで 20cm あり、土層は 3 層に分けられる。下から砂粒を含む地山粘土主体の明黄褐色粘土層、砂粒と地山粘土ブロックを不均質に含む灰褐色粘土層、地山土ブロック主体のにぶい黄褐色砂質シルト層で、それぞれ 5 ～ 10cm の均質な厚さで積まれている。

柱列の柱穴をみると、北側は 1.2 ～ 2.0 m 間隔で 10 個、長さ 18.1 m 分、南側は 1.7 ～ 2.2 m 間隔で 8 個、長さ 23.7 m 分を検出しており、柱痕跡もしくは柱抜取を確認できたものもある。方向は双方ともに東西の発掘基準線に対し東で南へ約 7° 振れている。柱穴は長軸 0.35 ～ 0.5 m、短軸 0.3 m 前後の隅丸長方形や楕円形で、深さは確認した柱穴で約 0.4 m ある。埋土は地山ブロッ



SX2909 積土遺構 (SA2897 柱列) _ 断面図 (南西隅トレンチ東壁)

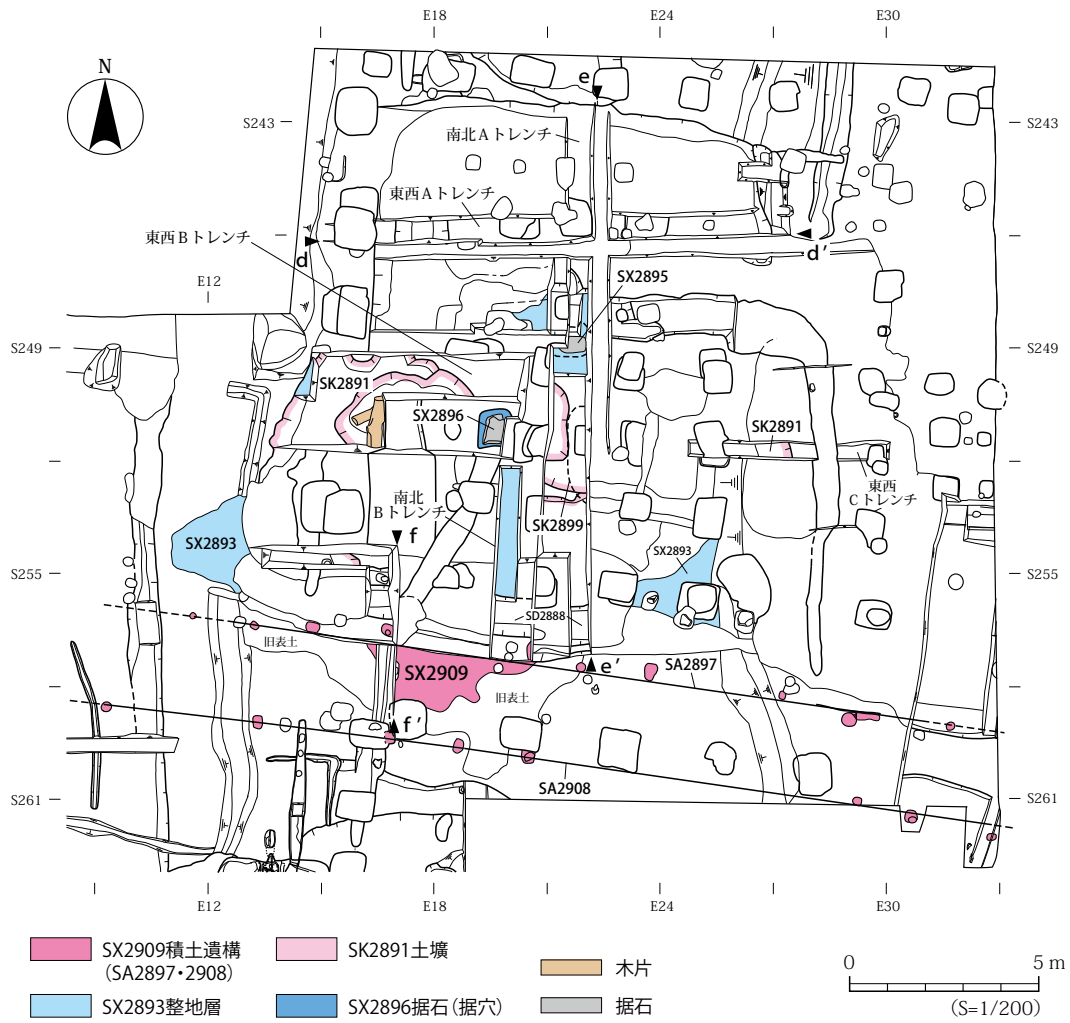


SX2909 積土遺構 (SA2897・2908) _ 全景 (79 次、東から)

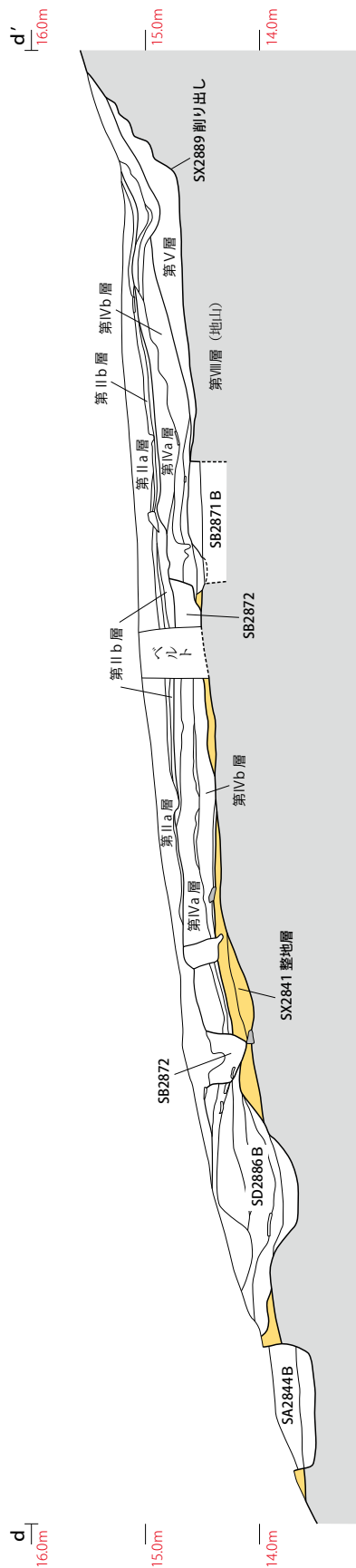


SX2909 積土遺構 (SA2897) _ 断面 (79 次、西から)

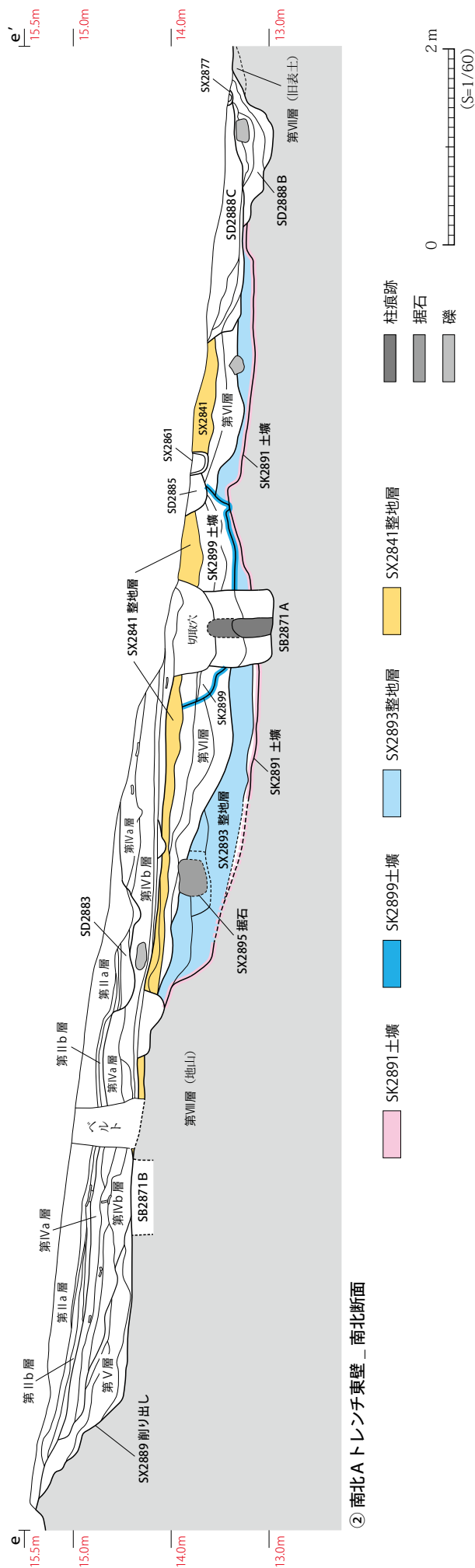
図版 29 SX2909 積土遺構 (SA2897・2908 柱列) _ 断面図・写真



図版 30 政庁南面地区東半部_平面図・写真



① 東西Aトレンチ南壁_東西断面 (反転)



② 南北Aトレンチ東壁_南北断面



図版 31 政庁南面地区東半部_断面図 (SX2893・2841 整地層、SX2895 掘石、SK2891・2899 土塼)

クを含む褐色の砂質シルトである。柱痕跡は径 0.15 m 弱の円形である。積土・柱列ともに遺物は出土していない。

ii. その他の遺構 (図版 30・31)

- 概要** SX2909 積土遺構は、調査区東半部に SX2889 削り出しと SX2841 整地層で SX2890 平場跡が造成され、建物群が展開する以前のものである。この SX2909 との重複関係は認められないものの、同様に SX2890 造成以前の遺構として SX2893 整地層、SK2891・2899 土壌、SX2895・2896 据石が検出されている。この場所では、最初に土採り穴と考えられる大規模な SK2891 土壌が掘削され、それを SX2893 整地層で一部埋め戻して整地した面に据石や土壌が伴う状況で、SX2909 を含めたこれらの遺構は最も古い遺構群と言える。
- そこで、これらの遺構については本報告書で扱うものとする。

【SX2893 整地層】 (図版 30・31)

- 検出状況・重複** E 11～28・S 247～256 の範囲に広がっており、主に南北・東西トレンチでその分布範囲を捉えている。SK2891 土壌より新しく、SX2896 据石、SK2899 土壌より古い。
- 分布範囲** 本整地層は、SK2891 土壌の窪みを一部埋め戻してその北壁から南側を整地したもので、基本的には SK2891 の範囲内に分布するが、南西隅が土壌から舌状に西へ張り出している。また、整地面は南西に向かって緩やかに傾斜しており、中央が皿状に窪み、全体にやや凹凸がみられる。舌状部以外の分布範囲は東西約 14.0 m、南北約 8.0 m で、舌状部は長さ約 2.5 m、根本の幅が約 3.0 m である。
- 層の特徴** 整地には径 5 cm 前後の地山大ブロックを多量に含む黒褐～褐色の粘土質シルトが用いられており、厚さは最大で 65 cm で、数枚の層に細分される。この整地下に認められる自然堆積層には厚みがなく、整地層自体が直接土壌底面に載る部分もあることから、SK2891 の掘削後あまり期間を空けずに本整地が行われたとみられる。また、SX2895 据石は整地の途中で据えられている。
- 出土遺物** 遺物は、層中から須恵器蓋の小片が出土している。

【SK2891 土壌】 (図版 30～32)

- 検出状況・重複** 東半の E 11～28・S 247～256 の範囲に位置する土壌で、主に南北・東西トレンチでその平面プランを確認している。確認面は地山面で、本来は旧表土面（第Ⅶ層上面）から掘り込まれていたとみられ、トレンチ内をみる限り、最も古い遺構である。
- 規模** 平面形は判然としないが、規模は凡そ東西が 14.0 m、南北が 8.5 m とみられる。深さは北端の確認面から最大で 1.4 m 前後あり、底面の凹凸が著しい。
- 堆積土・出土遺物** 土壌の底面直上には厚さ 5 cm 前後の黒褐色粘土層が堆積しており、SX2893 整地層で覆われている。堆積土を詳細にみると、粘土と砂が互層をなし、上面に薄い腐食植物層が認められる部分もある。この堆積土の上位からは非ロクロ整形の土師器環・甕の破片が出土している。
- その後の土壌内部には第Ⅵ層が堆積し、SX2841 整地層で完全に埋め戻されている。

【SK2899 土壌】(図版 30・31)

東半の S 251・E 20 付近に位置する土壌で、南北 A トレンチ東壁の断面で確認した(図版 31 の断面②)。第 VI 層上面から掘り込まれており、SB2871 建物跡、SD2885 溝より古い。検出状況・重複

平面形は判然としないが、南北幅は 2.3 m で、深さは 0.6 m である。堆積土は灰黄褐色の砂質シルトや褐色の砂で、自然堆積である。遺物は出土していない。規模・堆積土

【SX2895 据石】(図版 30～32)

東半の E 22・S 249 付近に位置する据石で、南北 A トレンチ内のほぼ中央で検出した。断面観察の結果(図版 31 の断面②)、SX2893 整地層による整地の途中で幅 0.65 m、深さ 0.2 m 程の据穴を掘り、長さ 0.75 m、幅 0.45 m、厚さ 0.3 m の礫を平らな面を上にして据えて埋め戻した後、さらに整地を行っていると判断した。礫の頭部は、最終的な整地面から高さ 5 cm 程露出していたとみられる。据穴から遺物は出土していない。検出状況・規模

【SX2896 据石】(図版 30・32)

東半の E 20・S 251 付近に位置する据石で、東西 B トレンチの南東隅で検出した。SX2893 整地層上部に第 VII 層が少し堆積した状態で、一辺 0.9 m 前後の隅丸方形の据穴を掘り、長さ 0.8 m、幅 0.6 m、厚さ 0.1 m 以上の礫を平らな面を上にして据えている。埋土は径 5 cm 以上の地山大ブ



SK2891 土壌 (79 次、南西から)



SX2895・2896 据石 (79 次、西から)



SX2895 据石 (79 次、南西から)



SX2896 据石 (79 次、北から)

図版 32 SK2891 土壌、SX2895・2896 据石 _ 写真

ロックを多く含む黒褐色粘土で、SX2893 整地層を起源とする土が主体を占める。据穴から遺物は出土していない。

2. 南門地区

(1) 地形と層序 (図版 98)

周辺の地形 南門地区は、政庁地区東部から南へ伸びる丘陵の末端部に位置している。本地区は、北側に政庁南門 (SB101) と外郭南門 (SB201) の間を分断するかたちで西から東へ沢地が入り込むことで独立した小丘となっており、多賀城碑付近が沢頭にあたる。地籍はこの沢地を境として、南側が「田屋場」、北側が「坂下」、沢頭以東が「城前」に分かれており、外郭南門・南辺築地塀は字田屋場、多賀城碑は字城前に含まれる (図版 4)。

調査区内の地形 SB201 外郭南門跡は SB101 政庁南門跡の約 310 m 南に位置し、両者の標高差は約 18 m である。調査区内では、外郭南門および南辺築地塀は東から西へ下る標高 6 ~ 16 m の丘陵斜面に立地しているが、門周辺は後世の削平が著しく、特に門の中央部は近世の通路跡、西側は近現代の溝状の掘削によって大きく壊されていた。また、南門・南辺築地塀の南側も全体に大規模な削平を受けており、その範囲は門西側の築地塀にも一部及んでいる。但し、南辺築地塀の他の部分は良好に残存しており、現況でも土手状の高まりとして確認できる。

基本層序 本地区内での層序をみると、南部の南辺築地塀周辺と北部中央の多賀城碑周辺に堆積層が分布し、その他の地域では基本的に表土直下が岩盤となっている。岩盤上面は南西に緩傾斜しており、民家があった北西部は大きく削平され一段低い。表層は浸食による土砂の流出が著しく、大半は基盤の凝灰岩およびアルコース砂岩の残留巨礫が現表土により直接覆われている状況である。これらのことから、南部と北部中央の状況を踏まえて基本層序を 6 層に大別した。現表土である第 I 層と第 II 層、灰白色火山灰 (To-a) を含む第 IV 層は双方で堆積が認められ、第 III 層は多賀城碑覆屋の西側周辺、旧表土の第 V 層は南門西側の築地塀下に分布している。第 VI 層は地山で、下層は基盤となる凝灰岩である。以下、各層の特徴を記す。

なお、南辺築地塀が土手状の高まりとなって残る部分では、その基礎整地や南北両側に嵩上げ整地層、崩壊土、堆積層が残存している。これらについては、遺構の説明の中で触れることにする。

【第 I 層】黒褐～褐色 (10YR3/1 ~ 10YR4/4) シルトの表土層で、調査区全体を覆う。厚さは 10 ~ 30cm である。

【第 II 層】黒褐～暗褐色 (10YR3/2 ~ 10YR3/3) シルト層で、南門からその西側にかけて東西約 15 m、南北約 18 m の範囲 (E W 0 ~ W 15、S 361 ~ 379) と北部中央の窪地 (W 3 ~ E 12、S 346 ~ 354) に分布する。本層の上面で遺構は検出されておらず、出土遺物の特徴から近世以降の堆積層とみられる。厚さは 10 ~ 30 m で、北部中央では本層が地山の岩盤を直接覆っている。

【第 III 層】褐色 (10YR4/6) シルト層で、多賀城碑覆屋の西側周辺 (E 10 ~ 12、S 347) に分布する。厚さは 20cm 前後である。

【第 IV 層】灰白色火山灰 (To-a) をブロック状に含む暗褐色 (10YR3/3) シルトの a 層と灰黄褐

色（10YR6/2）の比較的均質だが汚れた灰白色火山灰層のb層に分けられる。a層は築地塀北側のE 20、S 376付近と北部中央の窪地（E 1～10、S 348～352）、b層は築地塀北側のW 31、S 370付近の窪地に部分的に残存する。

【第V層】旧表土層で、灰褐色（7.5YR4/2）砂質シルトのいわゆる旧表土であるa層とにぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルトの漸移層であるb層に細分される。いずれも厚さは10cm前後で、南門西側の東西約13m、南北約4mの範囲（W 22.5～35.5、S 374.5～378.5）に分布する。

【第VI層】地山で、南門周辺は灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト層もしくはその下の浅黄色（2.5Y7/4）凝灰岩の岩盤が露出している。E 16より東側の岩盤は青灰色（5B5/1）のきわめて強固な岩となっており、この上に岩片を多く含む浅黄色（5Y7/3）砂質シルト層の地山が載ることを確認している。また、W 24より西側では、灰黄色砂質シルト層の上にぶい褐色（7.5YR5/4）シルト質粘土層の地山が認められる。岩盤の標高は東端部（E 48付近）で約15.4m、南門付近で約11.4m、西端部（W 51付近）で約5.4mとなっており、門より西側の傾斜がきつい。南門より北では、浅黄色の凝灰岩の岩盤が露出しており、この中にアルコース砂岩の残留巨礫が多数含まれる。

（2）発見遺構と出土遺物（図版33・34）

検出した主な遺構は、外郭南門跡とこれに取り付く南辺築地塀跡を中心として、その基礎となる掘込地業や整地層、削り出し面、道路跡、掘立柱建物跡、柱列・柱穴、溝、土壇、横穴墓などである。出土遺物は瓦類が主体で、特に表土と築地塀崩壊土から多量に出土しており、他に縄文土器、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、近世から現代までの陶磁器類、鉄製品、土製品、石器などが少量認められる。

検出遺構

本地区で最も重要な遺構である南門跡と南辺築地塀跡は、その構築過程において掘込地業や整地層などと深く関連し、周辺の遺構とも複雑に重複している。これらを切り離して説明することは難しく、南門・築地塀跡を中心に周辺の遺構を含めて検出した区域ごとのまとまりで説明を加える。また、表土を含む堆積層（基本層序第I～V層）の出土遺物についても最後に触れる。

区域ごとの説明

図版4に示したように、第7・48・72・73・87次の調査区は、当時の土地の制約や再発掘を実施していることから重複する範囲が多く、各次調査で同一の遺構に対して異なる番号が使用されているものや、遺構の解釈変更に合わせて分類記号が変更されたもの、別の遺構番号を付していたものが統一されて1つになったもの、番号自体が消滅したものなどがある。そこで、各次調査で使用した遺構番号を整理し、変更があったものについてその対応関係と最終的な遺構番号を第9表に示した。

遺構番号の整理

なお、築地塀跡など遺構番号の対応関係が複雑なものについては、その説明を改めて個別の事項の中で行うこととする。

遺構番号	遺構種別	調査回数	掲載ページ	備考	遺構番号	遺構種別	調査回数	掲載ページ	備考
201	SB	7	p43	外郭南門跡	2676	SK	72	p122	土壌
202	SF	7	p72	外郭南辺築地塀(南門東側)	2715	SK	73		近世の墓壇
203	欠番	7		SF202上部で東西に並ぶ2個のピット→攪乱穴	2716	欠番	73		攪乱穴
204	SD	7	p58	溝(SD2746と一連)	2717	SK	73	p99	土壌(SF202北側の土採り穴?)
205	SX	7	p46	掘込地業	2718	SK	73	p99	土壌(焼面伴う)
1535	欠番	48		南門東側の小柱穴群→解釈変更(p14~17)	2719	SK	73	p99	土壌(焼面伴う)
1536	SA	48	p54	柱穴	2720	SD	73	p86	SF202北側の小溝
1537	欠番	48		南門東側の小柱穴→不明	2721	欠番	73		SF202北側の布掘状の溝→攪乱溝
1538	SA	48	p54	柱列(元SA1538の東側柱穴2個)	2722	SD	73	p84	SF202北側の小溝
1539	欠番	48		SF202の基礎地業→SX3239b	2723	欠番	73		SF202南側の溝→攪乱溝
1540	SD	48	p46	SX205の一部	2724	SK	73	p99	土壌(SF202南側の土採り穴?)
1541	SD	48		近世以降の溝?	2725	SK	73	p101	小土壌
1542	欠番	48		溝→不明	2726	SB	73	p126	建物跡
1543	SD	48		近世以降の溝?	2727	SB	73	p126	建物跡
1544	欠番	48		溝→SD2657へ統一	2728	SD	73	p91	SF202北側の溝
1545	SD	48	p120	溝	2729	SD	73	p71	SX2728の排水溝
1546	欠番	48		小土壌→攪乱穴	2730	SD	73	p71	SX2728の排水溝
1547	SK	48	p60	土壌(焼土・瓦多量)	2731	SK	73	p65	土壌
1548	欠番	48		SK1547へ統一(底面の凹凸を捉えたもの)	2732	SK	73	p67	土壌
1549	欠番	48		SK1547へ統一(底面の凹凸を捉えたもの)	2733	SD	73	p58	SX3250の東側溝
1550	SK	48	p63	土壌	2734	SD	73	p131	溝
1551	SX	48	p48	掘込地業	2735	欠番	73		小ピット
1552	SD	48	p52	SX3250の西側溝	2736	欠番	73		小ピット
1553	SK	48	p64	小土壌	2737	欠番	73		小ピット
1554	SK	48	p65	小土壌	2738	SK	73		多賀城碑南側の土壌→攪乱穴
1555	SA	48		南門西側のピット群→解釈変更	2739	SD	73	p131	溝
1556	SF	48	p101	外郭南辺築地塀(南門西側)	2740	SD	73	p81	SF202北側の小溝
1557	欠番	48		SF1556南側の小柱穴列→解釈変更(p60~63)	2741	SD	73	p84	SF202北側の小溝
1558	欠番	48		SF1556南側の東西溝→攪乱溝	2742	SX	73	p76	SF202基礎整地
1559	SP	48	p139	横穴墓	2743	SD	73	p130	柱列
1560	SP	48	p134	横穴墓	2744	SB	73	p128	建物跡
1561	SP	48	p142	横穴墓	2745	SD	73	p132	溝
1562	SX	48	p101	SF1556基礎整地	2746	SD	73	p60	溝(SD204と一連)
1563	SK	48	p65	土壌	2747	SD	73	p133	溝
1564	SA	48	p56	柱穴	2748	SX	73	p68	南門南側の広場跡→南門南東部の削り出し面
1565	SD	48		近世の通路跡?	2749	欠番	73		南門北側の広場跡→認定できない
1566	SA	48		SF1556南側のピット2個→不明	2750	欠番	73		南門南側広場東端の溝→SX2748削り出しの東肩
1567	SA	48		SF1556南側のピット→解釈変更	2751	SX	73	p81	SF202北側辺の溝状痕跡
2657	SD	72	p130	溝	2752	欠番	73		溝→不明
2658	SD	72	p130	溝	3238	SX	87	p56	整地層
2659	欠番	72		SP2661の陥没坑→SP2661の堆積土1層	3239	SX	87	p56	整地層
2660	SP	72	p145	横穴墓	3240	SX	87	p48	SF201の基壇築成土
2661	SP	72	p145	横穴墓	3241	SK	87	p68	土壌
2662	SD	72		近世の溝	3242	SA	87	p54	柱穴(SA1538としていた西端の柱穴)
2663	SD	72	p130	溝	3243	SX	87	p78	SF202aに伴う整地層
2664	SX	72	p122	整地層	3244	SX	87	p78	SF202aに伴うSX2748部分の整地層
2665	SK	72	p133	土壌	3245	SX	87	p84	SF202bに伴う嵩上げ整地層
2666	SK	72	p133	小土壌	3246	SX	87	p93	SF202dに伴う嵩上げ整地層
2667	SD	72	p121	溝	3247	SX	87	p110	SF1556bに伴う嵩上げ整地層
2668	SD	72	p121	溝	3248	SX	87	p111	SF1556cに伴う嵩上げ整地層
2669	SK	72	p121	土壌	3249	SX	87	p52	SX3250の東肩にあたる削り出し
2670	SK	72	p122	土壌	3250	SX	87	p52	道路跡
2671	SK	72	p122	土壌	3251	SX	87	p76	SF202下の盛土
2672	SD	72	p131	溝	3254	SX	87	p104	SF1556下の盛土
2673	SD	72	p121	溝	3255	SX	73	p91	SF202cに伴う嵩上げ整地層
2674	SD	72	p108	SF1556北側の溝	3256	SK	48	p122	土壌
2675	SX	72	p126	整地層	3257	SX	72	p112	SF1556dに伴う嵩上げ整地層

※ 遺構種別は各調査時のものではなく、最終的な種別を掲載

第9表 南門地区_遺構番号一覧



図版 33 南門地区_全体図



第 87 次調査空撮（南から）



第 87 次調査空撮（俯瞰写真、上が北）

図版 34 南門地区_全景写真

i. 南門跡と周辺の遺構

(a) 南門跡 (図版 36)

南門跡には SX205 基礎地業の上面で検出した礎石式の SB201 A と SX205・1551 基礎地業の上面で検出した礎石式の SB201 B がある。門跡には SB201 A → SB201 B、基礎地業には SX205 → SX1551 という重複がみられ、第 48 次調査では両基礎地業を層位関係および門の礎石据穴との位置関係などから、それぞれ第Ⅱ期と第Ⅲ期の SB201 A・B 門の基礎地業と考えたが、第 87 次の再調査でその基礎地業に関わる新たな事実が判明した。また、基礎地業を地下の掘込地業部と地上の基壇築成土部分からなるとした解釈にも一部変更が生じ、SB201 A と SA1538 柱列の前後関係も改めた。

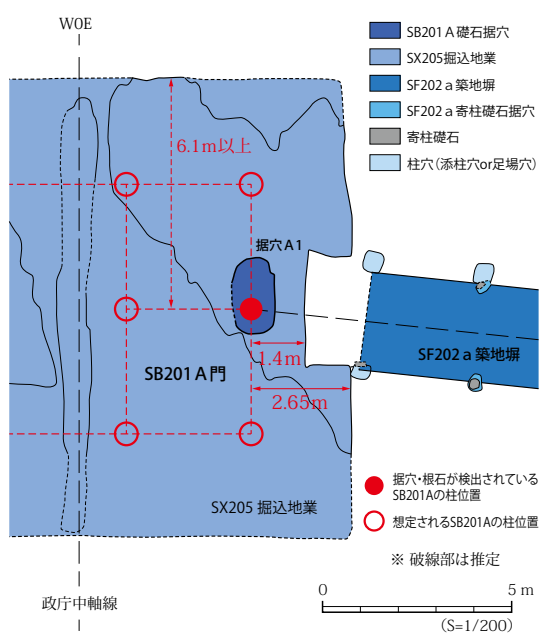
なお、南門跡より新しい遺構として SD1541・1543・1565 溝が挙げられるが、いずれの溝も多数の遺構と重複し、その中で最も新しく、SD1565 からは近世瓦が出土している。これらの遺構は近世以降のものと思われることから記載を省略する。

【SB201 A 門跡】 (図版 35・37・38・44・45)

SB201 A は SX205 掘込地業の上面で検出した 1 箇所の礎石据穴 (A 1) から認定した礎石式門跡である。礎石自体は失われており、根石が残る。SA1538 柱列、SB201 B 門跡と重複し、SA1538 より新しく、SB201 B より古い。

この据穴は SF202 築地塀跡の延長線上に位置しており、基壇の平面範囲を概ね反映していると理解される掘込地業^(註3)との位置関係を踏まえると、東妻で棟通りの礎石据穴と考えられ、後続する SB201 B とほぼ同位置にあることから、その構造は八脚門となる可能性が高い。方向は、掘込地業と同様にほぼ発掘基準線に一致していたと推定される。

据穴 A 1 の東西中心線と SF202 築地塀の中心線が交わる点に柱位置を設定すると、A 1 の柱



図版 35 SB201 A 門跡平面模式図

位置は SX205 の東辺が「凹」字状に内側へ入り込む部分から更に 1.4 m 程内側の位置にあり、掘込地業東端との距離は約 2.65 m、北端との距離は 6.1 m 以上でこれに近い値とみられる。

据穴 A 1 は長軸約 2.0 m、短軸約 1.2 m の楕円形を呈し、深さ 0.2 m 程が残る。据穴底面の標高は約 11.7 m である。埋土は地山ブロックを多く含む黄褐色シルトで、焼土・炭化物は含まない。内部には径 20 cm 前後の根石が遺存しており、その天端標高は 11.9 m である。据穴埋土から遺物は出土していない。

概要

検出状況・重複

構造

据穴と掘込地業

礎石据穴

【SB201 B門跡】 (図版 36～39・43～45)

検出状況・重複

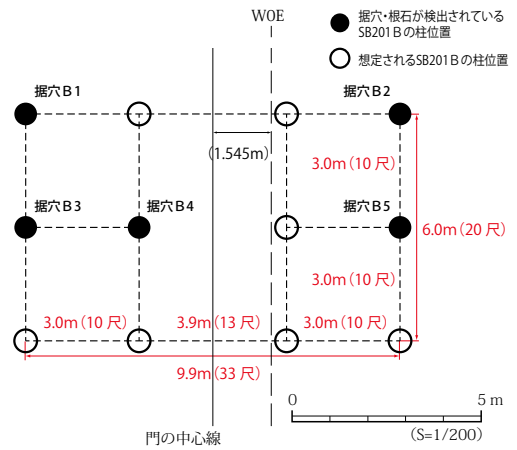
SB201 BはSX205・1551 掘込地業、SX3240 基壇築成土の上面で検出した5箇所の礎石据穴(B1～5)から認定した礎石式門跡である。確認した据穴では礎石はすべて失われているが、根石は比較的良好に残存している。但し、据穴B5は残りが悪く、その底面近くの埋土を認識できたのみである。SA3242 柱穴、SB201 A門跡と重複し、いずれよりも新しい。

構造・平面

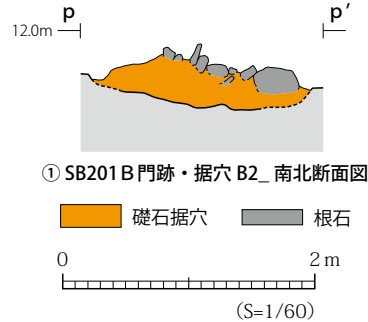
失われた礎石据穴が多いものの、SF202・1556 築地塀跡および掘込地業との位置関係から南側の3個の据穴(B3～5)は棟通りのもの、北側の2個の据穴(B1・2)は北側柱列のものと考えられ、その構造は八脚門と推定される。据穴B3・5ではそれぞれSF1556・202 築地塀の中心線上に、それ以外の据穴ではほぼ中心に柱位置を想定すると、桁行総長約9.9mで、柱間は中央間が約3.9m、両脇間が約3.0m、梁行柱間は約3.0mで、梁行総長は約6.0mとみられる。方向は発掘基準線にほぼ一致しているが、門の中心は政庁中軸線の延長上から西へ約1.5mずれる。

礎石据穴

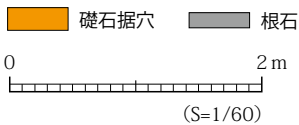
礎石据穴は長軸1.4～1.8m、短軸1.0～1.4mの楕円形を呈し、深さは0.3m以上で、残りの良い据穴B2では約0.45mある。据穴底面の標高は11.4～11.5mである。埋土はにぶい褐



図版 36 SB201 B門跡平面模式図



① SB201 B門跡・据穴B2_南北断面図



SB201 B門跡・据穴 B2 (87次、南東から)



据穴 B2 埋土中の焼土・炭化物粒 (87次)



SB201 A門跡・据穴 A1 (87次、北から)

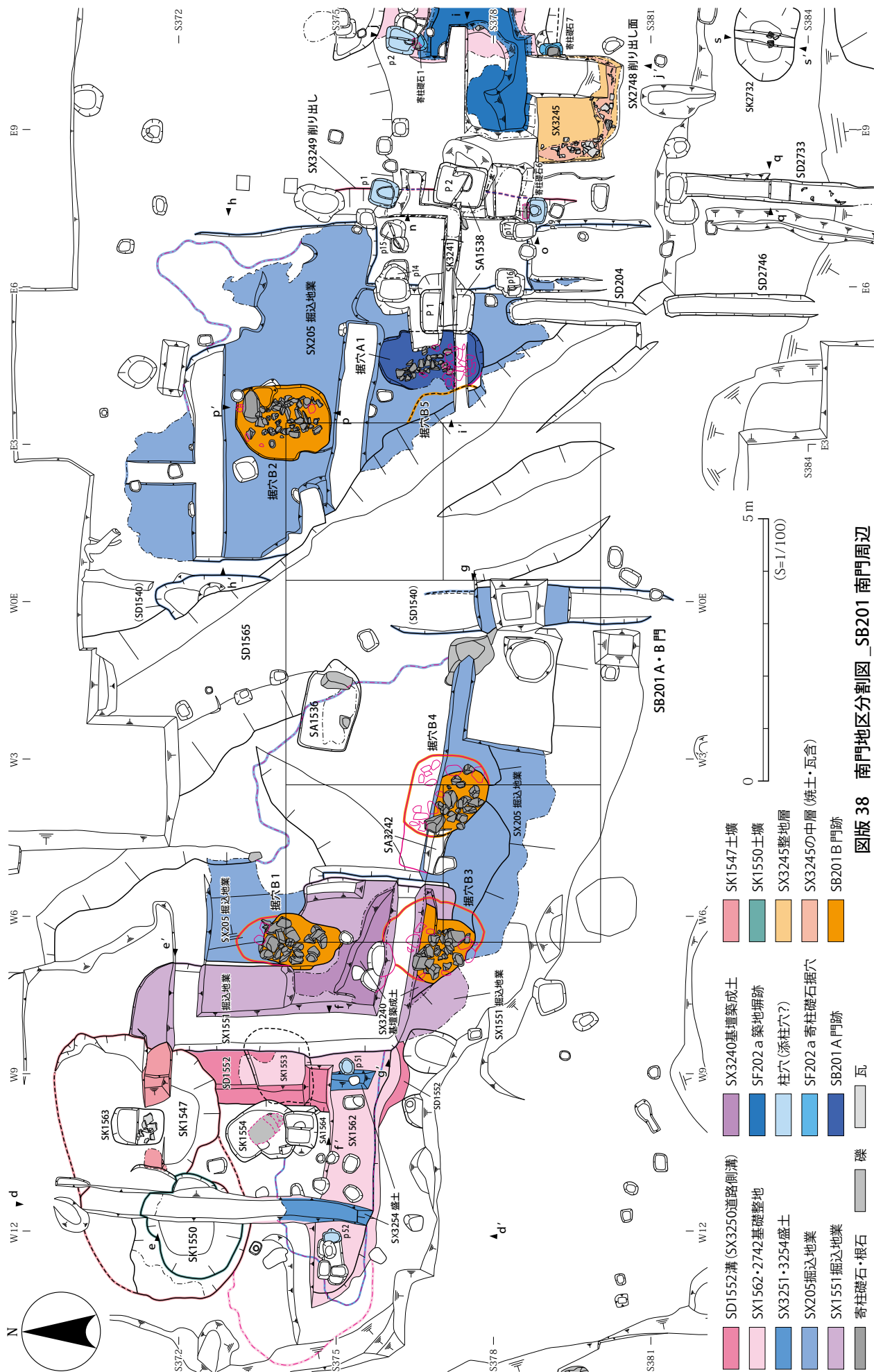


SB201 A門跡・据穴 A1 (87次、西から)



SB201 B門跡・据穴 B1 (87次、東から)

図版 37 SB201 門跡の礎石据穴_断面図・写真



図版 38 南門地区分割図_SB201 南門周辺

～褐色の砂質シルトもしくはシルトで、いずれも焼土・炭化物粒を含む。内部には径 20～60 cmの根石が遺存しており、その天端標高は 11.8～11.9 mである。

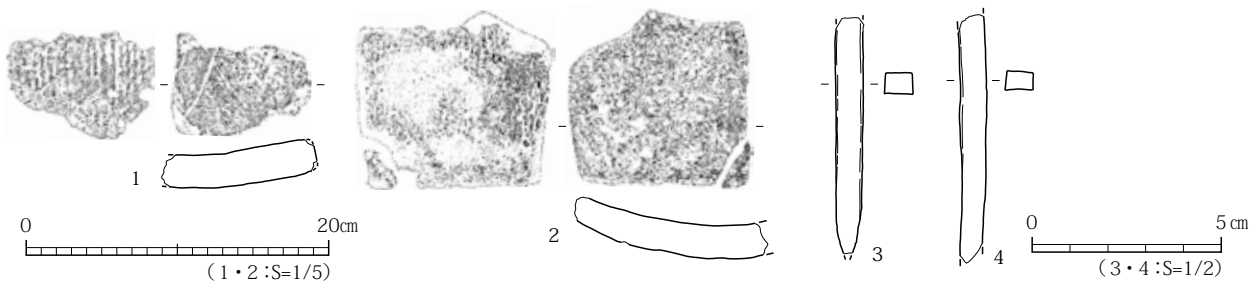
出土遺物 遺物は、礎石据穴の埋土から丸・平瓦、須恵器甕の体部破片 4点、鉄釘 2点（図版 39－3・4）が出土している。出土した丸瓦はⅡ類 4点・ⅡB類 1点、平瓦はⅠA類 2点・ⅡA類 1点、ⅡB類 4点（1・2）で、平瓦ⅡB類には焼瓦とみられる破片も含まれている。

【SX205 掘込地業（SD1540 溝）】（図版 38・40・43～45）

検出状況・重複 SX205 は SB201 南門下の地山面で検出した掘込地業で、門造営に伴う基礎地業と考えられる。第 48 次調査では地下の掘込地業部分と地上の基壇築成土部分からなる基礎地業とみていたが、第 87 次調査で築成土部分は別の整地層（SX3238）であることが判明している。多数の遺構と重複し、SA1536 柱穴より新しく、SA1538 柱列、SA3242 柱穴、SX1551 掘込地業、SB201 A・Bの礎石据穴より古い。

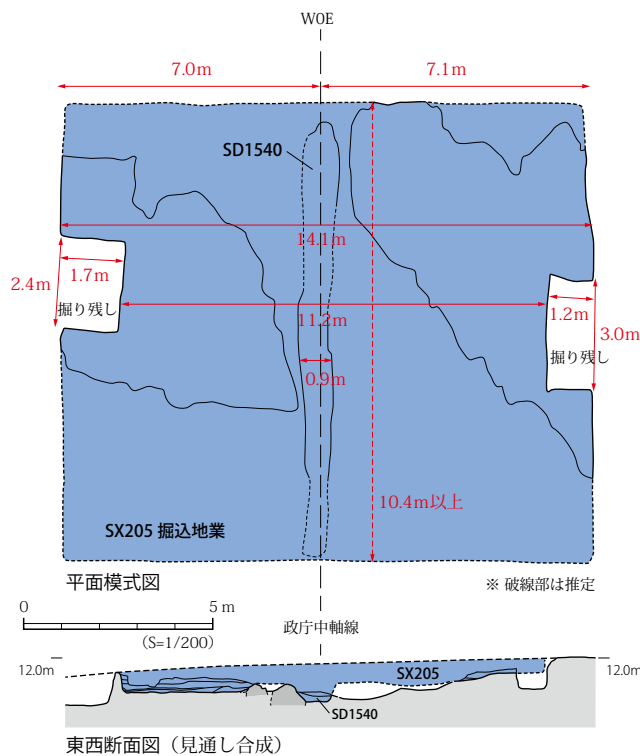
地業工法と SD1540 SX205 は SD1565 溝によって東西に二分されて中央に幅約 1.8 mの間隔が空くが、東西の掘り込みはほぼ対称となる平面形を呈し、埋土の特徴も共通することから一つの掘込地業と理解できる。また、SX205 の中央にあたる政庁中軸線上を南北に伸びる SD1540 溝は掘削後すぐに版築状に埋め戻されており、埋土の特徴は SX205 と共通している。溝の北端が SX205 の内側に収まることも踏まえると、両者はほぼ同時に掘り込まれ、一緒に埋め戻されている可能性が高く、SD1540 もこの掘込地業の一部と捉えられる。現況からは、中心線となる SD1540 部分を最初に掘り下げ、これを基準に東西の掘り込みを行ったと理解することも可能で、上部が削平されたために下部の深く掘り下げられた部分が独立した掘り込みのように見えているが、本来は SX205 の範囲全体を掘り下げた総地業であったと考えられる。

平面・規模 その場合、全体で東西約 14.1 m、南北 10.4 m以上の範囲に掘込地業が行われており、中央の溝部は上幅約 0.9 m、深さ 0.25 mで、断面は「U」字形を呈する。東西の掘り込みは溝の東西縁から各々 0.1～0.3 m離れて残り、それぞれの東西幅は 6.4 m前後である。双方の東西辺は直線的で壁が立ち、方向は溝部と同様にほぼ発掘基準線に一致している。北辺については、本来の位置を捉えることは難しいが、遺存する地業土の北端が E 1～3 間で概ね平らとなっており、



No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SB201B門跡・礎石据穴B1埋土	48	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.4)	aタイプ? 焼瓦		R 10	B 6745
2	礎石据穴B1埋土	48	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.3)	焼瓦		R 11	B 6745
No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		断面形状	特徴	写真図版	登録	箱番号
3	SB201B門跡・礎石据穴B2埋土	48	鉄釘	先端部?	(6.3)	0.8	0.6					
4	礎石据穴B2埋土	48	鉄釘?	破片	(6.6)	0.7	0.5	断面方形	鉄銹頸部の可能性あり		R 22-2	B 13923

図版 39 SB201B 門跡（礎石据穴）_ 出土遺物



図版 40 SX205 掘込地業模式図

この部分でみると S 371 付近であつたと推定される。深さは南西部が 0.5 m と最も深く、北東に向かって次第に浅くなる。底面にはやや凹凸があり、深さが一定でないのは安定した岩盤に到達するまで掘り下げたためとみられる。底面の標高は南西部で 11.1 m 前後、北東部で 11.7 m 前後である。

また、東側掘り込みの東辺と西側掘り込みの西辺では、それぞれ中央が内側に南北約 3.0 m ・ 約 2.4 m、東西約 1.2 m ・ 約 1.7 m の範囲で「コ」字形に掘り残されている。厳密には、東西辺の掘り残し部分は中軸線で折り返すと対称な位置になく、南北に 1 m 程ずれており、

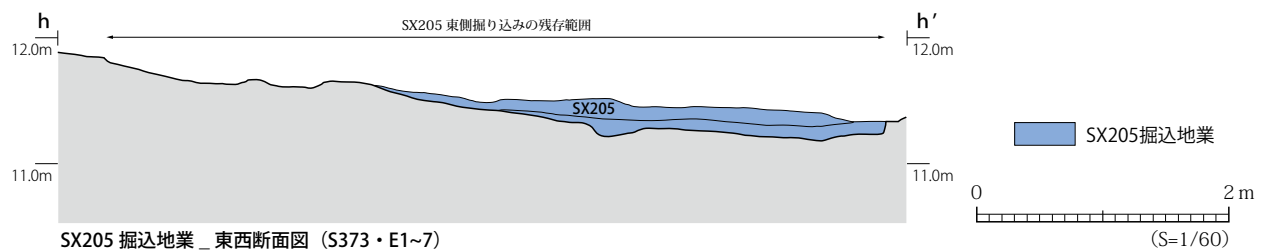
掘り残し部分

いずれも門東側の SF202 築地塀跡の延長線上に位置している。

地業土は地山ブロックを含む明褐色や褐色の砂質シルトを用いて厚さ 5 ～ 15cm の単位で版築

地業土

されており、焼土・炭化物は含まれない。遺物は出土していない。



SX205 掘込地業の東側北部 (87 次、東から)



SX205 の東側掘込西辺の状況 (87 次、北東から)

図版 41 SX205 掘込地業の東半部_断面図・写真

【SX1551 掘込地業】

(図版 42 ~ 45)

検出状況・重複

SX1551 は SB201 南門下西部の地山面で検出した掘込地業で、門造営に伴う基礎地業と考えられる。第 48 次調査では掘込地業部分とその上に載る築成土(上・下層)からなる基礎地業とみていたが、第 87 次調査で再確認・検討した結果、この築成土下層までが掘込地業部分(SX1551)にあたり、上層は基壇築成土(SX3240)、掘込地業より西側の帯状部分は別の盛土(SX3254)であることが判明した。多数の遺構と重複し、SD1552 溝、SX1562 基礎整地、

SX3254 盛土、SX205 掘込地業より新しく、SX3240 基壇築成土、SX3248 整地層、SB201 B の礎石掘穴、SK1547・1553 土壌より古い^(註4)。

平面・規模

SX1551 は南半が完全に削平されているため現状の平面形は「L」字形に近いが、当初の形状は東に突出部をもつ「凸」字形であったと推定される。西側の溝状部分の規模は東西幅 1.6 ~ 1.7 m、南北 6.5 m 以上で、東西辺は直線的に伸び、方向はほぼ発掘基準線に一致している。北辺は北西-南東方向に若干傾いているが、S 371 付近が北端とみられる。東の突出部は東西約 1.7 m、南北 2.9 m 前後である。

この掘込地業の東辺は SX205 の西辺にほぼ接し、両地業の凹凸が組み合っている。各辺の壁はやや開き気味に立ち上がり、深さは 0.7 ~ 0.8 m である。底面には多少の凹凸が認められ、その標高値は 10.7 m 前後である。

地業土・遺物

地業土は厚さ 5 ~ 20cm を単位とし、地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色やにぶい褐色の砂質シルトを用いて版築されており、焼土・炭化物は含まれない。遺物は出土していない。

【SX3240 基壇築成土】(図版 38・43)

検出状況

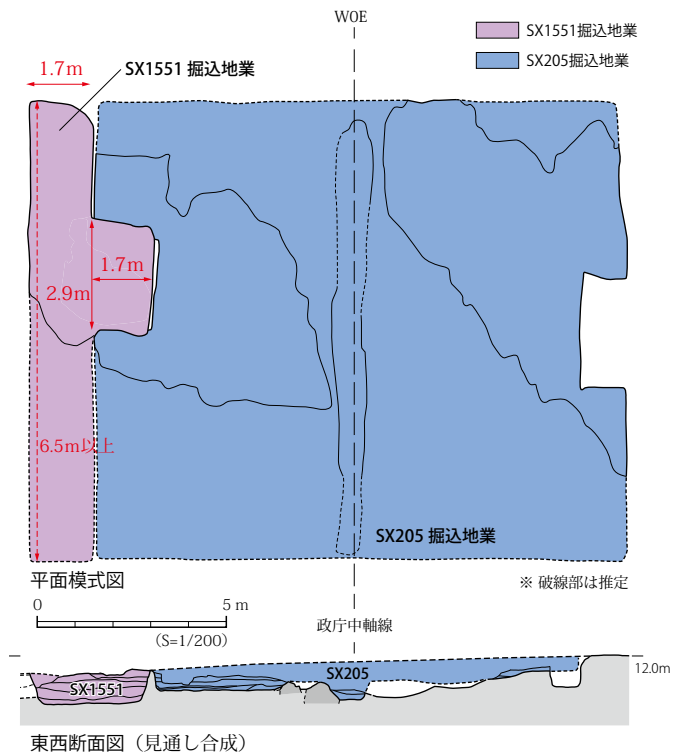
SX3240 は SX1551 掘込地業の上に載る SB201 南門の基壇積土とみられる層で、第 48 次調査で SX1551 築成土上層としていたものである。掘込地業土とは明らかに土の特徴が異なることから別番号を付して扱うことにした。SX3248 整地層、SB201 B 礎石掘穴より古い。

分布

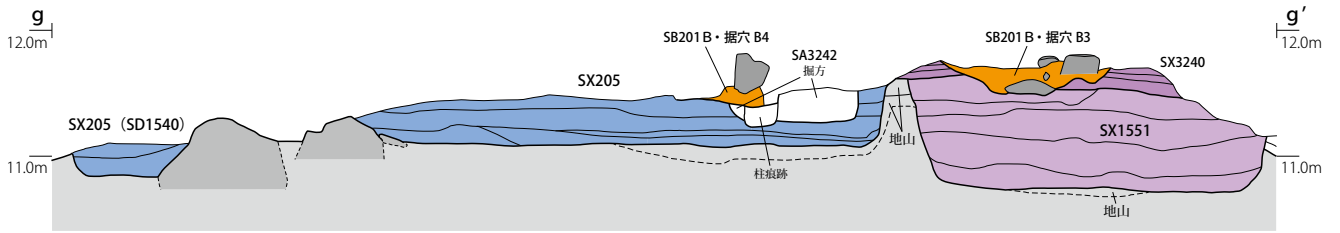
確認できた分布範囲は東西約 3.0 m、南北約 2.6 m で、SX1551 の上部から若干東へはみ出す位置に限られる。

築成土

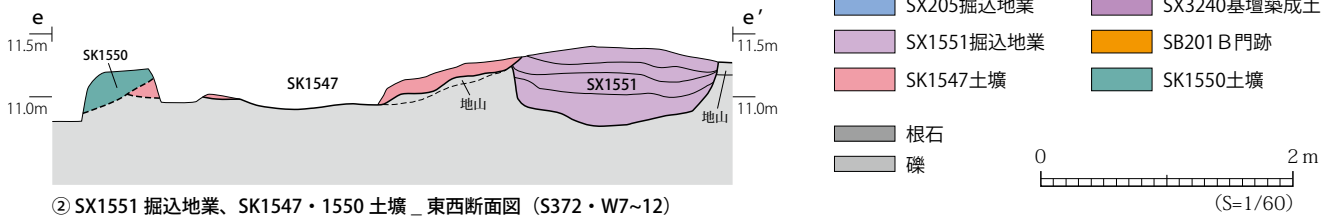
築成土は最大 30cm の厚さで残存しており、にぶい黄褐色やにぶい褐色のシルト質粘土を用い



図版 42 SX1551 掘込地業模式図



① SB201B門跡、SX205・1551掘込地業、SX3240基壇築成土、SA3242柱穴_東西断面図 (S377・E1~W9)



② SX1551掘込地業、SK1547・1550土壌_東西断面図 (S372・W7~12)



図版 43 SB201門跡、SX205・1551掘込地業、SX3240基壇築成土ほか_断面図・写真



図版 44 SB201 門跡、SX205・1551 掘込地業 _ 検出状況写真



図版 45 SB201 門跡、SX205・1551 掘込地業 _ 断ち割り後写真

て5～10cmの単位で版築されている。いずれの版築層も比較的均質に径1～3cmの白色凝灰岩片(岩盤片)を含んでおり、重複するSX1551埋土やSX3248整地層、SB201 B礎石据穴の埋土、周辺のSX1562整地層、SX3254盛土にはみられない特徴である。焼土・炭化物は含まない。

出土遺物 遺物は、築成土の確認面から重弁蓮花文軒丸瓦222と二重弧文軒平瓦511の破片が各1点出土している。

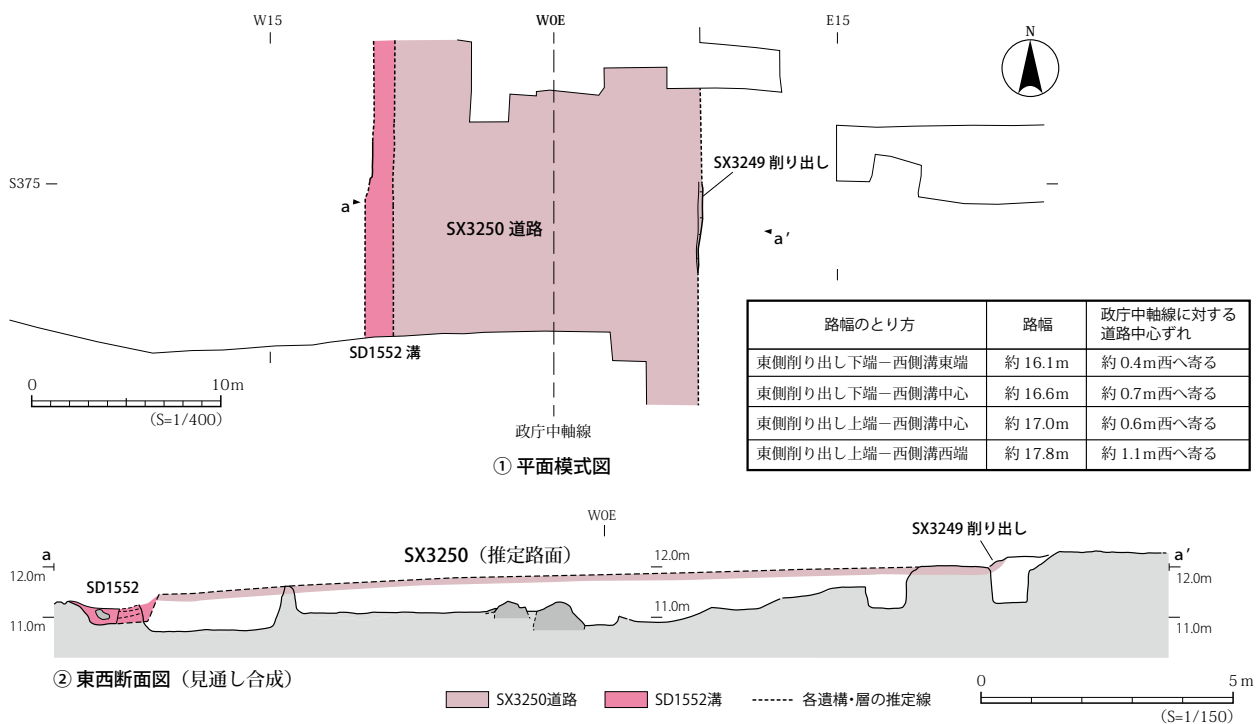
(b) 南門跡周辺の遺構

検出遺構 南門跡周辺では、道路跡や削り出し面、整地層、柱列・柱穴、溝、土壌などが検出されており、これらの中には南門や築地塀と重複し、その変遷や構築工程に関わる遺構が多く認められる。そこで、南門周辺で発見した遺構の状況をまとめて以下に記述する。なお、SX2748削り出し面は後述する東側の南辺築地塀(SF202)と関連する部分が多いため、末尾で説明する。

【SX3250道路跡(SX3249削り出し、SD1552溝)】(図版38・46・47)

概要 南門跡構築以前の遺構として、E7.8ライン上にみられるSX3249地山削り出しとW9ライン上の地山面で検出したSD1552溝を東西両端とする南北道路跡の存在を確認し、SX3250とした。

SX3249はSX3238・3239整地層、SA1538柱列、SF202a築地塀跡より古く、SD1552はSX1562基礎整地、SX3254盛土、SX1551掘込地業、SX3248嵩上げ整地、SK1547・1553・1554土壌より古い。いずれも周辺の遺構の中で最も古く、その方向が南北の発掘基準線に対して北で約1°東に偏して一致しており、両者の対称軸は政庁中軸線上の付近にある。また、北側では政庁南大路にあたるSX1411道路跡、南側ではSX3000南北大路跡が概ね政庁中軸線上を



図版46 SX3250道路跡(SX3249削り出し、SD1552溝) 模式図

南北に伸びていることが判明している^(註5)。

道路跡は南北約 7.4 m 分 (S 372.1 ~ 379.5) を検出しており、東端には地山を斜めに削り込んだ高さ 0.2 ~ 0.3 m の壁が残り、西端は上端幅 1.5 m 以上、下端幅約 1.0 m、深さ 0.4 m 程で、断面が逆台形状を呈する側溝 (SD1552) で画されている。路幅は削り出し下端と西側溝の東肩でみて約 16.1 m となり、路心は政庁中軸線から約 0.4 m 西へ寄る。路面は判然としないが、整地層が全く検出されていないこと、削り出しと側溝が残る南門下は小丘の尾根筋にあたる周辺で最も高い場所であること、東端の削り出し面と西部に残る地山面の比高差が 0.4 m 前後と小さいこと、SX1411 A 道路跡の路面が西側へ 2 ~ 6° 傾斜していること (『年報 1983・2007・2015』) などから、削り出された地山面が路面であったとみられる。その場合、路面は緩やかに西へ傾斜し、西部で最大 3° 前後の勾配をもつ。

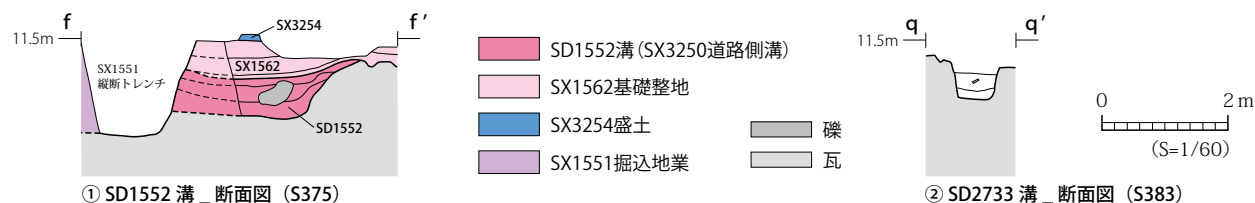
構造・規模

東端部の削り出し面上部には堆積土が認められない。上部に直接 SX3238 整地層が載っており、この整地の際に堆積土が除去されたとみられる。

SX3249 堆積土

西側溝の堆積土は 3 層に分けられ、上から順に均質なぶい黄褐色シルト質粘土、地山小ブロックを含む褐色シルト、壁の崩落土とみられる地山土のブロックを多く含む褐色砂質シルトとなる。いずれも自然流入土で、上部に残った最終的な窪みは SX1562 基礎整地の際に埋め戻されている。遺物は出土していない。

SD1552 堆積土



SD1552 溝断面 (87 次、北西から)

SD1552 溝 (87 次、南から)

SD2733 溝断面 (87 次、北から)



SD1552 溝 (87 次、北西から)

SD1552 溝の南端断面 (87 次、南から)

図版 47 SD1552・2733 溝_断面図・写真

【SA1538 柱列・SA3242 柱穴】 (図版 38・43・48～51)

概要 SX205 掘込地業の東辺の掘り残し部を間に挟むかたちで東西に並ぶ2個の柱穴を SA1538 柱列とし、SX205 西部 (S 377・W 4.5 付近) で確認した柱穴1個を SA3242 柱穴とした^(註6)。以前の調査で同一の柱列としたが、SA3242 の柱穴は SA1538 の柱穴2個の柱筋を結んだ延長線上に位置しておらず、両者の間隔が約 10.2 mあり、その間を繋ぐ柱穴は不明なこと、SA3242 の柱穴には焼土・炭化物粒を含む柱痕跡が残り、SA1538 の柱穴では柱が抜き取られてその埋め戻し土に焼土・炭化物粒は含まれていないことから、別番号を付して扱うことにした。

但し、これら3個の柱穴は底面の標高値が 11.2～11.3 mでほぼ揃っており、SA3242 の柱痕跡に焼土・炭化物粒が含まれる以外は、柱穴の特徴が似通っている。SA3242 の柱穴上部が埋土に焼土・炭化物粒を含む SB201 B門跡の礎石据穴 (B 4) に壊されていることを考慮すると、両者が一連の柱列である可能性は残る。

SA1538 柱列 SA1538 の重複関係をみると、SX3250 道路跡 (SX3249 削り出し)、SX205 掘込地業より新しく、SF202 a 築地塀跡、SX3239 整地層、SK3241 土壌より古い。また、本柱列の西側柱穴 (P 1) は SB201 A門跡の礎石据穴 (A 1) とも僅かに重複しており、その平・断面と埋土を検討した結果、本柱列の方が古いと判断した^(註7)。なお、東側柱穴 (P 2) の上部が新しい穴に大きく壊されており、SX3238 整地層との関係は判然としないが、SX3238 は P 1・2 の間で皿状に窪み、本柱列の抜取穴はこの整地層上面から掘り込まれている。

SA1538 規模 SA1538 の柱抜取穴は、互いに向かい合うかたちで P 1 では東から、P 2 では西から掘り込まれており、その底部に残る圧痕から柱の径は約 0.2 mと推定される。柱間は約 2.5 mで、方向は発掘基準線に対し東で約 6°南へ偏している。

柱穴は長辺約 1.0 m、短辺約 0.8 mの長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。深さは 0.7～0.8 mで、埋土は地山土の大ブロックや凝灰岩片を多く含む灰黄褐色またはにぶい黄褐色のシルトである。

SA1538 出土遺物 遺物は、P 2 の掘方埋土から丸瓦Ⅱ類の小破片1点が出土している。

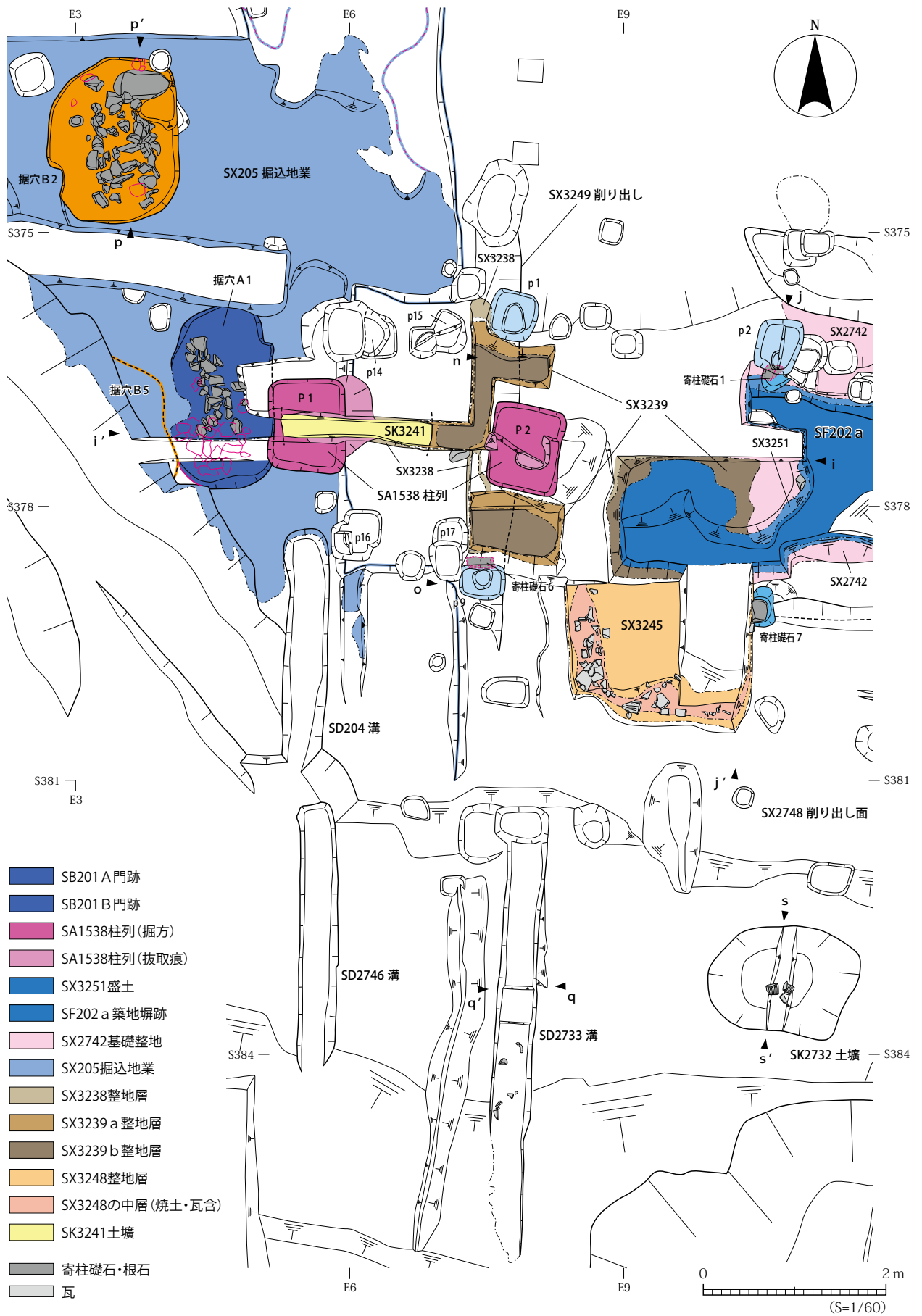
SA3242 柱穴 SA3242 は SX205 掘込地業より新しく、SB201 B門跡よりも古い。柱穴は一辺約 1.0 m前後の方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。深さは約 0.25 mで、埋土に焼土・炭化物粒を含む径約 0.25 mの柱痕跡が残り、掘方埋土は地山ブロックを多く含む褐色砂質シルトで、僅かに炭化物粒が混じる (断面：図版 43)。

SA3242 出土遺物 遺物は、掘方埋土から丸瓦Ⅱ類2点と平瓦ⅡB類1点 (図版 50-1)、柱痕跡から丸瓦Ⅱ類1点と土師器杯の小破片が出土している。

【SA1536 柱穴】 (図版 38)

検出状況・重複 W 2・S 375 付近で検出した比較的規模の大きい1個の柱穴で、組み合う柱穴は確認できなかった。確認面は、第 48 次調査によると SX205 掘込地業下の岩盤面である。

規模・構造 柱穴は長辺約 1.7 m×短辺約 1.0 mの不整な長方形を呈し、深さは 0.05～0.1 mである。遺存状態が極めて悪いため、構造・性格は不明である。第 48 次の調査時には最も古い掘立式門の可能性を検討したが、柱穴底面レベルと周辺地形の検討および築地塀との位置関係から門とは考



え難いとの結論に至っている。遺物は出土していない。

【SA1564 柱穴】 (図版 38)

検出状況・重複 W 10・S 374 付近で検出した比較的規模の大きい 1 個の柱穴で、組み合う柱穴は確認できなかった。確認面は、第 48 次調査によると SX3254 盛土上面で、SX1562 基礎整地、SX3254 より新しく、SK1554 土壌より古い。

規模・埋土 柱穴は一辺約 0.65 m 前後の方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。深さは約 0.35 m で、埋土は旧表土ブロックと地山土の細かいブロックが混じるにぶい黄褐色砂質シルトである。第 48 次では径 0.18 m の柱痕跡を確認していたが、第 87 次の再調査では検出できなかった。構造・性格は判然とせず、遺物も出土していない。

【SX3238 整地層】 (図版 48～51)

検出状況 SX3238 は SA1538 柱列の周辺に認められる整地層で、SX2742 基礎整地と SX3251 盛土の E 10.5 から西側を削り取り、更に SX3250 道路跡の東端部にあたる SX3249 削り出し面上の堆積層を除去した地山面に直接載っている^(註8)。

分布範囲・重複 現況の分布範囲は東西 3.5 m、南北 2.8 m で、ベルト以外の部分は以前の調査で掘り下げられてほとんど残存していない。重複関係をみると、SX3250 道路跡、SX2742 基礎整地、SX3251 盛土より新しく、SX3239 整地層、SF202 a 築地塀跡、SK3241 土壌より古い。SX205 掘込地業、SA1538 柱列、SB201 A 門跡との前後関係は判然としませんが、SA1538 の柱抜取穴はこの整地層上面から掘り込まれており、少なくとも SB201 A よりは古い可能性がある^(註9)。

整地土・堆積土 整地には白色の凝灰岩片を多く含む明褐色やにぶい褐色のシルトが用いられており、厚さは 5～15cm で、SA1538 の柱間にあたる中央部が皿状に窪んでいる。この窪んだ部分の直上には褐色粘土質シルトの自然堆積層が 1～6 cm の厚さで認められ、東部の SX2742 を削り取った部分にも自然堆積層とみられる褐色シルトの薄層が残存していた。

出土遺物 遺物は、整地層中から平瓦 I A 類 1 点 (図版 50-2) が出土している。

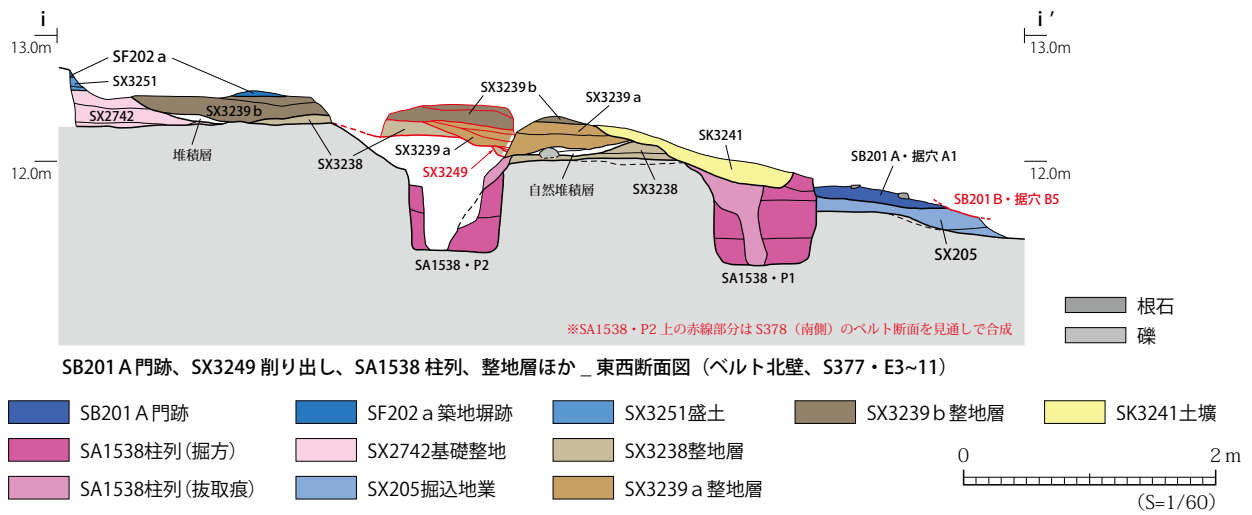
【SX3239 整地層】 (図版 48～51)

検出状況 SX3239 は SA1538 柱列の周辺に認められる整地層で、土色・土性の特徴から SA1538 の柱間の窪みを埋め戻した a 層とその上部を SX2742 基礎整地の上面まで嵩上げた b 層に細分され^(註10)、この上に SF202 a 築地塀本体が築成されている。

分布範囲・重複 確認できた分布範囲は東西 4.0 m、南北 2.5 m で、SX3238 整地層と同様にベルト以外ではほとんど残存していない。重複関係をみると、SX3250 道路跡、SX2742・3238 整地層、SX3251 盛土、SA1538 柱列より新しく、SF202 a 築地塀跡・SK3241 土壌より古い。

整地土 a 層は地山の小ブロックを多く含む褐色やにぶい褐色のシルトで、厚さは最大で 25cm ある。b 層は凝灰岩片と地山土の大ブロックを多く含む明黄褐色砂質シルトで、厚さは 5～20cm ある。

出土遺物 遺物は、a 層から平瓦 I A 類 3 点 (図版 50-3・4)・II B 類 1 点 (5) が出土している。II B 類の 1 点は a₂ タイプで、均整唐草文軒平瓦 660 と組むものとみられる。また、b 層からは



SA1538 柱列、SX3238・3239 整地層、SK3241 土壌ほか _ 東西ベルト北壁 (87 次、北西から)



SX3249 削り出し、SA1538 柱列、SX3238・3239 整地層、SK3241 土壌ほか _ 東西ベルト南壁 (87 次、南西から)



SX3249 削り出し、SX3238・3239 整地層、SK3241 土壌 _ 東西ベルト南壁 (87 次、南から)

図版 49 SB201 A 門跡、SX3249 削り出し、SA1538 柱列、SX3238・3239 整地層、SK3241 土壌ほか _ 断面図・写真

底部が静止糸切りで、その後に底部から体下端部に回転ヘラケズリを施した須恵器環1点（6）が出土している。

【SD2733 溝】（図版 38・47・48）

構造・規模

SD2733 は岩盤面で確認した E 8 付近を南北方向に直線的に伸びる溝である。SF202 築地塀の南裾から約 2.4 m 離れた S381.3 付近を北端として約 5.0m 分を検出したが、S 386.3 以南は削平により失われている。他の遺構との重複は認められない。方向は発掘基準線に対し北で約 3° 東に偏しており、SX3249・SD1552 よりも東への振れがやや大きい。基盤の凝灰岩を掘り込んでおり、北端部が東西 0.6 m × 南北 0.4 m のピット状に一段深くなっている。この部分の深さは 0.3 m あり、それ以外では上端幅が約 0.4 m、深さは 0.25 m 前後で、断面は箱形を呈し、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。

堆積土

堆積土は上下 2 層に分けられ、上層は焼土・炭化物と地山ブロック（凝灰岩片）を多く含むにぶい黄褐色シルト層で、瓦片の含有量も多く、人為的に埋め戻されていると考えられる。下層は均質なにぶい黄褐色シルト層で、自然堆積土である。

この溝は SX3250 道路跡の東端の延長線上に位置する点で注目される。SD2733 の西肩はおおよそ E 7.65 ライン上にあり、SX3249 削り出しの下端とほぼ位置が揃うことから、SX3250 の東側溝となる可能性がある。その場合、SD1552 とは溝の規模や堆積土の特徴が大きく異なっており、溝の北端が、想定される SB201 A 南門基壇の南東隅付近に位置することを踏まえれば、SB201 A の造営段階で整備されたものの可能性が高い。

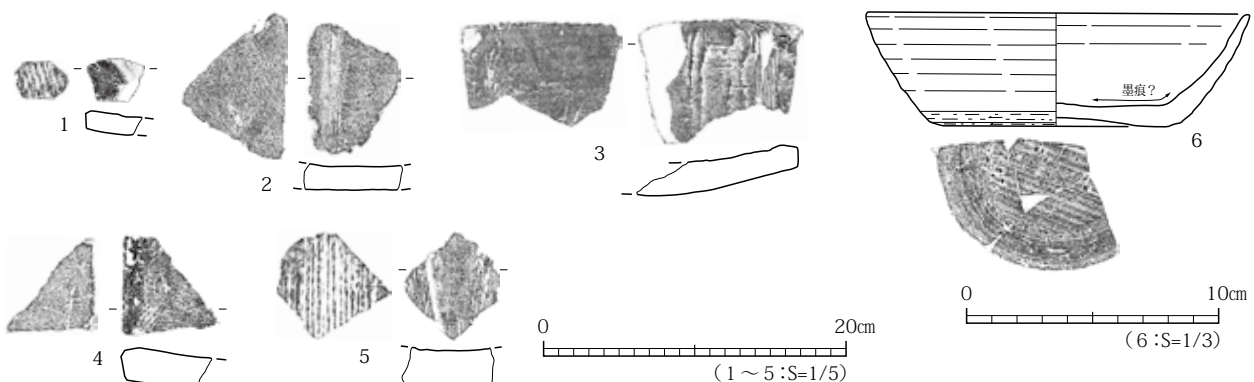
出土遺物

遺物は、上層から丸・平瓦の破片が出土しており、丸瓦には II・II B 類、平瓦には I A・II B 類がみられる。丸瓦 II B 類 1 点の凸面に刻印が認められたが、文字は欠損により不明である。

【SD204・2746 溝】（図版 38・48）

SD204 溝

SD204 は E 5.5 ライン上を南北方向に伸びる溝で、S 378.2 を北端とし、長さ 2.7 m 分を検



No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SA3242柱穴・掘方埋土	48	平瓦 II B	破片	—	—	—	(1.4)			R 3	B 6745
2	SX3238整地層	48	平瓦 I A	破片	—	—	—	(1.7)			R 2	B 6745
3	SX3239 a 整地層	48	平瓦 I A	破片	—	—	—	(2.0)			R 5	B 6745
4	SX3239 a 整地層	48	平瓦 I A	破片	—	—	—	(2.2)			R 3	B 6745
5	SX3239 a 整地層	48	平瓦 II B	破片	—	—	—	(2.4)	a タイプ 2 均整唐草文軒平瓦660と組む		R 4	B 6745
No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	口径	底径	器高		特徴	写真図版	登録	箱番号
6	SX3239 b 整地層	48	須恵器・環	1/4	(15.2)	(9.0)	4.5		底部：静止糸切り→回転ヘラケズリ 底部内面に墨痕？		R 2	B 6764

図版 50 SA3242 柱穴、SX3238・3239 整地層 _ 出土遺物



検出状況 (48次、東から)



断ち割り途中 (48次、西から)

SB201A門跡、SA1538柱列、SX3239整地層、SK3241土壌ほか



SX2742・3238・3239 整地層_ベルト北壁東部 (87次、北西から)



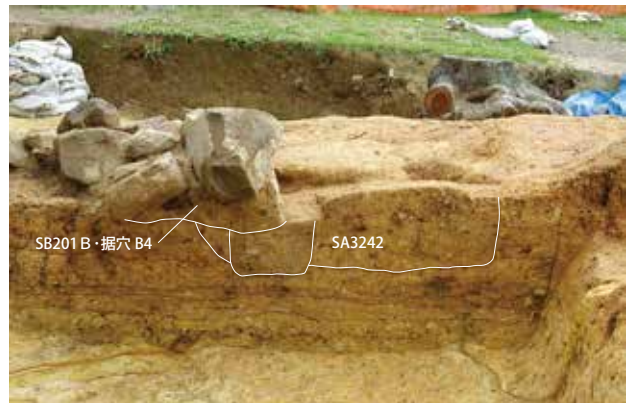
SB201A・据穴A1とSA1538・P1_ベルト南壁西部 (87次、南から)



SA1538・P1とSX3238・3239、SK3241_ベルト北壁中央部 (87次、北から)



SA1538・P2とSX3239_ベルト北壁中央部 (87次、北から)



SB201B・据穴B4とSA3242柱穴_S377東西断面 (87次、北から)

図版 51 SB201A門跡、SA1538柱列、SA3242柱穴、SX3238・3239整地層、SK3241土壌ほか_写真

出している。第7次調査で完掘されているため詳細は不明であるが、SX205 掘込地業を掘り込んでみるとみられ、南端部はSD1565 溝に壊されている^(註11)。規模は上幅 0.4～0.5 m、深さ 0.4～0.5 mで、断面は箱形を呈し、基盤の凝灰岩を掘り込んだ底面は緩やかに南へ傾斜している。方向は南北の発掘基準線にほぼ一致する。第7次調査の記録によると、堆積土は焼土粒と凝灰岩粒を含む黄褐色土もしくは褐色土であったとみられる。

SD2746 溝 SD2746 は E 5.6 ライン上を南北方向に伸びる溝で、SD204 から 0.3 m程南に離れた S 381.2 を北端とし、長さ 3.0 m分を検出している。確認面は表土直下の岩盤で、上部は削平を受けており、S 384 以南は削平によって完全に失われている。規模は上幅約 0.4 m、深さ 0.15～0.2 mで、断面は箱形を呈し、基盤の凝灰岩を掘り込んだ底面は緩やかに南へ傾斜している。方向は南北の発掘基準線にほぼ一致する。堆積土は焼土・炭化物粒と凝灰岩粒を含む褐色シルトの自然堆積土である。遺物は出土していない。

一つの溝 SD204 と SD2746 は、それぞれの南北軸が若干東西にずれるものの、ほぼ同規模、同方向の溝で、堆積土の特徴も類似している。両者は削平により 0.3 m程の間隔が空いた状態で検出されているが、本来は連続した一つの溝であったと考えられる。その場合、SD2746 の北端部で 0.2 m程の段が付いて一段深くなり、そこから南では溝の位置が約 0.1 m東へずれている。

【SK1547 土壌】(図版 38・52・53)

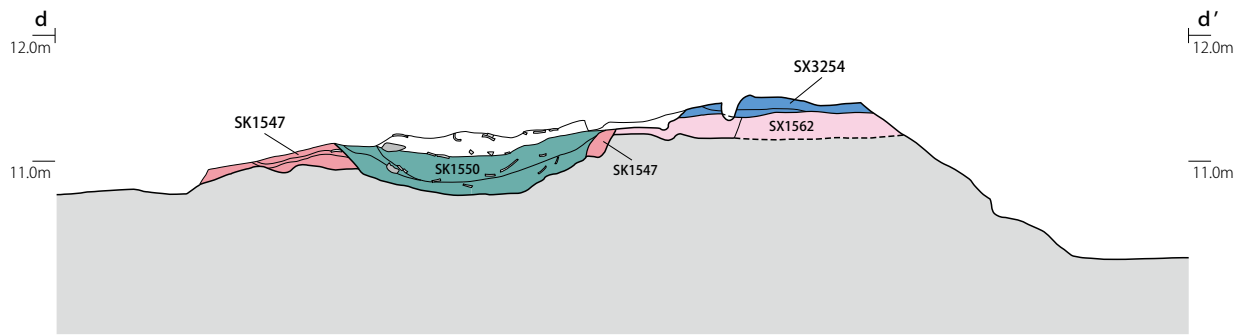
検出状況・重複 SK1547 は南門跡北西側の SX1562 基礎整地上面で検出した不整楕円形の土壌で、南西部がSK1550 土壌によって壊されている。多数の遺構と重複し、SD1552 溝 (SX3250 道路跡)、SX1562 基礎整地、SX1551 掘込地業より新しく、SK1550・1554・1563 土壌より古い^(註12)。

規模・堆積土 規模は東西約 5.5 m、南北約 3.2 mで、深さは 0.15～0.3 mある。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は焼土と地山のブロックを多量に含むにぶい赤褐色やにぶい黄褐色の砂質シルトで、炭化物粒・灰も多く混じる。人為的に埋め戻されている。

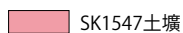
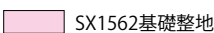

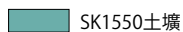
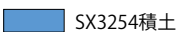
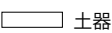
出土遺物 遺物は、埋土から多量の瓦と須恵器坏・甕の小破片、鉄釘 2 点 (図版 53 - 10・11) が出土している。

瓦類には軒丸瓦 3 点、軒平瓦 7 点、鬼板 1 点、熨斗瓦 2 点 (7・8)、丸瓦 62 点、平瓦 143 点がある。類型が判別できる軒丸瓦は重弁蓮花文 (型番 221～228、図版 53 - 1)、重圏文 240 (2)、軒平瓦は二重弧文 511 (3)、単弧文 640、無文 641 (5)、均整唐草文 721 A (4) の各 1 点があり、軒平瓦 511 の顎面には赤色顔料の付着が認められた。鬼板は大型の重弁蓮花文を表したもので (6)、裏面には篲の子状圧痕が残り、953 とみられる。平瓦は I A 類 35 点・I B 類 5 点、II 類 8 点・II A 類 8 点・II B 類 87 点で、II B 類の主体は a タイプ 1・2 であるが、a タイプ 3 と b タイプが各 1 点含まれていた。また、軒丸瓦 240 (2) の裏面には「物」A の刻印、平瓦 II B 類では「丸」A 2 点・「伊」1 点・「矢」A 1 点 (9) の刻印文字瓦が認められた。

時期が特定できる瓦類の大半は第 I・II 期のもので、総量ではやや第 II 期の瓦が勝り、丸・平瓦の約 2 割は焼瓦であった。なお、第 III 期の均整唐草文軒平瓦 721 A と平瓦 II B a₃・II B b 類が各 1 点出土しているが、明確な第 I・II 期以外の瓦は 218 点中この 3 点のみで、重複する SK1550 土壌の遺物が混入した可能性がある。



SF1556 築地堀跡、SX1562 基礎整地、SK1547・1550 土壌 _ 南北断面図 (W12 西壁)

- | | | |
|--|--|--|
|  SK1547土壌 |  SX1562基礎整地 |  瓦 |
|  SK1550土壌 |  SX3254積土 |  土器 |

0 2m
(S=1/60)



SK1547・1550 土壌 (48 次、北から)



SK1547・1550 土壌_W12 ベルト西壁断面 (48 次、北東から)



SX1551 掘込地業と SK1547 土壌 (87 次、北西から)



SK1547・1550 土壌_W12 ベルト東壁断面 (87 次、北東から)

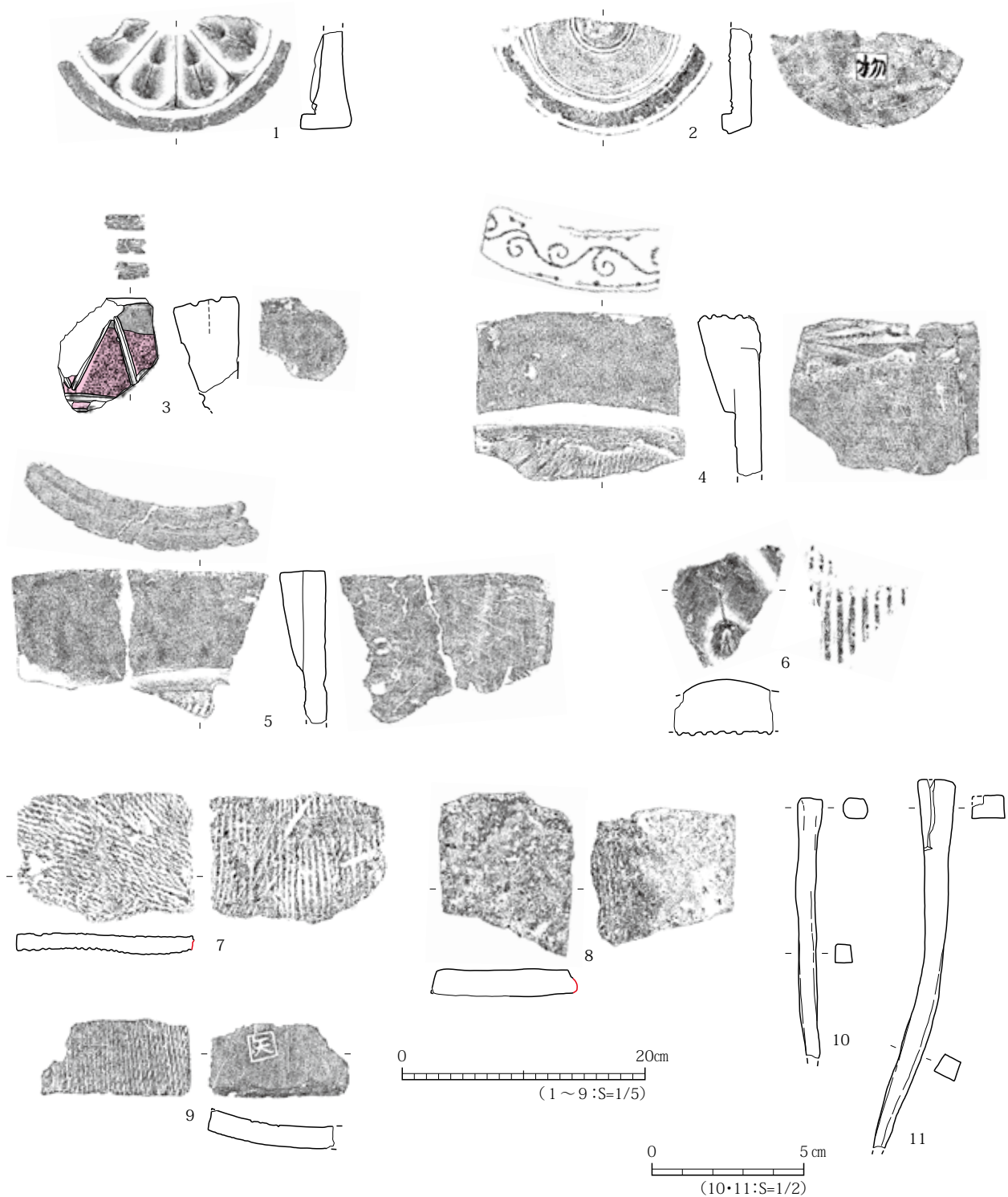


SX1551 掘込地業と SK1547 土壌_S372 断面拡大 (87 次、南から)



SK1547・1550 土壌_W12 ベルト東壁北部拡大 (87 次、北東から)

図版 52 SK1547・1550 土壌ほか _ 断面図・写真



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK1547・埋土	48	軒丸瓦221~228	瓦当部1/2	—	—	(4.1)	重弁蓮花文		R17	B6748
2	SK1547・埋土	48	軒丸瓦240	瓦当部1/2	—	—	(2.4)	重圏文 裏面に刻印文字「物」A bタイプ		R12	B6748
3	SK1547・埋土	48	軒平瓦511	破片	—	—	(5.1)	二重弧文 顎面に赤色顔料付着 aタイプ	131-2	R9	B6749
4	SK1547・埋土	48	軒平瓦621	瓦当部1/2	—	—	(4.8)	偏行唐草文 顎面刷毛目調整		R8	B6749
5	SK1547・埋土	48	軒平瓦641	瓦当部1/2	—	—	(3.7)	無文 顎面ナデ調整		R7	B6749
6	SK1547・埋土	48	鬼板953	破片	—	—	(4.4)	重弁蓮花文の蓮弁のみ 裏面：簀の子状圧痕	132-2	R35	B15511
7	SK1547・確認面	87	熨斗瓦I	破片	—	14.7	(1.5)	左面：縄叩き目→布目 右面：布目→縄叩き目 分割線の深さ：0.4cm 焼瓦？	132-9	R141	B15362
8	SK1547・埋土	48	熨斗瓦II	破片	—	12.0	(2.2)	左面：ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 焼瓦(器面の剥落著しい) 分割線の深さ：0.7cm	132-7	R31	B6753
9	SK1547・埋土	48	平瓦II B	破片	—	—	(1.7)	aタイプ2 凹面に刻印文字「矢」A		R24	B6754
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
10	SK1547・埋土	48	鉄釘	4/5	(8.5)	0.6	0.6	断面方形 頭部0.8×0.6cm 先端欠損	134-1	R21-1	B13923
11	SK1547・埋土	48	鉄釘	ほぼ完形	(12.4)	0.7	0.6	断面方形 頭部1.2×0.7cm 先端欠損	134-2	R21-2	B13923

図版 53 SK1547 土壌_出土遺物

【SK1550 土壌】 (図版 38・52・54・55)

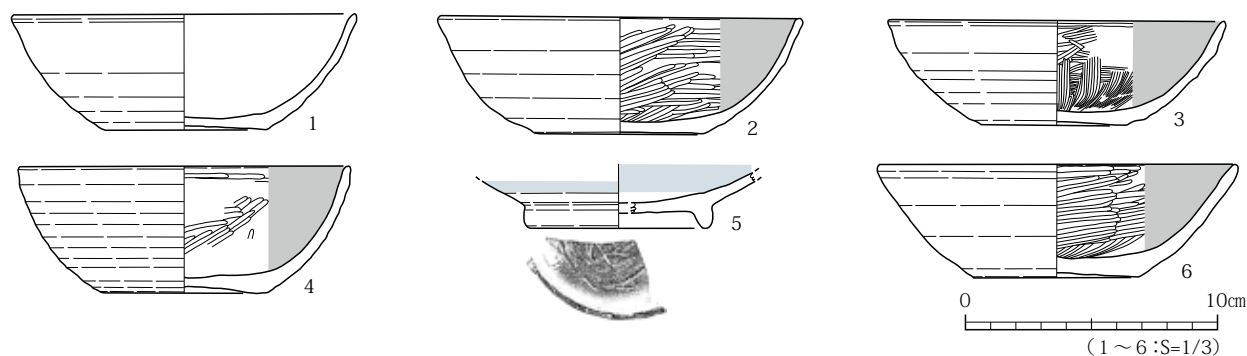
SK1550 は SK1547 土壌南西部の埋土上面で検出した不整円形の土壌である。SK1547 土壌、重複・規模 SD1543 溝と重複し、SK1547 より新しく、SD1543 より古い。規模は東西約 2.0 m、南北約 2.0 m で、深さは 0.4 m 程である。平坦な底面から、ゆるやかに壁が立ち上がる。

堆積土は 3 層に分けられ、上層は焼土・炭化物粒と地山小ブロックを含む褐色砂質シルト、中層は地山ブロックを含む褐色砂質シルト、下層はやや大きめの地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色砂質シルトで、中・下層にも焼土・炭化物粒が少量含まれる。いずれも人為的に埋め戻されており、土壌上部は第Ⅱ層で覆われていた。

遺物は、各層から多量の瓦と土器が出土している (図版 54・55)。

瓦類には、軒丸・平瓦、熨斗瓦 (図版 55 - 6・7)、丸・平瓦がある。軒丸瓦は重圏文 243、陰刻花文 450・451 (図版 55 - 1・2) が出土しており、軒平瓦では二重弧文 511 (3)、単弧文 640 (4)、無文 641、鋸歯文 630、二重波文 650 (5) がある。丸瓦にはⅡ B 類、平瓦にはⅠ A・Ⅰ B・Ⅱ A・Ⅱ B・Ⅱ C 類がみられ、平瓦Ⅱ B 類では a タイプ 1~3 と b タイプのすべてが含まれる。丸瓦の中には刻印文字「物」A 1 点と「本」1 点 (8)、新出の刻印記号 1 点 (9)、平瓦Ⅱ B 類には刻印文字「物」A 1 点・「矢」A 4 点 (10)・「丸」A 2 点がみられる。

土器類には、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器がある。土師器は坏・甕が出土しており、すべてロクロ整形のものであった。坏は底部が回転糸切り無調整のもの (図版 54 - 1~4) と底部全面を手持ちヘラケズリしたものがあり、すべて内面が黒色処理されていた。甕は底部と体部の小破片である。須恵器も坏・甕の小破片で、坏には回転糸切り無調整のものとヘラ切り無調整のものが認められた。須恵系土器は坏 1 点である。灰釉陶器は碗もしくは皿の 1 点 (5) で、屈曲の弱い三日月高台が付き、釉薬は底部を除く内外面に漬け掛けされている。東濃産で大原 2 号窯式のものと思われる。



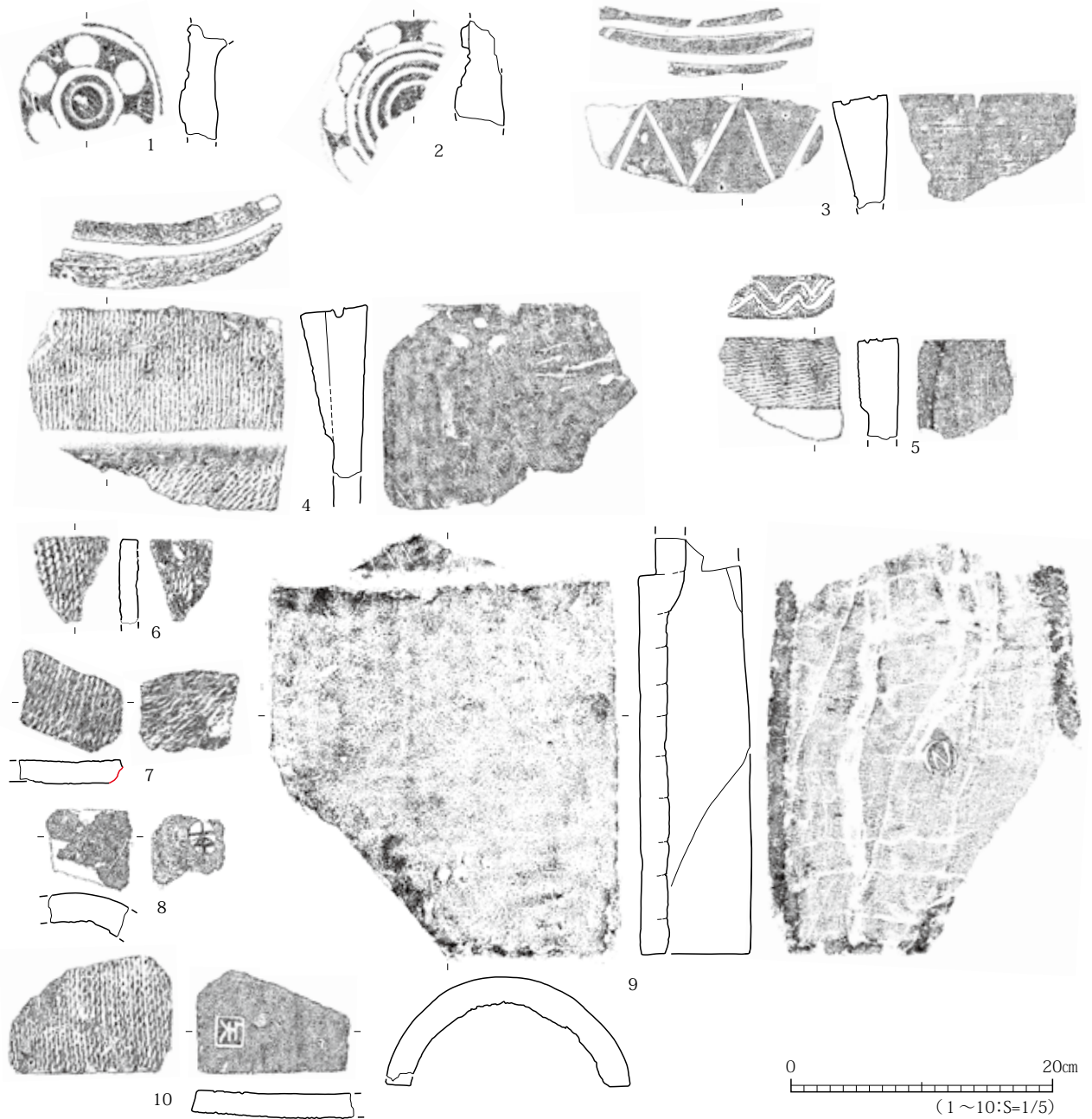
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK1550・中層	48	土師器・坏	1/2	(13.7)	6.5	4.6	ロクロ整形 内面：ヘラミガキ+黒色処理(摩滅) 底部：回転糸切り無調整		R23	B6765
2	SK1550・中層	48	土師器・坏	完形	14.5	6.7	4.7	ロクロ整形 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り無調整		R4	B6765
3	SK1550・下層	48	土師器・坏	2/3	13.4	5.8	4.2	ロクロ整形 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り無調整		R24	B6765
4	SK1550・下層	48	土師器・坏	3/4	13.1	6.5	5.1	ロクロ整形 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り無調整		R25	B6765
5	SK1550・中層	48	灰釉陶器・碗or皿	破片	—	(6.8)	—	底部：ナデ 屈曲の弱い三日月高台 高台径：7.5cm 漬け掛け 東濃産 大原2号窯式	130-15	R26	B6765
6	SK1554・堆積土	48	土師器・坏	3/4	14.4	6.6	4.5	ロクロ整形 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り無調整		R31	B6765

図版 54 SK1550・1554 土壌 _ 出土遺物

【SK1553 土壌】 (図版 38)

検出状況・重複

SK1553 は南門跡西側で SK1554 土壌の東に接し、これを切る不整楕円形の土壌である。
SD1552 溝 (SX3250 道路跡)、SX1562 基礎整地、SX3254 盛土、SX1551 掘込地業、SD1543



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SK1550・上層	48	軒丸瓦450	瓦当部1/2	—	—	—	(3.0)	陰刻花文		R 18	B 6748
2	SK1550・中層	48	軒丸瓦451	瓦当部2/5	—	—	—	(3.5)	陰刻花文		R 16	B 6748
3	SK1550・中層	48	軒平瓦511	瓦当部2/5	—	—	—	4.5	二重弧文 aタイプ		R 4	B 6749
4	SK1550・中層	48	軒平瓦640	瓦当部1/2	—	—	—	5.0	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:(2.8)cm		R 9	B 6750
5	SK1550・中層	48	軒平瓦650	破片	—	—	—	(3.3)	二重波文 bタイプ 平瓦部厚さ:(2.3)cm		R 3	B 6749
6	SK1550・上層	48	熨斗瓦 I	破片	—	—	—	(1.5)	左面:布目→縄叩き目 右面:縄叩き目→布目 焼瓦?(部分的に受熱の痕跡)		R 39	B 6753
7	SK1550・中層	48	熨斗瓦 I	破片	—	—	—	(1.8)	左面:布目→縄叩き目 右面:縄叩き目(つぶれ) 分割線:深さ0.5cm		R 32	B 6753
8	SK1550・上層	48	丸瓦 II	破片	—	—	—	(2.3)	凹面に刻印文字「本」		R 38	B 6755
9	SK1550・上層	48	丸瓦 II B	3/4	—	—	—	2.3	丸瓦部凹面に新出の刻印記号 丸瓦部長:29.5cm	133-9	R 9	B 6755
10	SK1550・下層	48	平瓦 II B	破片	—	—	—	(1.8)	aタイプ2 凹面に刻印文字「矢」A		R 22	B 6754

図版 55 SK1550 土壌 _ 出土遺物

溝とも重複し、SD1552、SX1562、SX3254、SX1551 より新しく、SD1543 より古い。

規模は東西 2.2 m、南北 1.1 m で、深さは 0.2 m 程である。底面にはやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は焼土・炭化物粒を僅かに含む黄褐色シルトで、人為的な埋土とみられる。

規模・堆積土

遺物は、堆積土から丸・平瓦とロクロ整形の土師器坏、須恵器甕・瓶の小破片が出土している。丸瓦にはⅡ B 類、平瓦にはⅠ A・Ⅱ A・Ⅱ B・Ⅱ C 類が認められ、平瓦Ⅱ B 類では a タイプ 1・2 と b タイプがある。

出土遺物

【SK1554 土壌】（図版 38・54）

SK1554 は南門跡西側で SA1564 柱穴を切る不整形の土壌で、SD1552 溝（SX3250 道路跡）、SX1562 基礎整地、SX3254 盛土、SK1547・1553 土壌、SD1543 溝とも重複し、SD1552、SX1562、SX3254、SK1547 より新しく、SK1553、SD1543 より古い。規模は東西 1.2 m、南北 1.7 m で、深さは 0.4 m 程である。底面は平坦で、壁は外側に開いて斜めに傾斜している。堆積土は第 48 次調査で完掘されているため判然としないが、底面に径 40cm 前後の礫 2 点が認められた。

重複・規模

遺物は、堆積土から瓦、ロクロ整形の土師器、須恵器が出土している。瓦には丸・平瓦があり、平瓦ではⅠ A・Ⅱ B 類がみられる。平瓦Ⅱ B 類には a タイプ 1・2 と b タイプが含まれる。土師器には底部が回転糸切り無調整の坏（図版 54 - 6）と甕体部の小破片がある。須恵器は回転糸切り無調整の坏と甕体部の小破片である。

出土遺物

【SK1563 土壌】（図版 38）

SK1563 は SK1547 土壌埋土の上面で検出した小土壌で、SK1547 を壊して地山まで掘り込んでいる。平面形は長辺 1.0 m、短辺 0.7 m の隅丸長方形を呈し、深さは 0.3 m 程である^(註13)。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は焼土・炭化物粒と地山ブロックを多く含む褐色シルトで、人為的な埋土とみられる。底面近くに瓦片がまとまって認められたが、取り上げは行っていない。

検出状況・規模

【SK2731 土壌】（図版 56・57・58・63）

SK2731 は南門跡南東側の E 12・S 386 付近で検出した不整楕円形の土壌で、SF202 築地堀跡の南約 6.0m に位置する。確認面は表土直下の岩盤で、上部は著しく削平を受けており、S 387 以南はその削平によって失われている。

検出状況

規模は東西 6.0 m 以上、南北 4.0 m 以上で、深さは 1.0 m 程である。基盤の凝灰岩を掘り込んでおり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。堆積土は風化礫片と瓦片を多く含む褐色シルトで、人為的に埋め戻されている（断面：図版 58）。

規模・堆積土

遺物は、埋土から瓦、土器、壁土の破片が出土している。

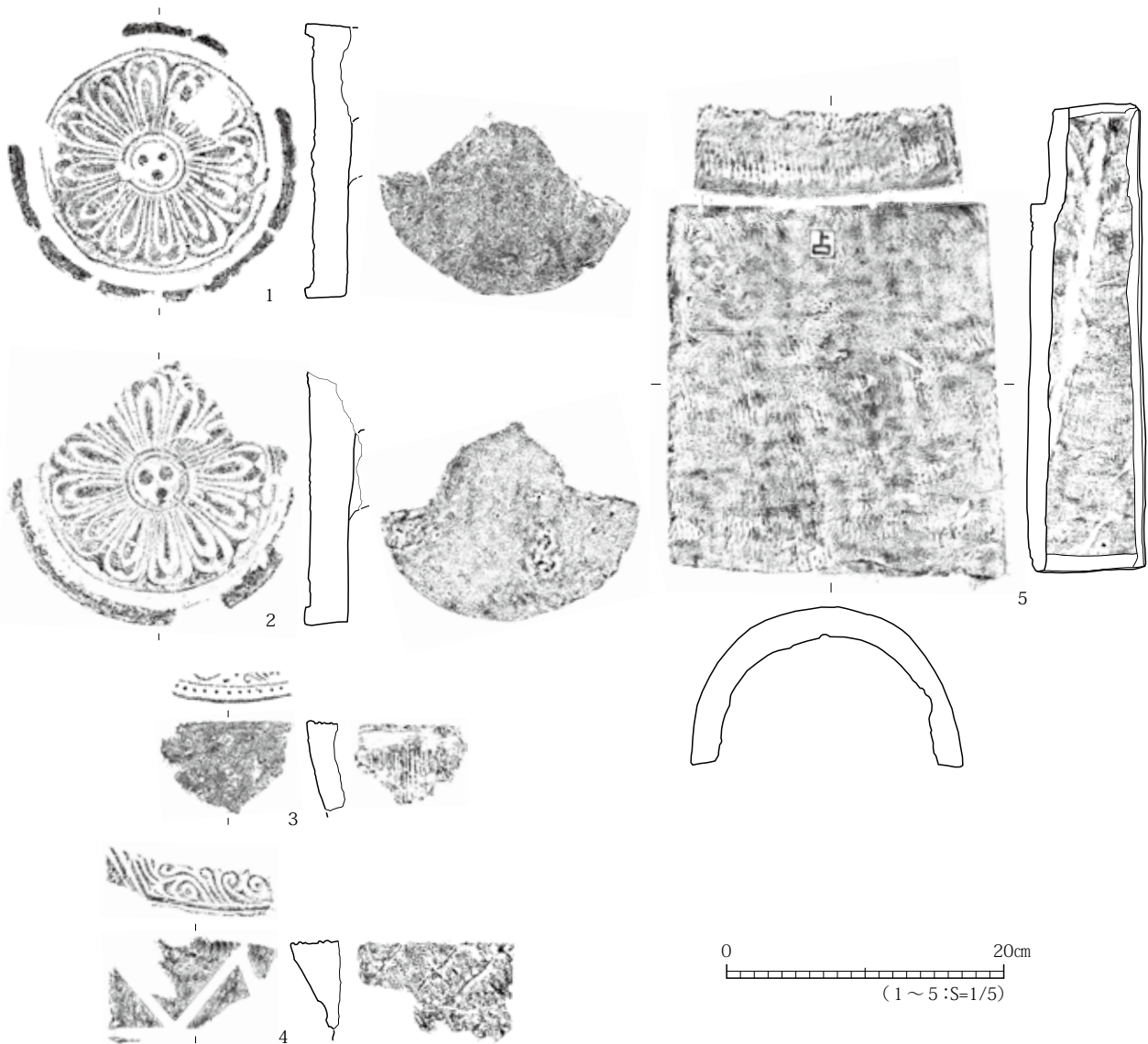
出土遺物

瓦類には、軒丸・平瓦、鬼板、丸・平瓦がある。軒丸瓦は細弁蓮花文 311（図版 56 - 1・2）と型番不明の重弁蓮花文、軒平瓦は二重弧文 511、均整唐草文 660（3）・721 A（4）、無文 641 がみられる。鬼板は裏面に簧の子状圧痕が残る小破片 1 点で、型番は不明である。丸瓦に

瓦類

はⅡA・ⅡB類があり、その中に「占」(5)の刻印文字が1点みられる。平瓦はⅠA(図版57-1)・ⅠB・ⅡB・ⅡC類があり、平瓦ⅡB類にはaタイプ1~3(3)とbタイプのすべてが含まれ、「物」A(2)の刻印文字が1点みられる。

土器類 土器類には、土師器、須恵器、須恵系土器がある。土師器は坏・甕、須恵器は坏・壺・甕、須恵系土器は坏・高台坏が認められるが、いずれも小破片で図示できない。土師器坏はすべてロクロ整形のもので、内面が黒色処理されている。須恵器坏の底部破片ではヘラ切り無調整、回転糸切り無調整のものがみられる。壁土はスサ入りの粘土塊である。



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅			厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端	厚さ					
1	SK2731・埋土	73	軒丸瓦311	瓦当部ほぼ完形	—	—	—	3.0	細弁蓮花文 瓦当面径：21.0cm		R 14	B 13566	
2	SK2731・埋土	73	軒丸瓦311	瓦当部3/4	—	—	—	3.5	細弁蓮花文		R 1	B 13565	
3	SK2731・埋土	73	軒平瓦660	頸部の剥落片	—	—	—	—	均整唐草文		R 16	B 13567	
4	SK2731・埋土	73	軒平瓦721A	頸部の剥落片	—	—	—	—	均整唐草文		R 7	B 13566	
5	SK2731・埋土	73	丸瓦Ⅱ	完形	34.0	17.0	13.0	2.3	玉縁長：7.0cm 丸瓦部凸面に刻印文字「占」		R 11	B 13566	

図版 56 SK2731 土壌 _ 出土遺物 (1)

【SK2732 土壙】 (図版 48・58)

SK2732 は南門跡南東側の E 11・S 383 付近で検出した不整楕円形の土壙で、SF202 築地堀 検出状況
跡の南約 4.0m に位置する。確認面は表土直下の岩盤で、上部は削平を受けている。

規模は東西 1.7 m、南北 1.2 m で、深さは 0.2 m 程である。断面は皿形で、底面からゆるやかに 規模・堆積土
に壁が立ち上がる。堆積土は瓦の大破片や地山粒を含むにぶい黄褐色砂質シルトで、自然堆積土



No.	出土遺構・層位	次数	種 類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SK2731・埋土	73	平瓦 I A	1/2	37.5	—	—	2.6	胎土に砂粒多い		R 12	B 13566
2	SK2731・埋土	73	平瓦 II B	ほぼ完形	34.0	(23.0)	(27.0)	2.2	aタイプ1 凹面に刻印文字「物」A 凸面に方形の窪み?		R 17	B 13567
3	SK2731・埋土	73	平瓦 II B	1/2	35.0	—	—	2.5	aタイプ3		R 13	B 13566

図版 57 SK2731 土壙 _ 出土遺物 (2)

とみられる。

出土遺物 遺物は、堆積土から瓦と須恵器甕の体部破片が出土している。瓦類には、重弁蓮花文軒丸瓦（型番 221～228）1点と丸・平瓦がある。丸瓦ではⅡB類が認められ、平瓦はⅠA・ⅠB・ⅡB・ⅡC類がみられる。平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2が含まれる。

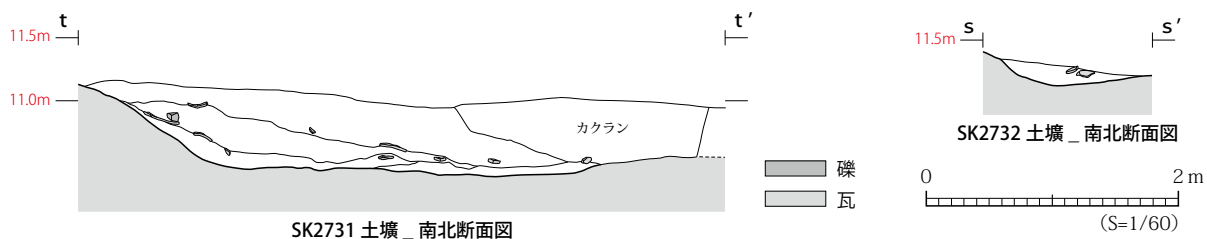
【SK3241 土壌】（図版 48・49・51）

検出状況・重複 SK3241はSA1538柱列の西側柱穴（P1）上部にみられる土壌で、少なくともSX3239整地層より上から掘り込まれている。この部分に残る東西ベルト（図版49の断面i-i'、図版51の写真3段目右）で確認したが、既に周辺は地山面まで掘り下げられており、その形状や規模を捉えることはできない。SA1538柱列、SX3238・3239整地層と重複し、いずれよりも新しい。なお、本土壌が南北に広がる場合は、SX205掘込地業の東辺部を壊しているとみられる。

規模・堆積土 断面観察では、東西幅は約1.6m、深さは西壁際が最も深く0.5mである。東壁は緩やかに立ち上がり、西壁はやや外側に開いて傾斜している。掘削後すぐに埋め戻されているとみられ、埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトで、焼土・炭化物粒が混じる。埋土中に遺物はほとんど認められない。

【SX2748 削り出し面（SD2729・2730溝）】（図版 59・60・62・63・66・70）

検出状況・重複 南門前面の東側で地山が削り出されて東西約8.8m、南北4.5m以上の範囲が一段低くなっていることを確認した。このSX2748削り出し面^(註14)は東西方向でみると東側へ、南北方向でみると南側へ傾斜しており、さらに西と南へ広がるが、削平によりその範囲を捉えることはできない。SD2729・2730溝は削り出し面の北東隅に設けられた側溝とみられる。

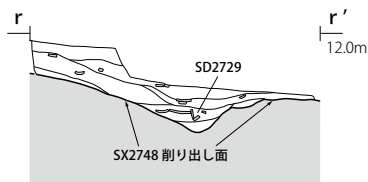


SK2731 土壌（73次、西から）



SK2732 土壌（87次、西から）

図版 58 SK2731・2732 土壌 _ 断面図・写真



① SX2748 東端部 _ 東西断面図

0 2 m
(S=1/60)

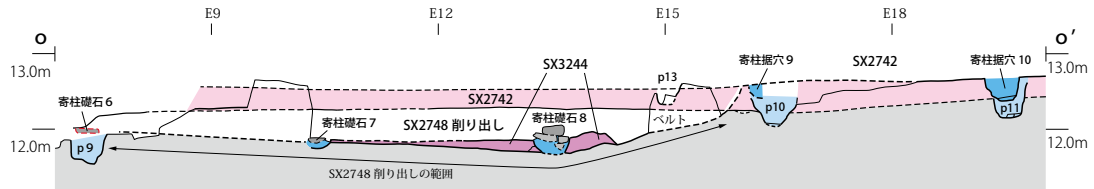
瓦



削り出し東端部とSD2729 (87次、北から)



削り出し東端部 (87次、南から)



② SX2748 と SX3244、SF202 a 寄柱礎石 _ 東西エレベーション (E7~20)

※ 寄柱礎石 6 (赤線) は第 7 次調査で検出していたが、第 8 次調査の時点では失われている。

- SX2742基礎整地
- 柱穴(添柱穴?)
- 寄柱礎石
- SX3244整地層(推定)
- SF202 a 寄柱礎石据穴
- 礎

0 5 m
(S=1/100)



SX2748 削り出し面 _ 東半部 (87次、南西から)



SX2748 削り出し面 _ 全景 (87次、西から)

図版 59 SX2748 削り出し面 (SD2729) _ 断面図・写真

SX2748 と SX2742 基礎整地の切り合いを捉えることは難しいが、ほぼ垂直に立ち上がる削り出しの北壁で SX2742 は厚さが約 30cm あるにもかかわらず、その盛土整地に伴う土留めの痕跡は認められないこと、東西に伸びる SX2742 の全体からみれば SX2748 と重なる部分は南西隅の一部で、帯状に平坦面を造り出した後に不要な部分を削る方が合理的に思えることなどから、SX2748 の削り出しは SX2742 基礎整地後に行われたと考えられる。

SF202 a 築地塀跡に伴う南側犬走り (SX3244 整地層) とその上に据えられた寄柱礎石 7・8 は削り出し面の北端に設けられたもので、SF202 b 補修の際に SX3245 整地層で嵩上げされ、結果として SX2748 の北端部は帯状に埋め戻された状態となっている。

形状 削り出しの形状を東西方向でみると (図版 59 のエレベーション o-o'), 東端は E 16 付近で、そこから斜めに基盤の凝灰岩を最大 0.6 m の厚さで削り取っており、削り出された面は SD2729 溝の西縁にあたる E 14 付近が最も低くなっている。これより西の削り出し面は門に向かって E 8 付近まで緩やかに高くなり、E 8 と E 14 では比高差が約 0.25 m ある。E 8 より西は門中央までほぼ平坦になっていたとみられるが、削り出しが確認できるのは SX205 掘込地業の東縁 (E 7.2) までである。

南北方向でみると (図版 62 の断面 j-j'・k-k'), 削り出しの北端は SF202 築地塀跡の南裾にあたり、造成面は南へ傾斜している。削り出された北壁の高さは、SX2742 基礎整地も含めると最大 0.8 m 前後で、底面からほぼ垂直に立ち上がり、途中で稜がついてそこから築地塀端部に向かって急角度で傾斜する。稜線は東西にほぼ水平に長くなり、削り出し面が東へ行くほど下がるために底面からの距離も東ほど離れている。

SX3244 と寄柱礎石 この稜線上で SF202 a 築地塀跡の寄柱礎石 7・8 を検出しており、その据穴が稜線より下に残る褐色シルト層を切って掘り込まれていることをベルト断面や削り出された北壁 (図版 59 の断面 o-o', 図版 62 の断面 j-j', 図版 66 の写真左下・中央下) で確認した。現況ではこの整地層を断片的にしか捉えられないが、本来この辺りには礎石を置くための整地が犬走り状に存在したと考えられることから、SX3244 整地層を想定した。

堆積層と SX3245 E 8～10.5 に残るベルトの南北断面 (図版 62 の断面 j-j'・図版 70 の写真左下) をみると、この削り出し面の部分的な窪みには焼土ブロックを多く含む炭化物層が直接堆積しており、その上部は SX3245 整地層で覆われている。浅い窪みは他にも数箇所確認しており、同様に焼土や炭化物の薄層が堆積していた。また、この層下に薄い自然堆積層が認められる部分もあり、第 48 次調査ではその上面が焼けていることを確認している^(註 15)。SX3245 は SF202 b 築地塀跡に伴う嵩上げ整地である。築地塀南側では褐色シルトの上層、暗褐色シルトの中層、黄褐色シルトの下層からなり、中層に多量の焼土・炭化物・瓦片が含まれ、瓦片は第 I・II 期のものに限られる。

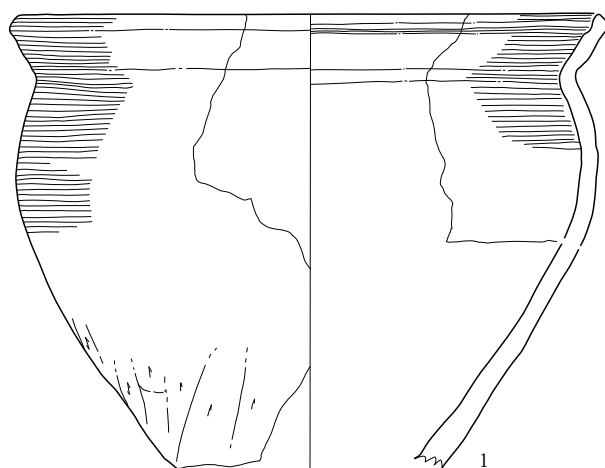
このような状況から周辺が第 II 期に大規模な火災に遭っていることは明らかであり、削り出された面が火災時のほぼ機能面で、火災によって生じた焼土や炭化物、瓦の層は後片付けの際に削り取られて部分的な窪みにその痕跡が残ること、火災後の築地塀補修に伴う嵩上げ整地にこの片付けた土を用いていることが窺われる。なお、SX3245 の中層に多量の焼土や瓦片が含まれる状況は門の南東に東西約 5 m の範囲で認められることが第 7 次調査で記録されている。削り出し

面の東端部に近い E 15 の南北断面（図版 62 の k - k'）では、SX3245 は削り出し面に残る焼土・炭化物粒の薄層を覆っており、同様に上・中・下の 3 層からなるが、中層に焼土は含まれず、炭化物粒と瓦の小片が少量含まれるのみであった。

さらに、E 10.5・15 の南北ベルトの断面観察では、SX3245 上部から削り出し面へ流入する灰黄褐～にぶい黄褐色のシルト層が認められる。この層は地山土や灰黄褐色土のブロック、凝灰岩の小片を含み、数枚に細分される。SF202 b 以降の崩壊土を中心とした堆積層とみられ、この層によって削り出し面は埋没している。

また、この削り出し面で検出されている SD2729・2730 はいずれも西-東-南方向に「L」字形に延びる溝で、その東西溝は SF202 築地塀本体、南北溝は SX2748 の東辺と平行し、南北溝は削り出し面が最も低くなる部分に配されている。この状況からみて、削り出し面の排水施設と考えられるがその帰属期は判然としない。

SD2729 は東西長 2.5 m、南北長 3.9 m 以上で、上幅 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.05 ～ 0.25 m である。断面は「V」字形を呈し、堆積土は褐色シルトの上層と灰黄褐色シルトの下層に大別される。い



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	登録	箱番号
1	SD2729・上層	73	土師器・鉢	1/4	(23.5)	—	(18.5)	R1	B13586
特 徴									
非ロクロ整形 器面摩滅 外面：体部下半ヘラケズリ									

図版 60 SD2729 溝 _ 出土遺物

ずれの層にも地山土と灰黄褐色土の小ブロック、凝灰岩片が含まれ、上層には瓦片もみられる。

SD2730 は東西長 1.1 m、南北長 1.4 m で、上幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.05 m 前後である。断面は「V」字形を呈する。堆積土は第 7 次調査で完掘されており、詳細は不明である。

遺物は、SD2729 の上層から非ロクロ整形の土師器鉢（図版 60 - 1）と丸・平瓦の破片が出土している。丸瓦には II A・II B 類、平瓦には I A・II B・II C 類が含まれていた。

ii. 南辺築地塀跡と周辺の遺構

南辺築地塀跡は多賀城跡の南辺を画する築地塀で、そのほぼ中央に SB201 南門跡が開かれている。調査区内では、東から西になだらかに下る丘陵斜面に立地し、門東側を第 7・48・73 次調査、西側を第 48・72 次調査で発掘し、第 87 次調査で南門を含めた東西の築地塀を再発掘している。門東側では E 9 以東、西側では W 21 以西に築地塀本体が残存するが、門との接続部分は削平により積土が完全に失われており、その細部を検討することは難しい。しかし、残存する築地塀は東側でみると発掘基準線に対して東で約 6° 南へ、西側では東で 8 ～ 11° 南へ振れており、東西双方を門に向かって延長すると両者は同一線上になく、東側の築地塀に対して西側の築地塀が 1 m 程南にずれていることがわかる。これは東西発掘基準線にほぼ一致する方向の門に対

削り出し面の溝

SD2729 溝

SD2730 溝

出土遺物

南辺築地塀

してその棟通り下に築地塀が取り付けいていたことを傍証するものと考えられる。

南辺築地塀の構築に際しては、その長軸方向に幅 6.0～7.5 mの削り出しを行い、上面を整地で平坦にする基礎地業（SX2743・1562）を施した段階で、幅 1.7～2.6 mの薄い盛土（SX3251・3254）が認められ、その後に築地塀本体が積まれている。本体の南北両側には、その補修に伴う犬走りの嵩上げ整地や崩壊土、溝などが比較的良好に残存していた。

築地塀の

遺構番号

門を挟んだ東西の築地塀を比べると、本体の積み方や補修、整地層の状況に異なる部分が認められる。そこで、門東西の築地塀に別の番号を付して扱うことにした。これまでは東側を一貫して「SF202」とし、西側は第 48 次調査で「SF1556」、第 72 次調査で「SF202」としてきた経緯がある。第 87 次の再調査では、これらの対応関係を整理した上で、門東側を「SF202」、西側を「SF1556」に統一し、築地塀の変遷・補修については古いものから順にアルファベット小文字で表記し直している。本書ではこれに従うこととし、各次調査で検出した築地塀本体の対応関係を第 10 表に示した。

以下では門の東西に分け、築地塀に関連する基礎地業や盛土、整地層、溝、重複する土壌など周辺の遺構も併せて記述する。なお、調査区南西端部の築地塀基礎整地下で発見した横穴墓については別に項を設けて説明する。

(a) 南門跡の東側

【SF202 築地塀跡】(図版 61～80・第 10 表)

概

要

E 9～30・42～60 の範囲で SF202 築地塀跡を検出している。E 9～30 区間では築地塀南北両側の崩壊土と嵩上げ整地層の大半が第 7 次調査の段階で除去されており、E 42～60 区間

	南辺築地塀跡 (西側)			南 門 跡	南辺築地塀跡 (東側)			
	第 48 次調査	第 72 次調査	第 87 次調査		第 7 次調査	第 48 次調査	第 73 次調査	第 87 次調査
旧 ↑ 遺構 ↓ 新	SX1562 基礎整地 SX1556A 築地塀 (寄柱不明)	SX1562 基礎整地 SF202 a 築地塀 (掘立式寄柱) SF202 b 築地塀 (寄柱不明)	SX1562 基礎整地 SF1556 a 築地塀 (寄柱不明) SF1556 b 築地塀 (寄柱不明)	SB201 A 門 (礎石式)	SF202A 築地塀 (掘立式寄柱)	SF202A 築地塀 (掘立式寄柱のみ)	SX2742 基礎整地	SX2742 基礎整地
	SF1556B 築地塀 (寄柱不明)	SF202 c 築地塀 (掘立式寄柱) SF202 d 築地塀 (寄柱不明) SF202 e 築地塀 (寄柱不明・瓦積)	SF1556 c 築地塀 (寄柱不明) SF1556 d 築地塀 (寄柱不明) SF1556 e 築地塀 (寄柱不明・瓦積)		火災	火災	火災	火災
				SB201 B 門 (礎石式) SB201 B 門継続?		SX1539 基礎整地 SF202 B 2 築地塀 (礎石式寄柱)	SF202 b 築地塀 (掘立式寄柱?) SF202 c 築地塀 (掘立式寄柱?)	SF202 b 築地塀 (寄柱不明) SF202 c 築地塀 (寄柱不明)
					SF202C 築地塀 (寄柱不明・瓦列)	SF202 C 築地塀 (寄柱不明・瓦列)		SF202 d 築地塀 (寄柱不明・瓦列)

※ 緑線は解釈の変更で、複数の築地塀が 1 つにまとめられたもの、逆に 1 つの築地塀が複数に分けられたものの対応関係を示す。

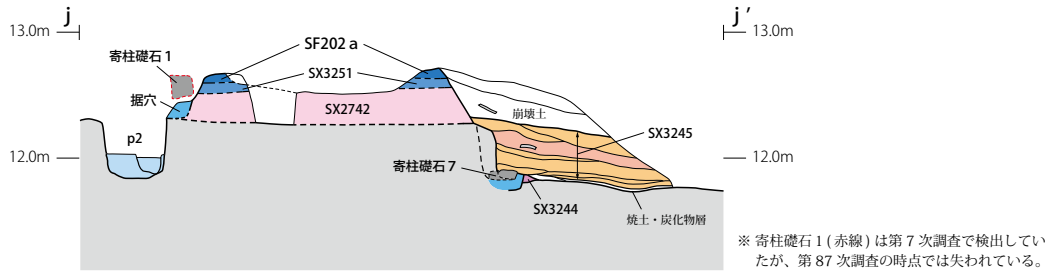
第 10 表 南辺築地塀跡 _ 各次調査の対応表

では整地層・崩壊土の掘り下げを上位層に止めたため、主に横断方向のベルトおよび断ち割り断面、築地塀側面の観察から変遷・補修について検討した。

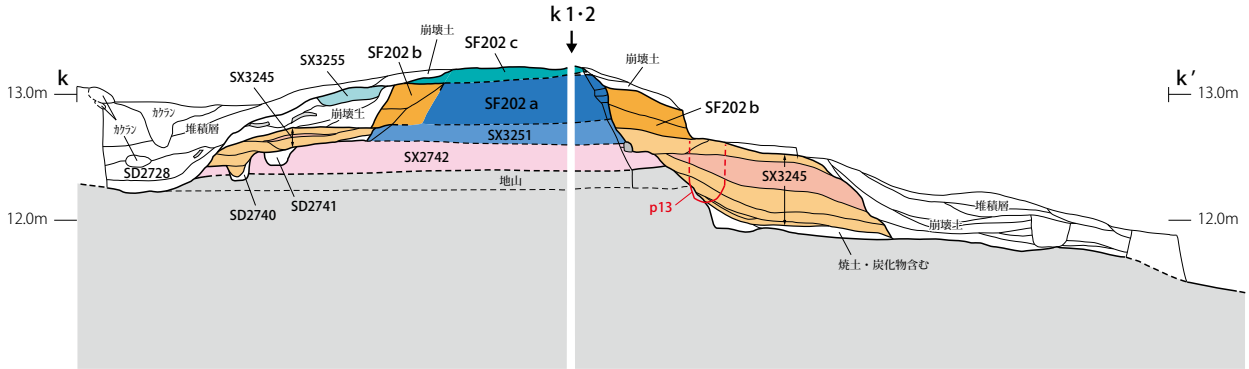
SF202 築地塀跡は SX2742 基礎整地の上に構築されており、方向は発掘基準線に対して東で約 6° 南へ偏している。築地塀本体には計 3 回の補修痕跡が認められ、順に a～d を付した。SF202 a 築地塀本体と b・c 補修に関しては、E 12～19・42～60 の 2 区間を精査した第 73 次調査と E 9～30 の区間を再精査した第 87 次調査の理解・解釈が概ね共通している^(註16)。但し、第 87 次では SF202 a を積土の特徴の違いから上・下層（下層を a₁、上層を a₂）に分け、その違いを整地層（SX3243・3244）や寄柱礎石などとの関係を踏まえて本体構築の工程差と



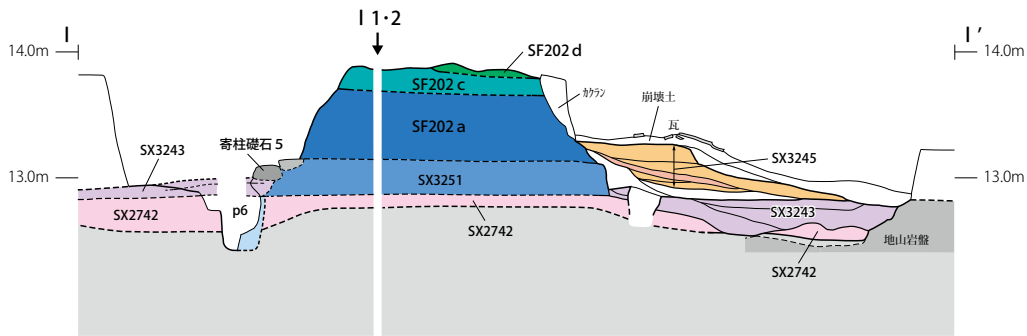
図版 61 SF202 築地塀跡_写真（87次、E24以西）



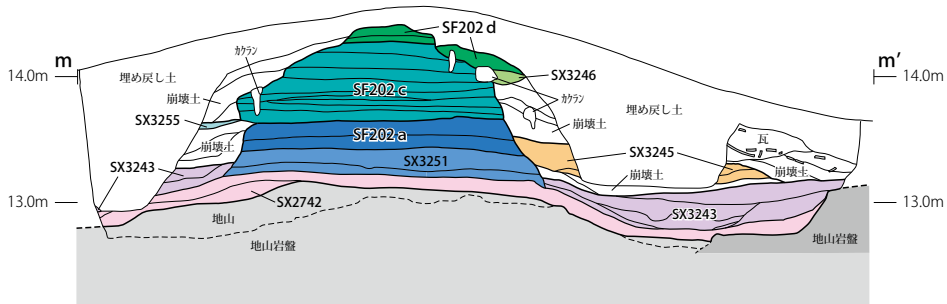
① SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E10.5、断面図反転)



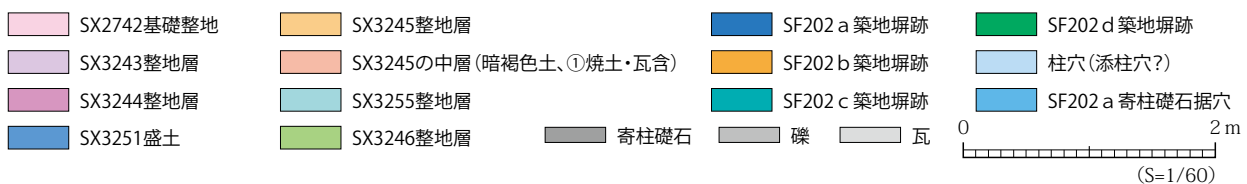
② SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E15、b-b1 間の断面図反転、赤線は見通し図)



③ SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E21)



④ SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E24 東壁)



図版 62 SF202 築地堀跡、整地層ほか _ 断面図 (E10.5~24)



図版 63 南門地区分割図_SF202 南辺築地堀周辺 (1)

捉えた。本書作成の整理段階で、E 42～60 区間でもこの a₁ に相当する層が認識できることが明らかとなり^(註17)、更に検討を加えた結果、a₁ 層は築地塀本体の版築以前に施された盛土(SX3251)と捉えるべきと判断した。d 補修は E 21.5～25.5 で確認した基底部の南北両端に互列を伴う補修である。

また、築地塀本体の築成や補修に関わると考えられる嵩上げ整地層(SX3245・3246・3255)や柱穴、SX2751 溝状遺構、溝(SD2740・2741・2720・2722)を検出している。

《SX2742 基礎整地、SX3251 盛土》

SX2742 基礎整地 SF202 a 築地塀本体の構築に先行して、その長軸(東西)方向に沿って 6.0～7.5 m の幅で削り出しを行い、上面を整地で平坦にする基礎地業を施しているが、E18 前後を境にその西と東で状況が異なる。

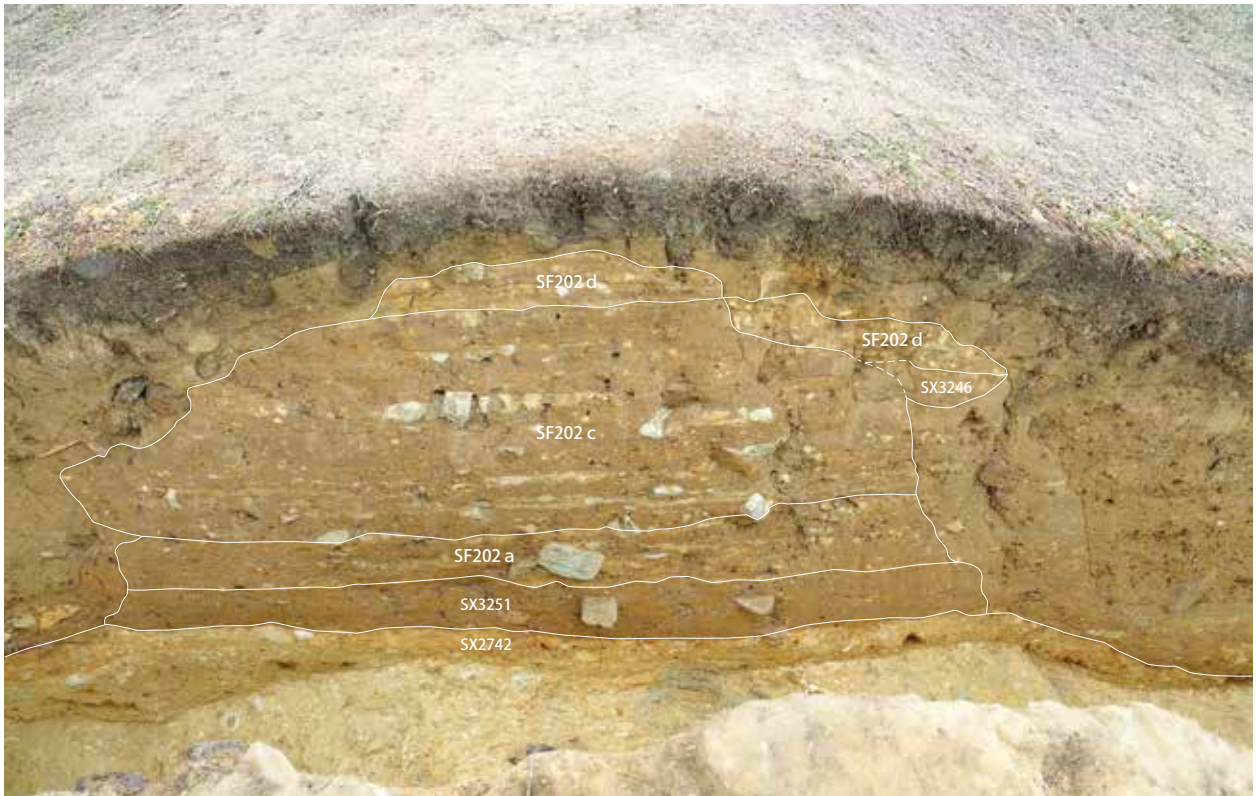
E18 より西 西側では基盤の凝灰岩を概ね平坦に削り出し、その上に盛土による SX2742 基礎整地を施している。整地の範囲はほぼ削り出しの範囲に一致するとみられ、厚さは 20～30cm で、整地土には地山土に近似した黄褐～明黄褐色砂質シルトが用いられている。その結果、築地塀の南北裾に添って幅 0.4～0.6 m 分が犬走り状にやや高くなっているが、E16 以西の南側では、SX2748 削り出しによってこの整地層は失われたとみられる。また、南門東脇の E 10.4 より西は後続する SX3238 整地時に一度基礎整地が削り取られ、SX3239 で整地し直されている。整地層の上面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西方向では西に 6° 前後傾斜している。

E18 より東 東側では、青灰色のきわめて強固な岩盤の上に載る浅黄色砂質シルトの地山を 0.5～0.7 m の深さまで掘り込んだ後に整地する基礎地業を行っている。南北に断ち割った E24・45・48 の断面(図版 62 の m-m'、図版 68 の u-u'・v-v')をみると、後に築地塀本体が載る中央部をやや高く掘り残し、その南北両側を溝状に掘り窪めている。その後、西側と共通の SX2742 基礎整地を厚さ 10～30cm で施している。

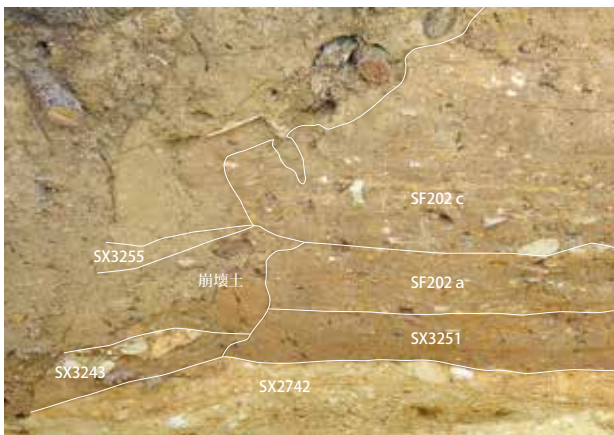
出土遺物 遺物は、層中から二重弧文軒平瓦(型番不明)、単弧文軒平瓦 640、類型不明軒平瓦の顎部が各 1 点出土しているが、いずれも小破片である。

SX3251 盛土 SX2742 基礎整地上には幅 2.5～2.6 m、厚さ 10～30cm の SX3251 盛土が認められ、基礎整地の長軸方向に沿ってその中央部を帯状に伸びている。SX3251 の直上には SF202 a 築地塀本体が載っており、築地本体版築の際に盛土の上面や側面の整形が行われたことが窺われる(図版 62・68)。

盛土の特徴 盛土には、E 9～30 区間では暗褐・褐灰色土の小ブロックを多く含む褐色もしくはにぶい黄褐色のシルト、E 42～60 区間では地山ブロックを含む暗赤褐色もしくは黄褐色のシルトが用いられており、いずれも分層はできるがその単位が大きく、明瞭な版築や積み手の違いは認められない。また、上部の築地塀本体に比べて土層の締まりが弱く、本体の築成以前に南北の盛土両脇が SX3243 整地層によって埋められている。さらに、同じく SX2742 上面で検出されている柱穴(p 2～6・10・11)よりも古いとみられ、基礎整地面に認められる最も古い遺構である。盛土中から遺物は出土していない。



SF202 築地堀跡、SX3251 盛土、SX2742・3246 整地層_E24 東壁 (西から)



SF202 a・c 築地堀跡、SX2742・3243 整地層_E24 東壁北部 (西から)



SF202 築地堀跡、SX2742・3243・3245 整地層_E24 東壁南半 (南西から)



SF202 a 築地堀跡、SX2742・3243 整地層_E24 北壁 (南から)

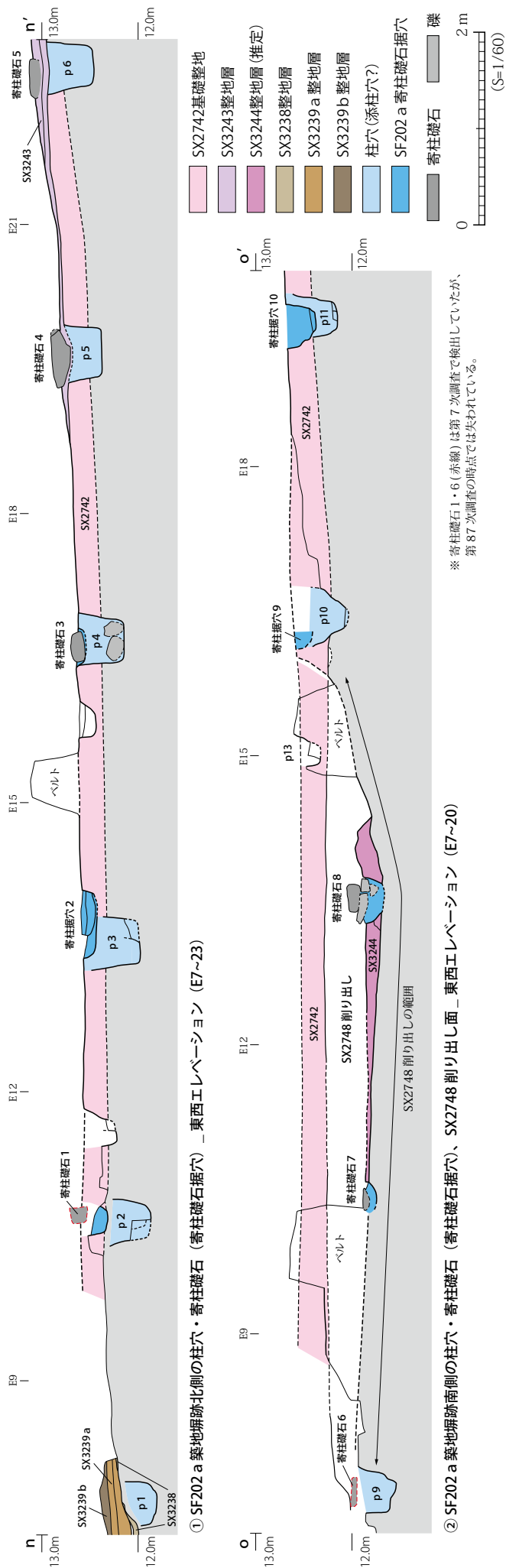


SF202 築地堀跡、SX2742・3243・3245 整地層_E21 南半 (西から)

図版 64 SF202 築地堀跡、SX2742・3243・3245・3246 整地層_断面写真 (87 次、E21・24)

《SF202 a 築地塀跡、SX3243・SX3244 整地層、SX2751 溝状痕跡・SD1740・2741・2722 溝》

- 構造・規模と重複** 最初に構築された SF202 a は、E 9 以東で確認されており、残存高は最大で 0.8 m 程である。寄柱は礎石式で、寄柱礎石もしくはその据穴の位置と残存する積土から基底幅は E 9 ～ 30 区間で約 2.6 m、E 42 ～ 60 区間では 2.5 m 程と推定される。SX3238・3239 整地層と重複し、いづれよりも新しい。
- 積土** 積土には地山土ブロックを主体とし、暗褐色土と褐灰色土の小ブロックが混じる褐～明黄褐色のシルトが用いられており、凝灰岩片も多く含まれる。版築は 10cm 前後を単位として行われており、その層理面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西の縦断方向では基底面と同様に西へ緩やかに下がっている。積み手の違いを E 49・59 の 2 箇所を確認している。
- SX3243 整地層** E18 以東の基礎地業に掘り込みを伴う範囲では、SF202 a の築成以前に SX3251 盛土の南北両裾から外側に向けてこの掘り込みによる窪みを埋めて平坦とするかたちで SX3243 整地が行われている。その結果、E18 以東でも以西と同様に築地塀の南北裾に添って幅 0.4 ～ 0.6 m 分が犬走り状にやや高くなっている。SX3243 は厚さ 10 ～ 50cm で、黄褐～にぶい橙色シルトの上層と褐色シルトの下層に大別される。上層は地山土ブロックを主体として暗褐色土の小ブロックが少量混じり、築地塀北側では白色の凝灰岩片、南側では風化礫片を多量に含む。E 42 ～ 60 区間では、この上層のみが確認されており、SX2742・3251 との間に薄い堆積層が認められる部分もある（図版 68 の断面 u-u'）。両者の間に多少の時間差があったことも窺われるが、SF202 a の寄柱礎石は E18 以西では SX2742 基礎整地上面、以東では SX3243 整地層上面に据えられており、基本的には SF202 a 構築に伴う一連の工程と捉えられる^(註18)。
- 出土遺物** 遺物は、本層下の堆積層（SX2742 との間層）から二重弧文軒平瓦（型番不明）の小破片 1 点と土師器坏・埴、須恵器甕の小破片が出土している。また、整地層中からは丸瓦Ⅱ類 3 点、平瓦Ⅱ B a 類 2 点の小破片が出土した。
- SX3244 整地層** E16 以西の SX2748 削り出しによって SF202 a 南側の基礎整地が失われている部分では、寄柱礎石を据える前段階で SX3244 整地が行われていると想定される。削り出しの北壁沿いで検出した寄柱礎石 7・8 では、その据穴が整地層を切って掘り込まれていることをベルト断面や削り出された北壁（図版 62 の断面 j-j'、図版 65 のエレベーション o-o'、図版 66 の写真左下・中央下）で確認している。現況ではこの整地層を断片的にしか捉えられないが、本来は築地塀に添った犬走り状の整地面であったと考えられる。SX3244 の整地土には地山土の小ブロックを多量に含む褐色シルトが用いられており、層の厚さは 5 ～ 20cm であったと推定される。
- 寄柱礎石と据穴** 築地塀南北両側で寄柱礎石 12 個（1・3～8・11～15）、寄柱礎石据穴 4 箇所（2・9・10・16）を検出した（図版 63・65・66・69）。礎石 1・3、据穴 2・10 は SX2742 基礎整地上面、礎石 4・5・12～15、据穴 16 は SX3243 整地層上面で確認し、SX2748 削り出し面の礎石 7・8 は SX3244 整地層上に据えられていたとみられる。礎石 6・10・11 の確認面は判然としませんが、周辺の状況から 6 は SX3239 整地層上面、10・11 は SX3243 上面の可能性はある。因みに、第 7 次調査で検出していた礎石 1・6 は第 87 次調査の時点では失われていた。
- これらの礎石および礎石据穴は築地塀南北両裾の SF202 a 積土に半ば食い込む位置でほぼ直



SF202 築地堀跡北側の p 5・6、寄柱礎石 4・5 (87 次、北から)



SF202 築地堀跡南側の p10-11、寄柱礎石・寄柱掘穴 7~10 (87 次、南東から)

図版 65 SF202 a 築地堀跡南北両側の柱穴・寄柱礎石 (寄柱礎石掘穴)、SX2748 削り出し面 _ エレベーション・写真

線上に並び、南北で対になっている。なお、礎石 7・8 は SX2748 削り出し北壁にあたる地山を柱状に抉って据えられており、築地塀北側の礎石 1・据穴 2 と対になる。その配置からみて SF202 a に伴う寄柱の礎石および礎石据穴と考えられる^(註 19)。寄柱礎石は長軸 20～60cm の扁平な自然石で、基本的に据穴を伴うが、寄柱礎石 4・5 は SX3243 上に直接置かれている。桁行方向の柱間は約 3.0 m 等間とみられ、据穴の埋土は地山土の小ブロックを多く含む褐色シルトである。

柱 穴 さらに、SX2742 基礎整地上面もしくは地山面で組み合わせとみられる柱穴 12 個 (p 1～12) を検出した (図版 63・65・66)。これらの柱穴は築地塀南北両側の寄柱礎石 (寄柱礎石据穴) とほぼ重なる位置で、若干外側にずれて直線上に並び、南北で対になっている。なお、p 1・7・8 と重複する寄柱礎石は未検出で、逆に SX2748 削り出し面では寄柱礎石 6・7 と重複する柱穴が検出されていない。p 1～12 はほぼ完掘されているが、各次調査の成果と現況からみて寄柱礎石もしくはその据穴よりも古く、すべてで柱が抜き取られていると判断される。柱穴下部には柱痕跡や柱押圧痕が残るものもあり、これらから推定される南北の柱間間隔は 3.0 m で、桁行方向の柱間は 3.0 m 等間である。

柱穴の掘込面 また、p 5・6 で確認できる整地層との関係を見ると、柱穴掘方は SX2742 上面から掘り込まれており、SX3243 整地層に覆われている。柱抜取穴の掘込面は特定できないが、SX3243 上面の可能性もある。E18 以西の SX3243 が分布しない範囲では、基本的に掘込・抜取面は



図版 66 SF202 a 築地塀跡南北両側の柱穴・寄柱礎石 (寄柱礎石据穴) _ 写真

SX2742 上面で、p 1・7 に限り SX3239 整地層上面と考えられ、寄柱礎石の設置面と一致する。

柱穴は、一辺 0.4 ～ 0.6 m のやや不整な隅丸方形を呈し、深さは 0.4 ～ 0.6 m である。柱痕跡は径 0.2 m 前後の円形で、僅かに残る埋土は地山土ブロックを多く含む褐～黄褐色シルトである。

柱穴の規模

築地本体両側の地山面や SX2742・3243 上面では、この他にも柱穴を確認しており、足場穴などの可能性があるが、詳細な時期や組み合わせは不明である。

柱穴と関連する可能性がある遺構として、SF202 a 築地塀本体の北辺を東西に伸びる溝状の痕跡 (SX2751) がある (図版 69、図版 68 の断面 u-u'・v-v'、図版 67 の写真左下・中央下)。築地本体両脇を SX3243 整地面まで掘り下げた E45～50 の範囲で平面的に確認しており、上幅 0.15 m 前後、深さ 0.2 ～ 0.35 m で、断面は不整形を呈し、一定していない。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトで、人為的に埋め戻されている。寄柱礎石 12 との関係は判然としませんが、築地本体版築時の堰板を抜き取った痕跡の可能性はある。

SX2751

溝状痕跡

他に、築地塀北側の SX2742 基礎整地または SX3243 整地層の上面で SD2740・2741・2722 溝を検出しており、これらは雨落ち溝もしくは犬走り外側の溝とみられる。

北側の溝

SD2740 は SF202 a に並行してその約 1.0 m 北側を東西に伸び、長さ 5.0 m 分 (E15.5 ～ 20.5) が確認されている (図版 63、図版 62 の断面 k-k')。上幅 0.20 ～ 0.3 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m で、断面は「U」字形を呈する。堆積土は地山小ブロックを多く含む褐色シルトで、溝の上部

SD2740 溝



南半 (南東から)



中央部 (東から)

SF202 築地塀跡、SX3251 盛土、SX2742・3243・3245・3255 整地層ほか E45 断ち割り西壁



E45 (東から)



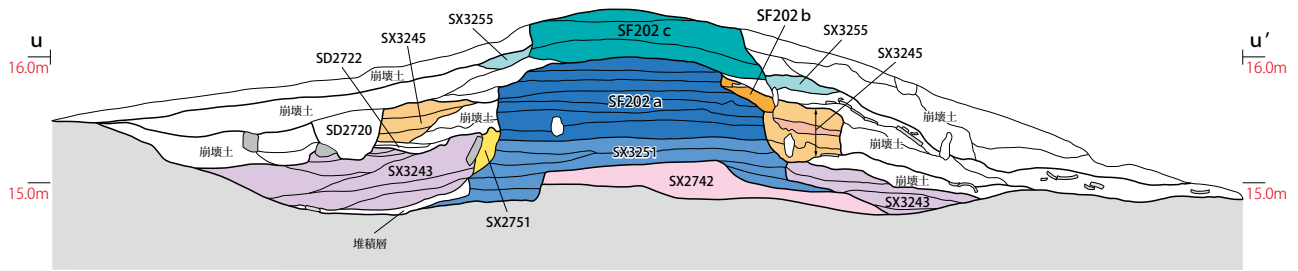
E48 (東から)



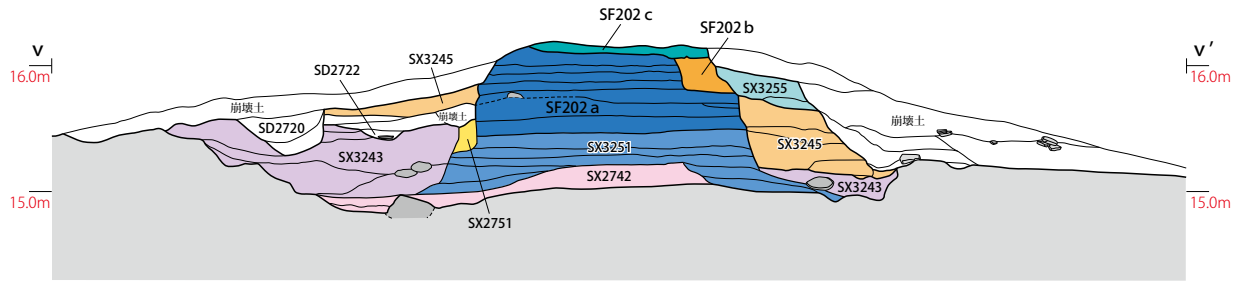
南側崩壊土と瓦出土状況 (E46～50 南東から)

SX2751 溝状痕跡と SX3243 整地層 E45・48 断ち割り西壁の北半

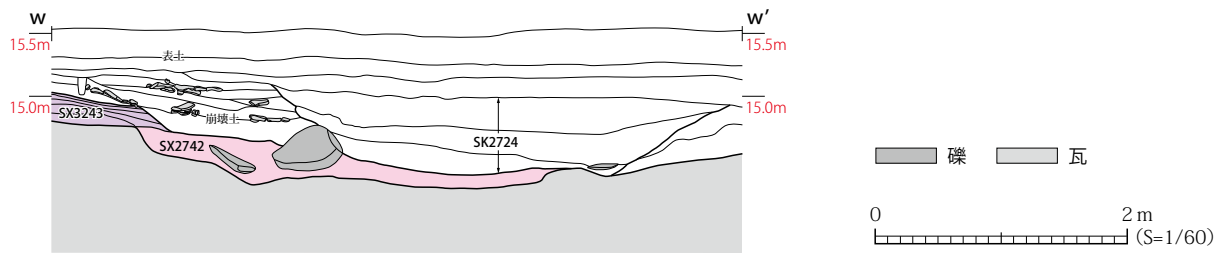
図版 67 SF202 築地塀跡、SX3251 盛土、SX2751 溝状痕跡、整地層ほか 断面写真 (73 次、E45・48)



① SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E45、断面図反転)



② SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (E48、断面図反転)



③ SF202 築地堀跡、整地層、崩壊土、SK2724 土壌 _ 南北断面図 (E60)

- | | | | | |
|------------|----------------|-----------|-------------|-------------|
| SX2742基礎整地 | SX3245整地層 | SX3255整地層 | SX2751溝状痕跡 | SF202 b築地堀跡 |
| SX3243整地層 | SX3245の中層(褐色土) | SX3251盛土 | SF202 a築地堀跡 | SF202 c築地堀跡 |



(東から)



(南東から)

SF202 築地堀跡 _ E42~50 (73次)

図版 68 SF202 築地堀跡、整地層ほか _ 断面図・写真 (E45~60)



图版 69 南門地区分割图_SF202 南边築地塀周边 (2)

はSX3245 嵩上げ整地層によって埋め戻されている。

SD2741 溝 SD2741 はSF202 aに並行してその約0.6 m北側を東西に伸び、長さ4.0 m分 (E15.5～19.5) が確認されている (図版 63、図版 62 の断面 k-k')。上幅0.25 m前後、深さ約0.1 mで、断面は「U」字形を呈する。堆積土は地山小ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで、平瓦Ⅱ B類の aタイプ1・2が各2点出土している。

SD2722 溝 SD2722 はSF202 aに並行してその約0.4 m北側を東西に伸びる (図版 69、図版 68 の断面 v-v')。長さ1.5 m分 (E48～49.5) が検出され、E45の南北断ち割り断面 (図版 68 の断面 u-u') でも確認されている。上幅0.3～0.4 m、深さ約0.1 mで、断面は皿状を呈する。堆積土は明黄褐色の砂質シルトで、平瓦Ⅱ B類が3点出土している。

崩壊土 E 15・21・24・45・48の断面 (図版 62・68) では、SF202 a南北両裾のSX2742 もしくはSX3243 上部に堆積し、b補修の嵩上げ整地であるSX3245 で覆われる灰黄褐～褐色のシルト層を確認している。層の厚さは5～25cmで、地山土の小ブロックと凝灰岩片を含み、南門の近くでは焼土・炭化物粒も含有している。SF202 aの崩壊土とみられる。

出土遺物 遺物は、SF202 aの崩壊土から瓦と須恵器環・甕の小破片が出土している。瓦類には、重圈文軒丸瓦 (型番：240～243) と単弧文軒平瓦 640 が各1点あり、他に丸瓦Ⅱ類3点、平瓦Ⅱ B a₁類2点がみられる。いずれも小破片である。底部の残る須恵器環は、手持ちヘラケズリ再調整により切り離し技法が不明のものである。

《SF202 b築地塀跡、SX3245 整地層、SD2720 溝》

本体の補修 SF202 bはSF202 a積土の南北両側面もしくは南側面を奥行50cm前後まで削り取った後、新たに本体を積み直して補修したもので、SX3245 嵩上げ整地層を伴う。

両側面の補修 (図版 63、図版 62 の断面 k-k') はE 15から東へ1.5 m程の範囲でみられるが、E 13～15 区間で残存するSF202 aの幅が急に狭くなっており、本来はこの部分まで補修が及んでいた可能性がある。両側の補修痕跡下端で基底幅をとると約2.5 mとなり、残存高は0.35 mである。積土には地山土ブロックを主体とし、炭化物粒と凝灰岩片を含む褐～にぶい黄褐色のシルトが用いられている。版築の単位は10～20cmとやや厚い。

南側面のみ補修は、築地本体を南北に断ち割ったE 45・48の断面 (図版 68 のu-u'・v-v') で確認しており、少なくともE 45～48の範囲に及んでいたと思われる。この部分の補修下端でみた基底幅は2.1～2.2 mで、残存高は0.3 mである。積土には凝灰岩片を含むにぶい黄褐色砂質シルトが用いられており、版築の単位は明瞭でない。

SX3245 整地層 E 15の断面 (図版 62 のk-k'、図版 70の写真上・中段) をみると、SX3245 嵩上げ整地は築地塀南北両裾に幅1.2～1.6 mで分布し、南裾ではb積土の下部にまでその分布が及ぶ。褐色シルトの上層、暗褐色シルトの中層、黄褐色シルトの下層からなり、南側の中層には炭化物粒と瓦の小片が少量含まれる。このような大別3層で構成される整地層はE 10.5・21の断面 (図版 62 のj-j'・l-l') でも築地塀南裾に観察でき、E 24の断面 (図版 62 のm-m') ではこのうち上・下層に相当する整地層を南裾で確認している。

また、E 45・48の断面 (図版 68 のu-u'・v-v') でもこれに対応する整地層をb積土



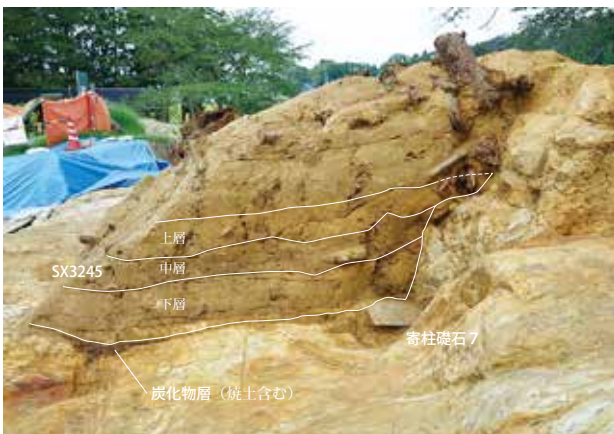
SF202 築地堀跡、SX2748 削り出し面、SX3245 整地層_E15 ベルト西壁南半（西から）



SF202b 築地堀跡、SX3245 整地層_E15 ベルト東壁北半（北東から）



SF202b 築地堀跡、SX3245 整地層_E15 ベルト西壁南半（西から）



SX2748 削り出し面、SX3245 整地層_E10.5 ベルト東壁（東から）



SX3245・中層に含まれる焼土・瓦_E10.5 ベルト西・南壁（南西から）

図版 70 SF202 築地堀跡、SX3245 整地層ほか_断面写真（87 次、E10.5・15）

下の南北両裾で確認している。3層に大別できる箇所では、上層が黄褐色、中層が褐色、下層が明黄褐色のシルトで、それ以外は主に黄褐色のシルトからなる。

これらの整地層は幅 0.6 ～ 2.0 m、厚さ 20 ～ 60cm で築地塀裾を帯状に分布する一連の嵩上げ整地層と考えられ、少なくとも SF202 b 南側には幅 1 m 前後の犬走りがついていたと推定される。北側の状況は判然としないが、E 15・45・48 の断面では整地層の厚さが 20 ～ 30cm あり、その上面レベルは南側とほぼ等しく、E 45 ～ 48 区間の北端では SD2720 溝が検出されている。

なお、E 8 ～ 10.5 区間に残る SX3245 の中層には多量の焼土・炭化物・瓦片が含まれていた(図版 70 の写真右下)。詳細は SX2748 削り出し面の項で触れたが、火災の後片付けをした土を整地に用いたもので、この嵩上げ整地を伴う築地塀の補修は火災後最初に行われた補修と考えられる。

柱 穴 E 15 付近の b 補修本体南裾と若干重なる外側で SX3245 上面から掘り込まれた柱穴 (p 13) を検出した(図版 63、図版 62 の断面 k - k')。柱の抜取穴とみられ、一辺が約 0.3 m の隅丸方形を呈し、深さは 0.5 m 程で、埋土は地山小ブロックを含む灰黄褐色シルトである。SX3245 上面で抜き取られていることを重視すれば、b 補修時の添柱や足場の柱を抜き取ったものの可能性がある。

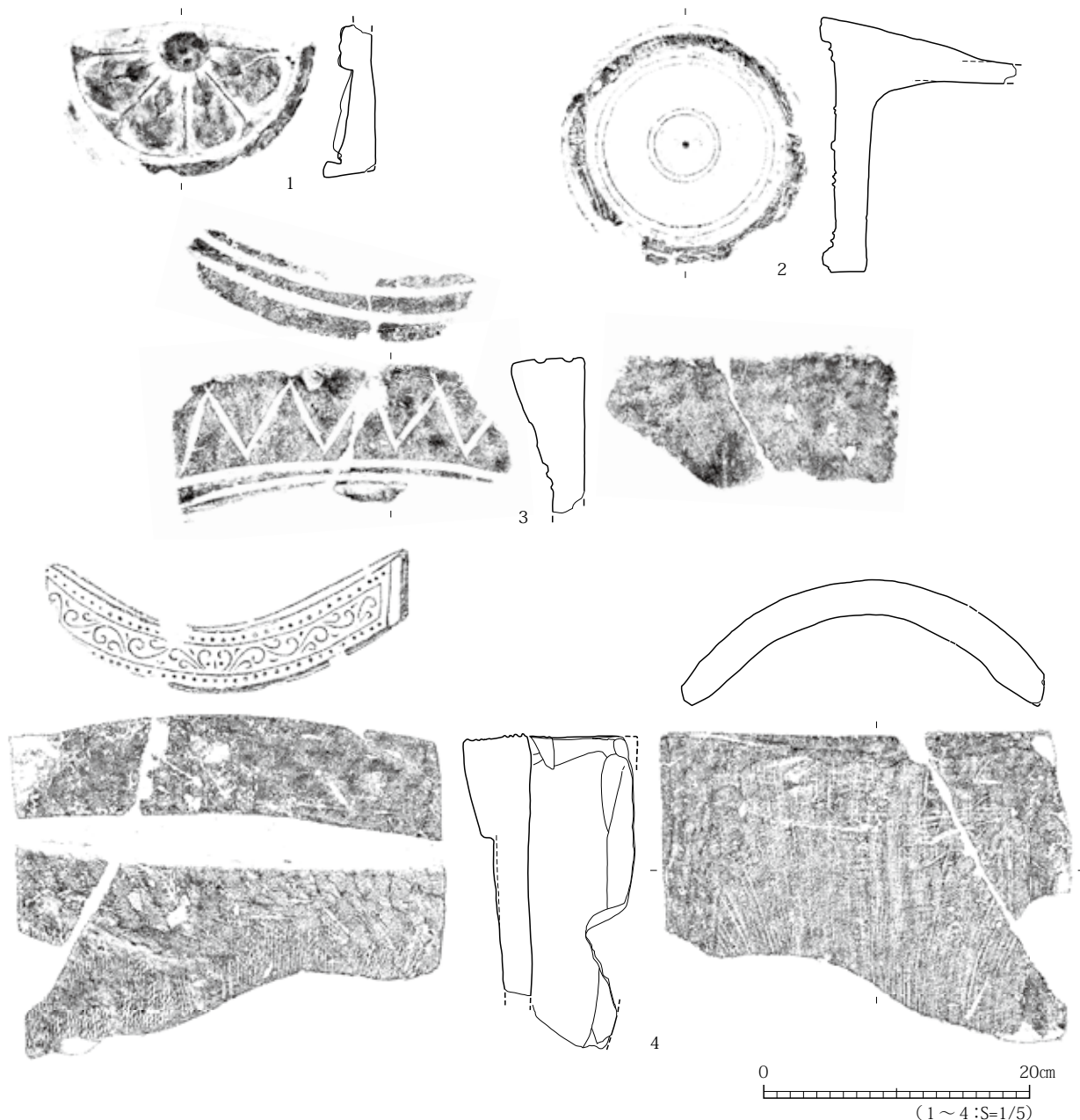
これ以外は SF202 b に伴う柱穴等は不明で、寄柱構造も判然としないが、E 6 ～ 8 区間の築地線上で検出している柱穴 (p 14 ～ 17) が注目される。この部分は築地本体が残存せず、柱穴は完掘されて、周辺も地山面まで掘り下げられているが、p 14 ～ 17 は SF202 a 延長線の南北両端からやや内側に入った位置で直線上に並び、南北で対になっている。柱穴は、一辺が 0.4 m 前後の隅丸方形を呈し、地山面からの深さは 0.4 m 程で、いずれも柱抜取穴を伴うとみられる。各柱穴のほぼ中心で測ると、南北の間隔は約 2.3 m、東西の間隔は 1.1 m で、西側の p 14・16 は SB201 B 門跡で推定される基壇範囲^(註20)の東脇に位置することとなる。この部分は、SK3241 土壌の存在から、火災後に SB201 A の基壇が削り取られ、新たに SF202 b が築成されたとみられる箇所で、p 14 ～ 17 はそれに伴う添柱穴や足場穴の可能性が残る^(註21)。

SD2720 溝 他に、築地塀北側の SX3245 嵩上げ整地面で SD2720 溝を検出している(図版 69、図版 68 の断面 u - u'・v - v')。SD2720 は築地本体の 1.0 ～ 1.2 m 北側を東西に伸び、長さ 3.0 m 分 (E45 ～ 48) が確認されている。上幅 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m で、断面は「U」字形を呈する。堆積土は凝灰岩片を少量含む黄褐色シルトで、丸瓦 II B 類が 1 点出土している。

崩 壊 土 E 15 の断面では築地塀北裾、E 45 の断面では南北両裾の SX3245 上部に堆積し、c 補修の嵩上げ整地である SX3255 に覆われる暗褐～黄褐色のシルト層を確認している。層の厚さは 5 ～ 25cm で、E 45 の南側では瓦片が多量に含まれる。SF202 b の崩壊土とみられる。

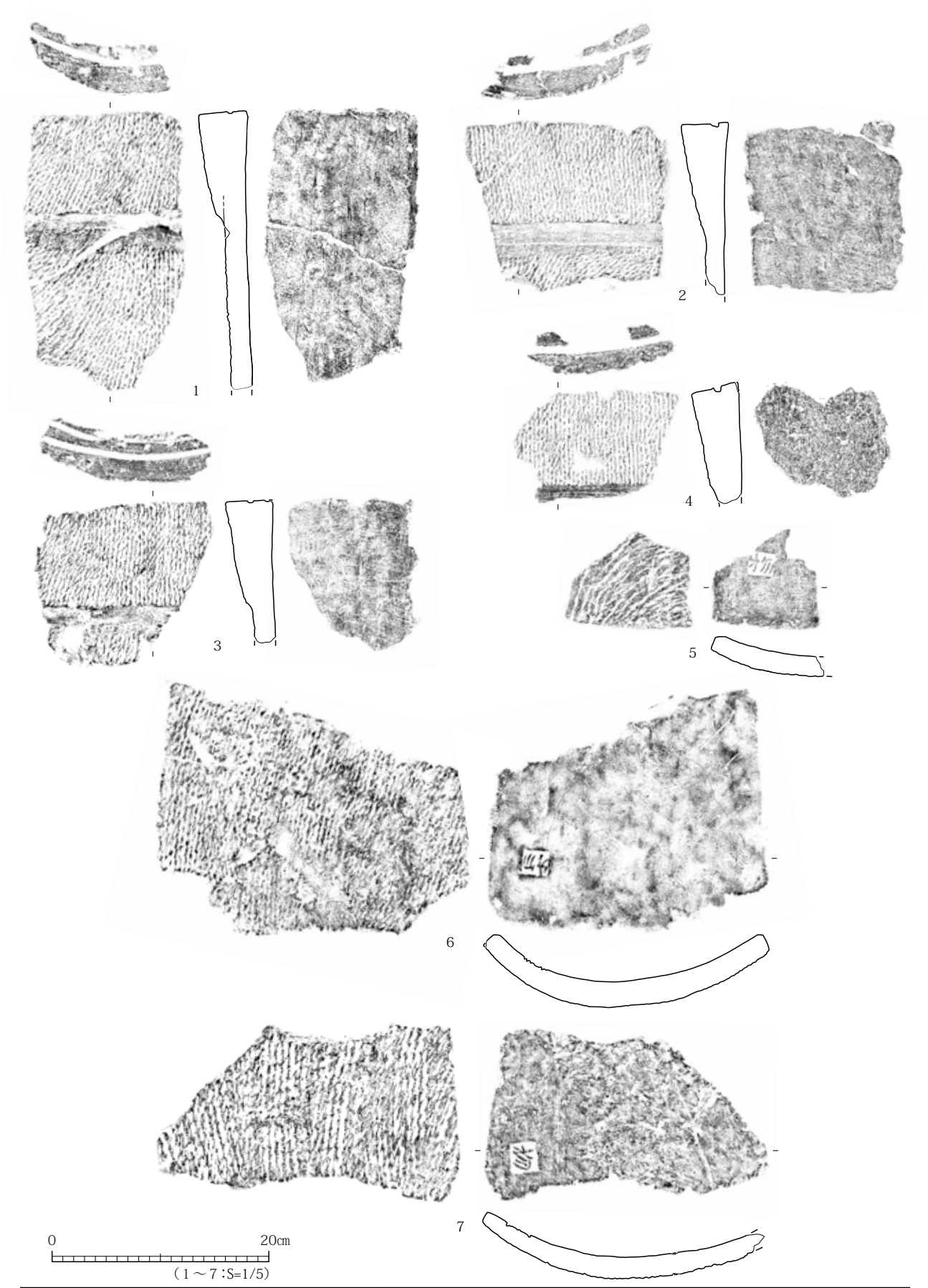
また、E 21 ～ 23 の築地塀南裾では、SX3245 上に厚さ 5 ～ 15cm で残るにぶい黄褐色シルトの崩壊土層中から大破片や完形に近い瓦類がまとまって出土している。SX3255 との関係は捉えられないが、堆積状況からみて SF202 b の崩壊土である可能性が高い。その他、E 10.5・15・24 断面の築地塀南側、E 48 断面の築地塀北側でも SX3245 に載る b 補修以降の崩壊土層(褐灰～黄褐色シルト層)を確認しているが、後続する築地本体の補修や嵩上げ整地との関係が不明のため築地塀との関係を限定できない。

ここでは、SX3245 整地層から出土した遺物と SF202 b 崩壊土中の遺物について触れる。出土遺物 SX3245 層中
 SX3245 の層中からは多量の瓦片が出土しており、そのほとんどが第 7 次調査で南門東脇の築地南側から取り上げたものである。大半の瓦は焼土層（中層）からの出土で、軒丸・平瓦、平・丸瓦がみられる。軒丸瓦は重弁蓮花文 222（図版 71 - 1）、重圏文 241（2）、重圏文（型番：240～243）が各 1 点出土しており、軒平瓦には二重弧文 511（3）と均整唐草文 660（4）が各 1 点、単弧文 640（図版 72 - 1～4）が 6 点認められる^(註 22)。



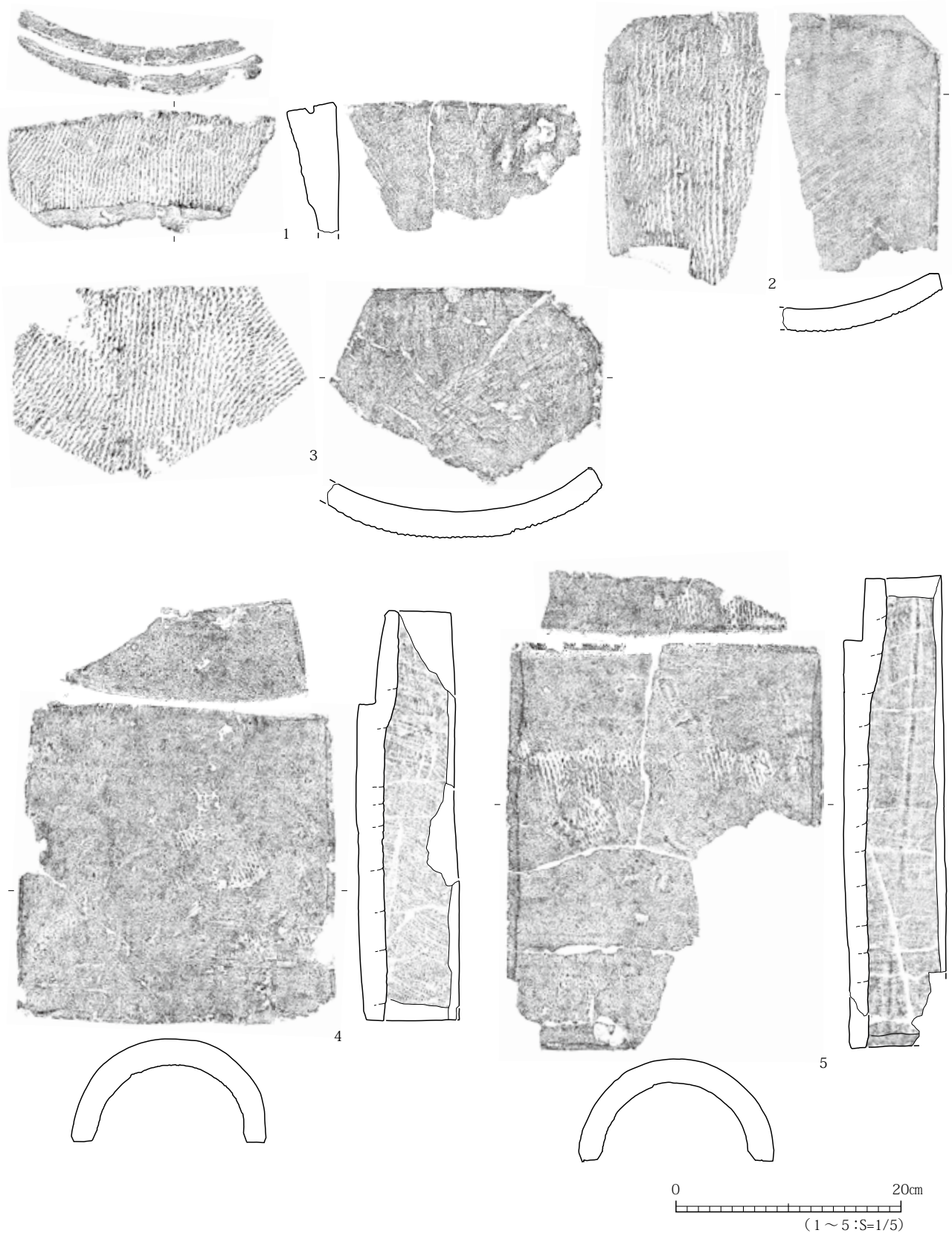
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SX3245・中層(焼土)	7	軒丸瓦222	瓦当部1/2	—	—	—	3.8	重弁蓮花文		R 15	B 3598
2	SX3245・中層(焼土)	7	軒丸瓦241	瓦当部完形	—	—	—	3.3	重圏文 瓦当面径19.0cm		R 2	収6棚
3	SX3245・中層(焼土)	7	軒平瓦511	瓦当部2/3	—	—	—	5.5	二重弧文 aタイプ		R 2+R 5	B 3602
4	SX3245・中層(焼土)	7	軒平瓦660	1/2	—	—	(29.0)	5.0	均整唐草文 焼瓦(顔面に受熱剥落あり) 平瓦部厚さ: 2.5cm	131-4	R 1	収6棚

図版 71 SX3245 嵩上げ整地層 _ 出土遺物 (1)



No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SX3245・中層(焼土)	7	軒平瓦640	1/4	-	-	-	4.5	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:2.3cm		R3	B3602
2	SX3245・中層(焼土)	7	軒平瓦640	瓦当部1/2	-	-	-	4.5	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:2.0cm		R101	B3598
3	SX3245・中層(焼土)	7	軒平瓦640	瓦当部1/2	-	-	-	4.5	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:2.3cm		R4	B3602
4	SX3245	73	軒平瓦640	瓦当部1/2	-	-	-	4.5	単弧文 aタイプ1		R1	B13568
5	SX3245・中層(焼土)	7	平瓦II B	破片	-	-	-	(2.0)	aタイプ1 凹面に刻印文字「物」A		R8	B3596
6	SX3245・中層(焼土)	7	平瓦II B	1/2	-	-	27.0	2.5	aタイプ2 凹面に刻印文字「物」A 焼瓦? (器面に剥落あり)		R3	B3596
7	SX3245・中層(焼土)	7	平瓦II B	1/3	-	-	-	2.0	aタイプ2 凹面に刻印文字「物」C 焼瓦		R6	B3596

図版 72 SX3245 嵩上げ整地層_出土遺物(2)

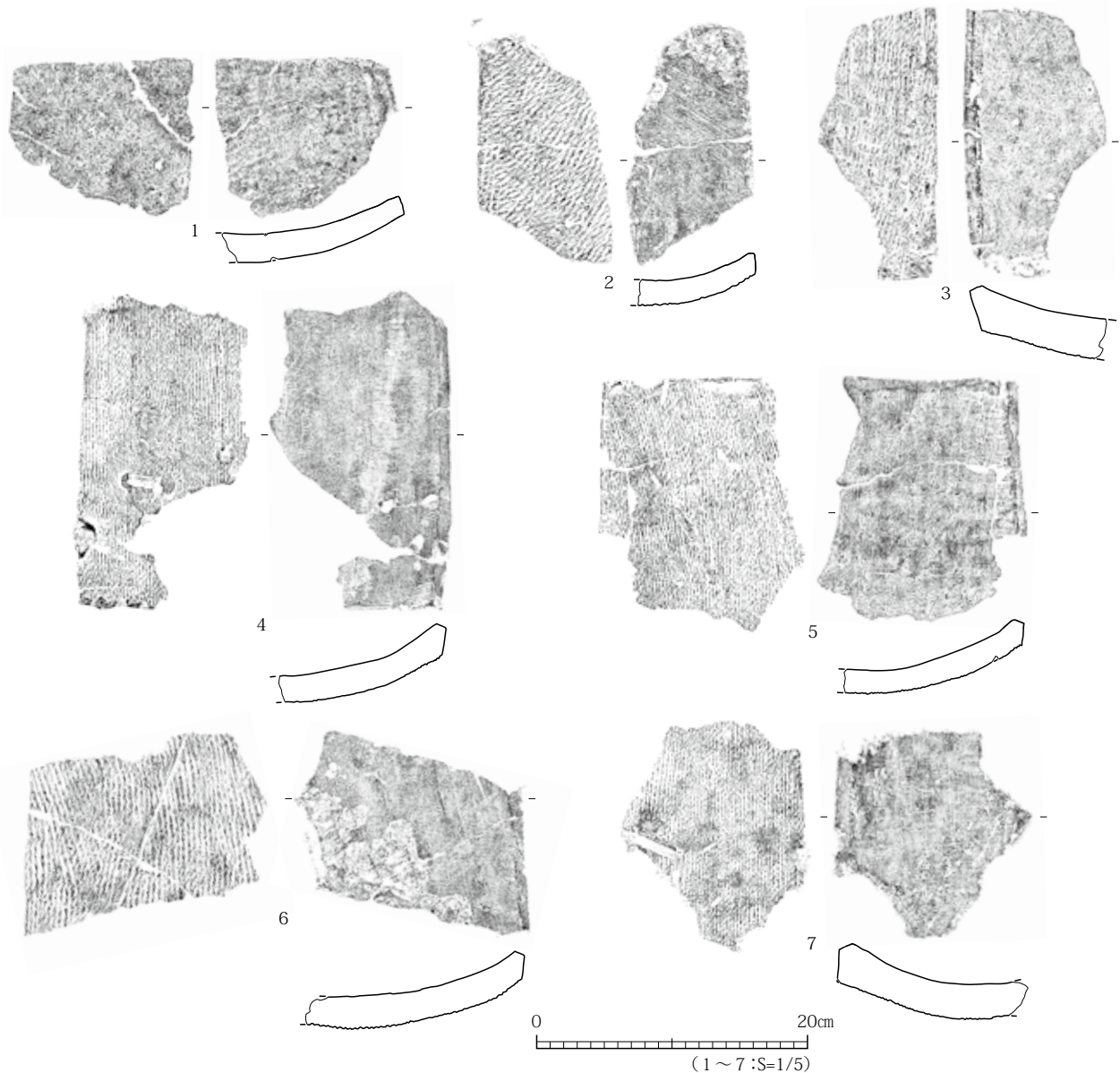


No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF202 b・崩壊土一括	87	軒平瓦640	瓦当部2/3	—	—	—	4.5	単弧文 aタイプ1		R 119	B 15361
2	SF202 b・崩壊土一括	87	隅切瓦	1/3	—	—	—	2.0	平瓦ⅡBa2類使用 広端隅の一部を切る	133-2	R 134	B 15362
3	SF202 b・崩壊土	87	隅切瓦	2/5	—	—	—	2.5	平瓦ⅡBa1類使用 広端隅の一部を切る	133-1	R 133	B 15362
4	SF202 b・崩壊土一括	87	丸瓦ⅡB	ほぼ完形	36.5	(12.0)	17.5	2.5	玉縁長: 5.5cm		R 120	B 15361
5	SF202 b・崩壊土一括	87	丸瓦ⅡB	4/5	42.0	(14.0)	(17.5)	2.5	玉縁長: 8.5cm		R 121	B 15361

図版 73 SF202b 築地塀跡南側崩壊土 (E21~23) _ 出土遺物 (1)

丸瓦は、ⅠA類が1点、Ⅱ類が67点、ⅡA類が1点、ⅡB類が4点あり、Ⅱ類では「物」Aの刻印文字が1点にみられる。平瓦は、ⅠA類が19点、ⅠB類が6点、ⅡA類が1点、ⅡB類が77点あり、ⅡB類にはaタイプ1・2が含まれる。また、平瓦ⅡB類では「物」A(図版72-5・6)の刻印文字が4点、「物」C(7)が1点、「矢」Aが1点に認められ、「丸」とみられる資料も1点ある。なお、丸・平瓦の2割強は焼瓦であった。

SF202 b崩壊土中 SF202 b崩壊土層は多量の瓦を含むが、取り上げたのは築地南裾のE 21～23付近のものがほとんどで、軒平瓦、隅切瓦、丸・平瓦がある。このうち、一括資料とした大破片や完形に近い瓦のまとまりには、単弧文軒平瓦640(図版73-1)が1点、平瓦ⅡB a₂類を用いた隅切瓦(2)



No	出土遺構・層位	次数	種 類	残存長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
					狭端	広端					
1	SF202 b・崩壊土	87	平瓦ⅠA	1/6	-	-	(2.0)			R 124	B 15361
2	SF202 b・崩壊土一括	87	平瓦ⅡB	1/6	-	-	(2.0)	aタイプ1		R 125	B 15361
3	SF202 b・崩壊土	87	平瓦ⅡB	1/5	-	-	(3.0)	aタイプ2		R 126	B 15361
4	SF202 b・崩壊土一括	87	平瓦ⅡB	1/3	-	-	(2.3)	aタイプ2		R 127	B 15362
5	SF202 b・崩壊土	87	平瓦ⅡB	1/4	-	-	(2.0)	aタイプ2		R 130	B 15362
6	SF202 b・崩壊土一括	87	平瓦ⅡB	1/5	-	-	(2.5)	aタイプ2 凸面にへら書き「×」?		R 128	B 15361
7	SF202 b・崩壊土	87	平瓦ⅡC	1/6	-	-	(3.0)			R 129	B 15361

図版 74 SF202 b築地堀跡南側崩壊土 (E21~23) _ 出土遺物 (2)

が1点、丸瓦のⅡ類が2点、ⅡB類(4・5)が2点、平瓦のⅡBa₁類(図版74-2)が1点、ⅡBa₂類(4・6)が2点含まれていた。一括資料以外では、平瓦ⅡBa₁類を用いた隅切瓦1点(図版73-3)と、丸・平瓦が出土している。丸瓦は、Ⅱ類が36点、Ⅱb類が2点あり、平瓦は、ⅠA類(図版74-1)が1点、ⅡB類(5)が49点、ⅡC類(7)が2点ある。平瓦ⅡB類ではaタイプ1~3とbタイプのすべてが認められた。

《SF202 c 築地塀跡、SX3255 整地層、SD2728 溝》

SF202 cはSF202 a・b積土上部を削平し、新たに本体を積み直して補修したもので、本体の補修
SX3255 嵩上げ整地層を伴い、a・b積土との間には崩壊土の間層が断続的に認められる^(註23)。

c補修はE 12.3~24区間で連続して確認されており、東へ向かって厚さを増し、E 24の断ち割り断面(図版62のm-m')では残存高が0.75m、積み直し部分の基底幅が2.1mある。E 24の断面では、地山土ブロックを主体とし、暗褐色土ブロックと凝灰岩片を含む褐~黄褐色のシルトが積土に用いられており、5~15cmを単位として版築されている。積手の違いはE 14.7・17.2・20.6の3箇所を確認しており、それぞれの間隔は西から2.5m・3.4mである。

また、E 42~48の範囲でもc補修を確認しているが、これより東の状況は後世の削平がSF202 a積土にまで及んでいるため不明である。築地本体を南北に断ち割ったE 45の断面(図版68のu-u')をみると、c積土の残存高は0.4m、基底幅は1.9mで、凝灰岩片を多く含むにぶい黄褐~黄褐色シルトを用いて10~20cm単位の版築が行われている。

SX3255 嵩上げ整地層は、E 15・24・45・48の断面(図版62のk-k'・m-m'、図版68のu-u'・v-v')で確認した。E 15・24では積み直したSF202 cの北裾、E 45・48では南北両裾に幅0.35~0.7m、厚さ10~25cmで分布する。全般に遺存状況が悪く、詳細は判然としないが、E 48の断面からはSF202 c南側に幅0.7m程の犬走りがついていたことが窺われる。南門寄りのE 15・24断面では地山土ブロックを多く含む褐色シルト、南門から離れたE 45・48断面では凝灰岩片を多く含む黄褐~明黄褐色シルトが整地に用いられていた。SX3255 整地層

E 15南北ベルトの西側断面でSX3255上面から掘り込まれた柱穴(p 18)を確認している(図版63)。柱 穴
c補修本体の北裾に位置し、一辺は約0.3m前後で、深さは0.5m程である。柱穴は抜取穴とみられ、埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。SX3255上面で抜き取られており、c補修時の添柱や足場の柱を抜き取ったものの可能性がある。これ以外はSF202 cに伴う柱穴等は不明で、寄柱構造も判然としない。

他に、SF202 築地塀に並行してその約0.8m北側を東西に伸びるSD2728溝がある(図版63)。SD2728 溝
E 10~15区間のSX2742基礎整地上面もしくは地山面で長さ約5.0m分を検出しているが、E 15南北ベルトの断面観察(図版62のk-k')では、少なくともSF202 bの崩壊土より上から掘り込まれており、SF202 cに伴う犬走り外側の溝の可能性はある。

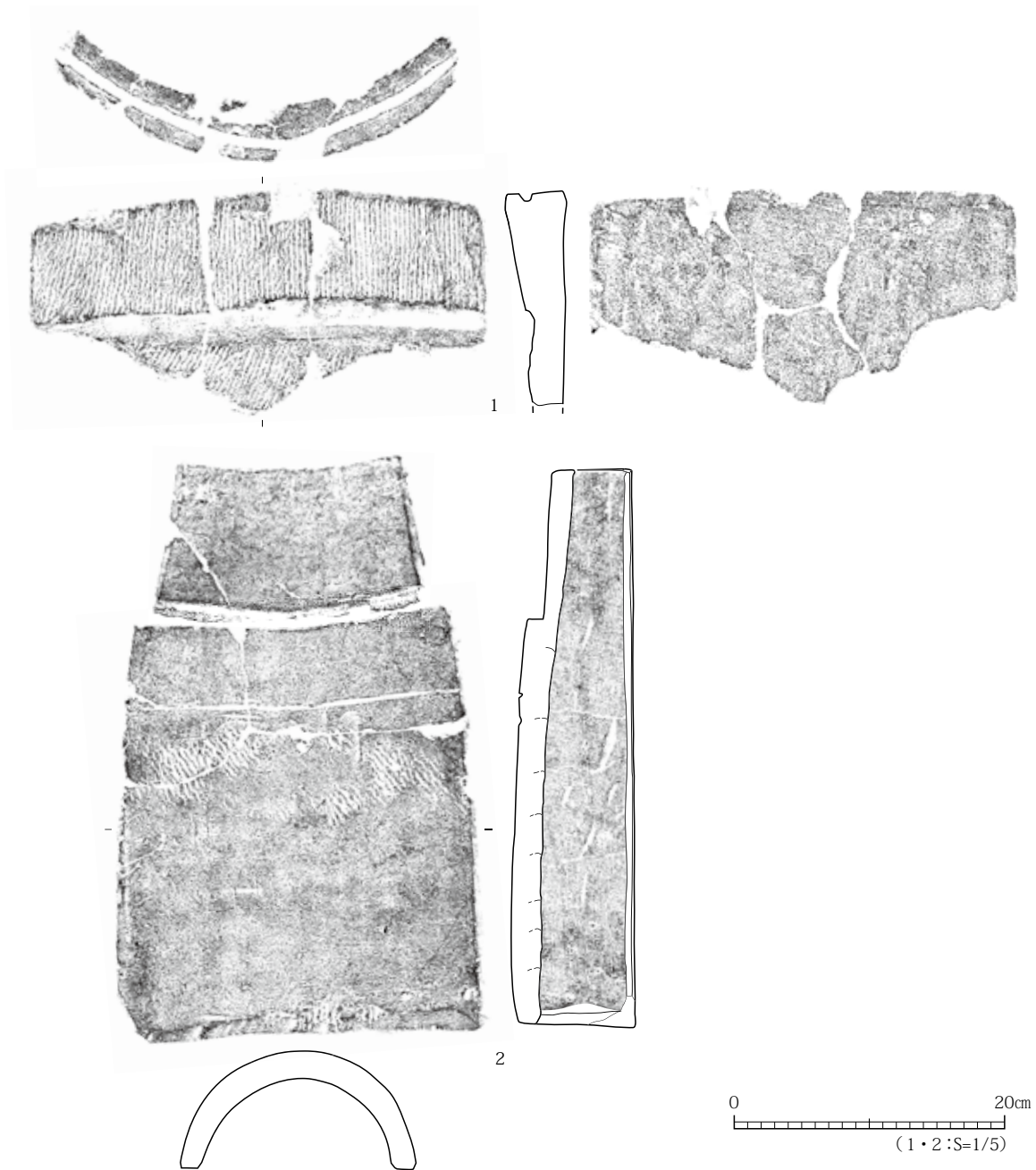
上幅1.0m前後、深さ0.5m程で、断面は「U」字形を呈する。溝を確認できたのがその底面近くまで掘り下げた時点であったため、平面形は不整形である。堆積土は地山小ブロックを多く含む暗褐~灰黄褐色シルトである。

SD2728の堆積土中からは、瓦と土器片が出土している。瓦類は、軒平瓦、道具瓦、丸・平瓦SD2728 遺物

があり、軒平瓦は単弧文 640 (図版 75 - 1) が 2 点認められる。道具瓦は小破片 1 点で、用途は不明である。丸瓦には II A・II B 類 (2)、平瓦には I A・I B・II B・II C 類があり、平瓦 II B 類では a タイプ 1・2 がみられる。土器は、須恵器高台坏・甕の小破片があるが、図示できるものはない。

崩壊土 E 15・24 断面の築地塀北側、E 48 断面の南側、E 45 断面の南北両側では、SX3255 に載る SF202 c 以降の崩壊土層 (暗褐～黄褐色シルト層) を確認しているが、後続する築地本体の補修や嵩上げ整地との関係が不明のため築地塀との関係を限定できない。

出土遺物 SF202 c 築地本体の積土から、平瓦 II B a₁ 類が 3 点出土している。



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SD2728・堆積土	73	軒平瓦640	瓦当部完形	—	—	29.5	4.5	単弧文 aタイプ1		R2	B 13565
2	SD2728・堆積土	73	丸瓦II B	ほぼ完形	41.2	12.0	18.0	2.3	玉縁長：11.0cm		R4	B 13565

図版 75 SD2728 溝_出土遺物

《SF202 d 築地塀跡・SX3246 整地層》

SF202 dはSF202 c南側の崩壊土上にSX3246 嵩上げ整地を行って平坦とし、そこからc積土の南側面を奥行約40cmまで削り取った後、新たに本体を積み直して補修したもので、その基底側面に瓦列を伴う。d補修に伴う寄柱は不明である。

本体の補修

瓦列はE 22～23区間の築地本体南側面で確認しており、平瓦（もしくは軒平瓦）4枚が東西に並ぶ状況であったが、この部分の断ち割りを行っていないため、詳細は不明である。第7次調査では、この瓦列とほぼ同レベルで、平行して東西に並ぶ瓦5枚の瓦列^(註24)を築地塀の北側辺で検出している。これら2条の瓦列は同時期の補修に用いられていたものの可能性が高く、d補修は基底部の両側に瓦列を伴うものであったと考えられる。その場合、d補修時の築地基底幅は瓦列の間隔から約2.1m、補修が確認できるのはE 21.5～25区間となる。なお、第7次調査では築地本体の南側面に食い込んだ状態の瓦をE 23.5～25.5区間で数点確認している。これらは南側瓦列とほぼ同レベルで、その延長線上に位置しており、南側瓦列の一部である可能性がある。

d補修の断ち割りを行ったE 24の断面（図版62のm-m'・図版64の写真上）をみると、積土の残存高は0.4m程で、地山土ブロックを主体とし、凝灰岩片を多く含む褐色シルトが用いられている。版築の単位は10cm前後とみられるが、不明瞭である。

SX3246 嵩上げ整地層は、E 24の断面でのみ確認しており、南北幅約0.3m、厚さ10cm程で、整地には地山土と暗褐色土のブロックを含む褐色シルトが用いられている。

SX3246 整地層

《崩壊土・堆積層の出土遺物》

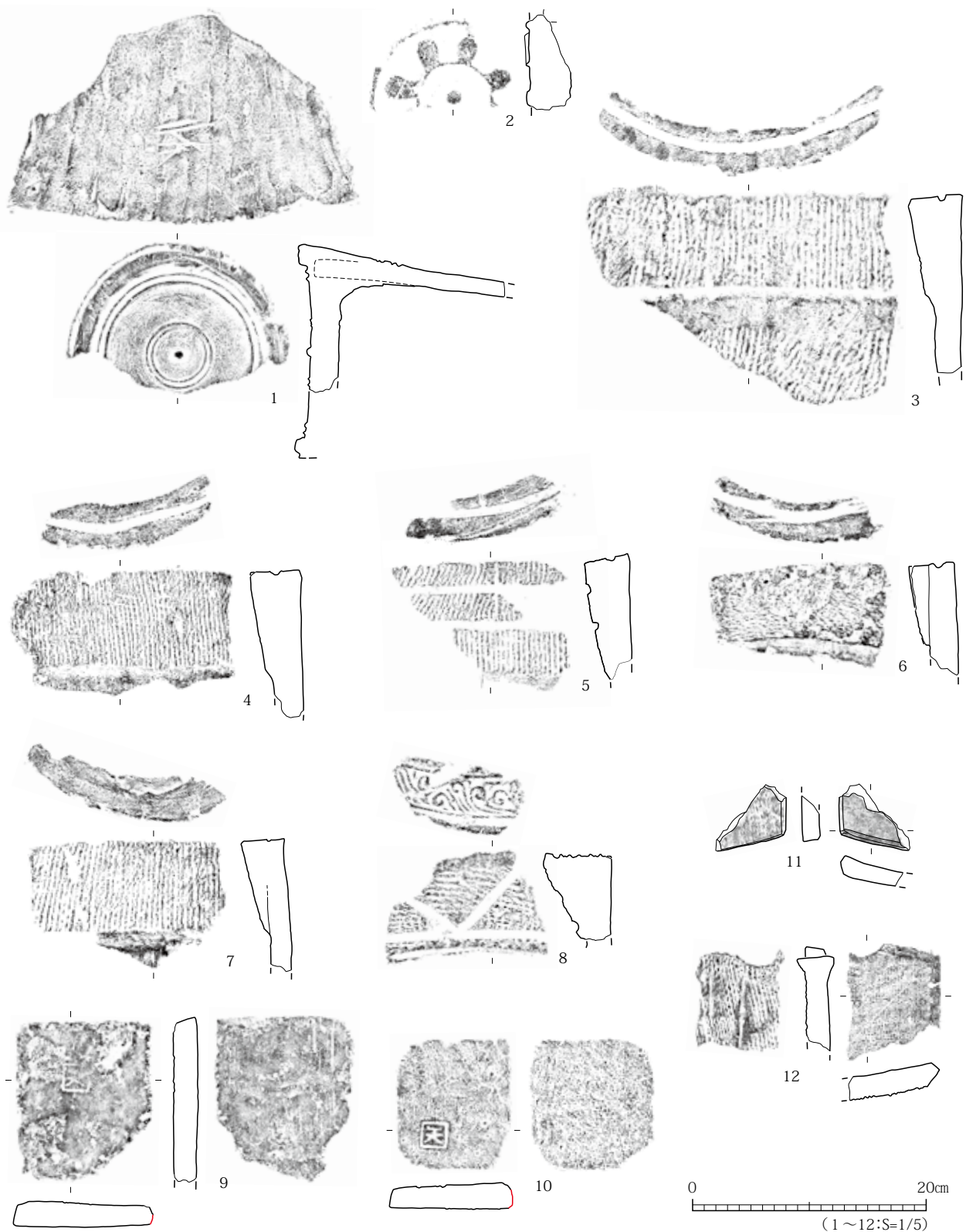
SF202 築地塀跡の南北両側に認められる崩壊土や堆積層から出土した遺物で、時期を限定できないものについてまとめて説明する。この中には、少なくともb補修またはc補修以降とみられる遺物も含まれ、瓦、土器、羽口、鉄製品が出土している。

出土状況

瓦類には、軒丸・平瓦、道具瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は、重弁蓮花文（型番：221～228）、重圏文240・241（図版76-1）、歯車状文427（2）、陰刻花文451がみられ、軒平瓦は、単弧文640（3～6）、無文641（7）、均整唐草文721 A（8）がみられる。軒平瓦の8割以上を単弧文640が占め、軒丸・平瓦に明確な第I期の瓦は認められなかった。道具瓦には熨斗瓦（9・10）や隅切瓦（11）などがあり、図示した熨斗瓦2点はいずれも焼瓦で、片面に刻印文字の「矢」Aが押印されている。また、図版76-12は平瓦II B a₂類の小口に棒状の工具を当てて半円状に窪ませたとみられるもの、図版77-1は丸瓦部と玉縁部の境が斜めになる丸瓦で、いずれも道具瓦の可能性もある。

瓦類

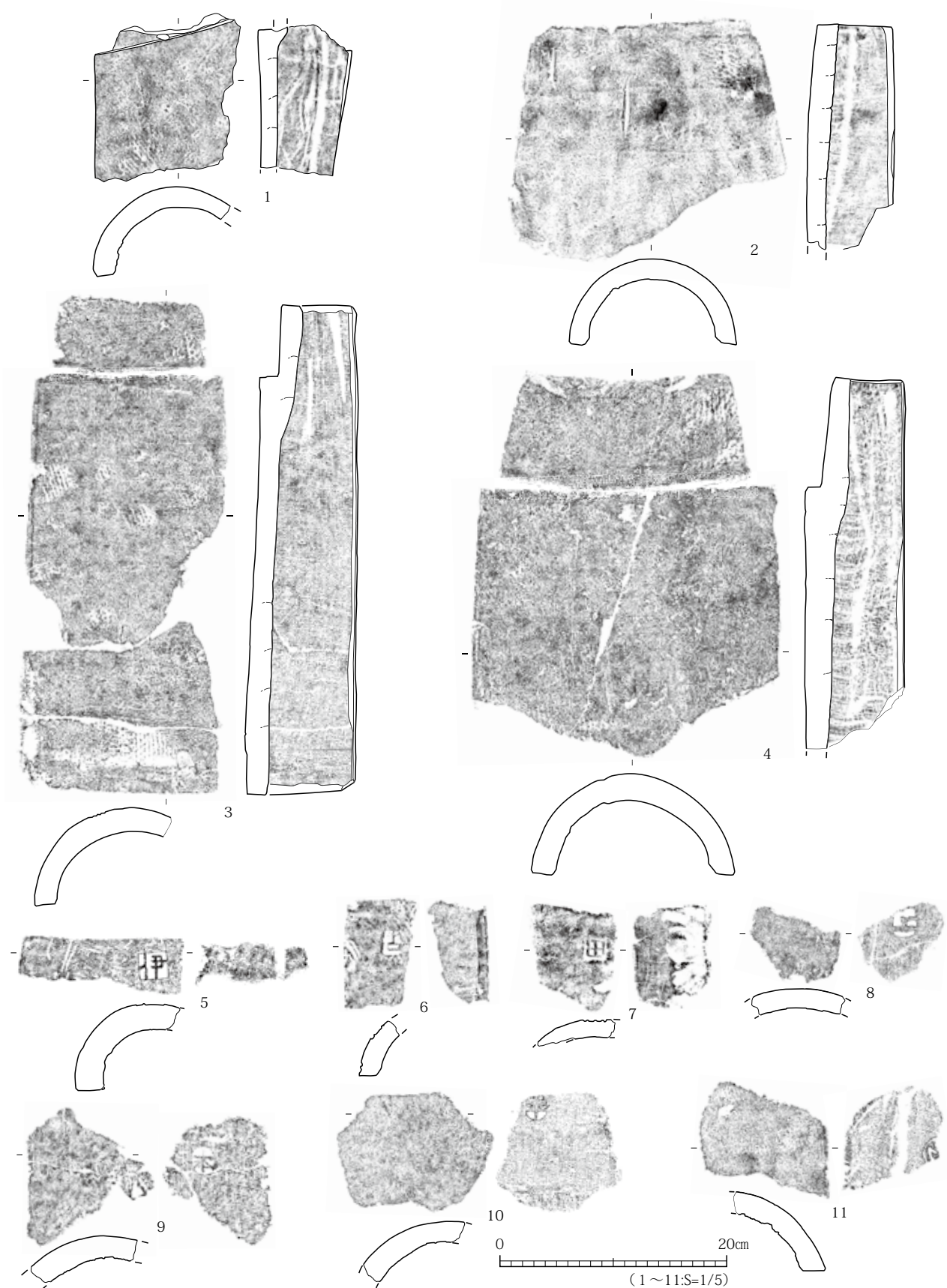
丸瓦はII A（図版77-2）・II B（3・4）類があり、その中には刻印文字の「物」?・「伊」（5）・「占」（6）・「田」A（7）・「上」B（8）・「本」（9・10）や刻印記号（図版77-11・図版78-1）が押印されたもの、ヘラ書きの「＝」（図版78-2）・「×」（3）などがみられるものが含まれる。図版77-11は新出の刻印記号で、『本文編』PL.104-13の陰陽部分が反転したものとみられる。平瓦はI A・I B・I C a・II A・II B・II C（図版78-9）類があり、I類およびII A類が約5%、II B類が約52%、II C類が約43%を占める。平瓦II B類には、刻印文字の「丸」B（図



(1~12:S=1/5)

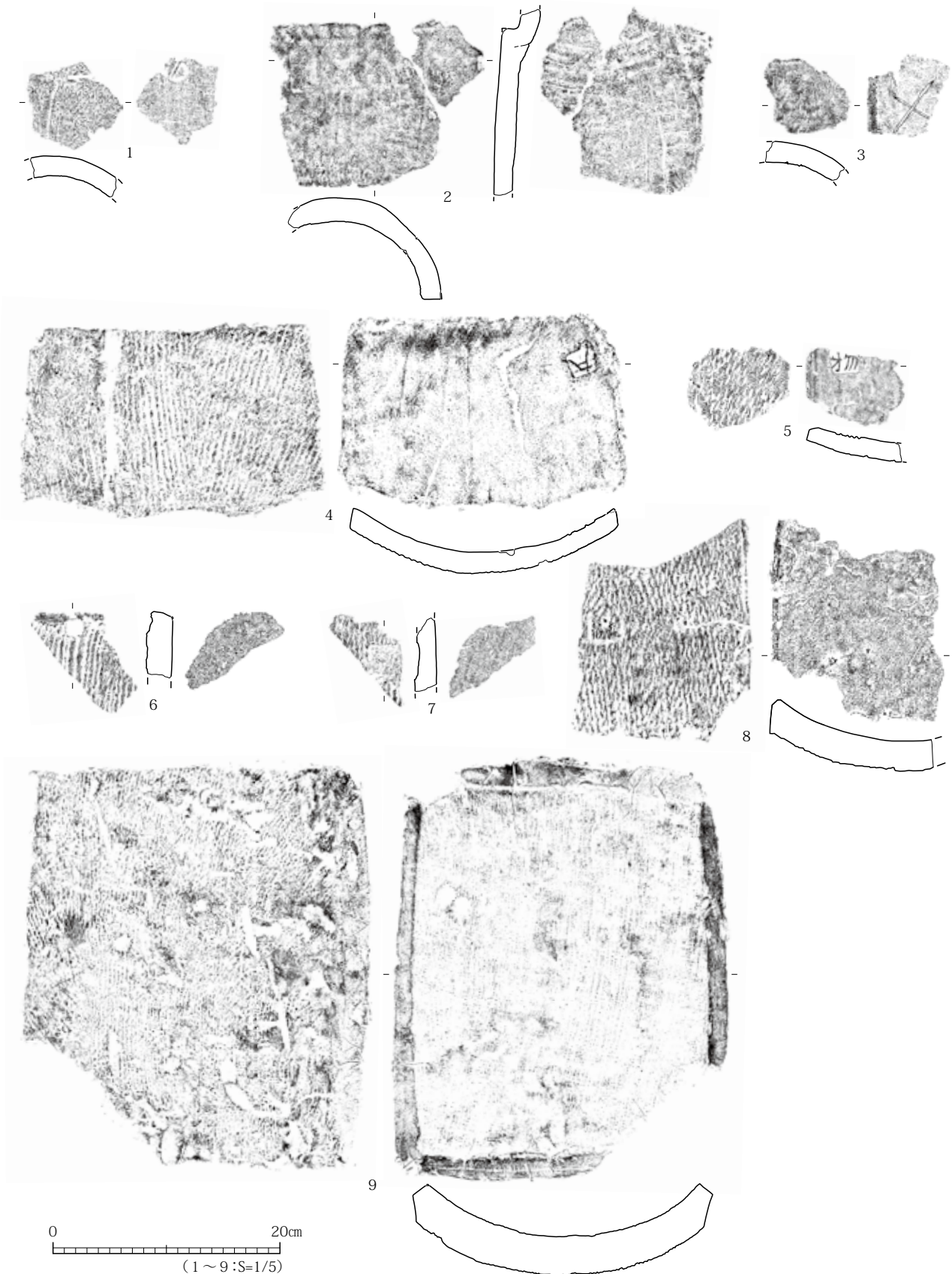
No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF202・南側崩壊土	7	軒丸瓦241	瓦当部2/3	—	—	—	3.0	重圏文 瓦当面径:18.0cm 丸瓦部凸面にヘラ書き(不明) 丸瓦部厚さ:2.0cm	131-1	R7	B3597
2	SF202・北側崩壊土	7	軒丸瓦427	瓦当部1/2	—	—	—	(4.0)	歯車状文 瓦当裏面に縄叩き目		R2	B3603
3	SF202 c以降・崩壊土	73	軒平瓦640	瓦当部完形	—	—	24.0	4.8	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:2.5cm		R3	B13572
4	SF202・南側崩壊土	7	軒平瓦640	瓦当部1/2	—	—	—	4.5	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:2.0cm		R11	B3602
5	SF202・北側堆積土	7	軒平瓦640	瓦当部1/3	—	—	—	(3.5)	単弧文 aタイプ1 顎面に横位沈線2条	131-4	R1	B3597
6	SF202・南側崩壊土	7	軒平瓦640	瓦当部1/2	—	—	—	3.5	単弧文 aタイプ2 焼瓦		R1	B3602
7	SF202・南側崩壊土	7	軒平瓦641	瓦当部1/2	—	—	—	4.0	無文 焼瓦?(器面に剥落あり)器面 黒色 顎面に縦位縄叩き目		R5	B3603
8	SF202・北側崩壊土	7	軒平瓦721A	瓦当部2/5	—	—	—	(6.0)	aタイプ		R4	B3603
9	SF202・南側崩壊土	7	熨斗瓦II	破片	—	12.0	—	2.2	左面:布目→ナデ 右面:縄叩き目(つぶれ) 分割線:深さ0.7cm 刻印文字「矢」A? 焼瓦?		R4	B3596
10	SF202 c以降・崩壊土	73	熨斗瓦II	破片	—	10.7	—	2.1	左面:ナデ 右面:縄叩き目(つぶれ)? 分割線:深さ0.7cm 刻印文字「矢」A 焼瓦	132-8	R9	B13572
11	SF202・北側崩壊土	73	隅切瓦	破片	—	—	—	(2.0)	平瓦II B類使用?		R39	B13570
12	SF202・北側崩壊土	7	道具瓦	破片	—	—	—	(2.0)	平瓦II B類の端部が半円状に窪む		追R1	B3604

図版 76 SF202 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (1)



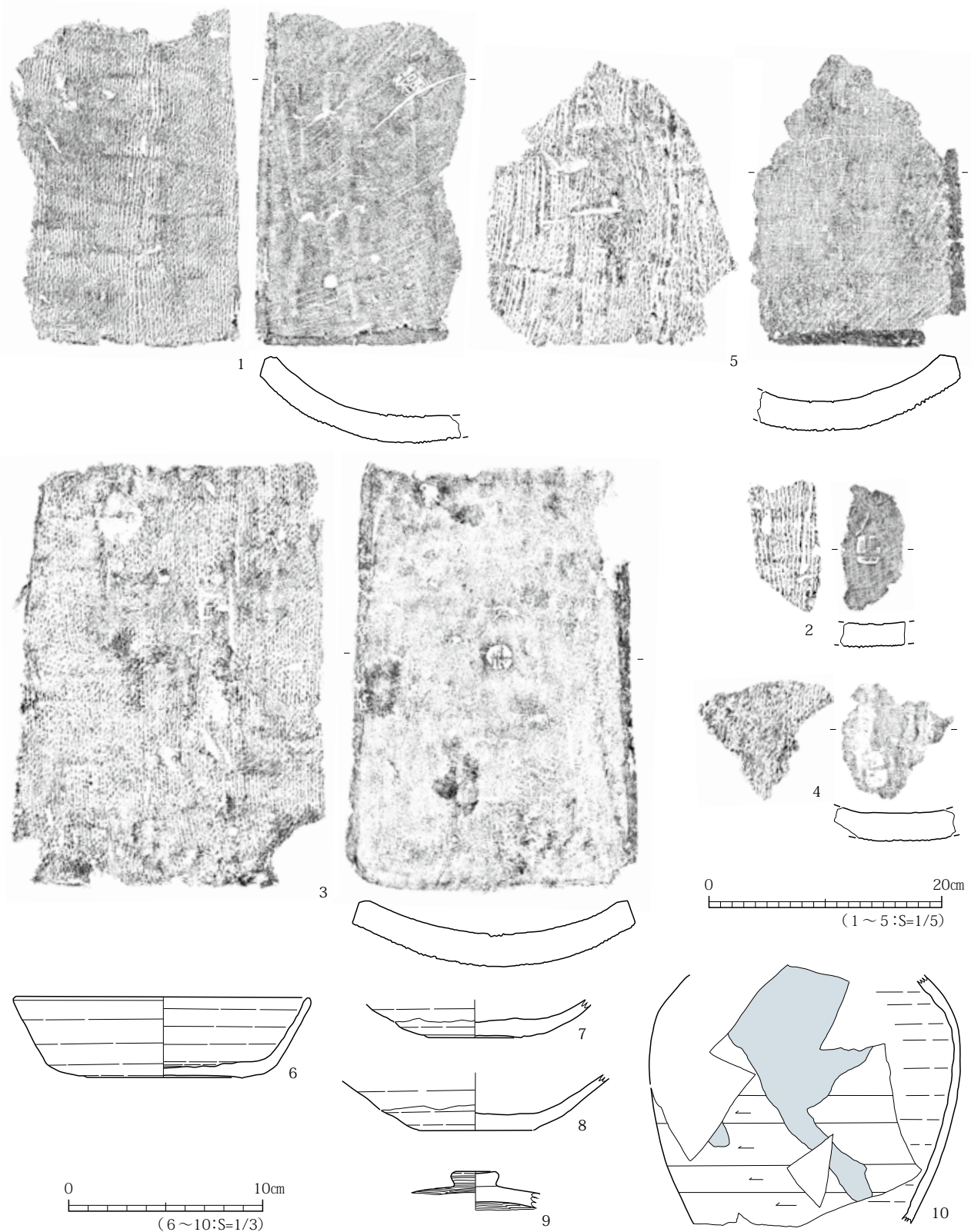
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF202・南側崩壊土	73	道具瓦?	破片	—	—	—	(2.0)	玉縁部の段が長軸に対して斜め	133-4	R 40	B 13570
2	SF202・北側堆積土	7	丸瓦ⅡA	1/2	—	14.0	—	2.0			R 101	B 3598
3	SF202 c以降・崩壊土	73	丸瓦ⅡB	ほぼ完形	43.0	13.5 (19.5)	—	2.3			R 36	B 13574
4	SF202・南側崩壊土	73	丸瓦ⅡB	2/3	—	13.5	—	2.5			R 44	B 13571
5	SF202・南側崩壊土	73	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.0)	丸瓦部凸面に刻印文字「伊」 焼瓦		R 13	B 13569
6	SF202・北側崩壊土	7	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(1.8)	丸瓦部凸面に刻印文字「占」		R 101	B 3604
7	SF202・南側崩壊土	7	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(1.5)	丸瓦部凸面に刻印文字「田」A 焼瓦		R 4	B 3596
8	SF202・南側崩壊土	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(1.8)	凹面に刻印文字「上」B		R 18	B 13569
9	SF202・南側崩壊土	7	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.0)	凹面に刻印文字「本」 2度押し		R 8	B 3600
10	SF202・南側崩壊土	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.0)	凹面に刻印文字「本」		R 17	B 13569
11	SF202 c以降・崩壊土	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.0)	凹面に新出の刻印記号(『政庁編』PL.104-13の陰陽が反転?)		R 1	B 13574

図版 77 SF202 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (2)



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF202 c以降・崩壊土	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(1.8)	凹面に刻印記号(『政庁編』PL.104-12)		R 33	B 13574
2	SF202・南側崩壊土	73	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.3)	丸瓦部凹面にヘラ書き「=」		R 27	B 13569
3	SF202・北側崩壊土	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.0)	凹面にヘラ書き「×」		R 23	B 13569
4	SF202・北側崩壊土	7	平瓦ⅡB	2/5	—	(22.5)	—	2.0	aタイプ2 凹面に刻印文字「丸」B 焼瓦		R 102	B 3604
5	SF202・南側崩壊土	73	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(1.8)	aタイプ2 凹面に刻印文字「物」A		R 15	B 13569
6	SF202・南側崩壊土	73	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.5)	凸面に方形窪み(一辺:1.5cm)		R 43	B 13571
7	SF202・南側崩壊土	73	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.0)	凸面に方形窪み(一辺:3.2cm)		R 42	B 13571
8	SF202・北側崩壊土	73	平瓦ⅡB	破片	—	—	—	(3.0)	bタイプ 凸面に方形突出(一辺:2.5cm)		R 41	B 13571
9	SF202・南側崩壊土	7	平瓦ⅡC	ほぼ完形	35.0(24.5)	—	—	3.5			R 1	B 3601

図版 78 SF202 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (3)



No	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF202・北側崩壊土	7	平瓦ⅡC	2/5	—	—	—	2.3	凹面に刻印文字「福」		R1	B3604
2	SF202・北側崩壊土	7	平瓦ⅡC	1/3	—	—	—	(2.0)	凹面に刻印文字「上」B		R2	B3604
3	SF202・北側堆積土	7	平瓦ⅡC	ほぼ完形	36.2	23.1	26.0	2.7	凹面に刻印文字「本」		R102	B3596
4	SF202 c以降・崩壊土	73	平瓦ⅡC	破片	—	—	—	(2.4)	凹面に刻印記号（『政庁編』PL104-2?）		R12	B13572
5	SF202・南側崩壊土	73	平瓦ⅡC	破片	—	—	—	2.6	凹面にヘラ書き「井」		R32	B13570
No	出土遺構・層位	回数	種類	残存	口径	底径	器高	特 徴		写真図版	登録	箱番号
6	SF202 c以降・崩壊土	73	須恵器・坏	1/5	15.3	8.0	4.1	底部：ヘラ切り無調整 胎土に海綿骨針を含む			R1	B13586
7	SF202 c以降・崩壊土	73	須恵器・坏	底部破片	—	4.8	—	底部：回転糸切り無調整			R2	B13586
8	SF202 c以降・崩壊土	73	須恵器・坏	底部破片	—	6.2	—	底部：回転糸切り無調整			R3	B13586
9	SF202 c以降・崩壊土	73	須恵器・蓋	破片	—	—	—	リング状つまみ 器面の内外全面をヘラミガキ			R2	B13586
10	SF202 c以降・崩壊土	73	灰釉陶器・瓶	体部破片	—	—	—	体部下半をヘラケズリ 肩部に緑色の灰釉		130-16	R1	B13586

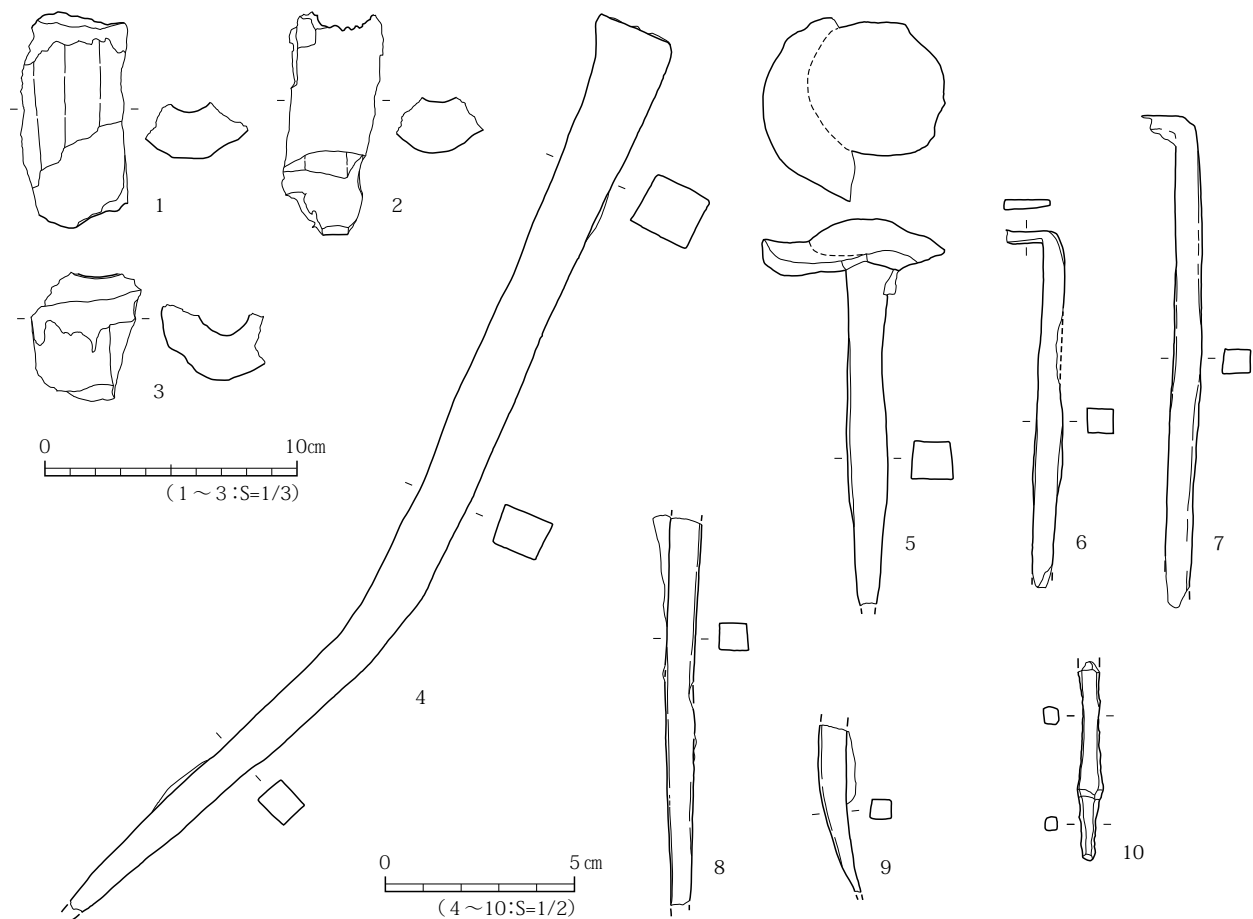
図版 79 SF202 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (4)

版 78-4)・「物」A (5)・「物」Cが押印されたもの、凸面に方形の窪み(6・7)や突出(8)がみられるものも含まれる。II C類には、刻印文字の「福」(図版 79-1)・「上」B (4)・「本」(3)や刻印記号(5)が押印されたもの、ヘラ書きの「井」(2)・「大」・「七」・「九」・「L」・「=」・「×」などがみられるものも含まれる。

土 器 類 土器は、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器がある。土師器は坏・埴がある。いずれも破片資料で図示できないが、底部破片は手持ちヘラケズリもしくは回転ケズリ再調整で切り離し技法が不明のものである。須恵器は坏(図版 79-6~8)・蓋(9)・壺・甕がある。図示不能な底部破片ではヘラ切り後手持ちヘラケズリ、静止糸切り無調整のものが認められた。須恵系土器は坏があるが、図示できるものはない。灰釉陶器は瓶の体部破片(10)である。

羽 口 羽口(図版 80-1~3)は小鍛冶に関連するとみられるSK2719 土壌付近から出土している。

鉄 製 品 鉄製品には鉄釘(図版 80-4~9)、鉄鏃(10)がある。鉄釘はいずれも断面四角形の角釘で、頭部の形状には円形のもの(5)と扁平につぶされて折り曲げられたもの(6・7)、そのまま頭部に至るもの(4)がみられる。鉄鏃は長頸鏃で、頸部から茎にかけての破片である。



No.	出土遺構・層位	次数	種 類	残存	特 徴			写真図版	登録	箱番号	
1	SF202C以降・崩壊土	73	羽口	1/3	先端にスラグ付着				R4	B 13586	
2	SF202C以降・崩壊土	73	羽口	1/3	先端にスラグ付着				R1	B 13586	
3	SF202C以降・崩壊土	73	羽口	破片	先端にスラグ付着				R3	B 13586	
No.	出土遺構・層位	次数	種 類	残存	長さ	幅	厚さ	特 徴			
4	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	ほぼ完形	(28.2)	2.8	1.5	先端欠損 断面方形 中央付近で屈曲し、そのまま頭部に至る	134-6	RM5	B 13918
5	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	4/5	(10.1)	1.1	1.0	先端部欠損 断面方形 頭部円形(径:約5.5cm)	134-11	RM1	B 13918
6	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	4/5	(9.4)	0.7	0.6	先端部欠損 断面方形 頭部折り曲げ	134-3	RM4	B 13918
7	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	4/5	(12.9)	0.8	0.6	先端部欠損 断面方形 頭部折り曲げ	134-4	RM6	B 13918
8	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	2/3	(10.2)	0.8	0.7	両端部欠損 断面方形		RM3	B 13918
9	SF202・北側崩壊土	7	鉄釘	1/3	(4.4)	(0.7)	(0.7)	先端部のみ残存 断面方形 一部にサビ膨れ		RM7	B 13918
10	SF202C以降・崩壊土	73	鉄鏃	1/2	(5.4)	-	(0.4)	茎・頸部のみ残存 長頸鏃		RM11	B 13587

図版 80 SF202 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (5)

【SK2717 土壙】（図版 69・81）

SK2717 は E 48 以東の SF202 築地塀北約 1.5m にあり、築地塀に並行して溝状に伸びる土壙で、E 57 以東の調査区外に及ぶ。確認面は SF202 c 以降の崩壊土上面で、SX3243 整地層の一部を切って基盤の凝灰岩まで掘り込んでいる。

検出状況・重複

規模は東西 8.8 m 以上、南北 4.0m 程で、深さは 0.7 m 前後である。底面および壁面には岩盤の節理の凹凸が残り、起伏が大きい。堆積土は 2 層に大別され、下層は凝灰岩片を多く含む黄褐色シルトで人為的に埋め戻されているが、上層は灰白色火山灰ブロックを含む自然堆積土である。

規模・堆積土

遺物は、堆積土から瓦と土器の破片が出土しているが、上・下層でその組成に大きな変化は認められない。瓦類は、丸・平瓦がある。丸瓦は II B 類、平瓦は I A・I B・II B・II C 類がみられ、丸瓦 II B 類には刻印文字の「占」が押印されたものもある。土器は、土師器杯、須恵器盤・甕の小破片が認められる。土師器杯はロクロ整形のもので、須恵器盤は底部が静止糸切り無調整である。

出土遺物

【SK2718 土壙】（図版 69）

SK2718 は SF202 築地塀北側約 1.0 m の E 49.5・S 379.5 付近に位置する小土壙である。SX3243 整地層の上面で検出した。平面形は一辺約 0.3 m の隅丸方形を呈し、深さが 0.15 m 前後の浅い土壙で、底面および壁面は火を受け、黒色もしくは赤褐色に変色している。堆積土は焼土・炭化物粒を含む褐色シルトである。

概要

遺物は、堆積土から丸瓦 II 類の破片が少量出土している。

出土遺物

【SK2719 土壙】（図版 69・81）

SK2719 は SF202 築地塀北側約 0.5 m の E 45・S 379.5 付近に位置する小土壙である。SX3243 整地層の上面で検出した。平面形は一辺 0.3 m 前後の隅丸方形とみられ、深さは 0.1 m 程である。底面および壁面は火を受け、黒色もしくは赤褐色に変色しているが、東側半分は攪乱によって壊されていた。堆積土は焼土・炭化物粒を含む褐色シルトである。

概要

遺物は、堆積土から瓦と土器の破片が少量出土している。瓦類は丸・平瓦があり、丸瓦は II 類、平瓦は II B・II C 類が認められる。土器は須恵器蓋の小破片である。

出土遺物

【SK2724 土壙】（図版 68・69）

SK2724 は E 54 以東の SF202 築地塀南約 2.0m にあり、築地塀に並行して溝状に伸びる土壙で、E 60 以東の調査区外に及ぶ。確認面は SF202 a 以降の崩壊土上面で、SX2742 基礎整地の一部を切って基盤の凝灰岩まで掘り込んでいる。

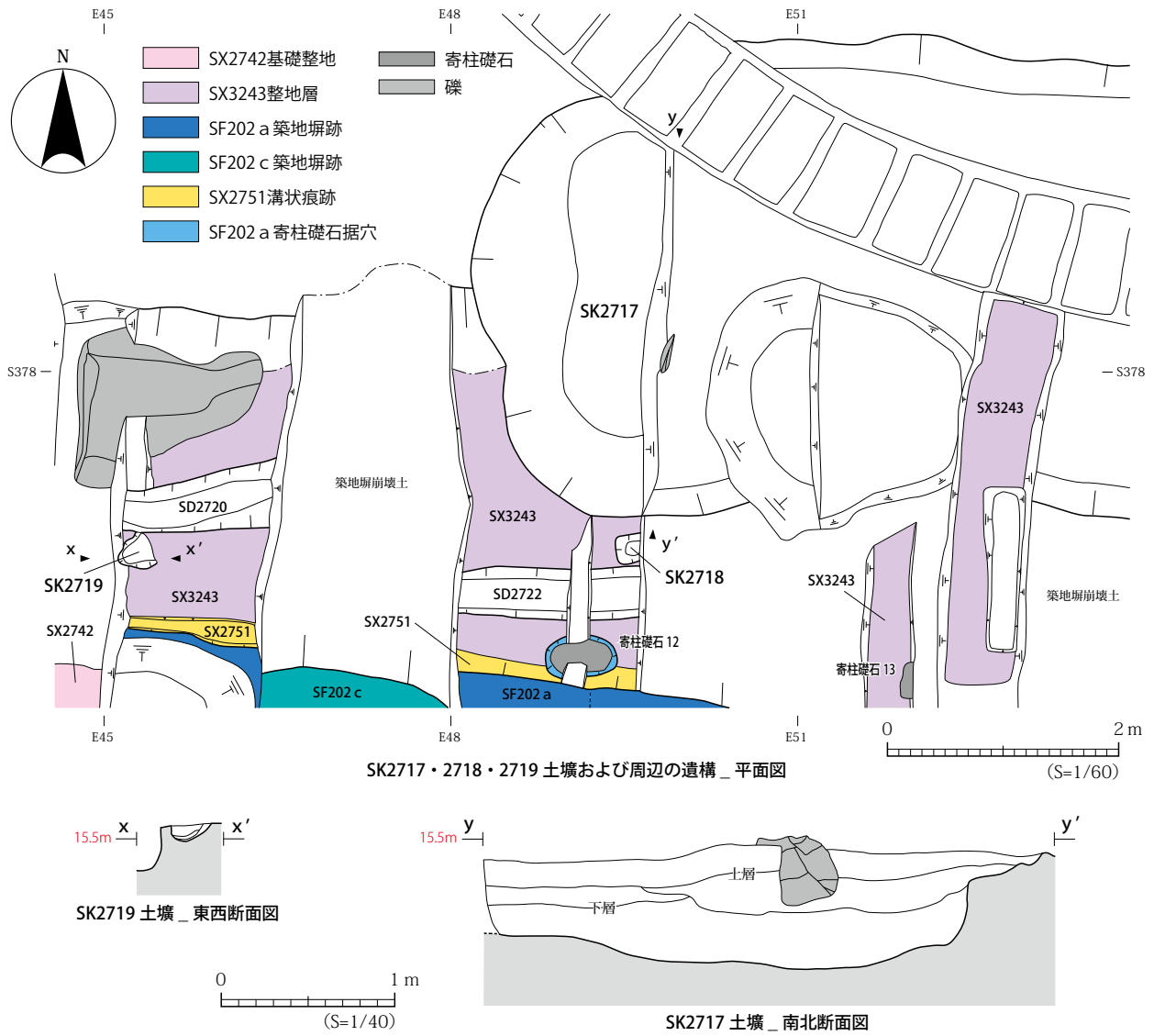
検出状況・重複

規模は東西 5.0 m 以上、南北 3.5m 程で、深さは 0.6 m 前後である。底面および壁面には岩盤の節理の凹凸が残り、起伏が大きい。堆積土は凝灰岩片を多く含む褐色シルトで、自然堆積土である。

規模・堆積土

遺物は、堆積土から瓦と土器の破片が出土している。瓦は、軒丸・平瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は重圈文（型番：240～243）が 1 点、軒平瓦は類型不明の顎部破片 1 点のみである。丸瓦は II B 類、平瓦は I A・II B・II C 類が認められ、丸瓦 II B 類には刻印文字の「田」A、平瓦

出土遺物



SK2719 土壌 (73 次、北から)



SK2717 土壌の南北断面 (73 次、北西から)

図版 81 SK2717・2718・2719 土壌 _ 平・断面図、写真

Ⅱ B類には刻印文字の「物」・「丸」 Bがみられる。土器は、土師器坏、須恵器坏・瓶・甕、須恵系土器坏の破片がある。土師器坏はロクロ整形のもので、底部が回転糸切り無調整である。須恵器坏は底部がヘラ切り無調整であった。

【SK2725 土壌】（図版 69）

SK2725 は E 59・S 384.5 の SF202 築地塀南裾付近に位置する隅丸方形の土壌である。掘り込み面は判然としないが、SF202 a 本体の南裾とこれに伴うとみられる寄柱の礎石据穴（寄柱据穴 16）、SX3243 整地層を切っている。

検出状況・重複

規模は東西約 0.65 m、南北約 0.95m で、深さは 0.2 m 程である。底面は概ね平坦で、壁は外側に開いて傾斜している。堆積土は褐色シルトで、自然流入土とみられる。

規模・堆積土

遺物は、堆積土から丸瓦Ⅱ類と平瓦Ⅱ B類の破片が少量出土している。

出土遺物

（b）南門跡の西側

【SF1556 築地塀跡】（図版 82～95）

W 21～51 区間の約 30 m にわたって残存する SF1556 築地塀跡を検出している。W 38 以東では築地塀本体の南半が大きく削平されているが、これ以西では本体および南北両側の整地層・崩壊土が確認できる。北側の整地層・崩壊土の掘り下げを上位層に止めたため、主に横断方向のベルトおよび断ち割り断面、築地塀側面の観察から変遷・補修について検討した。

概要

SF1556 築地塀跡は SX1562 基礎整地の上に構築されており、方向は発掘基準線に対して東で 8～11°南へ偏している。南門に近い東寄りほど南への振れが大きく、僅かに弧を描きながら伸びている。築地塀本体には計 4 回の補修痕跡が認められ、古い順に a～e を付した。SF1556 a～e 築地塀本体は南門西側の築地全体を精査した第 72 次調査で捉えたもので、門から W 34 までを再精査した第 87 次調査でも築地塀本体の変遷・補修に関する理解・解釈に大きな変更点はなかった。但し、W 30.2～33 区間の d 補修については、その下位に位置する c 補修との間に間層がなく、積土の特徴にも違いが認められなかったため c 補修に含めることとし、削り出し面に段差がつく W 33 以西を d 補修に改めた。

また、基礎整地直上に載る SX3254 盛土の存在を確認し、築地塀本体の築成もしくは補修に関わると考えられる嵩上げ整地層（SX3247・3248・3257）や柱穴、溝（SD2674）を検出している。

《SX1562 基礎整地・SX3254 盛土》

SF1556 a 築地塀跡の基礎整地となる SX1562 は北側では凝灰岩の岩盤を削り出した面の上に、丘陵斜面にかかる南側では旧表土上に盛土整地しており、築地塀の長軸（東西）方向に沿って 6.0～7.0 m の幅で分布することが W 8.6 以西の調査区内で確認されている（図版 52・83・85・86・88）。また、調査区西部では SP1559～1561・2660・2661 横穴墓を埋めて整地しており、この部分では南北の分布幅が 10.0 m 前後まで広がる。

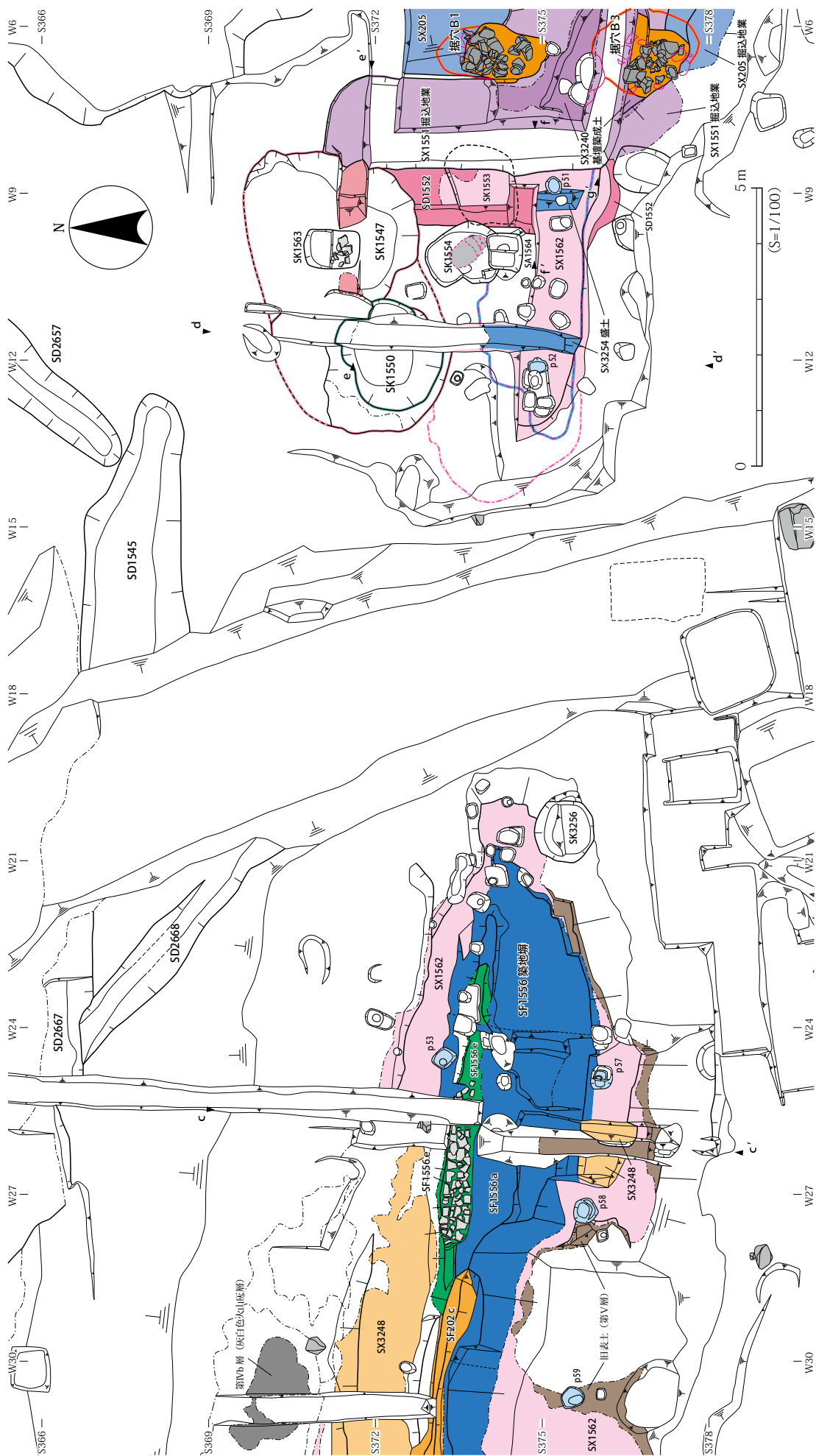
SX1562

基礎整地

層の厚さは 10～20cm で、横穴墓を埋めている W 40 付近から西側の丘陵斜面で厚さを増し、



図版 82 SF1556 築地堀跡_写真



- | | | | |
|--|---|--|--|
| SD1552溝(SX3250)道路側溝 | SX205掘込地業 | SF1556 c 築地塀跡 | 礎 |
| SX1562基礎地 | SX1551掘込地業 | SF1556 e 築地塀跡 | 瓦 |
| SX3254盛土 | SB201B門跡 | SF1556 a 築地塀跡 | 香柱礎石・根石 |
| SD1552溝(SX3250)道路側溝 | SX3248整地層 | 柱穴(添柱?) | |
| SX1562基礎地 | SK1547土壇 | | |
| SX3254盛土 | SK1550土壇 | | |

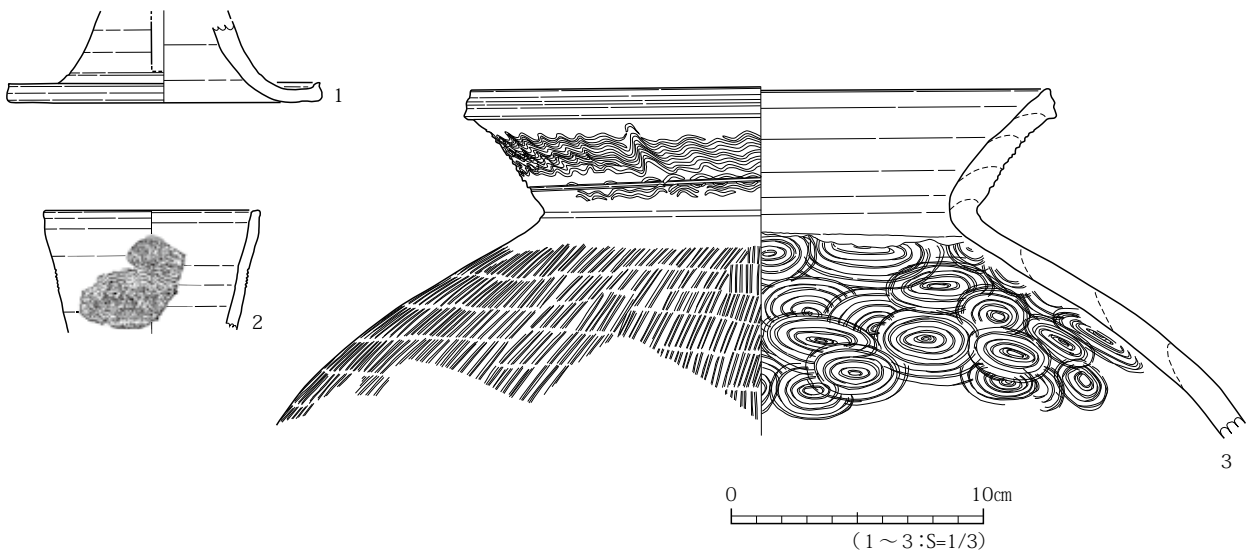
図版 83 南門地区分割図_SF1556 南辺築地塀周辺 (1)

西端部では 2.0 m を超える。整地には旧表土と地山土のブロックを主体とした混合土（灰黄色砂質シルト）が用いられており、両者が互層をなす部分もみられる。整地層上面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西縦断方向では西に約 10° 傾斜している。

C 整地層の解釈 この基礎整地は第 72 次調査の時点で、W 20 以西に分布し、これより東は南北方向の溝状の削平で分断され、その伸びは判然としていなかった。しかし、第 87 次の再調査で、第 48 次調査の際に削平の東側で確認していた地山面に載る C 整地層の特徴がこの SX1562 と共通していることが判明し、C 整地層を SX1562 基礎整地と改めた（図版 47 の断面 f - f'）。その結果、SX1562 は SX1551 掘込地業の西端まで分布範囲が広がり、SX3250 道路跡（SD1552 溝）より新しく、SX3254 盛土、SX1551 掘込地業、SA1564 柱穴、SK1547・1553・1554 土壌より古いことになる。

出土遺物 遺物は、層中から瓦、土師器、須恵器、石器が出土している。瓦類には、丸瓦Ⅱ・ⅡB類と平瓦ⅠA・ⅡBa類が各 1 点ある。土師器は内面が黒色処理された坏の体部破片 3 点、甕の体部と頸部破片各 1 点がみられる。いずれも非ロクロ整形のものであるが、小破片のため詳細は不明である。須恵器は高坏（図版 84 - 1）・長頸瓶（2）・甕（3）がある。高坏は脚部破片、長頸瓶は口縁部破片で、いずれも胎土に海綿骨針が含まれる。甕は頸部に波状文、体部の外面には平行叩き目、内面には同心円の当て具痕がみられる。石器にはスクレーパー 2 点と石鏃 1 点がある。

SX3254 盛土 W 8.6 ~ 13.5 区間の SX1562 基礎整地上には幅 1.7 m 前後、厚さ 5 ~ 15cm の SX3254 盛土が認められ、基礎整地の長軸方向に沿って帯状に伸びている（図版 52 の断面 d - d'）。第 48 次調査で SX1562 および SX1551 掘込地業上に載る SX1551 築成土下層とみていた層であるが、第 87 次調査で掘込地業の西肩がこの層を切って上部まで立ち上がること^(註 25)を確認し、これより西側を SX3254 と改めた。SX3248 嵩上げ整地、SA1564 柱穴、SK1553・1554 土壌より古く、SX1562 上面に載る最も古い遺構とみられる^(註 26)。なお、SD1552 溝（SX3250 道路跡）よりは



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX1562・層中	48	須恵器・高坏	破片	—	(12.6)	—	脚部破片 胎土に海綿骨針を含む		R 18-1	B 6768
2	SX1562・層中	48	須恵器・長頸瓶	破片	(8.7)	—	—	口縁部破片 胎土に海綿骨針を含む		R 18-2	B 6768
3	SX1562・層中	48	須恵器・甕	1/5	23.0	—	—	頸部に波状文 体部外面：平行叩き目 体部内面：同心円アテ具痕		R 23	B 6769

図版 84 SX1562 基礎整地 _ 出土遺物

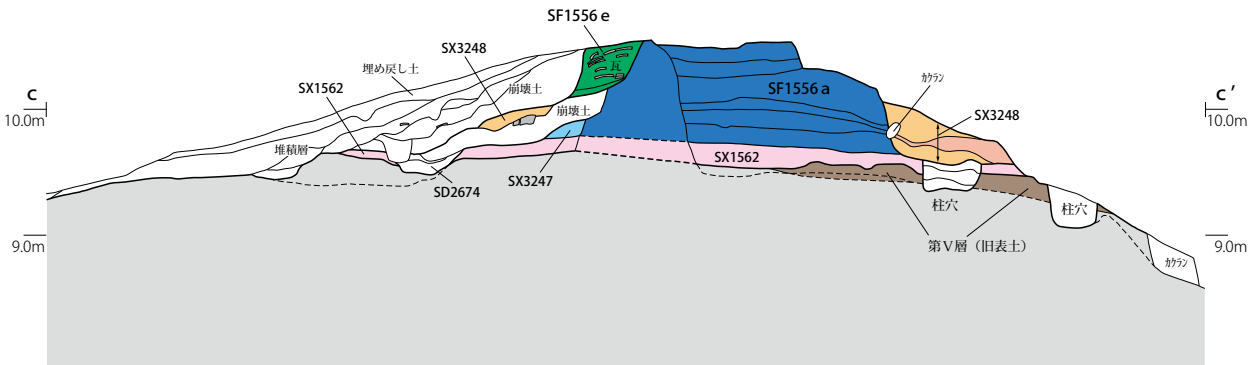


図版 85 南門地区分割図_SF1556 南辺築地塀周辺 (2)

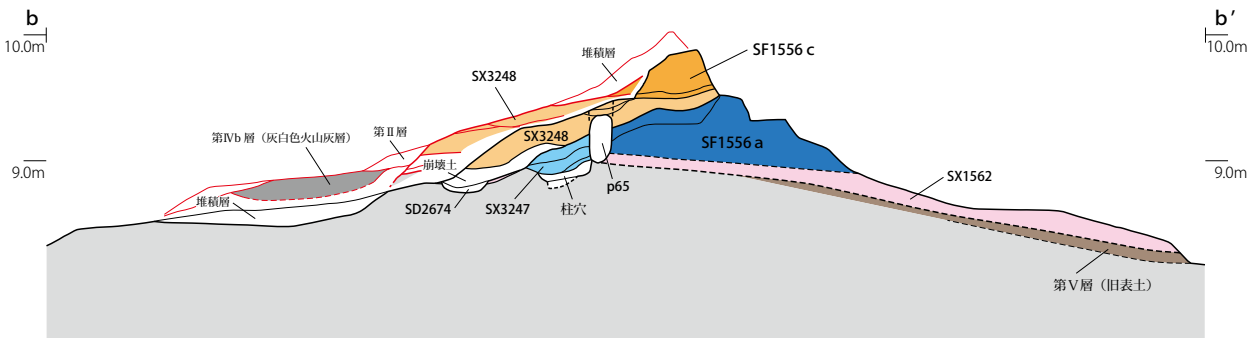
新しい。

盛土の特徴

盛土は、地山土ブロック主体で、旧表土の小ブロックを少量含むにぶい黄褐色砂質シルトで、土層の締まりは弱く、明瞭な版築も認められない。層中からの出土遺物もなかった。この盛土は、南門東側で検出したSX3251盛土と特徴が共通し、その分布範囲はSX3251(SF202築地堀跡)の延長線上に収まり、SF1556築地堀跡の推定位置からやや北にずれている。

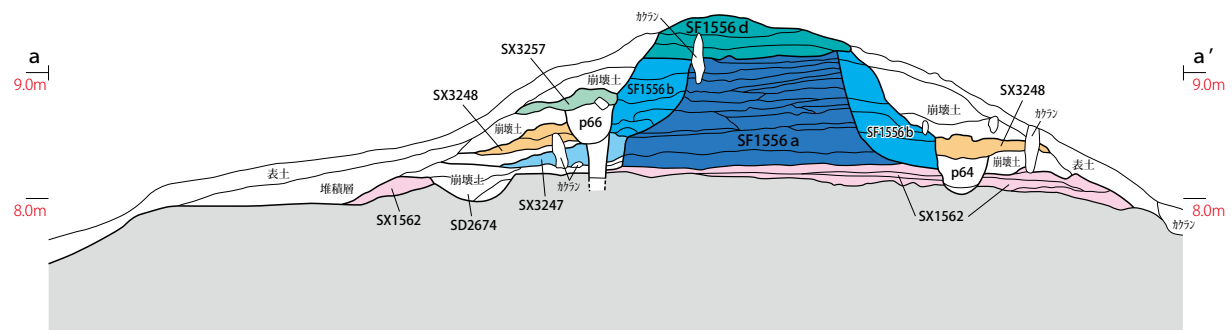


① SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248 整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (W26 東壁)



② SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248 整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (W32 東壁、赤線は W31 ベルトの見通し図)

■ 灰白色火山灰層 (To-a) ■ 第V層 (旧表土) ■ 礫 ■ 瓦



③ SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248・3257 整地層、崩壊土ほか _ 南北断面図 (W39 東壁)

■ SX1562基礎整地	■ SX3248整地層	■ SF1556b 築地堀跡	■ SF1556e 築地堀跡
■ SX3247整地層	■ SX3248の中層(褐色土)	■ SF1556c 築地堀跡	
■ SX3257整地層	■ SF1556a 築地堀跡	■ SF1556d 築地堀跡	

0 2m
(S=1/60)

図版 86 SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248・3257 整地層ほか _ 断面図



北半 (北西から)



南半 (西から)

SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248 整地層ほか_W26 断面 (87 次)



SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248 整地層ほか_W32 断面 (87 次、西から)



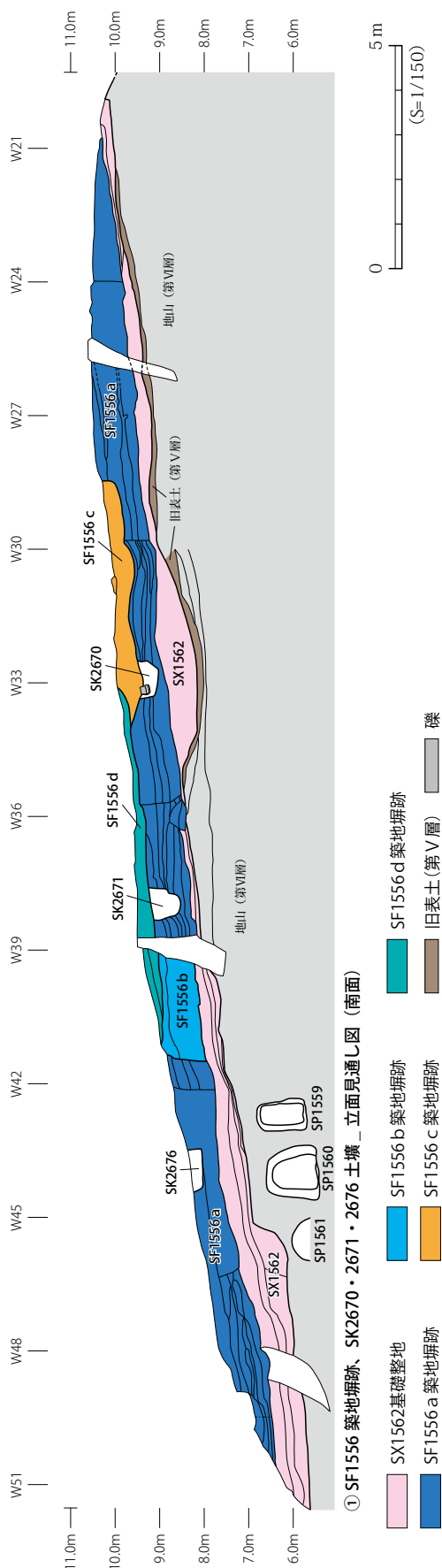
SF1556 拡大

SF1556 築地堀跡、SX1562・3247・3248・3257 整地層ほか_W39 断面 (72 次、南西から)

図版 87 SF1556 築地堀跡、整地層ほか_断面写真 (W26・32・39)

《SF1556 a 築地塀跡・SD2674 溝》

- 構造・規模と重複** 最初に構築された SF1556 a は、W 21 ～ 51 区間の約 30 m にわたって検出され、遺存状態が良好な部分で基底幅は約 2.6 m、残存高は最大で 0.9 m 程ある（図版 83・85・86・88）。築地塀両側には幅 1.0 m 前後の犬走りが認められ、北側犬走りの北辺は SD2674 溝で画されている。SX2669・2670・2671・2676 土壌と重複し、いずれよりも古い。
- 積土** 積土は、地山土ブロックを主体とし、風化岩片を含むにぶい黄褐～にぶい黄橙色砂質シルトと旧表土を主体とした褐色砂質シルトが互層をなす。版築は概ね 10cm 前後を単位として行われており、その層理面は南北横断方向でみるとほぼ水平であるが、東西の縦断方向は基底面と同様に西へ傾斜している。積み手の違いは約 5.8 m 間隔で計 4 箇所（W 24・30・36・42）確認しており、積み手の異なる区間では積土の状況に多少の違いが認められる（図版 88 の写真）。1 区目（W 21 ～ W 24）はにぶい黄褐色土の版築が主体、2 区目（W 24 ～ W 30）は互層、3 区目（W 30 ～ W 36）は互層で黄褐色土に人頭大の砂岩塊が含まれ、4 区目（W 36 ～ W 42）は互層、5 区目（W 42 ～ W 51）は褐色土の版築が主体となっている。
- 柱穴** SF1556 a 南北両側の SX1562 基礎整地上面や地山面では多くの柱穴が確認されている（図版 83・85）。この中には、築地本体両裾の直線上に南北で対となって並び、埋土に焼土粒を含まないもの^(註27)が 13 個（p 51 ～ 63）ある。これらの柱穴は、残存する SF1556 a 本体もしくはその延長線の南北両裾から若干外側に位置しており、中でも p 53・57・59・61・63 は積土の積み手の違いの近辺に配され、いずれも 20 ～ 60cm の範囲内で積み手の違いから西へずれている。p 51 ～ 63 の多くは完掘されており、築地本体との前後関係は判然としないが、すべてで柱が抜き取られていると判断され、柱穴下部には柱痕跡や柱押圧痕が残るものもある。これらの痕跡と柱穴の中心に柱位置を考えて推定すると、南北の柱間間隔は 3.0 m 前後で、桁行方向の柱間は 2.4 ～ 3.3 m となる。p 51 ～ 63 については、SF202 a 築地塀の南北両裾で検出されている柱穴（p 1 ～ 12）と同様に SF1556 a に伴う添柱穴の可能性はあるが、桁行方向の柱間にばらつきがあるために足場穴などの可能性も否定できない^(註28)。
- 柱穴は、一辺 0.3 ～ 0.4 m のやや不整な隅丸方形を呈するものが多く、深さは 0.1 ～ 0.3 m である。柱痕跡は径 0.1 ～ 0.2 m の円形で、僅かに残る埋土は地山土ブロックを多く含む褐～黄褐色シルトである。
- SD2674 溝** SD2674 は SX1562 上面から掘り込まれた SF1556 a 北側の犬走り北辺を画する溝で、本体に並行して 0.8 ～ 0.9 m 北側を東西方向に直線的に伸びるとみられる。W 26・32・39 を南北方向に断ち割った箇所（図版 86）で部分に確認しており、長さは 13.6m 以上で、上幅 0.4 ～ 0.65 m、深さ 0.2 m 前後である。残存する壁・底面は凝灰岩からなり、壁がゆるやかに立ち上がる。堆積土は灰褐～褐色の砂質シルトで主に SF1556 a に由来する自然堆積層である。堆積土から丸瓦Ⅱ類 1 点と平瓦Ⅱ B 類 2 点が出土している。
- 崩壊土** W 39 の断面では、SF1556 a 北裾から SX1562 上部に堆積し、北側の SD2674 内まで流入する厚さ 10cm 程の褐色砂質シルト層を確認している。b 補修の嵩上げ整地である SX3247 に覆われることから、a 築地塀の崩壊土とみられる。W 26・32 の断面ではこの層は認められず、SX1562 上に SX3247 が直接載っている。



SF1556 a 築地塀跡の積み手の違いと b 補修_W42 (72次、南から)

SF1556 a 築地塀跡の積み手の違い_W36 (72次、南東から)

図版 88 SF1556 築地塀跡 _ 立面見通し図・写真

出土遺物 遺物は、SF1556 a 本体の積土と崩壊土層から瓦が出土している。積土中の瓦は、丸瓦Ⅱ類が5点と、平瓦のⅠA類が2点、ⅠB類が1点、ⅡB類が5点あり、平瓦ⅡB類はaタイプ1・2に限られた。また、掘り下げた部分の崩壊土中には平瓦ⅡB類が4点みられた。

《SF1556 b 築地塀跡・SX3247 整地層》

本体の補修 SF1556 bはSF1556 a 積土の南北両側面を奥行0.6 m前後まで削り取った後、新たに本体を積み直して補修したもので、SX3247 嵩上げ整地層を伴う（図版85・88、図版86の断面a-a'）。

b 補修はW 38.8～41.4 区間の約2.5 mの範囲でみられ、両側の補修痕跡下端で基底幅をとると約2.6 mとなり、残存高は0.9 m程である。積土には地山土ブロックと風化岩片を含むにぶい黄橙色砂質シルトが用いられており、版築の単位が10～20cmとやや厚く、その層理面は南北横断方向では外側へわずかに傾斜している。補修の際の削り取り底面は、南側ではSX1562 基礎整地の上面まで及んでいるが、北側ではSX3247 嵩上げ整地上に止まって基礎整地面より0.25 m高い。

SX3247 整地層 SX3247 は、W 39の南北断ち割り箇所（図版86のa-a'）で確認した築地塀北裾に幅約1.0 mの帯状に分布する整地層である。SF1556 b 積土の直下にあることから、b 補修に伴う嵩上げ整地層で、その上面は北側犬走りであったとみられる。層の厚さは10～20cmで、整地に用いられた土は旧表土と地山土のブロックを主体とした灰黄色砂質シルトである。

W 26・32の断面観察（図版86のc-c'・b-b'）でも、築地塀北裾にこの整地層が存在することを確認しているが、その遺存状況は悪く、b 補修の本体積土も検出されていない。この2箇所の断面では、SX1562 基礎整地上にSX3247 が直接載っており、嵩上げの前段階で基礎整地上面までを削り取ったと考えられる。築地塀南裾では、この嵩上げ整地層は確認されておらず、W 39の断面ではb 補修の本体がSX1562 上面に積まれている。北側と同様に、補修の際に基礎整地上面までを削り取った結果とみられる。

柱 穴 W 39の断面では、b 補修の積土南裾に接してSX3248 整地層下から掘り込まれた柱穴（p 64）を確認している。平面形は直径0.4 m前後の不整形で、深さは約0.3 mである。この柱穴は抜取穴とみられ、埋土は地山土ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトである。SX1562 基礎整地上に堆積した崩壊土を覆うc 補修時の嵩上げ整地層直下で抜き取られていることから、b 補修に伴う寄柱の抜取穴の可能性が考えられる。その場合、抜取穴の底面がSX1562 上面から0.15 m程しか下がっていないことを踏まえれば、礎石式の寄柱（寄柱礎石）を抜き取ったものの可能性も残る。これ以外はSF1556 bに伴う柱穴等は不明で、寄柱構造も判然としない。

崩 壊 土 W 26・32・39の断面観察では、b 補修本体の北裾からSX3247 上部に堆積し、更に北へ広がる厚さ10～20cmの褐～黄褐色砂質シルト層を確認している。c 補修の嵩上げ整地であるSX3248に覆われることから、b 築地塀の崩壊土である。また、W 39の断面では、b 補修の本体南裾でSX1562 上部に堆積し、SX3248に覆われる厚さ20cm程の灰黄褐色砂質シルト層が確認できる。同様にb 築地塀の崩壊土とみられる。

出土遺物 断ち割りを行った部分では、掘り下げ段階でb 築地塀の崩壊土を明確に区別することができなかったため、出土遺物は判然としない。

《SF1556 c 築地塀跡・SX3248 整地層》

SF1556 c は SF1556 a の積土上部を削平し、新たに本体を積み直して補修したもので、SX3248 嵩上げ整地層^(註29)を伴う(図版 85・86・88)。c 補修の積土は W 28.3 ~ 34 区間の約 5.7 m の範囲で確認されており、その東端部は後続の d 補修の際に削り取られている。残存高は最大で 0.6 m あり、基底幅は判然としないが、遺存する積土の最大幅は 1.2 m である。SK2669・2670 土壌と重複し、いずれよりも新しいが、SK2669 は SX3248 を掘り込んでいることが判明しており、嵩上げ整地後で c 本体の版築以前の土壌である。

本体の補修

積土には地山土ブロックを主体としたにぶい黄褐～にぶい黄橙色の砂質シルトが用いられており、焼土・炭化物粒と風化岩片が僅かに含まれる。版築の痕跡は不明瞭だが、5 ~ 10cm の単位を確認しており、その層理面は南北横断方向、東西縦断方向ともに概ね水平である。積み手の違いは判然としない。

SX3248 は築地塀南北両裾に幅 1.0 ~ 1.5 m の帯状に分布する整地層で、W 25.6 ~ 40 区間で確認している。W 32 を南北方向に断ち割った断面の観察(図版 86 の b - b')では、この整地層が c 積土の下部にまで及んでいることから、c 補修に伴う嵩上げ整地層で、南北両側の整地上面は犬走りであったとみられる。

SX3248 整地層

層の厚さは 10 ~ 35cm で、整地には主に地山土(シルトもしくは粘土)ブロックを多く含むにぶい黄褐～黄褐色の砂質シルトが用いられており、層中に焼土・炭化物粒が含まれる部分もある。また、W 26 の断面観察(図版 86 の c - c')では、築地塀南側の整地がにぶい黄褐色の上層、旧表土ブロックからなる褐色の中層、黄褐色の下層に分けられた。これらの特徴は南門東側の SX3245 嵩上げ整地層にもみられるものである。

なお、第 48 次調査で D 整地層とした W 10・S 375 付近の SX3254 盛土上に東西約 4.0 m、南北約 1.0 m の範囲で帯状に分布する整地層は、厚さが 15cm 前後で、明黄褐色砂質シルト、炭化物粒混じりの焼土、明褐色砂質シルトからなり、その特徴と分布範囲からみて SX3248 の一部と考えられる。しかし、第 87 次の再調査時には残存していなかった。

D 整地層の解釈

W 39 の断ち割り断面(図版 86 の a - a')では、築地塀北裾に接して SX3257 整地層下から掘り込まれた柱穴(p 66)を確認している。平面形は直径 0.4 m 前後の不整形円で、深さは約 0.3 m であるが、その下部には直径 0.15 m で SX1562 基礎整地層まで達する深さ 0.4 m の柱痕跡が認められる。この柱穴は抜取穴もしくは切取穴とみられ、埋土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。SX3248 上部に堆積した崩壊土を覆う d 補修時の嵩上げ整地層直下で抜き取られていることから、c 補修に伴う掘立式寄柱の抜取穴または切取穴の可能性が考えられる。しかし、検出したのは 1 箇所のみで、対となる築地塀南裾の寄柱も確認できていないため、やはり寄柱構造は判然としない。

柱 穴

また、W 32 の断面(図版 86 の b - b')で SX3248 上面から掘り込まれた柱穴(p 65)を確認している。c 補修本体の北裾に位置し、一辺は約 0.3 m 前後で、深さは 0.5 m 程である。柱は抜き取られているとみられ、埋土は地山小ブロックを含む褐色砂質シルトである。SX3248 上面で抜き取られていることから、c 補修時の添柱や足場の柱を抜き取ったものの可能性がある。これら以外では、埋土に焼土粒を含む柱穴を確認しているが、その配置に規則性や SF1556 c と

の関連性を見出せなかった。

崩壊土 W 39 の断面では、築地塀北裾の SX3248 上部に堆積し、d 補修の嵩上げ整地である SX3257 に覆われる厚さ 10～20cm の灰黄褐色砂質シルト層を確認している。SF1556 c の崩壊土とみられる。

また、W 32 断面の築地塀南側、W 39 断面の築地塀北側でも SX3248 に載る c 補修以降の崩壊土層（にぶい黄褐～褐色砂質シルト層）を確認しているが、後続する築地本体の補修や嵩上げ整地との関係が不明のために築地塀との関係を限定できない。

出土遺物 遺物は、SF1556 c 本体の積土と SX3248 整地層中から瓦が出土している。積土中の瓦は、丸瓦Ⅱ類と平瓦ⅡB類が各 2 点あり、平瓦ⅡB類の 1 点は a タイプ 1 であった。また、嵩上げ整地層中には平瓦Ⅱ類の焼瓦が 1 点みられた。

《SF1556 d 築地塀跡・SX3257 整地層》

本体の補修 SF1556 d は SF1556 a～c の積土上部を削平し、新たに本体を積み直して補修したもので、SX3257 嵩上げ整地層^(註30)を伴う（図版 85・88、図版 86 の断面 a－a'）。d 補修の積土は W 33～41 区間の約 8.0 m の範囲で確認されており、残存高は最大で 0.4 m ある。基底幅は判然としないが、遺存する積土の最大幅は 1.7 m である。d 補修に伴う寄柱は不明である。SK2671 土壌と重複し、これより新しい。

積土には地山土ブロックを多量に含む灰黄褐～黄褐色の砂質シルトが用いられており、風化岩片も僅かに含まれる。版築の痕跡は不明瞭だが、10cm 前後の単位を確認しており、その層理面は南北横断方向でみるとほぼ水平であるが、東西の縦断方向は基底面と同様に西へ傾斜している。積み手の違いは判然としない。

SX3257 整地層 SX3257 は築地塀北裾に幅 0.9 m 前後の帯状に分布したとみられる整地層で、W 39 を南北方向に断ち割った断面で確認している。断面観察（図版 86 の a－a'）では、この整地層は d 補修の積み直し底面より 0.2 m 程下に位置しており、c 補修の崩壊土とみられる層を覆っていることから、d 補修に伴う嵩上げ整地層の可能性が高く、北側の整地上面は犬走りであったとみられる。層の厚さは 10～15cm で、整地にはやや粘土質の地山土ブロックを多く含む灰黄褐色シルトが用いられている。

崩壊土 W 39 の断面では築地塀北裾の SX3257 上部に堆積する d 補修以降の崩壊土層（褐色砂質シルト層）を確認しているが、後続する築地本体の補修や嵩上げ整地との関係が不明のために築地塀との関係を限定できない。

《SF1556 e 築地塀跡》

本体の補修 SF1556 e は SF1556 a・c・d の積土の北側面を奥行 0.4～0.7 m まで削り取った後、新たに本体を積み直して補修したもので、本体は積土と瓦積の互層からなる（図版 83・85、図版 86 の断面 c－c'）。e 補修は W 22.8～29.2・33～38.4・40.8～42.9 の 3 区間で確認されており、3 区間目では b 補修の積土の西端も削り取った上で行われている。残存高は最大で 0.5 m 前後で、この補修の底面は当初の基礎整地上面より 0.3～0.4 m 高い。e 補修に伴う寄柱や嵩上

げ整地は不明である。SX2669 土壌と重複し、これより新しい。

e 補修を南北方向に断ち割ったW 26 の断面（図版 86 の c - c '・図版 89 の写真）をみると、下層ににぶい黄褐色砂質シルトを用いて厚さ 10cm 前後の積土をし、その上に瓦とにぶい褐色土を互層に積んでいる。瓦積は 5 段まで確認でき、使用された瓦には軒平瓦、丸・平瓦が認められるが、大半は平瓦である。いずれの瓦も破片で、意図的に割って扁平にされていた可能性があり、各段ともあまり間隔を空けず敷き詰められていた。特に築地塀の側面にあたる最も北側の瓦列は外側の辺を揃えるように整然と並べられていた。

W 26 の断面では、e 補修の積土北裾を覆い、そこから北へ伸びる灰黄～にぶい黄褐色の砂質シルト層が認められる。この層は築地塀北側に広く残存しており、厚さは 10～40cm で、数枚に細分される。e 補修以降の崩壊土を中心とした堆積層とみられ、この層の続きは W 30 付近で上部を灰白色火山灰層（第Ⅳ b 層）に覆われている。

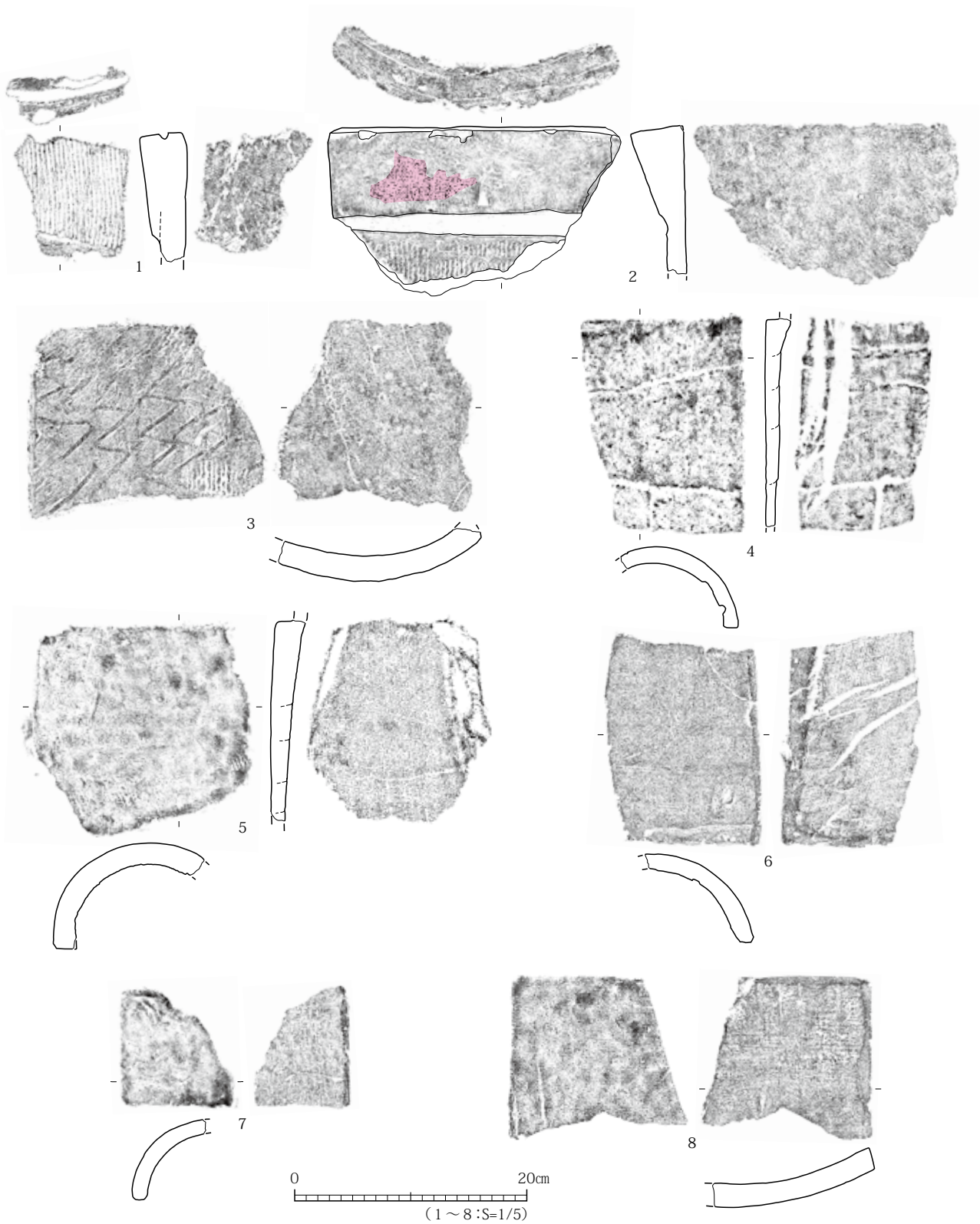
遺物は、e 補修の瓦積に使用された瓦がある。W26 で断ち割りをを行った箇所の瓦を取り上げており、軒平瓦、丸・平瓦の破片が認められる。軒平瓦は、単弧文 640（図版 90 - 1）と無文 641（2）が各 1 点で、641 の顎部には赤色顔料が付着していた。また、凸面に稲妻状叩き目が

崩壊土

出土遺物

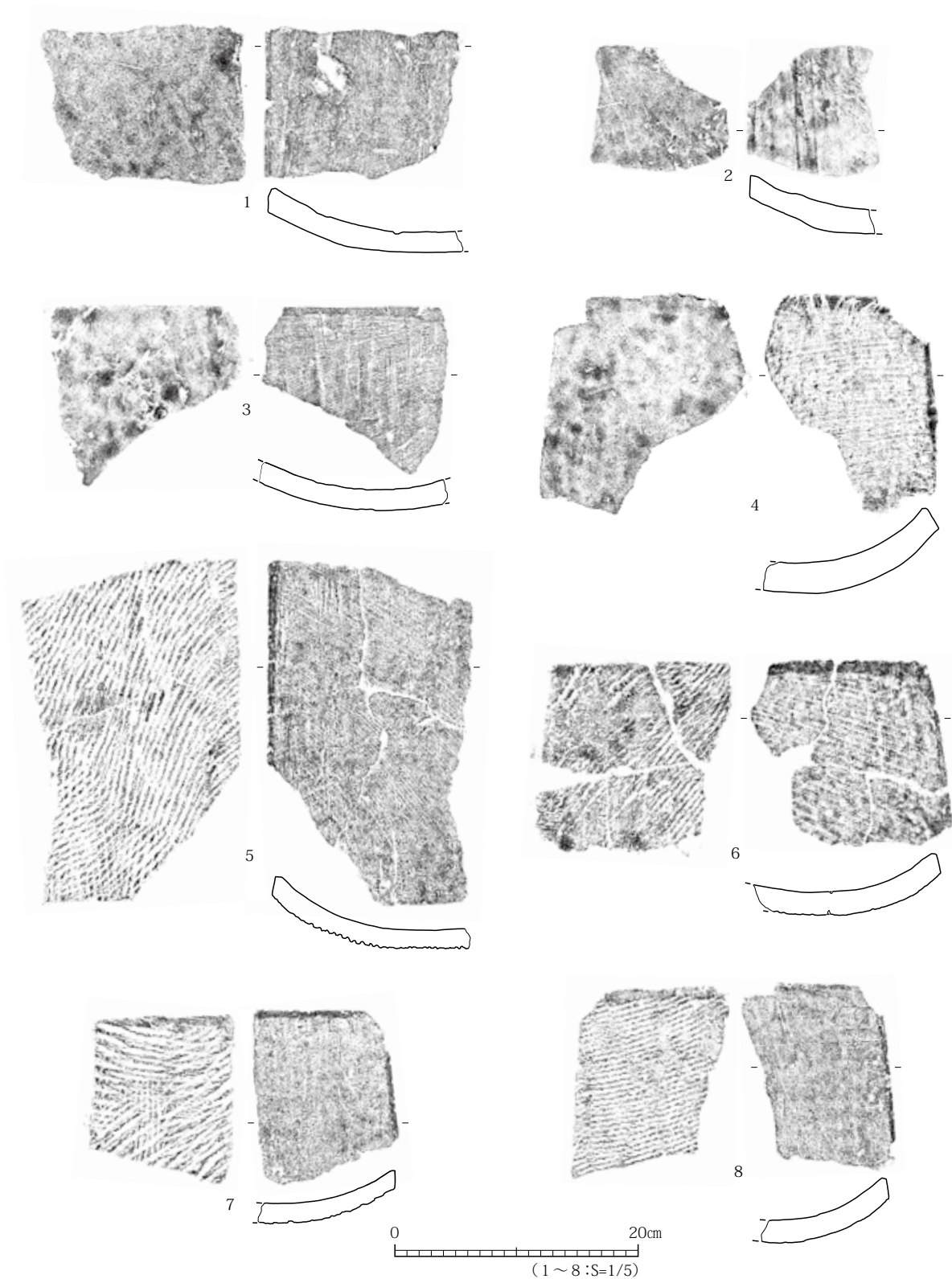


図版 89 SF1556e 築地塀跡の瓦積_写真 (87 次、W26~28)



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SF1556e・本体瓦積	72	軒平瓦640	瓦当部1/3	—	—	(4.0)	単弧文 a1タイプ		R2	B13236
2	SF1556e・本体瓦積	72	軒平瓦641	瓦当部4/5	—	—	(4.5)	無文 顔面に赤色顔料付着 焼瓦 平瓦部厚さ:(2.0cm)	131-5	R4	B13236
3	SF1556e・本体瓦積	72	軒平瓦621?	破片	—	—	(2.5)	偏行唐草文621の平瓦部(凸面に稲妻状の叩き目)?	133-5	R3	B13236
4	SF1556e・本体瓦積2段目	87	丸瓦ⅡB	破片	—	—	(2.0)	丸瓦部凸面に刻印(文字不明) 焼瓦 意図的に分割(19.4×11.9)?		R110	B15360
5	SF1556e・本体瓦積5段目	87	丸瓦ⅡB	破片	—	—	(2.5)	意図的に分割(12.8×15.2)?		R101	B15360
6	SF1556e・本体瓦積1段目	87	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	(2.0)	意図的に分割(19.0×12.1)?		R115	B15360
7	SF1556e・本体瓦積3段目	87	丸瓦ⅡB	破片	—	—	(1.5)	意図的に分割(11.6×9.0)?		R107	B15360
8	SF1556e・本体瓦積2段目	87	平瓦ⅠA	破片	—	—	(2.0)	意図的に分割(15.2×14.5)?		R111	B15360

図版 90 SF1556e 築地堀跡・本体瓦積 _ 出土遺物 (1)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF1556e・本体瓦積2段目	87	平瓦IA	破片	—	—	—	(2.0)	凹面に焼けハジケ? 意図的に分割(13.5×16.8cm)?		R112	B15360
2	SF1556e・本体瓦積1段目	87	平瓦IA	破片	—	—	—	(2.5)	意図的に分割(11.1×11.6cm)?		R116	B15360
3	SF1556e・本体瓦積2段目	87	平瓦IA	破片	—	—	—	(2.0)	aタイプ 意図的に分割(15.2×15.7cm)?		R113	B15360
4	SF1556e・本体瓦積5段目	87	平瓦IIA	破片	—	—	—	(2.8)	意図的に分割(18.5×16.0cm)?		R102	B15360
5	SF1556e・本体瓦積3段目	87	平瓦IIB	破片	—	—	—	(2.0)	aタイプ1 意図的に分割(24.4×18.0cm)?		R108	B15360
6	SF1556e・本体瓦積5段目	87	平瓦IIB	破片	—	—	—	(2.0)	aタイプ1 意図的に分割(15.0×16.2cm)?		R103	B15360
7	SF1556e・本体瓦積4段目	87	平瓦IIB	破片	—	—	—	(1.8)	aタイプ1 意図的に分割(14.6×12.3cm)?		R105	B15360
8	SF1556e・本体瓦積4段目	87	平瓦IIB	破片	—	—	—	(2.0)	aタイプ1 意図的に分割(15.8×13.7cm)?		R104	B15360

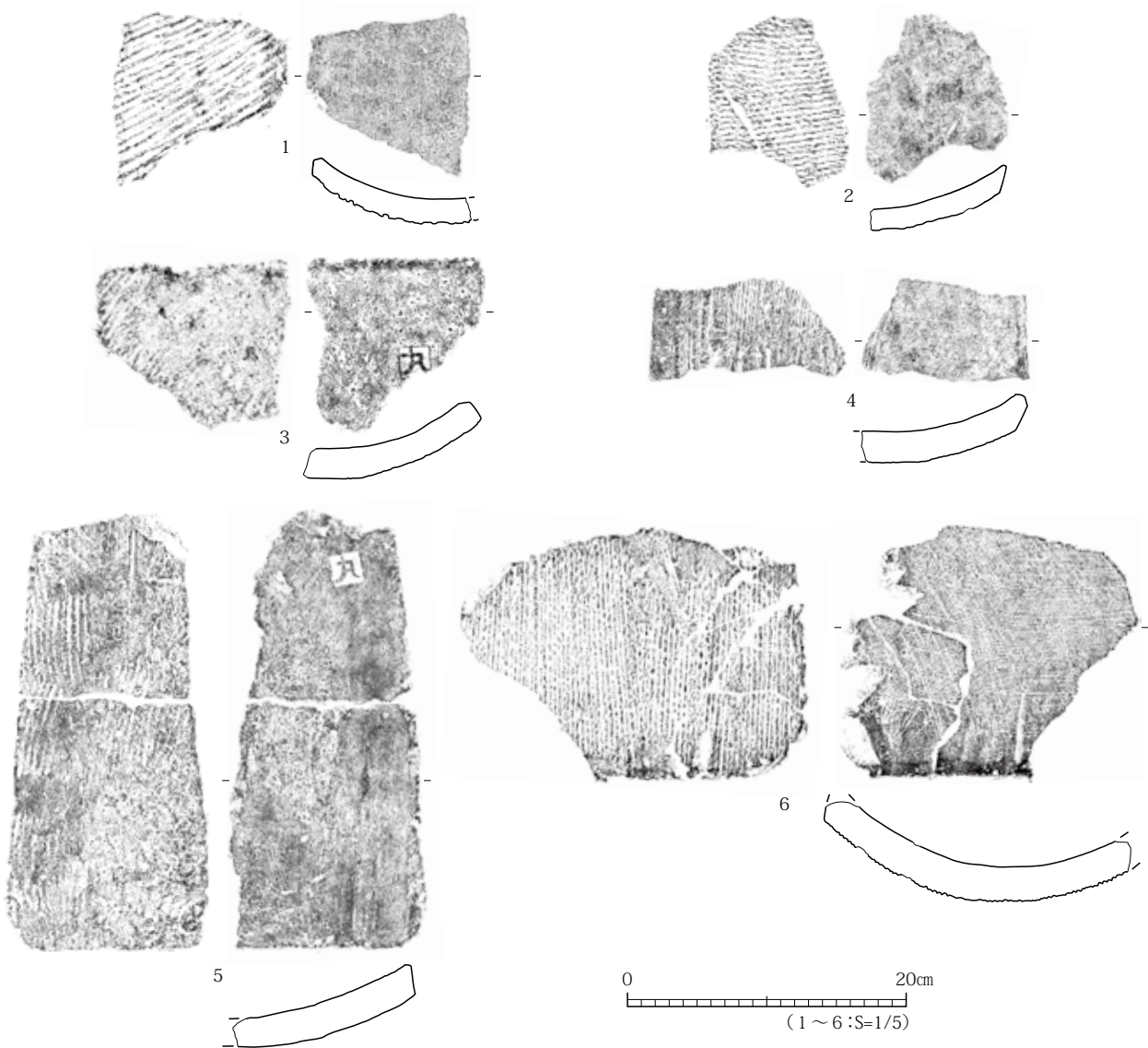
図版 91 SF1556e 築地堀跡・本体瓦積 _ 出土遺物 (2)

残る平瓦ⅡB類(3)が1点出土しており、偏行唐草文621に用いられたものとみられる。

丸瓦・平瓦 丸瓦は、Ⅱ類(6)が12点、ⅡA類が1点、ⅡB類(4・5・7)が10点である。平瓦は、ⅠA類(図版90-8、図版91-1~3)が9点、ⅠCa類が1点、ⅡA類(図版91-4)が2点、ⅡB類(図版91-5~8、図版92-1~6)が49点、ⅡC類が2点である。平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2が含まれており、刻印文字の「丸」Aが押印されたものも2点(図版92-3・5)認められた。

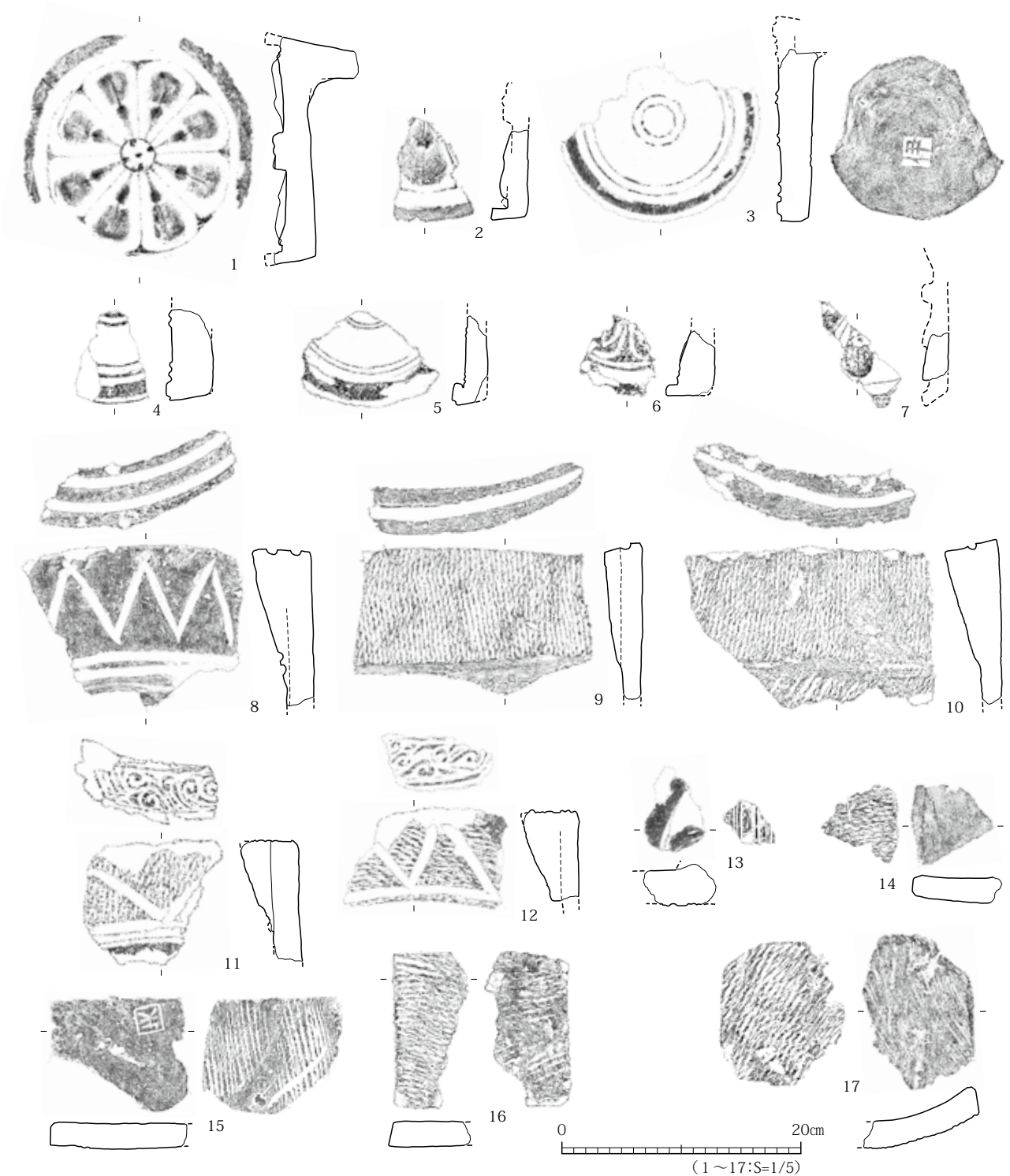
《崩壊土・堆積層の出土遺物》

出土状況 SF1556 築地塀跡の南北両側に認められる崩壊土や堆積層から出土した遺物で、時期を限定できないものについてまとめて説明する。この中にはe補修以降とみられる遺物も含まれ、多量の瓦と少量の土器類が出土している。



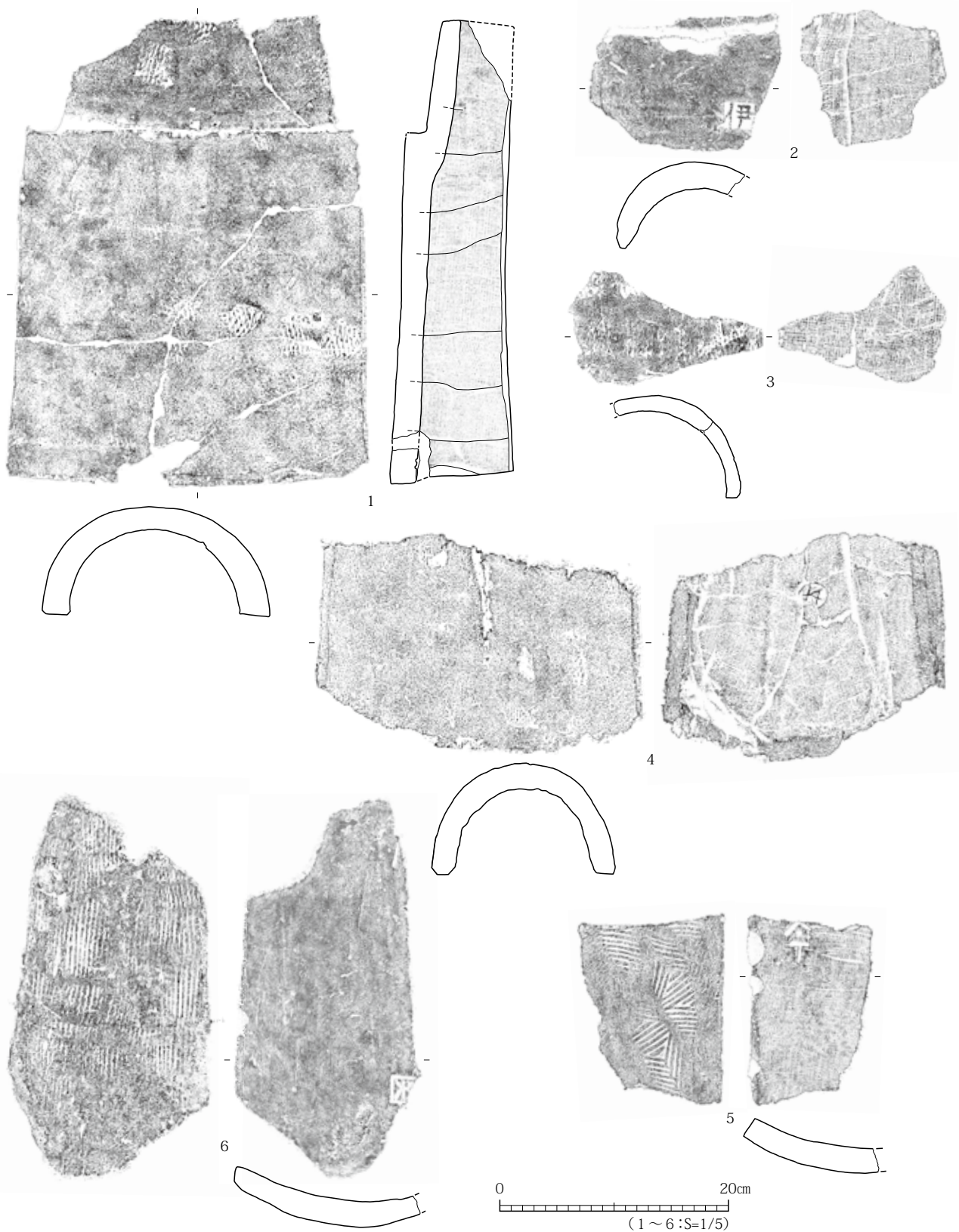
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SF1556e・本体瓦積3段目	87	平瓦ⅡB	破片	—	—	(2.0)	aタイプ1 意図的に分割(13.4×12.3cm)?		R114	B15360
2	SF1556e・本体瓦積1段目	87	平瓦ⅡB	破片	—	—	(1.8)	aタイプ1 意図的に分割(13.1×11.0cm)?		R117	B15360
3	SF1556e・本体瓦積3段目	87	平瓦ⅡB	破片	—	—	(2.5)	aタイプ1 凹面に刻印文字「丸」A 焼瓦 意図的に分割(13.3×13.9cm)?		R109	B15360
4	SF1556e・本体瓦積4段目	87	平瓦ⅡB	破片	—	—	(2.5)	aタイプ2 軒平瓦均整唐草文660と組むものか? 意図的に分割(8.0×13.3cm)?		R106	B15360
5	SF1556e・本体瓦積	72	平瓦ⅡB	1/2	—	—	2.5	aタイプ2 凹面に刻印文字「丸」A 焼瓦 意図的に分割?		R1	B13236
6	SF1556e・本体瓦積1段目	87	平瓦ⅡC	破片	—	—	(2.8)	意図的に分割(18.5×22.7cm)?		R118	B15360

図版92 SF1556e 築地塀跡・本体瓦積_出土遺物(3)



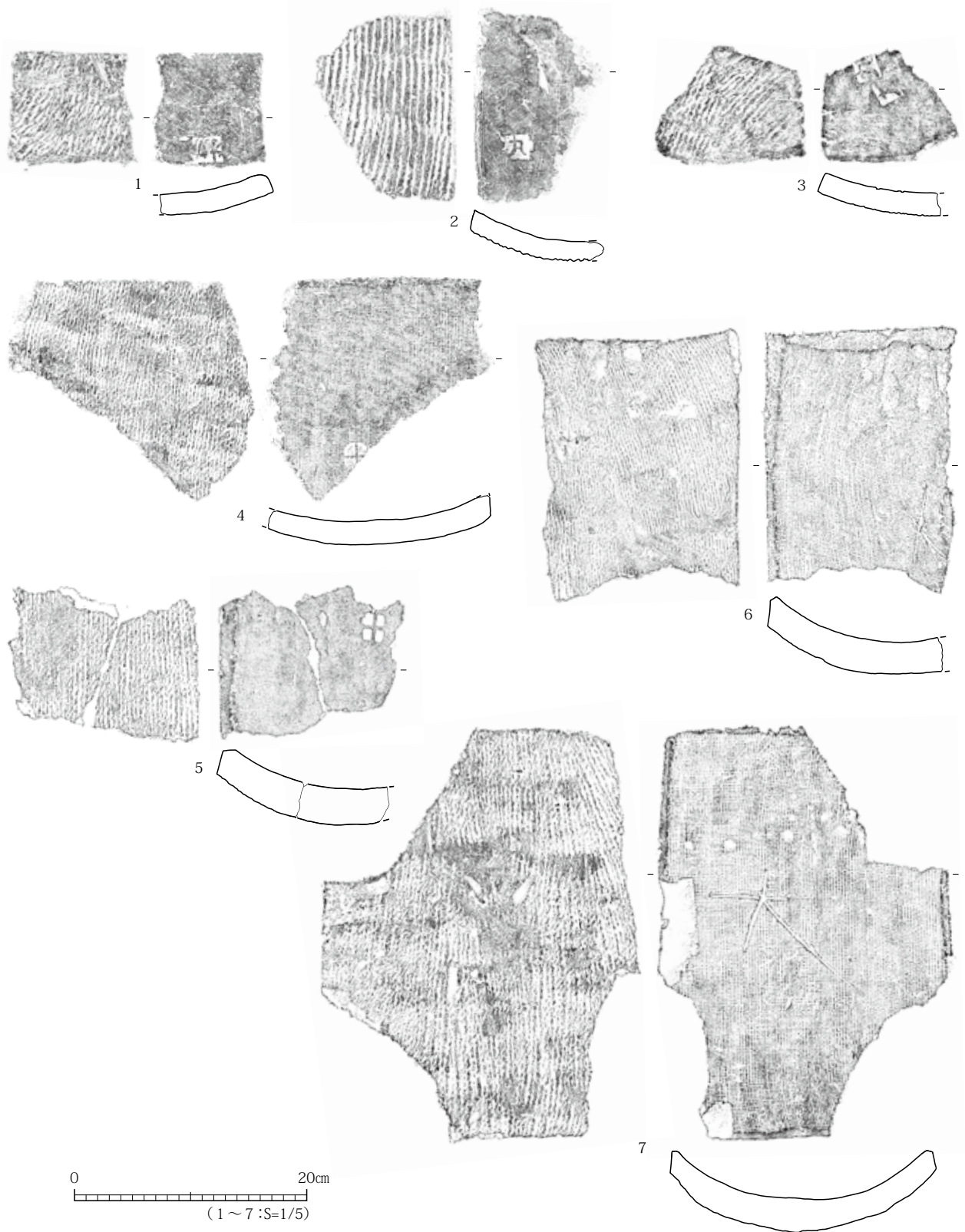
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF1556・南側崩壊土	48	軒丸瓦222	瓦当ほぼ完形	-	-	-	(3.1)	重弁蓮花文 瓦当面径：19.4cm		R 3	B 6748
2	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦221~223?	瓦当部破片	-	-	-	(3.0)	重弁蓮花文		R 7	B 13237
3	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦243	瓦当部2/3	-	-	-	3.3	重圈文 瓦当面径：16.0cm 裏面に刻印文字「伊」		R 3	B 13237
4	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦243	瓦当部破片	-	-	-	(4.0)	重圈文		R 4	B 13237
5	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦240~242	瓦当部1/4	-	-	-	(2.0)	重圈文 瓦当面径：(14.0cm)		R 1	B 13239
6	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦311or313	瓦当部破片	-	-	-	(4.0)	細弁蓮花文		R 3	B 13239
7	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒丸瓦320	瓦当部1/3	-	-	-	(2.0)	重弁蓮花文		R 8	B 13237
8	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒平瓦511	瓦当部2/5	-	-	-	5.0	二重弧文 aタイプ 平瓦部厚さ：(2.5cm)		R 24	B 13238
9	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒平瓦640	瓦当部3/5	-	-	-	4.0	単弧文 a1タイプ		R 28	B 13238
10	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒平瓦640	瓦当部3/5	-	-	-	4.5	単弧文 a1タイプ 平瓦部厚さ：(1.8cm)		R 38	B 13238
11	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒平瓦721A	瓦頭部破片	-	-	-	(5.0)	均整唐草文 aタイプ		R 10	B 13237
12	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	軒平瓦721A	瓦当部1/3	-	-	-	(4.5)	均整唐草文 aタイプ		R 6	B 13239
13	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	鬼板953	破片	-	-	-	(3.0)	重弁蓮花文? 裏面：篋の子状の圧痕	132-6	R 2	B 15511
14	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	道具瓦	破片	-	-	-	(2.3)	平瓦ⅡB類使用 端部をヘラケズリ加工		追R 15	B 13379
15	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	炭斗瓦Ⅱ	破片	-	-	-	(2.3)	左面：布目→ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 刻印文字「矢」A		R 7	B 13239
16	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	炭斗瓦Ⅰ	破片	-	-	-	(2.3)	左面：縄叩き目 右面：縄叩き目(つぶれ)		R 25	B 13238
17	SF1556・北側堆積土	87	隅切瓦	破片	-	-	-	(2.5)	平瓦ⅡBa1類の狭端部隅をわずかに切り取る		R 146	B 15362

図版 93 SF1556 築地塀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (1)



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	丸瓦 II B	ほぼ完形	40.0	(13.0)	22.0	2.5	玉縁長：9.7cm		R1	B13237
2	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	丸瓦 II B	破片	-	-	-	(2.5)	丸瓦部凸面に刻印文字「伊」		R18	B13237
3	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	丸瓦 II	破片	-	-	-	(2.0)	凹面にへら書き「大」?		R21	B13237
4	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	丸瓦 II	破片	-	-	-	(2.5)	凹面に刻印文字「本」		R15	B13237
5	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦 I Ca	破片	-	-	-	(2.5)	凹面に陰刻文字「今」		R41	B13238
6	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦 II B	2/5	-	-	-	(2.5)	a タイプ2 凹面に刻印文字「矢」A		R4	B13239

図版 94 SF1556 築地塀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (2)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II B	破片	-	-	-	(2.0)	凹面に刻印文字「物」A 焼瓦?		R 10	B13239
2	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II B	破片	-	-	-	(2.0)	aタイプ2 凹面に刻印文字「丸」A		R 9	B13239
3	SF1556・北側堆積土	87	平瓦II B	破片	-	-	-	(2.0)	aタイプ1 凹面に刻印文字「丸」A×2		R 228	B15363
4	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II C	破片	-	-	-	(2.5)	凹面に刻印記号 (『本文編』PL.104-9)		R 5	B13239
5	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II C	破片	-	-	-	(3.3)	凹面に刻印記号 (『本文編』PL.105-2)		R 27	B13238
6	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II C	1/4	-	-	-	(3.0)	凹面にヘラ書き「×」		R 13	B13237
7	SF1556 e以降・北側崩壊土	72	平瓦II C	3/4	35.5	-	-	3.0	凹面にヘラ書き「大」		R 26	B13238

図版 95 SF1556 築地堀跡崩壊土・堆積層 _ 出土遺物 (3)

瓦 類 瓦類には、軒丸・平瓦、道具瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は、重弁蓮花文 222 (図版 93 - 1)・320 (7) と型番が 221 ~ 223 とみられる重弁蓮花文 (2)、重圏文 242・243 (3・4) と 240 ~ 242 とみられる重圏文、311 もしくは 313 の細弁蓮花文 (6) などがみられ、重圏文 243 (3) の裏面には刻印文字「伊」が押印されている。軒平瓦は、二重弧文 511 (8)、偏行唐草文 621、単弧文 640 (9・10)、均整唐草文 721 A (11・12) などがみられる。軒丸瓦の 5 割を重圏文、軒平瓦の 7 割以上を単弧文が占め、軒丸・平瓦で明確な第 I 期の瓦は二重弧文軒平瓦 511 の 1 点のみであった。

道具瓦には鬼板 (13)、熨斗瓦 (14・15)、隅切瓦 (16) などがある。鬼板は重弁蓮花文の弁端付近の小破片で、裏面には篋の子状の圧痕が残る。砂粒を多く含む胎土や焼成状況および色調が表土出土の鬼板 953 とみられる周縁部資料と酷似していることから、これと同種あるいは同一個体の可能性が考えられる。出土した熨斗瓦は 2 点で、1 点 (14) の片面には刻印文字の「矢」A が押印されている。また、隅切瓦は 1 点で、平瓦 II B 類の狭端隅を切ったものである。図版 93 - 17 は平瓦 II B a₁ 類の側端をヘラケズリ調整して弧状に仕上げたもので道具瓦の可能性はある。

丸瓦は I A・II A・II B 類があり、完形に近い II B 類 (図版 94 - 1) や、凸面に刻印文字「伊」が押印されているもの (2)、凹面に「本」? の押印が認められるもの (4)、凹面にヘラ書き「大」? のみられるもの (3) などが含まれる。平瓦は I A・I B・I C a・I C b・I D・II A・II B・II C 類があり、I 類および II A 類が約 5%、II B 類が約 45%、II C 類が約 16% を占める。II 類以上の判別ができないものも約 13% 含まれる。この中には、I C 類 a タイプで凹面に凸型台の陰刻文字「今」C がみられるもの (5)、II B 類で凹面に刻印文字「矢」A (6)・「物」A (図版 95 - 1)・「丸」A (2・3) が押印されているものが認められる。また、II C 類には凹面に刻印記号 (4・5) が押印されているものや「×」(6)・「大」(7) などがヘラ書きされているものがある。

土 器 類 土器類には土師器、須恵器、須恵系土器があるが、いずれも小破片で図示できるものはない。土師器には坏と甕があり、ともにロクロ整形と非ロクロ整形のものがみられる。須恵器には坏・高台坏・甕・瓶類があり、坏底部の切り離し技法と調整をみると、ヘラ切り無調整、切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリ調整と回転ヘラケズリ調整のものがある。須恵系土器には坏と高台坏が各 1 点みられた。

【SD1545 溝】 (図版 83)

概 要 SD1545 は南門跡の北西側を東西方向に伸びる溝で、W 12 ~ 18 区間の長さ 5.0 m 分を検出している。確認面は地山面で、W 18 以西は攪乱によって失われている。規模は上幅 0.9 ~ 1.9 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m で、断面は皿状を呈する。堆積土は第 II 層に極めて類似する暗褐色シルトで、自然堆積土である。

出 土 遺 物 遺物は、堆積土から刻印文字の「丸」A が押印された丸瓦 II B 類が 1 点出土している。

【SD2667 溝】 (図版 83)

SD2667 は SF1556 築地堀跡の約 6.4 m 北を東西方向に伸びる溝で、W 21 ~ 27 区間の長さ 5.0 m 分を検出している。確認面は地山面で、東側は攪乱によって壊され、西側は削平されている。SD2668 溝と重複するが、その前後関係は不明である。また、溝の上部は第 IV b 層（灰白色火山灰層）下にあたる築地堀崩壊土の最上層に覆われていた。規模は上幅 1.0 m 前後で、北斜面を削り出しており、断面は浅い皿状を呈する。深さは南壁で 0.2 m 程である。堆積土は褐色シルトで、自然堆積土である。

概要

遺物は、堆積土中から摩滅して角のとれた丸・平瓦の破片資料が出土している。丸瓦はすべて II 類で、II B 類と判別できるものもある。平瓦は I A・II B・II C 類があり、II B 類には a タイプ 1 ~ 3 と b タイプのすべてが含まれる。

出土遺物

【SD2668 溝】 (図版 83)

SD2668 は SF1556 築地堀跡の 4 m 程北を北西-南東方向に伸びる溝で、W 21 ~ 31 区間の長さ 11.5 m 分を検出している。確認面は地山面で、南東側は攪乱によって壊され、北西側は削平されている。SD2667 溝と重複するが、その前後関係は不明である。また、溝の上部は第 III b 層下にあたる築地堀崩壊土の最上層に覆われていた。規模は上幅 0.8 m 前後、深さ 0.1 m 程で、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は灰黄褐色砂質シルトで、自然堆積土である。

概要

堆積土中から摩滅して角のとれた丸・平瓦の破片資料が出土している。丸瓦はすべて II 類である。平瓦は I A・II B・II C 類があり、II B 類には a タイプ 1 ~ 3 が含まれる。

出土遺物

【SD2673 溝】 (図版 85)

SD2673 は SF1556 築地堀跡に概ね並行してその約 6.0 m 北を東西方向に伸びる溝で、W 35 ~ 45 区間の長さ 10.0 m 分を検出している。確認面は地山面で、西側は削平によって失われており、東側も削平を受けているとみられる。溝の上部は第 III b 層下にあたる築地堀崩壊土の最上層に覆われていた。規模は上幅 1.0 ~ 1.2 m、深さ 0.1 m 程で、断面は浅い皿状を呈し、南壁に軽い段が付く。堆積土は黒褐色シルトで、自然堆積土である。

概要

遺物は、堆積土中から摩滅して角のとれた丸・平瓦の破片資料が少量出土している。丸瓦は II A・II B 類がある。平瓦は II B 類と II C 類である。

出土遺物

【SK2669 土壇】 (図版 85)

SK2669 は W 33・S 373 付近で SF1556 a 築地堀本体の北寄りに位置する土壇である。SF202 a の積土と c 補修に伴う SX3248 嵩上げ整地層を掘り込み、c 補修の積土に覆われている。平面形は径 0.7 m 前後の不整形円形を呈し、深さは 0.5 m 程である。底面は概ね平坦で、壁は外側へやや開き気味に立ち上がる。堆積土は風化岩片を多く含む黄褐色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。須恵器甕の破片が 1 点出土している。

概要

【SK2670 土壙】 (図版 85・88)

概要 SK2670 は W 33・S 374 付近で SF1556 a 築地塀本体の南寄りに位置する土壙である。SF202 a の積土を掘り込み、c 補修の積土に覆われている (図版 88 の立面見通し図)。平面形は南半が削平されているため判然としないが、径 0.9 m 前後の不整形円形と推定され、深さは約 0.15 m である。底面は概ね平坦で、壁は外側へ開き気味に立ち上がる。堆積土は風化岩片を多く含む黄褐色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK2671 土壙】 (図版 85・88)

概要 SK2671 は W 38・S 373 付近で SF1556 a 築地塀本体の南寄りに位置する土壙である。SF202 a の積土を掘り込み、d 補修の積土に覆われている。平面形は東西約 1.1 m、南北約 0.8 m の不整形楕円形で、深さは約 0.75 m である。底面は概ね平坦で、壁は外側へ開き気味に立ち上がる。堆積土は風化岩片を多く含む黄褐色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK2676 土壙】 (図版 85・88)

概要 SK2676 は W 44・S 372 付近で SF1556 a 築地塀本体の北寄りに位置する土壙である。SF202 a の積土を掘り込んでいる。平面形は東西約 1.0 m、南北約 0.8 m の長方形で、深さは 0.2 m 以上である。堆積土は風化岩片を多く含む黄褐色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK3256 土壙】 (図版 83)

概要 SK3256 は W 20.5・S 375.5 付近の地山面で確認された土壙で、上部が著しく削平を受けている。平面形は直径約 1.1 m の円形を呈し、深さは約 0.8 m である。底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がるが、途中でやや外側に膨らみをもつ。堆積土は 2 層に大別され、上層は炭化物粒を含むにぶい黄褐色シルト、下層は地山粒を含む黄褐色シルトである。いずれの層も軟質で、下層の最下部にはやや粘質の土が堆積していた。

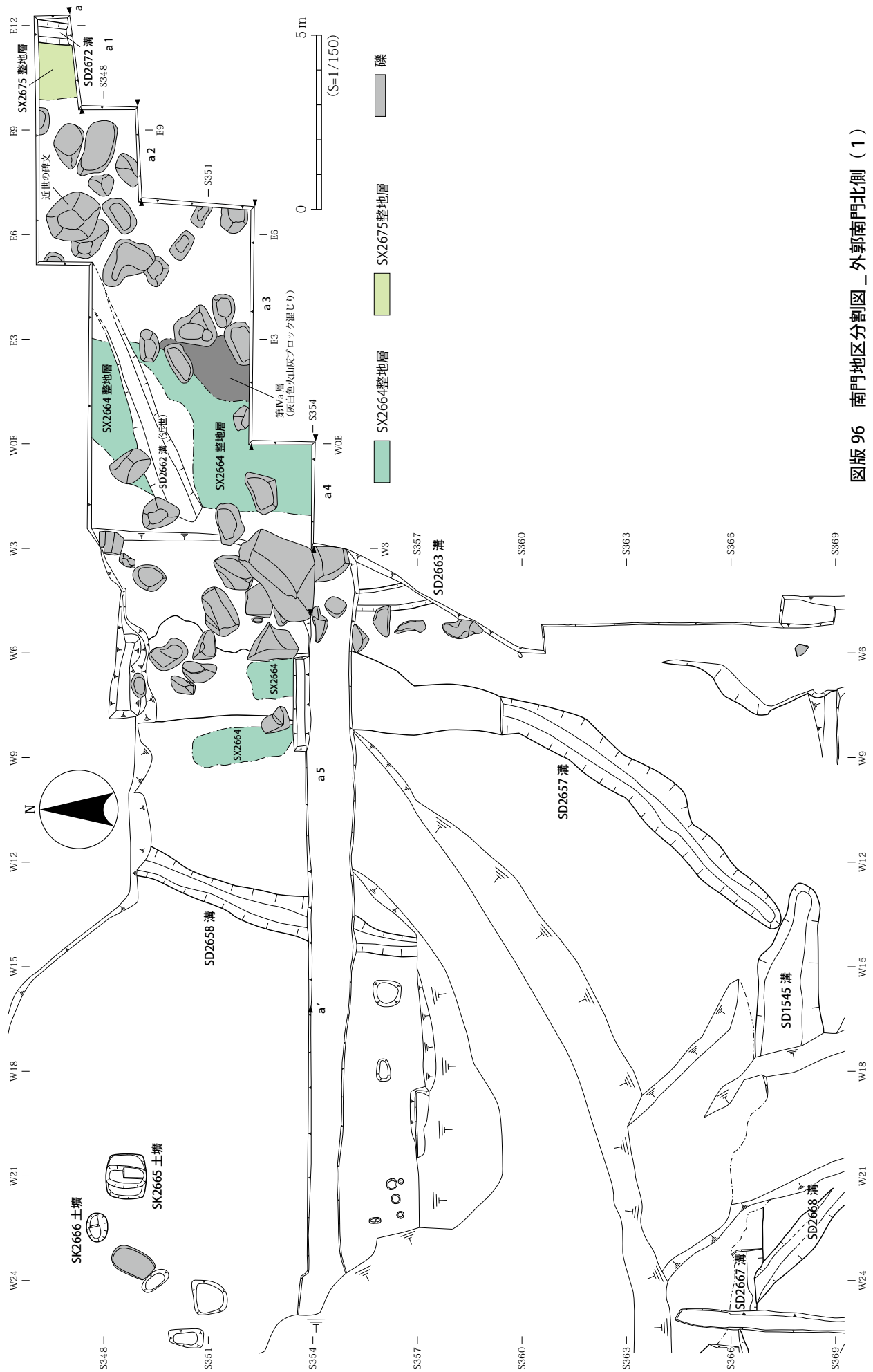
出土遺物 遺物は、上層から瓦当文様が判別できない軒丸瓦 1 点と、上・下層から丸・平瓦の破片が出土している。丸瓦はすべてⅡ類で、ⅡB類と判別できるものもある。平瓦はⅠB・ⅡB・ⅡC類があり、ⅡB類には a タイプ 1・2 と b タイプが含まれる。

iii. 南門跡北側の遺構

検出遺構 外郭南門北側の一帯は、近世以降の遺物を含む第Ⅱ層が岩盤直上に堆積しており、古代の堆積層と遺構の遺存状態は悪く、その大半は浸食により失われた可能性が高い。検出した遺構には整地層をはじめ、建物跡や柱列、溝、土壙などがある。

【SX2664 整地層】 (図版 96～98)

概要 SX2664 は南門跡の約 20 m 北にあたる W 9.5～E 3・S 347.5～357.5 の範囲に分布する整

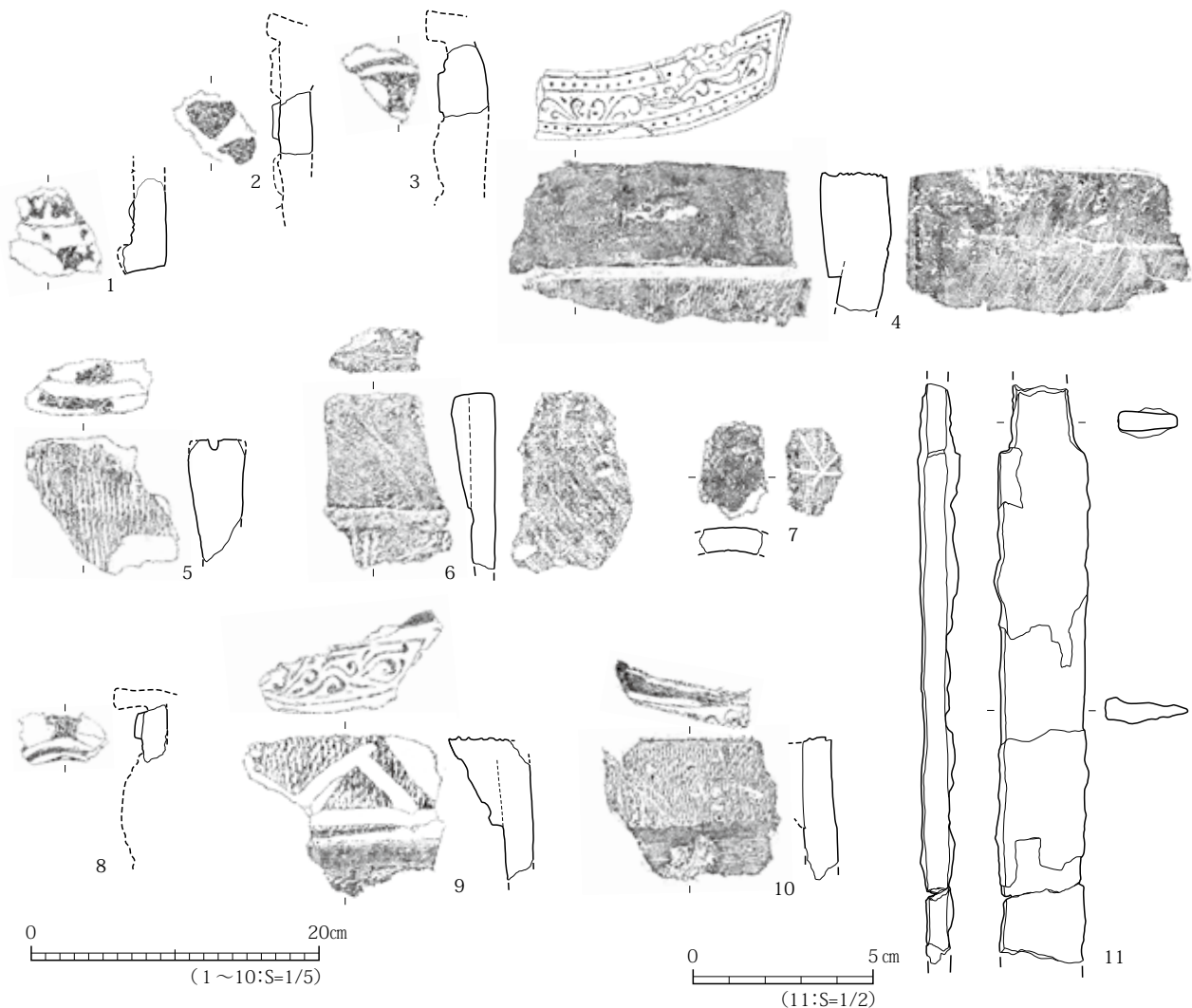


図版 96 南門地区分割図_外郭南門北側(1)

地層で、地山面で確認している。第IV a層（灰白色火山灰ブロック含む）下にあり、SD2657・2663 溝より新しい。層の厚さは5～10cmで、上面は南東から北西方向へ緩やかに傾斜している。整地土には小礫と角の取れた瓦の小破片を多量に含む褐灰色シルトが用いられている。

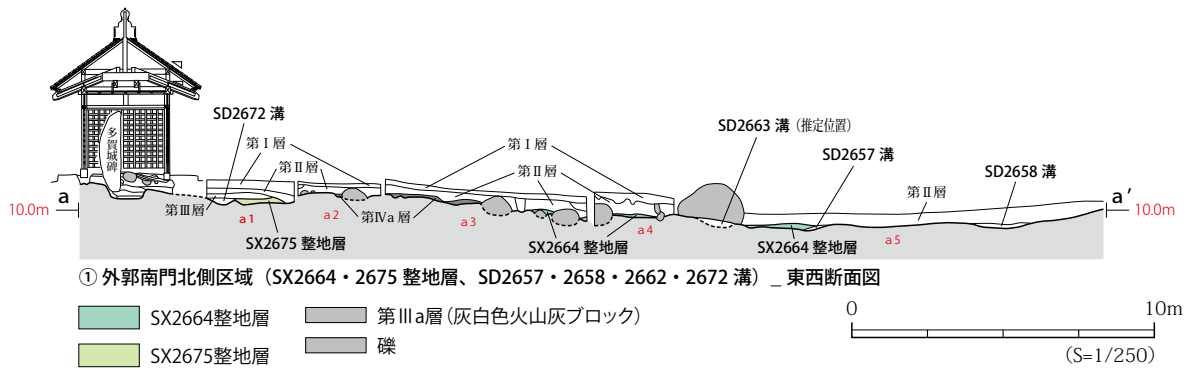
出土遺物 遺物は、層中から多量の瓦と少量の土器類、鉄刀が出土している。

瓦 類 瓦類は大部分が摩滅して角のとれた小破片で、軒丸・平瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は、型番が310 A・B不明の細弁蓮花文（図版97-1）、宝相花文420（2）、陰刻花文450？（3）などがみられる。軒平瓦は、均整唐草文660（4）、単弧文640（5）、無文641（6）がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類で、この中には凹面にヘラ書き「大」（7）がみられるものがある。平瓦にはⅠA・



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭幅	広幅					
1	SX2664・層中	72	軒丸瓦310AorB	瓦当部破片	-	-	-	(2.8)	細弁蓮花文		R9	B13240
2	SX2664・層中	72	軒丸瓦420	瓦当部破片	-	-	-	(3.0)	宝相花文		R8	B13240
3	SX2664・層中	72	軒丸瓦450?	瓦当部破片	-	-	-	(3.5)	陰刻花文 452の可能性もあるか?		R7	B13240
4	SX2664・層中	72	軒平瓦660	瓦当部3/5	-	-	-	(5.0)	均整唐草文		R1	B13240
5	SX2664・層中	72	軒平瓦640	瓦当部破片	-	-	-	(4.0)	単弧文		R2	B13240
6	SX2664・層中	72	軒平瓦641	瓦当部破片	-	-	-	(3.0)	無文 黒色軟質 顎面ナデ調整		R3	B13240
7	SX2664・層中	72	丸瓦Ⅱ	破片	-	-	-	(1.8)	凹面にヘラ書き「大」?		R10	B13240
8	SX2675・層中	72	軒平瓦451	瓦当部破片	-	-	-	(2.5)	陰刻花文		R2	B13240
9	SX2675・層中	72	軒平瓦721A	瓦当部1/3	-	-	-	(4.0)	均整唐草文		R4	B13240
10	SX2675・層中	72	軒平瓦721?	瓦当部破片	-	-	-	(2.5)	均整唐草文		R3	B13240
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	刃幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
11	SX2664・層中	72	鉄刀	1/3	(16.4)	2.5	0.7		平棟平造 両区	135-17	R11	B13242

図版 97 SX2664・2675 整地層 出土遺物



外郭南門北側区域_全景 (72次、西から)



SX2664 整地層、SD2662 溝ほか (72次、西から)



SX2664 整地層_拡大 (72次、南から)



SD2657 溝_断面 (72次、北から)



SD2658 溝_断面 (72次、北から)

図版 98 外郭南門北側区域 (整地層、溝など) _ 断面図・写真

I B・I C b・II B・II C類があり、II B類にはaタイプ1～3とbタイプのすべてが含まれる。

- 土器類 土器類はいずれも小破片で図示できるものはないが、土師器と須恵器が少量出土している。土師器には甕があり、大半は摩滅して特徴を把握し難いが、ロクロ整形のものが含まれる。須恵器には坏・甕・瓶類があり、坏では底部の切り離し技法がヘラ切りで、ナデ調整のものがみられる。
- 鉄刀 鉄刀は茎から刀身にかけての資料で、平棟、平造で両区の刀である(11)。

【SX2675 整地層】 (図版 96～98)

- 概要 SX2675はSD2672溝西側の概ねE 9.5～E 11.5・S 346～347.5の範囲に分布する整地層で、地山面で確認している。SD2672溝と重複し、これより古い。層の厚さは5～20cmで、上面は南から北へ緩やかに傾斜している。整地土には小礫と角の取れた瓦の小破片を含む黄褐色砂質シルトが用いられており、硬く締まりがある。

- 出土遺物 遺物は、層中から多量の瓦と少量の土器、他に硯が1点出土している。

瓦類は大部分が摩滅して角のとれた小破片で、軒丸・平瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は、型番が240もしくは241の重圏文、陰刻花文451(図版97-8)などがみられる。軒平瓦は、単弧文640、均整唐草文721A(9)、均整唐草文721とみられるもの(10)があり、単弧文640の裏面には刻印文字「丸」Bの押印が認められる。丸瓦はII・II B類で、I類はない。平瓦にはI A・I B・II B・II C類があり、II B類にはaタイプ1～3とbタイプのすべてが含まれる。また、平瓦II B類の中には凹面に刻印文字「物」C?が押印されたものもある。

土器は小破片のため図示できないが、須恵器の甕がみられる。

【SB2726 建物跡】 (図版 33・99・100)

- 概要 SB2726は南門跡の北東約35mの丘陵北斜面(E 35～42・S 355～360)に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。表土直下の岩盤面で検出し、いずれの柱穴でも柱は抜き取られており、柱痕跡は確認できなかった。棟の方向は、北側柱列でみると東西の発掘基準線に対して東で約2°北に偏している。SB2727建物跡と重複し、これより新しい。

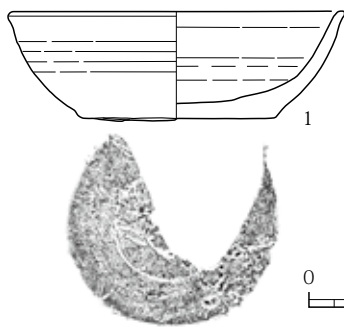
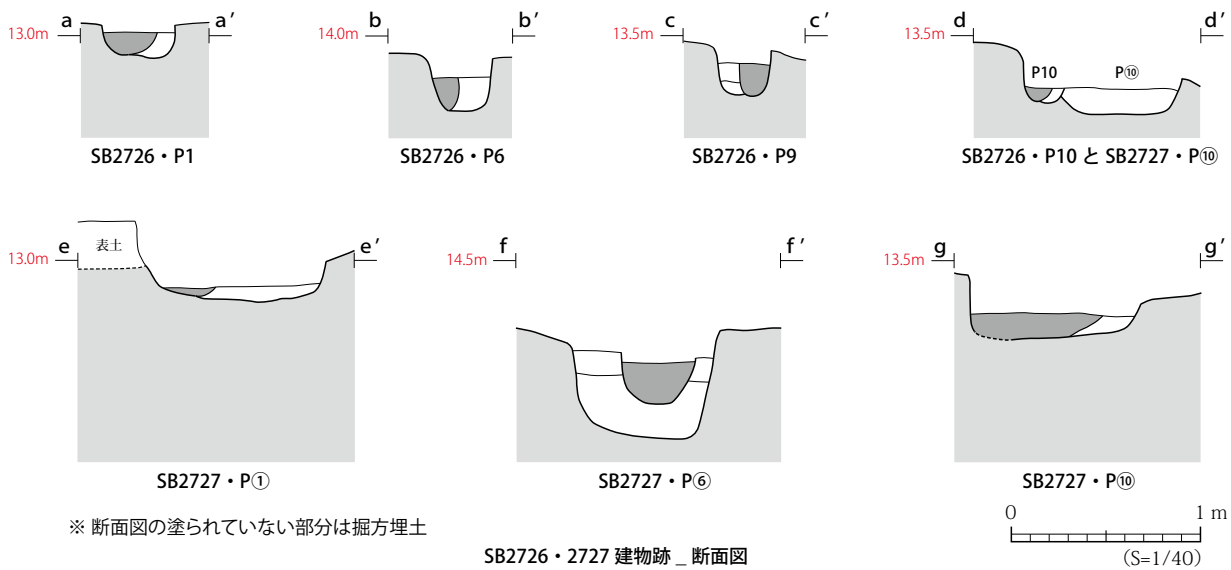
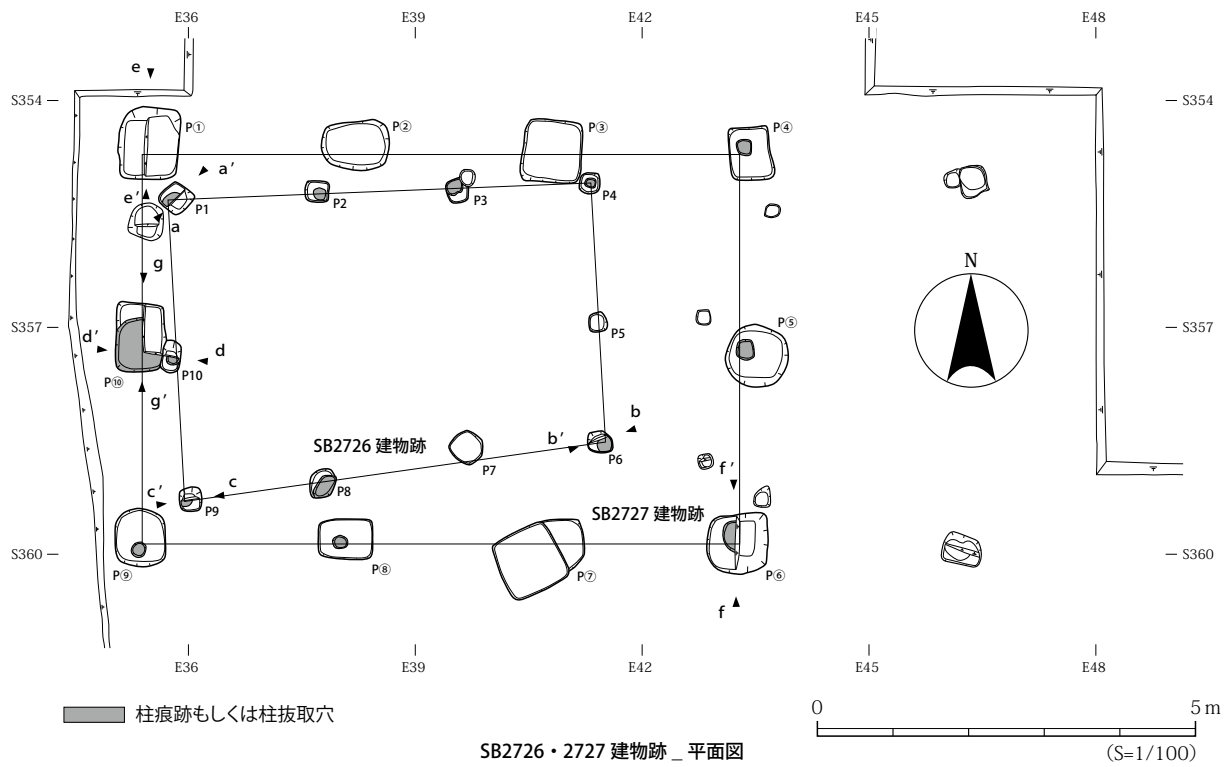
- 平面規模 柱抜取穴のほぼ中央に柱位置を推定すると、桁行は北側柱列で総長約5.6m、柱間は西から2.0m・1.8m・1.8mである。梁行は西妻で総長約4.0m、柱間は北から2.1m・1.9mである。なお、東妻の総長が約3.4mと短く、南側柱列も北への振れが大きい。

- 柱穴 柱穴掘方は一辺0.3～0.4mの隅丸方形で、深さは0.2～0.3mである。埋土は凝灰岩片を多く含む暗褐色シルトである。

- 出土遺物 遺物は、抜取穴から平瓦II類の小破片が2点出土している。

【SB2727 建物跡】 (図版 33・99・100)

- 概要 SB2727は南門跡の北東約35mの丘陵北斜面(E 35～44・S 354～361)に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。表土直下の岩盤面で検出し、いずれの柱穴でも柱は抜き取られており、4個の柱穴下部で柱痕跡を確認した。棟の方向は、南側柱列でみると東西の発掘基準線にほぼ一致している。SB2726建物跡と重複し、これより古い。



SB2727 建物跡・P⑩_須恵器坏出土状況 (73次、西から)

No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SB2727・P⑩柱抜取穴	73	須恵器・坏	3/4	13.3	7.7	4.3	底部：ヘラ切無調整		R1	B13586

図版 99 SB2726・2727 建物跡_平・断面図、出土遺物

平面規模 柱痕跡もしくは柱抜取穴のほぼ中央に柱位置を推定すると、桁行は南側柱列で総長約 7.9m、柱間は西から 2.6 m・(2.6 m)・(2.7 m) である。梁行は東妻で総長約 5.2m、柱間は 2.6m 等間である。

柱 穴 柱穴掘方は一辺 0.7 ~ 1.0 m の方形もしくは長方形で、検出面からの深さは南東隅の柱穴で 0.6 m である。埋土は凝灰岩片を含む黄褐色シルトで、柱痕跡は直径 0.25 m 前後の円形である。

出土遺物 遺物は、掘方埋土から丸瓦のⅡ類 1 点とⅡB類 2 点、柱抜取穴から平瓦のⅡ類 1 点とⅡB a 2 類 1 点、須恵器坏（図版 99 - 1）が出土している。

【SB2744 建物跡】（図版 33・101）

概 要 SB2744 は南門跡の北東約 10 m（E 12 ~ 20・S 363 ~ 369）に位置する桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。表土直下の岩盤面で検出しているが、東妻以外の柱穴は第 7 次調査で完掘されていた。東妻の柱穴には柱痕跡が残る。棟の方向は、南側柱列でみると東西の発掘基準線に対して東で約 6°南に偏している。SA2743 柱列、SD2734・2745・2747 溝と重複し、SD2734 より新しい。SA2743、SD2745・2747 との前後関係は不明である。

平面規模 柱痕跡もしくは柱穴のほぼ中央に柱位置を推定すると、桁行は南側柱列で総長約 6.3m、柱間は西から 2.9 m・3.4 m である。梁行は東妻で総長約 4.6m、柱間は 2.3m 等間である。

柱 穴 柱穴掘方は直径 0.3 m 前後の不整形円形で、検出面からの深さは南西隅の柱穴で 0.13 m である。



SB2726・2727 建物跡_全景（北から）



SB2726 建物跡_P6 断面（北から）

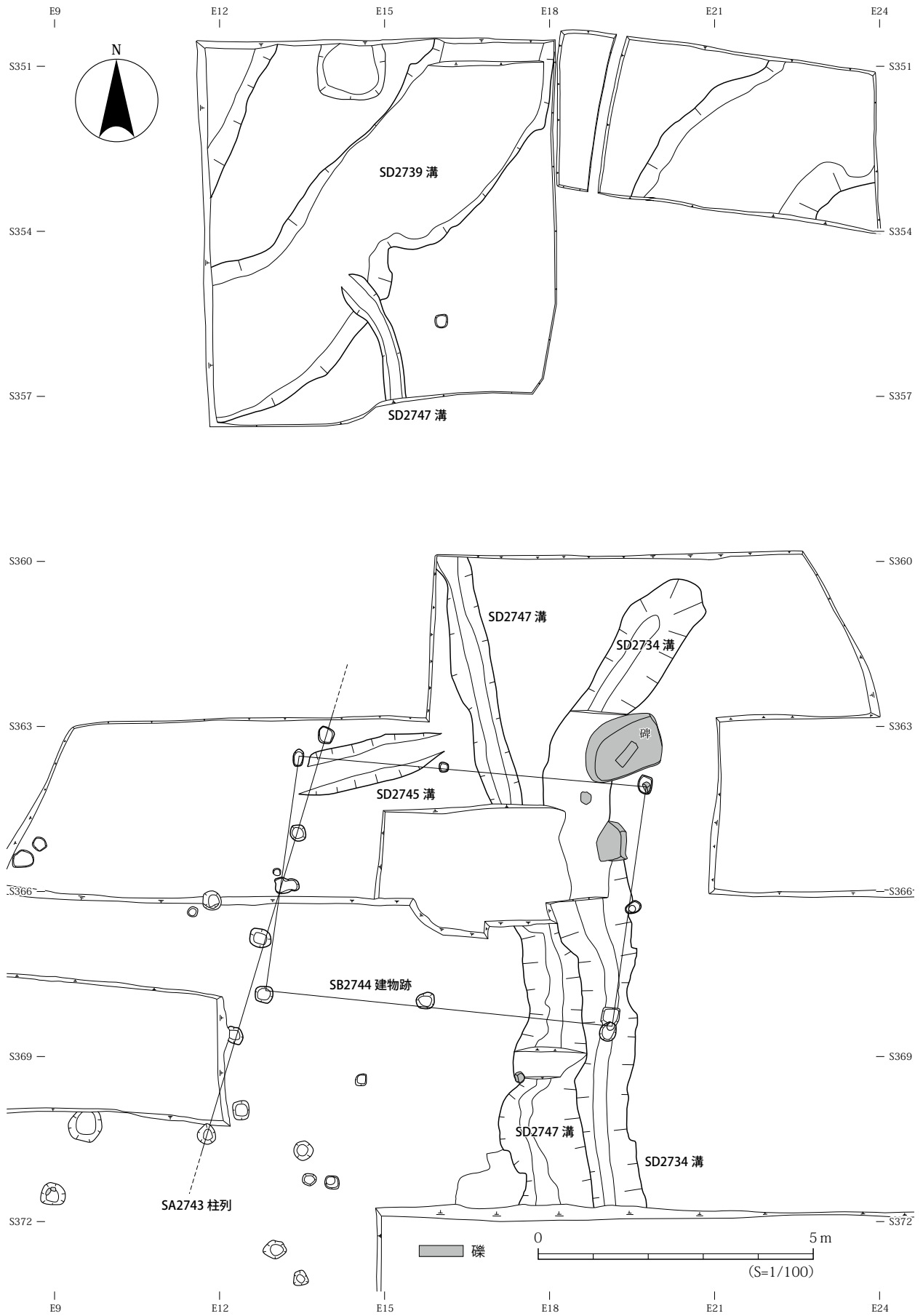


SB2727 建物跡_P6 断面（東から）



SB2726・2727 建物跡_P10・P10 断面（北から）

図版 100 SB2726・2727 建物跡_写真（73 次）



図版 101 南門地区分割図_外郭南門北側(2)

東妻の埋土は締まりのない褐色シルトで、柱痕跡は直径 0.1 m 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SA2743 柱列】 (図版 33・101)

概要 SA2743 は南門跡の北東約 8 m (E 11 ~ 15・S 363 ~ 371) に位置する柱間 4 間以上の南北方向の柱列である。表土直下の岩盤面で検出しているが、いずれの柱穴も第 7 次調査で完掘されていた。方向は、南北の発掘基準線に対して北で約 17° 東に偏している。SB2744 建物跡、SD2745 溝と重複しているが、切り合いがなく新旧関係は不明である。

規模・柱穴 柱穴のほぼ中央に柱位置を推定すると、総長 7.6m 以上で、柱間は南から 1.9 m・1.9 m・2.0 m・1.8 m である。柱穴掘方は直径 0.3 m 前後の不整形円で、検出面からの深さは 0.15 m 前後である。遺物は出土していない。

【SD2657 溝】 (図版 96・98)

概要 SD2657 は政庁中軸線の 7 m 程西を南北方向に伸びる溝で、S 349 ~ 368 区間の長さ 19.5 m 分を検出している。確認面は岩盤面で、溝は多賀城碑の西側から南門跡の北西側にかけて緩やかな弧を描くように伸びており、北側は削平され、南側は徐々に浅くなり途切れている。SX2664 整地層と重複し、これより古い。規模は上幅 1.0 ~ 2.3 m、深さ 0.5 m 程で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は黄褐色砂質シルトで、自然堆積土である。

出土遺物 遺物は、堆積土中から軒丸瓦、丸・平瓦が出土している。軒丸瓦は、型番が 221 ~ 228 のいずれかに含まれる重弁蓮花文と陰刻花文 451 が各 1 点ある。丸瓦はすべて II 類で、II B 類と判別できるものもある。平瓦は I A・II B・II C 類がみられ、II B 類には a タイプ 1 ~ 3 と b タイプのすべてが含まれる。また、平瓦 II C 類には凹面に刻印記号 (『本文編』 PL.104 - 3) が押印されたものやヘラ書きがみられるものもある。

【SD2658 溝】 (図版 96・98)

概要 SD2658 は政庁中軸線の 13 m 程西を南南西 - 北北東方向に伸びる溝で、S 349 ~ 357 区間の長さ 8.5 m 分を検出している。確認面は岩盤面で、溝は概ね直線的に伸びており、南北両側は削平されている。規模は上幅 0.7 ~ 1.2 m、深さ 0.1 m 前後で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は褐色砂質シルトで、自然堆積土である。

出土遺物 遺物は、堆積土から瓦と土器が出土している。瓦には、丸瓦 II・II B 類、平瓦 I A・II A・II B・II C 類があり、平瓦 II B 類には a タイプ 1・2 と b タイプがみられる。土器は、須恵器甕・瓶の破片が少量出土している。

【SD2663 溝】 (図版 96)

概要 SD2663 は政庁中軸線の 4.5 m 程西を南北方向に伸びる溝で、S 355 ~ 358 区間の長さ 2.2 m 分を検出している。確認面は SX2664 整地層下の岩盤面で、溝は南南東方向へ緩やかな弧を

描くように伸びており、北側の状況は判然としないが、南側は調査区外へ及ぶ。SX2664 整地層より古い。規模は上幅 0.7 m 前後、深さ 0.2 m 程で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は褐色シルトで、自然堆積土である。

遺物は、堆積土中から丸・平瓦の破片資料が出土している。丸瓦はすべてⅡ類で、ⅡB類と判別できるものもある。平瓦はⅠA・ⅠB・ⅠCa・ⅡB・ⅡC類があり、ⅡB類にはaタイプ1～3とbタイプのすべてが含まれる。また、平瓦ⅡC類では凹面に「L」のヘラ書きがみられるものがある。

【SD2672 溝】(図版 96・98)

SD2672 は政庁中軸線の 11.5 m 程東を南南西―北北東方向に伸びる溝で、S 346～347 区間の長さ 1.0 m 分を検出している。確認面は表土直下の SX2675 整地層上面もしくは岩盤面で、溝は概ね直線的に伸びており、南北両側は調査区外へ及ぶ。SX2675 整地層より新しい。規模は上幅 0.7 m 前後、深さ 0.2 m 程で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は褐色シルトで、自然堆積土である。

遺物は、堆積土中から丸瓦と平瓦の破片が少量出土している。丸瓦は 3 点で、すべてⅡ類である。平瓦にはⅠA・ⅡB・ⅡC類がある。

【SD2734 溝】(図版 101・102)

SD2734 は政庁中軸線の 19 m 程東を南北方向に伸びる溝で、S 360～372 区間の長さ 11.5 m 分を検出している。確認面は表土直下の岩盤面で、溝は北北東方向へ緩やかな弧を描くように伸びており、北側は徐々に浅くなり途切れている。南側は調査区外へ及ぶ。SB2744 建物跡、SD2747 溝と重複し、これらより古い。規模は上幅 0.9～1.1 m、深さ 0.2 m 前後で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は風化礫片を多く含む暗褐色シルトで、自然堆積土である。

遺物は、堆積土中から瓦、土器、鉄釘が出土している。瓦類は、軒丸・平瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は重圈文(型番:240～243)、軒平瓦は均整唐草文(型番不明)が各 1 点認められる。丸瓦はⅡA・ⅡB類がある。平瓦はⅠA・ⅠB・ⅡB・ⅡC類があり、ⅡB類にはaタイプ1～3とbタイプのすべてが含まれる。また、平瓦ⅡB類では凹面に刻印文字の「矢」Aが押印されたものがあつた。

土器は、土師器、須恵器がある。土師器は甕、須恵器は稜碗・甕があるが小破片で図示できない。鉄釘(図版 102-3)は大型のもので、頭部を欠損している。

【SD2739 溝】(図版 101・102)

SD2739 は多賀城碑南側に位置し、南西―北東方向に伸びる溝で、E 12～18・S 350～358 の範囲で長さ 8.5 m 分を検出している。確認面は表土直下の岩盤面で、溝は南西から北東へ緩やかな弧を描くように伸びており、南北両側は調査区外へ及ぶ。SD2747 溝と重複し、これより古い。規模は上幅 2.3～2.7 m、深さ 0.5 m 前後で、断面は浅い台形を呈する。堆積土は灰白

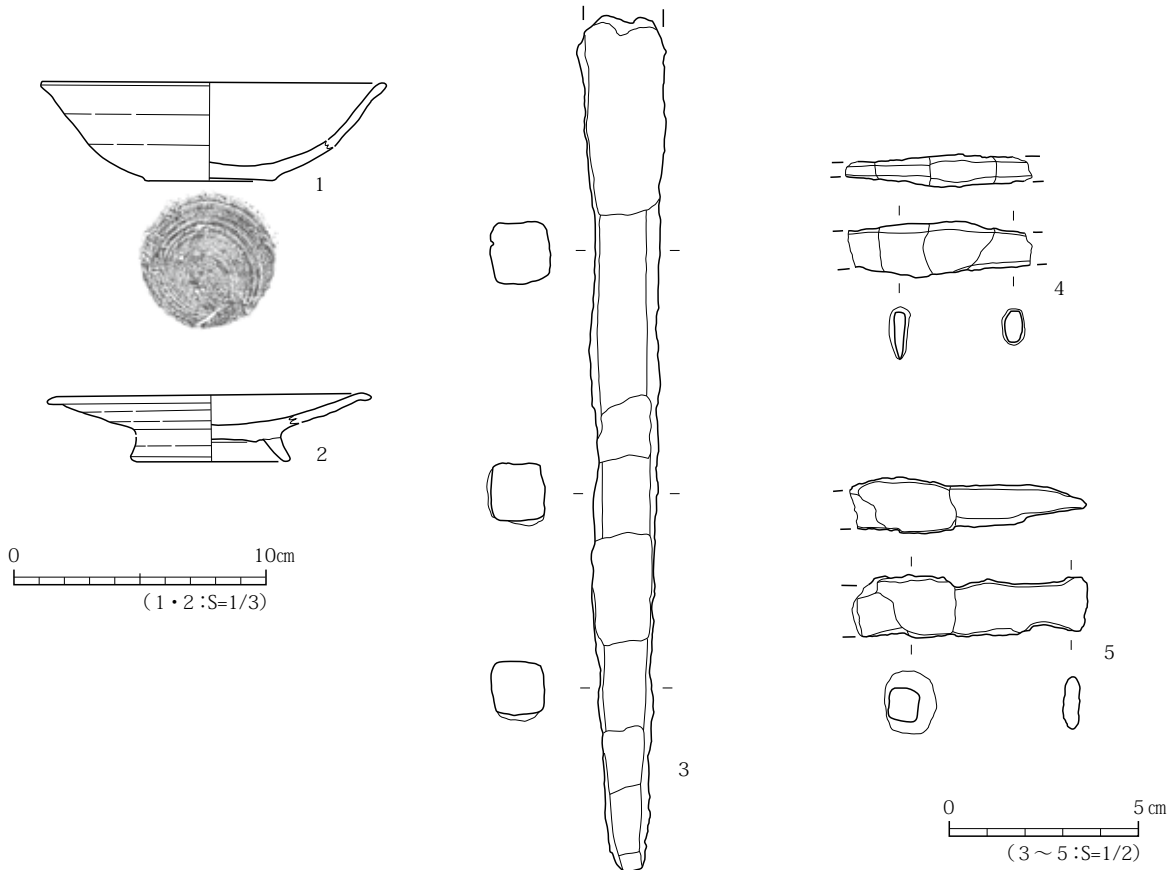
色火山灰ブロックと焼土・炭化物粒を含む褐色シルトで、自然堆積土である。

出土遺物 遺物は、堆積土中から瓦、土器、鉄製品が出土している。瓦類は、軒丸・平瓦、隅切瓦、丸・平瓦がある。軒丸瓦は重圏文（型番：240～243）、軒平瓦は単弧文640がみられ、隅切瓦は平瓦ⅡB a 2類の隅を切ったものである。丸瓦はⅡ・ⅡB類、平瓦はⅠA・ⅠB・ⅡB・ⅡC類があり、平瓦ⅡB類には刻印文字の「物」A・「丸」A・「丸」B？、ⅡC類には刻印記号が押印されたものも認められる。

土器は、土師器、須恵器、須恵系土器がある。土師器は坏・椀、須恵器は坏・瓶・甕、須恵系土器は坏（図版102-1）・高台皿（2）・台付鉢がある。鉄製品は刀子（4）と鑿（5）の破片である。

【SD2745 溝】（図版101）

概要 SD2745はE 14・S 364付近を東西方向に伸びる溝で、E 13.2～16区間の長さ2.8m分を検出している。確認面は表土直下の岩盤面で、溝は概ね直線的に伸び、東西両側は削平されている。SB2744建物跡、SA2743柱列と重複するが、その前後関係は不明である。規模は上幅約0.8m、深さ0.1m前後で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は褐色シルトで、自然堆積土である。遺物は出土していない。



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SD2739・堆積土	73	須恵系土器・坏	2/3	13.8	6.2	3.9	底部：回転糸切り無調整		R 1	B 13586
2	SD2739溝	73	須恵系土器・高台皿	1/2	12.9	6.3	2.7	底部：回転糸切り		R 2	B 13586
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
3	SD2734・堆積土	73	鉄釘	4/5	(22.5)	1.5	1.2	頭部欠損 断面方形	134-5	RM10	B 13567
4	SD2739・堆積土	73	刀子	2.8	(2.8)	(1.0)	(0.4)	柄から刃部にかけての破片 区はサビにより不明瞭		RM12	B 13567
5	SD2739・堆積土	73	鑿	4.9	(4.9)	(1.1)	(0.6)	柄から刃部に欠けての破片		RM15	B 13568

図版 102 SD2734・2739 溝 _ 出土遺物

【SD2747 溝】 (図版 101)

SD2747 は政庁中軸線の 16.5 m 程東を南南東—北北西方向に伸びる溝で、S 354～372 区間の長さ 17.5 m 分を検出している。確認面は表土直下の岩盤面で、溝は概ね直線的に伸びるが、北部は西側へ緩やかな弧を描いている。SB2744 建物跡、SD2734・2739・2745 溝と重複し、SD2734・2739 より新しい。SB2744、SD2745 との前後関係は不明である。規模は上幅 0.4～0.7 m、深さ 0.3 m 前後で、断面は皿状を呈し、平坦な底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は風化礫と瓦の小片を含む褐色シルトで、自然堆積土である。遺物は出土していない。

概要

【SK2665 土壇】 (図版 96・103)

SK2665 は北西部の微高地上 (W 21・S 348.5 付近) に位置する土壇で、表土直下の岩盤面で検出した。平面形は東西約 1.3 m、南北約 1.15 m の長方形を呈する。東西方向に断ち割った断面は逆「凸」字形で、中央部が東西 0.65 m×南北 1.15 m のピット状に一段深くなっている。深さは中央部で約 0.4 m、周辺部は 0.1 m 前後である。基盤の凝灰岩を掘り込んでおり、壁や底面には掘削に用いた刃幅 5 cm 前後の工具痕が残る。堆積土は凝灰岩片を多く含む黄褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

概要

遺物は、埋土から丸瓦Ⅱ類 1 点と平瓦Ⅱ B 類 2 点の破片が出土している。

出土遺物

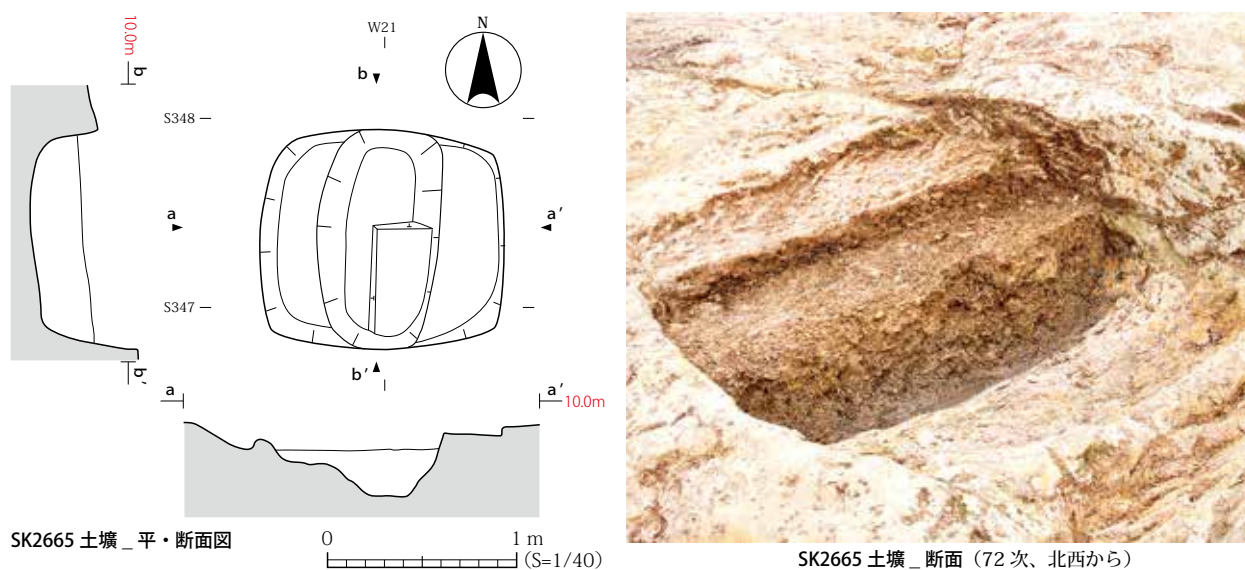
【SK2666 土壇】 (図版 96)

SK2666 は北西部の微高地上 (W 22.5・S 348 付近) に位置する小土壇で、表土直下の岩盤面で検出した。平面形は東西約 0.8 m、南北約 0.6 m の楕円形を呈し、深さは 0.2 m 程である。底面から壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は褐色シルトで、自然堆積土とみられる。

概要

遺物は、堆積土から平瓦Ⅱ類の破片が 1 点出土している。

出土遺物



図版 103 SK2665 土壇_平・断面図、写真

iv. 横穴墓

分布状況と地形 南門跡が載る小丘の西端部では、SF1556 築地塀跡に伴う SX1562 基礎整地下で 5 基の横穴墓が発見されている。これらは丘陵縁の南に 3 基、西に 2 基が並んでおり、南西側に広がる沖積地との比高差は 2～3 m である。築地塀南側の旧地形は削平されて判然としないが、周辺の地形からみて、本来は基盤の凝灰岩からなる南西向きの傾斜地であったと推定される。こうした旧地形に沿って横穴墓は造営されており、周辺には更に複数の横穴墓が埋没していると思われる。

堆積層の説明 なお、南斜面の 3 基 (SP1559・1560・1561) については、各横穴墓の内部および前面の堆積層がほぼ共通した特徴をもつことから、最も複雑な堆積を示す SP1560 の層を基準として統一した層名を用いて説明する。そのため最初に SP1560 の記載を行う。

【SP1560 横穴墓】(図版 85・104～108)

位置・検出状況 SP1560 は SF1556 築地塀跡の南壁から 1.5 m 程南に開口部が位置し、玄室が築地塀下まで及ぶ横穴墓である。南西に開口し、長軸方向は東西の発掘基準線に対して東で約 41°北に偏している。玄室から前庭にかけて遺存しており、前庭部および羨道の一部が築地塀の SX1562 基礎整地に覆われていた。

重 複 SP1561 横穴墓を削平して造成した前庭部から掘り込まれており、東側に隣接する SP1559 とは堆積土の特徴や堆積状況がほぼ共通することから、同時に構築され、その後も同様の変遷を辿った可能性が高いと思われる。

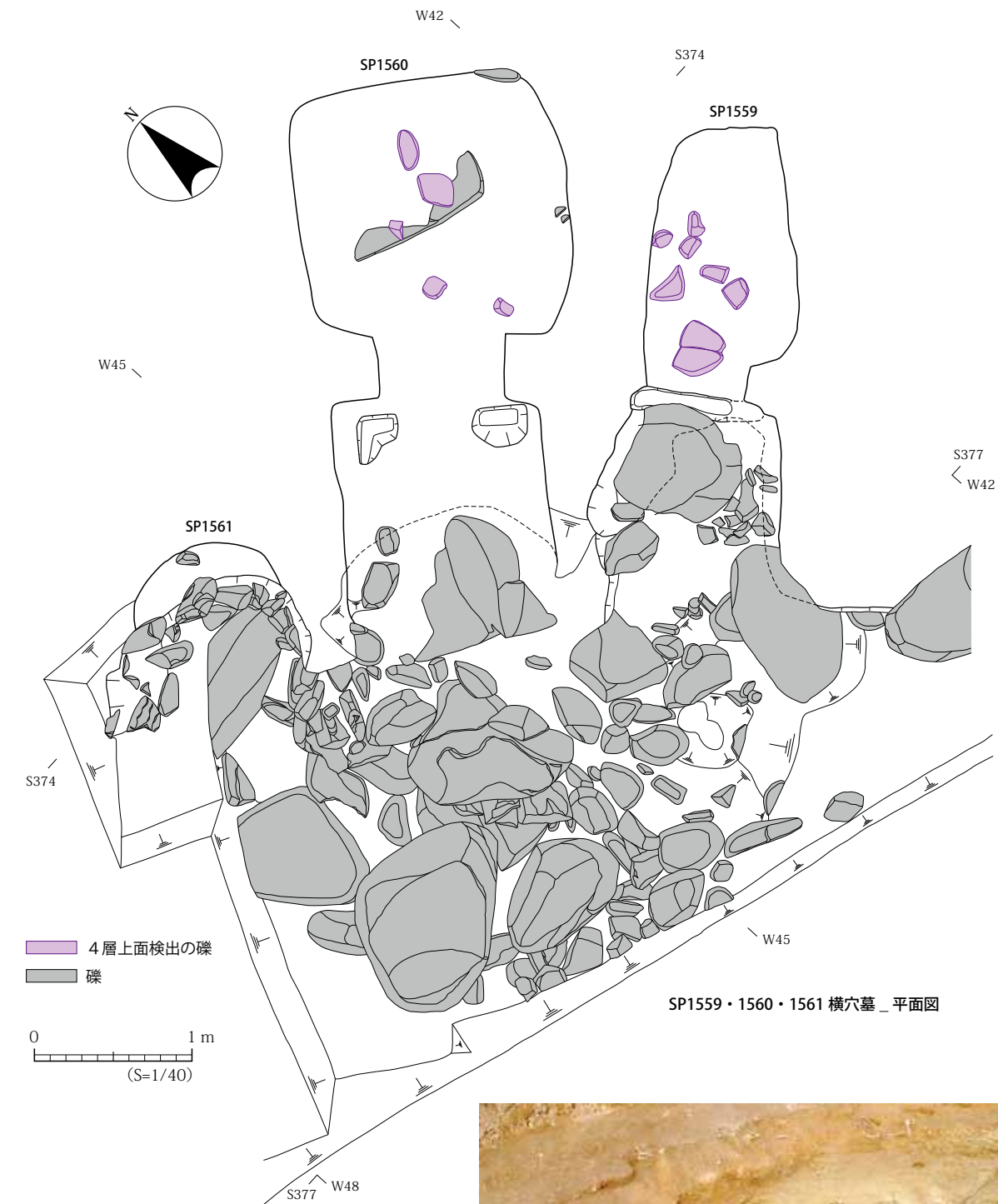
また、築地塀基礎整地 (2 層) との関係は、2 層が羨道から前庭部の堆積層を覆い、南半では 6 層もしくは 7 層上に直接載っていること、直前の自然堆積土である 3 層が羨門付近で極端に薄くなり前庭部南半には残存しないことから、築地塀の基礎地業施工時に軟質の自然堆積土が除去され、基礎整地層で埋め立てられたものと考えられる。さらに、2 層上部から羨道・玄門部へ流入する自然堆積層 (1 層) も認められ、基礎整地層は後に削平を受けたかもしくは層自体が沈下・流出したとみられる。

形態・規模 玄室は、平面形が胴張の隅丸方形、立面形がアーチ形を呈し、奥行 1.65 m、奥幅 1.4 m、中央幅 1.7 m、前幅 1.5 m、高さ 0.9 m である。床面は平坦で、南に向かって低くなり、内部施設は特に認められない。

玄門の立面形はアーチ形で、幅 0.8 m、高さ 0.85 m、奥行 0.4 m である。玄門前床面の左右壁際で長軸 0.3 m 前後の不整形を呈し、深さが 4 cm 程の浅い窪みを検出した。ともに玄門側の辺が直線的で壁が直立していることから閉塞に関わる施設の跡と考えられる。この上には径 10～40 cm の自然石が 2～3 段に重なった状態で並んでおり、閉塞に用いられたものとみられる。

羨道の平面は長方形とみられ、長さ 1.5 m 以上、幅 1.3 m、高さ 0.95 m で、天井部は玄門から 0.65 m まで遺存している。立面はアーチ形である。

構築技法についてみると、直刃の工具の先端が深く入ったため残った痕跡と、蛤刃の工具 (手斧) で面を削った痕跡があり、前者は横穴の掘削時のもの、後者は内面の整形時のものと考えられる。掘削痕は各面の境界付近を中心として残り、工具の幅は 8 cm 以上とみられる。整形痕は横



SP1559・1560・1561 横穴墓 (48次、南東から)

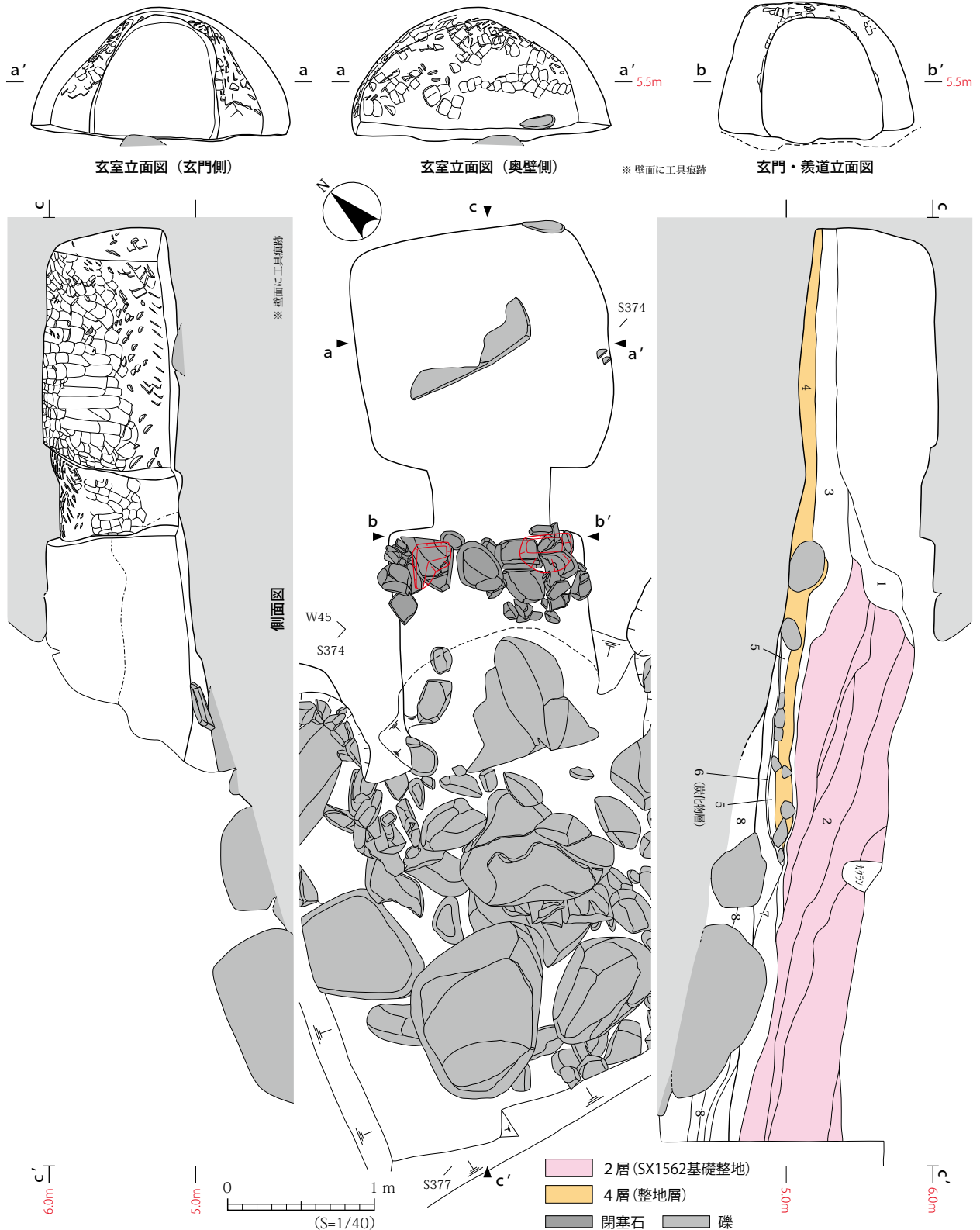


SP1559・1560・1561 横穴墓 (48次、南西から)

図版 104 SP1559・1560・1561 横穴墓_平面図・写真

穴のほぼ全体にみられ、幅は 10cm 前後である。長さは 15cm 未満の場合が多いが、天井から側壁にかけて 50cm 以上になる部分もある。

堆積土 堆積土は 8 層に大別され、このうち「2 層」は SF1556 築地塀跡の基礎整地 (SX1562) である。また、「8 層」は SP1561 横穴墓を削平して SP1559・1560 横穴墓の前庭部を造成した際の盛



図版 105 SP1560 横穴墓_平・断面図

土整地層とみられ、SP1561 で説明を加える。

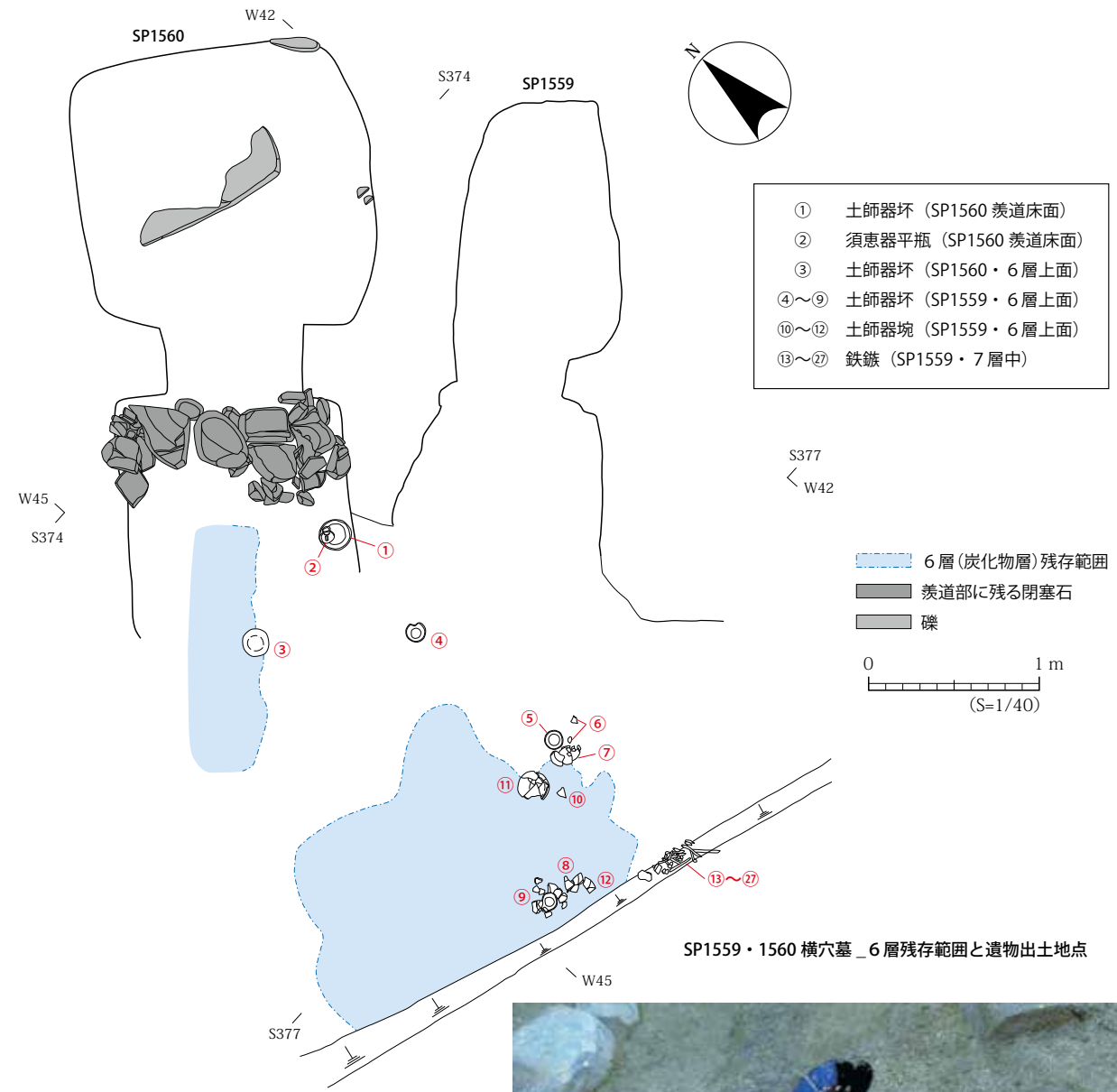
- 1 層：羨道から玄門付近にのみ分布するにぶい黄褐色砂質シルト層で、極めて軟質である。築地塀の基礎整地層（2層）が後世に削平を受けたかもしくは沈下・流出してSP1560の羨道部が再開口した後に流入したものと考えられる。この層から少量の瓦が出土した。
- 2 層：横穴墓を覆う築地塀の基礎地業土で、「SF1556 築地塀跡」の項でSX1562として記載したものである。
- 3 層：玄室の奥壁から前庭部北半まで分布するやや軟質の黒褐色シルト層で、玄門前付近で最も厚く25cmあるが、南北の両側では次第に薄くなる。羨門付近から前庭部北半で極端に薄くなり、そこから南には残存しないことから、築地基礎地業時に削平を受けているとみられる。層中には灰黄褐色砂質土がラミナ状に含まれることなどから築地基礎地業以前の自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。
- 4 層：玄室の奥壁から羨門前の浅い窪みにかけて分布する厚さ5～15cmの粘土質シルト層で、玄門前に残る閉塞石を境に玄室側では黄褐色土、羨道・前庭部では褐色土となっている。5層上に載る前庭部以外では床面上に直接堆積しており、羨道・前庭部の層中には閉塞に用いられていたと考えられる自然石が多く含まれていた。硬く締まっていることや上面が平坦であることから整地層とみられる。遺物は出土していない。
- 5 層：羨門付近からその前方の浅い窪みに分布するにぶい黄褐色の凝灰岩の破碎砂で、自然堆積土と思われる。厚さ3cm前後の薄層で、層中には4層と同様に閉塞に用いられていたと考えられる自然石がみられ、土師器が少量出土した。
- 6 層：羨門付近からその前方の浅い窪みの底面に残るごく薄い炭化物層である。調査時の記録には、この炭化物層が羨道東壁際の床面で出土した土師器坏と須恵器平瓶の上部を覆っていたことが記されている。東側に隣接するSP1559の前方にも分布し、調査区南端まで広がる。本横穴墓およびSP1559前方では、この層上面で完形の土師器が発見されており、直下で出土した土器を含めて炭化物の形成を伴う墓前祭祀が行われたことが窺われる。
- 7 層：羨門前の前庭部にみられる浅い窪みの末端から調査区南端まで分布し、東のSP1559と西のSP1561の前方まで広がる褐色の凝灰岩の破碎砂である。後述するSP1559前方での出土遺物の様相から、本横穴墓およびSP1559から遺物などを掻き出した時に形成された層と思われる。羨門前の浅い窪みはこの掻き出しの際に生じたものと推察される。厚さは南端が15cmと最大で、北に向かって次第に薄くなる。

遺物は、床面、6層上面、5層から少量の土師器坏・甕や須恵器平瓶が出土している。

出土遺物

羨道東壁際の床面から土師器坏1点（図版106・107-①）と須恵器平瓶1点（②）が重なった状態で出土した。土師器坏は非ロクロ整形で、内面が黒色処理された（内黒）丸底坏である。体部外面の中段に稜が付き、内面にはそれと対応する屈曲がみられる。口縁部はやや急に立ち上がる。外面の調整は稜の上方がヨコナデ、下方がヘラケズリであり、内面は全面にヘラミガキが施されている。須恵器平瓶は高台と把手の付く小型のものである。把手はヘラで整形されており、断面は五角形をなす。

羨道床面



SP1559・1560 横穴墓_6層残存範囲と遺物出土地点

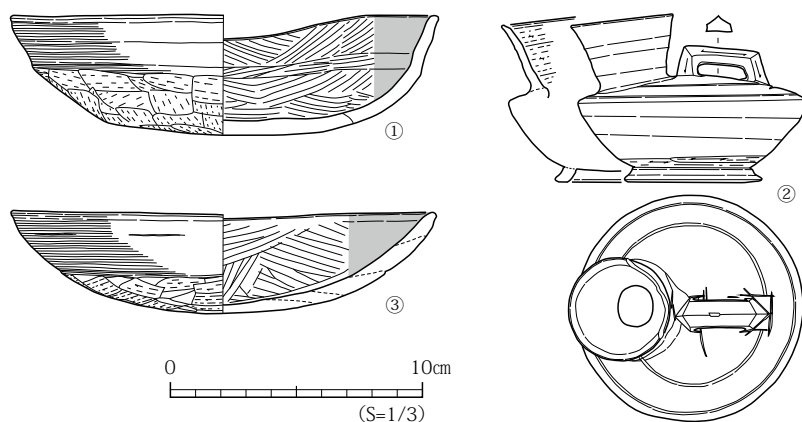


SP1560 横穴墓_羨道床面遺物①・②出土状況 (48次、南西から)

SP1559・1560の6層残存状況 (48次、南西から)

図版 106 SP1559・1560 横穴墓の6層残存範囲と遺物出土地点_分布図・写真

羨門前ほぼ中央の6層上面から完形の土師器環1点(③)が出土した。非ロクロ整形で、内黒の丸底環である。体部は内湾気味に外傾し、体部中程にわずかな段がみられる。外面の調整は上半がヨコナデ、下半がヘラケズリで、内面は全面にヘラミガキが施されている。



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
①	SP1560・羨道床面	48	土師器・環	完形	17.0	—	4.8	非ロクロ整形 内黒	130-1	R 4	B 6768
②	SP1560・羨道床面	48	須恵器・平瓶	完形	3.9	5.5	6.7	高台・把手の付く小型品	130-3	R 3	B 6768
③	SP1560・6層上面	48	土師器・環	完形	17.0	—	4.2	非ロクロ整形 内黒	130-2	R 12	B 6768

図版 107 SP1560 横穴墓 _ 出土遺物

【SP1559 横穴墓】(図版 85・104・106・108～110)

SP1559 は SF1556 築地塀跡の南壁から 0.7 m 程南に位置する横穴墓である。南西に開口し、長軸方向は東西の発掘基準線に対して東で約 36° 北に偏している。玄室から前庭にかけて遺存しており、羨道から前庭部は築地塀の SX1562 基礎整地に覆われていた。

SP1561 横穴墓を削平して造成した前庭部から掘り込まれており、西側に隣接する SP1560 とは堆積土の特徴や堆積状況がほぼ共通することから、同時に構築され、その後も同様の変遷を辿った可能性が高いと思われる。

また、築地塀基礎整地(2層)との関係は、2層が羨道から前庭部の堆積層を覆い、前庭部では6層もしくは8層上に直接載っていること、直前の自然堆積土である3'層が羨門付近で途切れて前庭部に残存しないことから、築地塀の基礎地業施工時に軟質の自然堆積土が除去され、基礎整地層で埋め立てられたものと考えられる。さらに、2層上部から玄門・玄室へ流入する自然堆積層(1'層)も認められ、基礎整地層は後に削平を受けたかもしくは層自体が沈下・流出したとみられる。

玄室は、平面がほぼ長方形、立面が台形に近いアーチ形を呈し、奥行 1.5 m、奥幅 0.65 m、前幅 0.95 m、高さ 0.8 m である。床面はほぼ平坦で、内部施設は特に認められない。

玄門の立面はほぼ長方形で、幅 0.65 m、高さ 0.8 m、奥行 0.2 m である。玄門の前に接して閉塞施設に関わるとみられる長さ 0.65 m、幅 10～15 cm で、深さ 5 cm 程の溝がある。

羨道の平面形は長方形とみられ、長さ 0.9 m 以上、幅 1.1 m で、天井部は 0.1 m 分が残存しており、立面は台形をなす。

構築技法については、掘削痕と整形痕がみられ、それぞれの幅は SP1560 の場合と同様である。但し、横穴内部が狭いためか SP1560 にみられた長い整形痕はなく、全体に仕上げが粗い。

6 層 上 面

5 層

5層からは土師器の内黒環と甕の小破片が少量出土している。いずれも非ロクロ整形のものである。

他に、1層から丸・平瓦が少量出土している。丸瓦にはⅡ・ⅡB類、平瓦にはⅡB・ⅡC類がみられた。

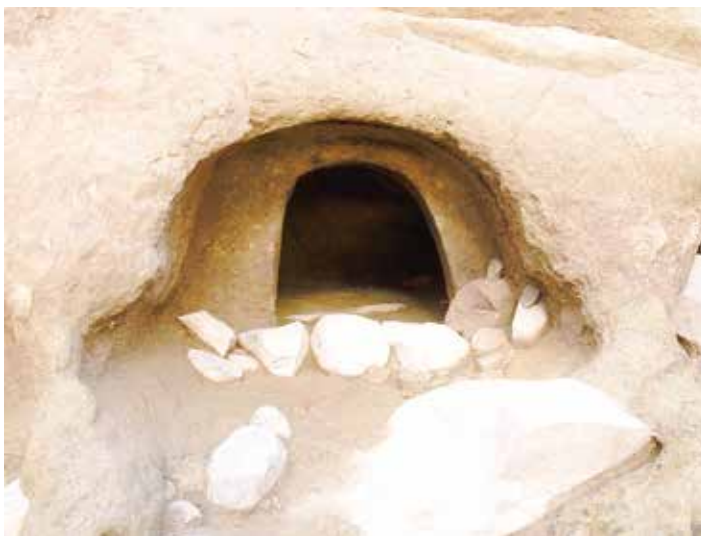
位置・検出状況

重 複

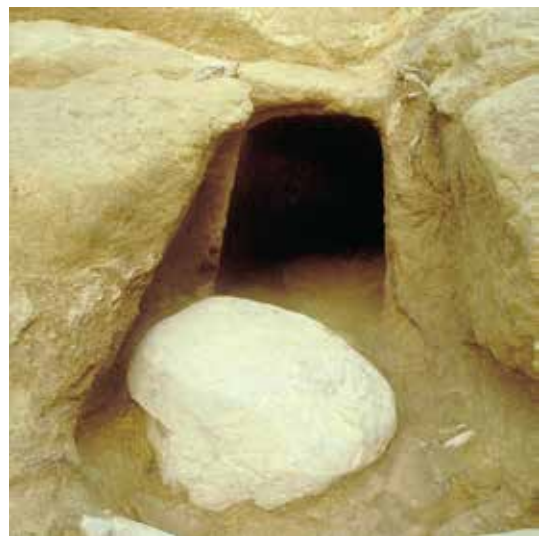
形態・規模

堆 積 土 堆積土をみると、SP1560 横穴墓の各層に比定される 1'・2'・3'・4'・6'・7 層が認められる（明確な同一層以外には'を付した）。このうち 4' 層と 6 層には直接の層位的関係はない。

- 1' 層：玄門から玄室のほぼ全域に分布する厚さ 40～50cm の褐色砂質シルト層で、極めて軟質である。SP1560 の 1 層と同様に築地塀の基礎整地層（2 層）が後世に削平を受けたかもしくは沈下・流出して SP1559 の羨道部が再開口した後に流入したものと考えられる。この層から少量の瓦が出土した。
- 2 層：SP1560 の 2 層と一連の築地塀の基礎地業土（SX1562）である。
- 3' 層：玄門を中心として分布するやや軟質の黒褐色シルト層で、SP1560 の 3 層と同様に玄門付近で最も厚く 40cm あるが、南北の両側では次第に薄くなる。前庭部には残存しておらず、築地基礎地業時に削平を受けているとみられる。
- 4' 層：玄室から玄門のやや前方にかけて分布する厚さが 5 cm 程の黄褐色粘土質シルトである。床面に直接載り、硬く締まっていることや上面が平坦であることなどの点で、SP1560 の 4 層と類似する。遺物は出土していない。
- 6 層：SP1560 の 6 層と一連のごく薄い炭化物層で、前庭部南半から調査区南端まで分布する。この上面から多数の完形土師器が出土した。
- 7 層：SP1560 の 7 層と一連の凝灰岩の破碎砂である。調査区南端で層中から多数の鉄鏃が出



SP1560 横穴墓（48 次、南西から）



SP1559 横穴墓（48 次、南西から）



SP1560_ 閉塞石除去後（48 次、南西から）



SP1560_c-c' 断面（48 次、西から）



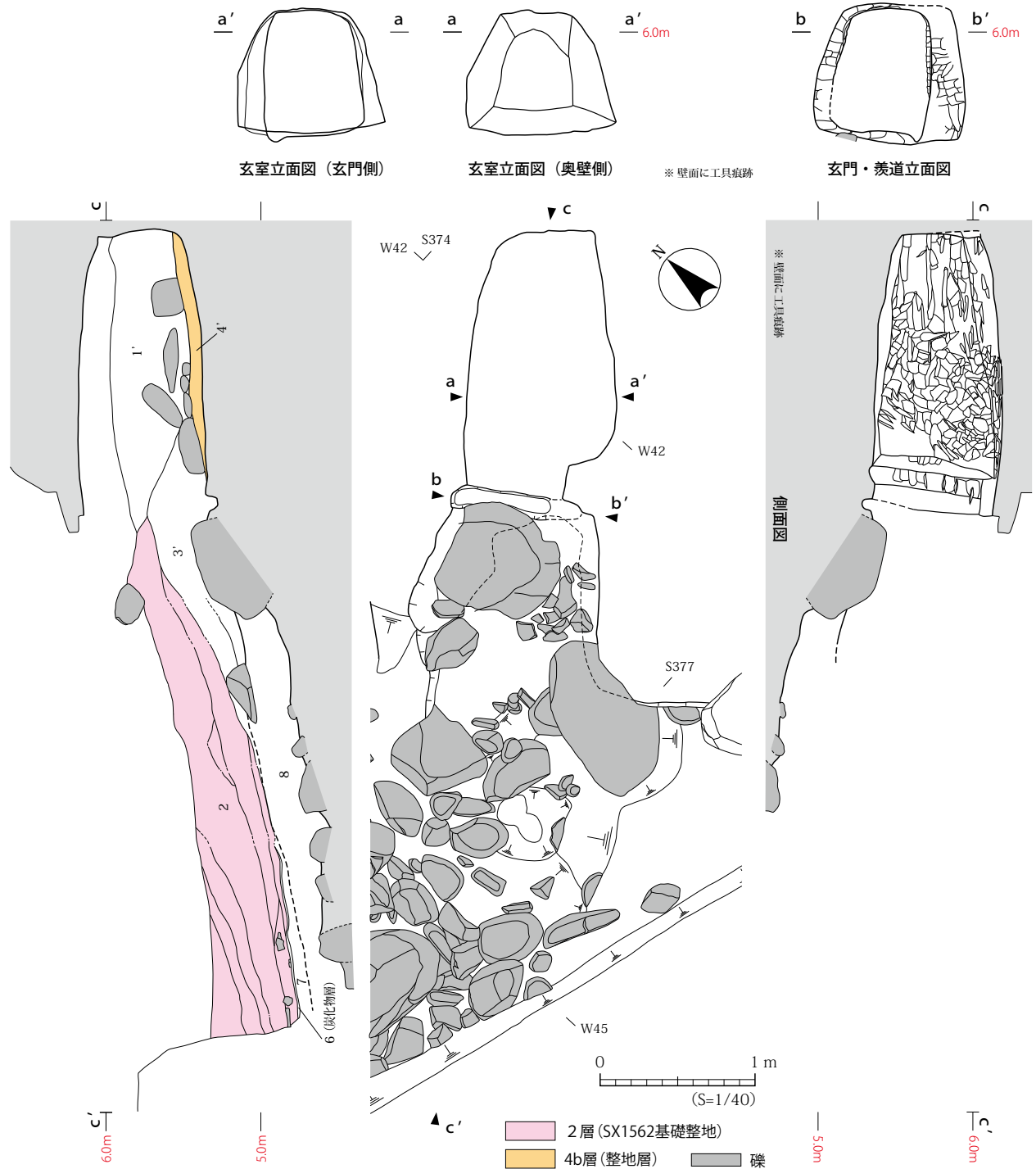
SP1559_ 玄室内部（48 次、南西から）

図版 108 SP1559・1560 横穴墓_写真

土した。

遺物は、6層上面から土師器と須恵器が、また7層から鉄鏃が出土している。出土遺物
前庭部の6層上面から完形ないし完形に近く復元できた土師器6点(図版106・110-④ 6層上面
~⑨)・埴3点(⑩~⑫)のほか、土師器と須恵器の甕破片が出土した。

土師器は6点とも非ロクロ整形の内黒、丸底坏である。法量から口径11cm程の小振りのも
の(④~⑥)と口径13.5~18.8cmのもの(⑦~⑨)がある。器形はいずれも内湾しながら外傾



図版 109 SP1559 横穴墓_平・断面図

するものであるが、体部外面の段・稜の有無、外傾度、口縁部の形などは多様である。外面の調整はヨコナデの後、下半部をヘラケズリし、粗いヘラミガキを施すものが大半を占める。内面はいずれもヘラミガキが施されている。

塚の3点はすべて非ロクロ整形の平底塚で、内黒のもの(⑩・⑪)と両黒のもの(⑫)がある。⑩は他に較べやや小振りで、外傾度が大きい。⑩・⑪の外面はヨコナデの後、口縁部付近を除きヘラケズリし、さらに全面に軽いヘラミガキを施している。⑫の内外面は丁寧なヘラミガキが施されており、前段階の調整は不明である。

この他に非ロクロ整形の土師器甕と平行叩き目のみられる須恵器甕の体部破片が少量出土しているが、詳細は不明である。

- 7 層 調査区南端の7層中からは多量の鉄鏃がまとまって出土している(図版106)。この出土状況を見ると、方向が不定で整然と並ばないことなどから、横穴墓から掻き出されたものである可能性が高いと思われる。鉄鏃はほぼ完形のもの4点のほか、鏃身11点、頸部や茎部の破片が多数あり、区を持つ資料の数から個体数は22以上とみられる。

鏃身を持つ資料を形態からⅠ～Ⅲ類に分類できる。

Ⅰ類：鏃身が刀子状の片刃のもので、12点(図版110-⑬～⑳)ある。鏃身の長さは2.7～3.0cm、幅0.8cm前後で、法量と形に規格性が窺われる。図には鏃の線を入れたが、明瞭ではない。頸部はいずれも断面が方形で、先端に向かって細まる。完形の3点を見ると、先端から区までの長さは12.9cm、茎部の長さは5.5cm程である。うち1点(⑮)は区付近に矢柄が一部残存している。矢柄は藤状のものを巻いて固定し、漆状の塗料が塗られている。

Ⅱ類：鏃身が切り出し状をなし、先端のみに刃が付けられているもので、2点(㉕・㉖)ある。茎部のみ欠損している㉖をみると、先端から区までの長さは14.2cmで、鏃身と頸部との間には明瞭な境はみられない。頸部の断面は2点とも長方形をなす。

Ⅲ類：扁平な平根鏃で、1点(㉗)ある。鏃身の幅は2.5cm以上、長さ6.0cm以上で、下半が欠損しているため詳細は不明である。

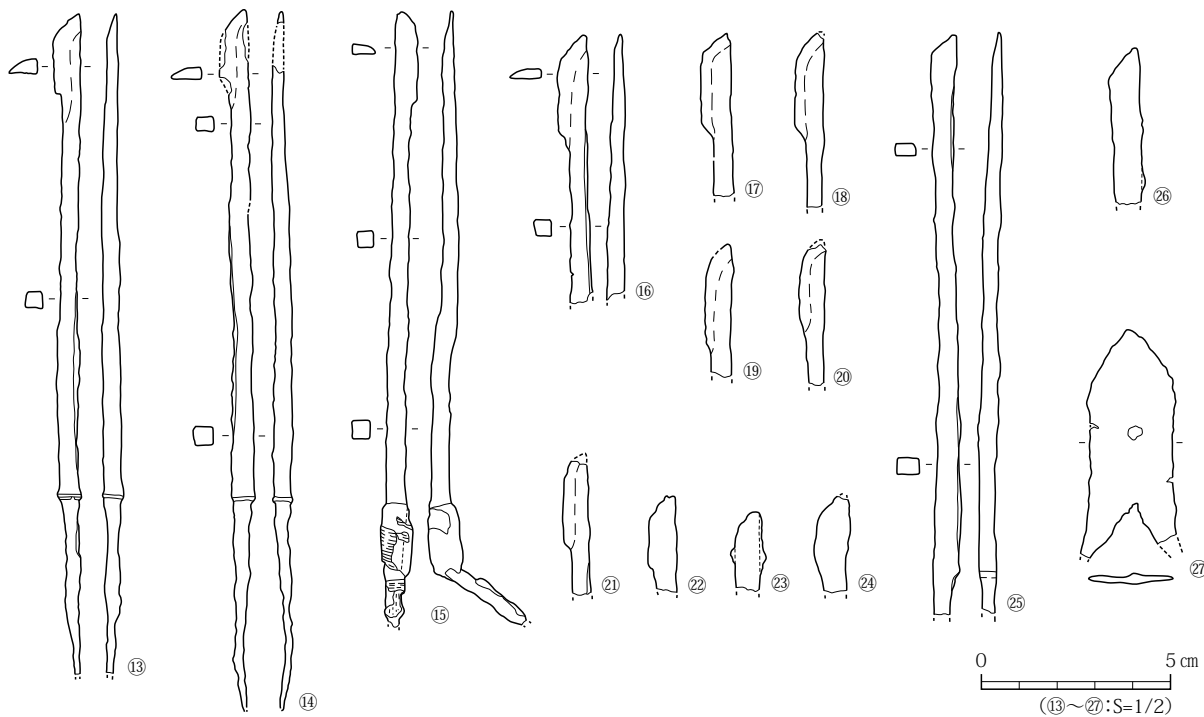
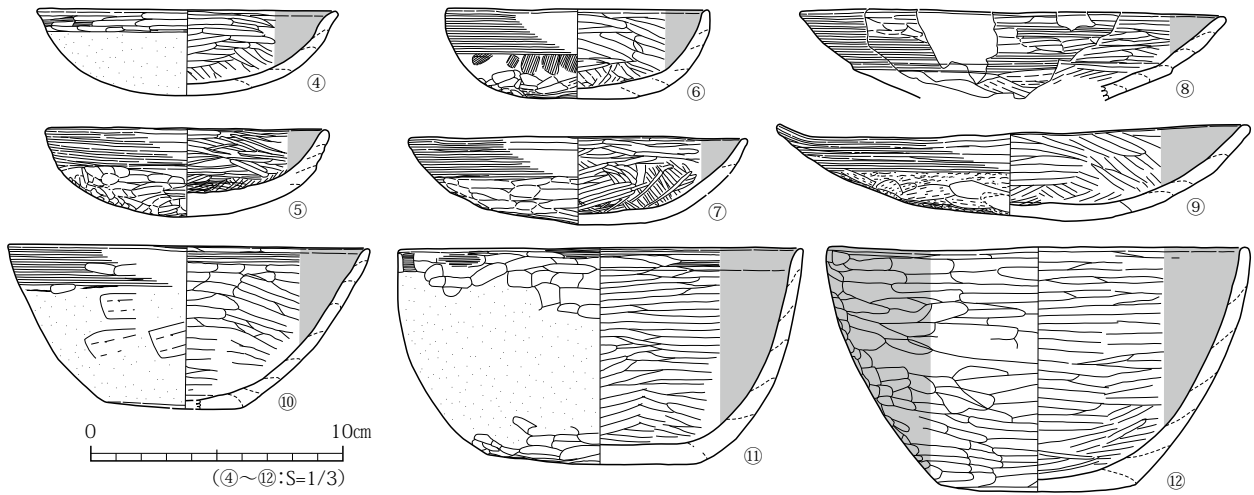
なお、頸部のみをみると大部分が断面方形のもので、この特徴からみればⅠ類に属する可能性が高い。

他に、1'層から丸・平瓦が少量出土している。丸瓦にはⅡ・ⅡB類、平瓦にはⅡB・ⅡC類がみられた。

【SP1561 横穴墓】(図版85・104・111・112)

- 位置・検出状況 SP1561はSF1556築地堀跡の南壁から0.5m程南に位置する横穴墓である。SP1560横穴墓の西に接するかたちで検出されており、玄室の奥壁寄りが奥行0.4m、幅0.8m、壁高0.8mで遺存するのみであった。

- 8 層 残存する玄室内部からその前面、さらには東側のSP1559・1560の前方まで、凝灰岩の破碎砂を主体とする褐～黄褐色もしくはオリーブ褐色の砂質シルト層(8層)が分布している。この層は玄室床面や前面の地山巨岩に直接載り、この横穴墓付近で最も厚く0.6m程あるが、東に向かって次第に薄くなる。層の上面は緩やかに南西方向へ傾斜している。

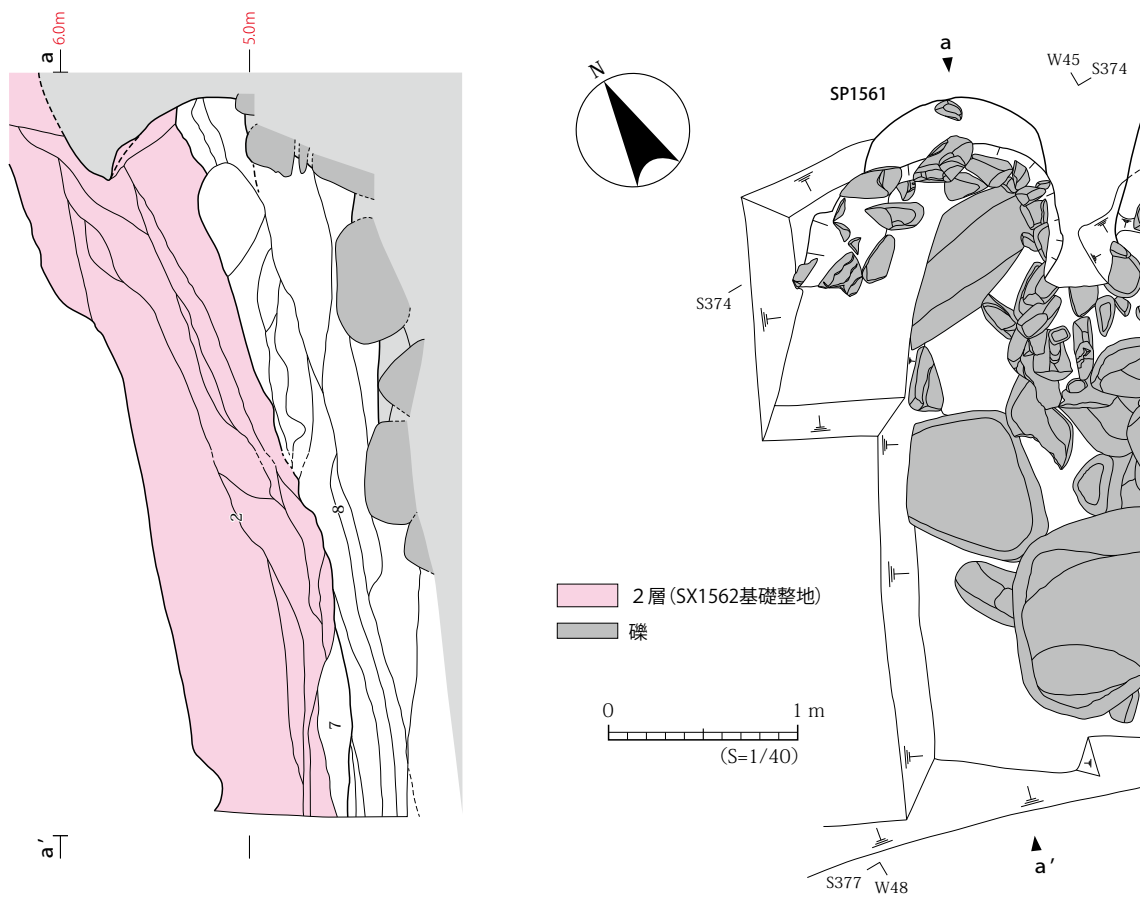


No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
④	SP1559・6層上面	48	土師器・环	完形	12.0	—	3.6	丸底 外面:ヨコナデ→下半ヘラケズリ→全面ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-4	R10	B6767
⑤	SP1559・6層上面	48	土師器・环	完形	11.4	—	3.6	丸底 稜あり 外面:ヨコナデ→下半ヘラケズリ→下半粗いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-5	R6	B6767
⑥	SP1559・6層上面	48	土師器・环	完形	10.5	—	3.6	丸底 外面:ナデ・ヨコナデ→下半ヘラケズリ→下半粗いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-6	R8	B6767
⑦	SP1559・6層上面	48	土師器・环	ほぼ完形	13.5	—	3.6	丸底 外面:ヨコナデ→下半ヘラケズリ→下半粗いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-8	R7	B6767
⑧	SP1559・6層上面	48	土師器・环	ほぼ完形	17.0	—	—	丸底 段あり 外面:ヨコナデ→下半ヘラケズリ→下半粗いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-14	R9	B6767
⑨	SP1559・6層上面	48	土師器・环	完形	18.9	—	3.6	丸底 外面:ヨコナデ→下半ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-7	R12	B6767
⑩	SP1559・6層上面	48	土師器・碗	ほぼ完形	14.4	5.6	6.6	平底 外面:ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面軽いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-9	R11	B6766
⑪	SP1559・6層上面	48	土師器・碗	完形	16.2	8.4	8.7	平底 外面:ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面軽いヘラミガキ 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-11	R5	B6766
⑫	SP1559・6層上面	48	土師器・碗	ほぼ完形	17.0	7.8	9.9	平底 外面:ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面ヘラミガキ+黒色処理 内面:ヘラミガキ+黒色処理	130-10	R4	B6766
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	刃幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
⑬	SP1559・7層	48	鉄鏃	ほぼ完形	(17.5)	0.8	0.4	I類	135-7	RM1	B13923
⑭	SP1559・7層	48	鉄鏃	ほぼ完形	(18.5)	0.9	0.4	I類	135-8	RM2	B13923
⑮	SP1559・7層	48	鉄鏃	ほぼ完形	(16.8)	0.7	0.5	I類 区付近に矢柄の一部が残存	135-9	RM3	B13923
⑯	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(7.2)	0.9	0.4	I類	135-11	RM4	B13923
⑰	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(4.5)	0.9	—	I類	135-12	RM5	B13923
⑱	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(4.8)	0.8	—	I類	135-15	RM6	B13923
⑲	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(3.6)	0.7	—	I類	135-14	RM7	B13923
⑳	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(3.8)	0.7	—	I類	135-13	RM8	B13923
㉑	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(3.6)	0.8	—	I類		RM9	所在不明
㉒	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(2.8)	0.8	—	I類		RM10	所在不明
㉓	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(2.2)	1.0	—	I類		RM11	所在不明
㉔	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(2.6)	1.0	—	I類		RM12	所在不明
㉕	SP1559・7層	48	鉄鏃	5/6	(15.3)	0.7	0.4	II類 茎端部を欠損	135-10	RM13	B13923
㉖	SP1559・7層	48	鉄鏃	破片	(4.2)	—	—	II類		RM14	所在不明
㉗	SP1559・7層	48	鉄鏃	1/2	(6.0)	(2.5)	0.2	III類 下半欠損	135-16	RM15	B13923

図版 110 SP1559 横穴墓 出土遺物

重複・堆積土 床や地山面との間に堆積層や崩壊土などがみられないことから、SP1561 とその前面から SP1559・1560 前方にかけてを一度削平し、盛土整地したものと考えられる。8層の分布範囲とその後の堆積土の状況からみて、SP1559・1560 の構築はこの整地後に行われており、削平と盛土が SP1559・1560 の前庭部を造成する目的で行われた可能性が窺われる。

また、築地塀の SX1562 基礎整地（2層）との関係を見ると、8層上を2層がほぼ直接覆っており、部分的に間層として7層が残存している。基礎整地直前の自然堆積土である3層が全く認められないことから、築地塀の基礎地業に際して軟質の自然堆積土が除去され、基礎整地層で

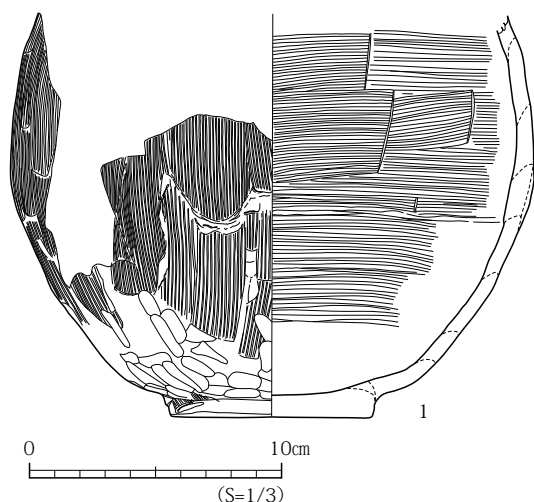


SP1561 横穴墓（48次、南西から）



SP1561 横穴墓（48次、南東から）

図版 111 SP1561 横穴墓_平・断面図、写真



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高
	SP1561・8層	48	土師器・甕	1/2	—	8.0	—
1	特 徴			写真図版	登録	箱番号	
	非ロクロ整形 胴張りで胴下部が膨らむ				R16	B6768	

図版 112 SP1561 横穴墓 出土遺物

埋め立てられたものと考えられる。

8層中から非ロクロ整形の土師器甕1点(図版112-1)が出土している。口縁部を欠くが、胴張りで胴部下半が膨らむ。胴部外面はヘラナデ状刷毛目の後に粗いヘラミガキが、内面は全面にヘラナデが施されている。底部外面はヘラケズリされている。

出土遺物

【SP2660 横穴墓】(図版 85・113)

SP2660はSF1556築地堀跡の北壁から2m程北に位置する横穴墓である。南西に開口し、長軸方向は東西の発掘基準線に対して東で約23°北に偏している。天井部と北壁が大きく削平され、全体が築地堀のSX1562

位置・検出状況

基礎整地下に埋もれていた。

本横穴墓の羨道部は、北側に隣接するSP2661横穴墓の前庭部と重複しており、SP2661の前庭部を構築した後に、この前庭部をそのまま利用もしくは南東側へ僅かに拡張して本横穴墓が造営されている。また、SX1562との関係は、基礎整地層が玄室床面直上の薄い堆積層を直接覆っていて、他の堆積層や天井崩落土がみられないことから、築地堀の基礎地業施工時に天井部と堆積土が除去され、基礎整地層で埋め立てられたものと考えられる。

重 複

平面形は奥行きが長い長方形を基調とし、奥壁に向かって徐々に幅が狭くなる。全長2.5m、玄室奥行1.7m、玄門部0.3m、羨道部長0.5m、幅は奥壁で約0.4m、玄門部から羨道部は0.8m程である。

形態・規模

床面はほぼ平坦であるが、奥壁側から羨道側へ向かって約7°の傾斜があり、羨道部前端は玄室奥壁下端より0.4m程低い。また、床面には玄室前半から前庭部にかけての中軸線上を伸びる長さ1.1m、幅7～10cm、深さ3cmの排水溝がある。残存する壁の高さは奥壁が0.4m、南壁が0.6mで、床から丸みをもって立ち上がり、屈曲して天井部に至る。壁や床には、部分的に構築時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性は認められない。

玄門部左右壁際の床面には、閉塞施設に関連するとみられる長軸0.2～0.35mの不整円もしくは楕円形を呈し、深さ0.1m弱の浅い窪みが残る。

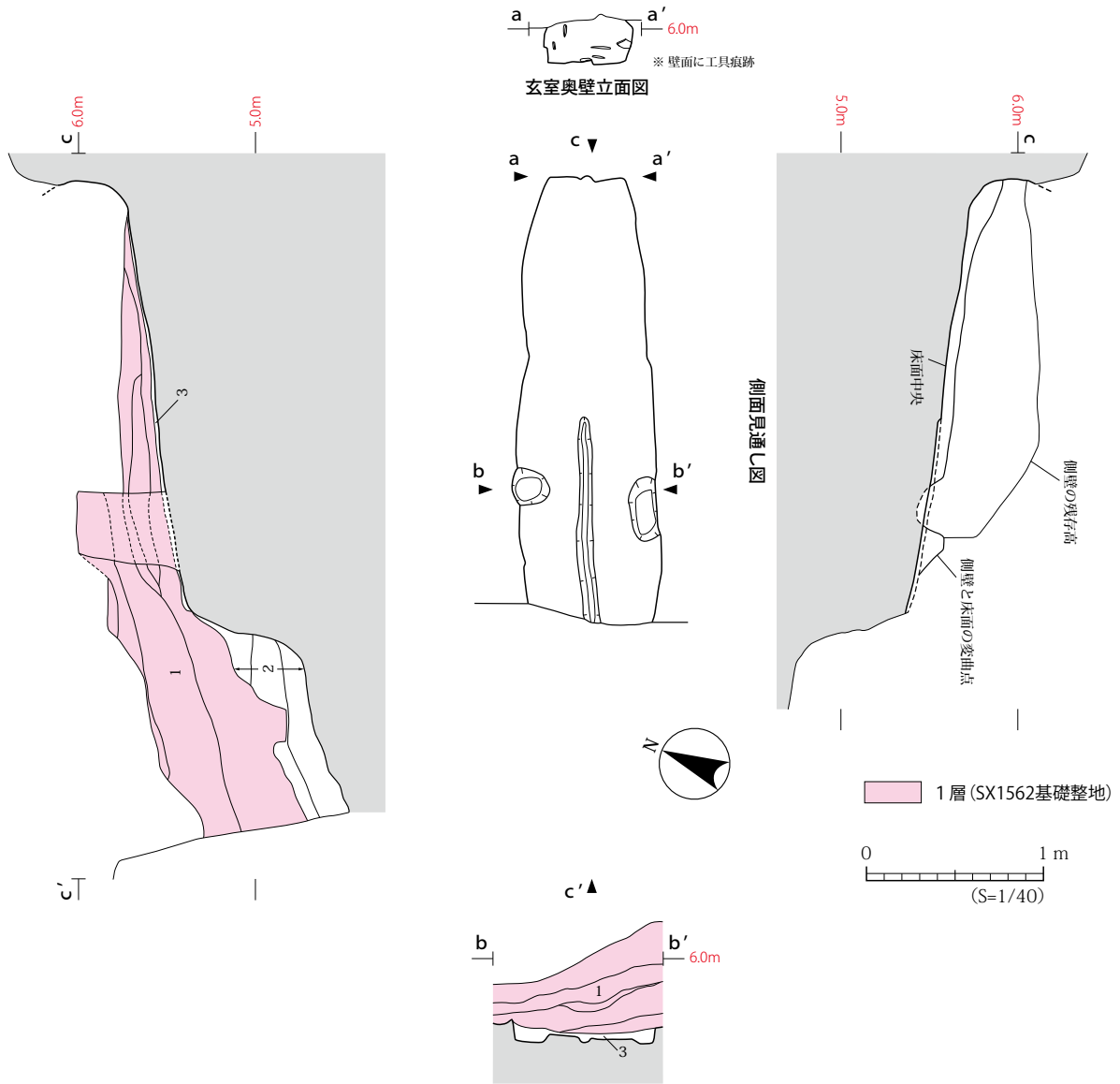
堆積土をみると、玄室から羨道部の床面直上に厚さ3cm前後の黒褐色シルト層(3層)が薄く堆積し、前庭部の床面には厚さ25～40cmの褐～黄褐色シルト層(2層)が認められる。その上はSX1562基礎整地層(1層)で埋め戻されていた。遺物は出土していない。

堆 積 土

【SP2661 横穴墓】(図版 85・114～117)

SP2661はSF1556築地堀跡の北壁から3m程北に位置する横穴墓である。南西に開口し、長軸方向は東西の発掘基準線に対して東で北に約25°偏している。前庭部は築地堀のSX1562基

位置・検出状況



SP2660 横穴墓 (72次、南西から)



SP2660 横穴墓とSX1562基礎整地 (72次、北西から)

図版 113 SP2660 横穴墓_平・断面図、写真

礎整地に覆われていた。

本横穴墓の前庭部は、南側に隣接する SP2660 横穴墓の羨道部と重複しており、本横穴墓の前庭部構築後に、この前庭部をそのまま利用もしくは南東側に僅かに拡張して SP2660 横穴墓が造営されている。また、SX1562 基礎整地との関係は、基礎整地層(2層)が前庭部堆積層(4層)から羨道部の天井崩落土層(3層)を覆っていることと、玄室部では天井崩落土層(3層)の上に灰白色火山灰(To-a)を含む自然堆積層^(註31)がみられることから、玄室天井部は築地塀の基礎整地後に崩壊し、灰白色火山灰が降下した10世紀前葉頃には玄室上部が窪地となっていたと考えられる。

重 複

平面形は、奥壁に丸みがあり、側壁が玄門から奥壁へ向けて直線的に開く扇形を呈する。全長3.1 m、玄室奥行2.15 m、玄門部0.4 m、羨道部長0.55 m、幅は奥壁で2.8 m、玄門部内側で1.8 m、玄門部は1.2 m、羨道部は玄門外側で1.3 m、羨門部1.05 mである。

形態・規模

床面はほぼ平坦であるが、奥壁側から前庭部側に傾斜し、玄門と羨門の床にはそれぞれ約10 cmの段差が認められる。また、床面には玄室部の壁際を巡り玄門に至る幅3～10 cm、深さ5 cm程の排水溝と、玄室前半から玄門部にかけての中軸線上を伸びる長さ1.45 m、幅5～10 cm、深さ5 cm程の排水溝がある。残存する壁の高さは0.8 m前後で、床から内傾気味に立ち上がる。壁や床には、部分的に構築時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性は認められない。

奥に向かって開く玄門と羨道を経て「コ」字形に開く前庭部に至る。羨道部には閉塞施設として積まれていた人頭大(径25～45 cm)の自然石が2～3段残る。

堆積土は6層に大別される。まず、玄室から前庭部までの床面直上に厚さ3 cm前後の黒褐色シルト層(6層)が堆積し、その上に玄室から玄門部にかけては暗褐～黄褐色シルト層(5層)、羨道から前庭部にかけては褐～黄褐色シルト層(4層)が厚さ20～30 cmで堆積している。さらに上の玄室から羨道部では主に凝灰岩片からなる天井崩落土(3層)、羨道から前庭部では築地塀基礎整地層(2層)が認められる。最終的な玄室部天井崩落土上の窪みには灰白色火山灰を含む暗褐色シルト層(1層)が堆積する。

堆 積 土



SP2661 横穴墓 (72次、南西から)



SP2661 横穴墓 (72次、北西から)

図版 114 SP2661 横穴墓_写真



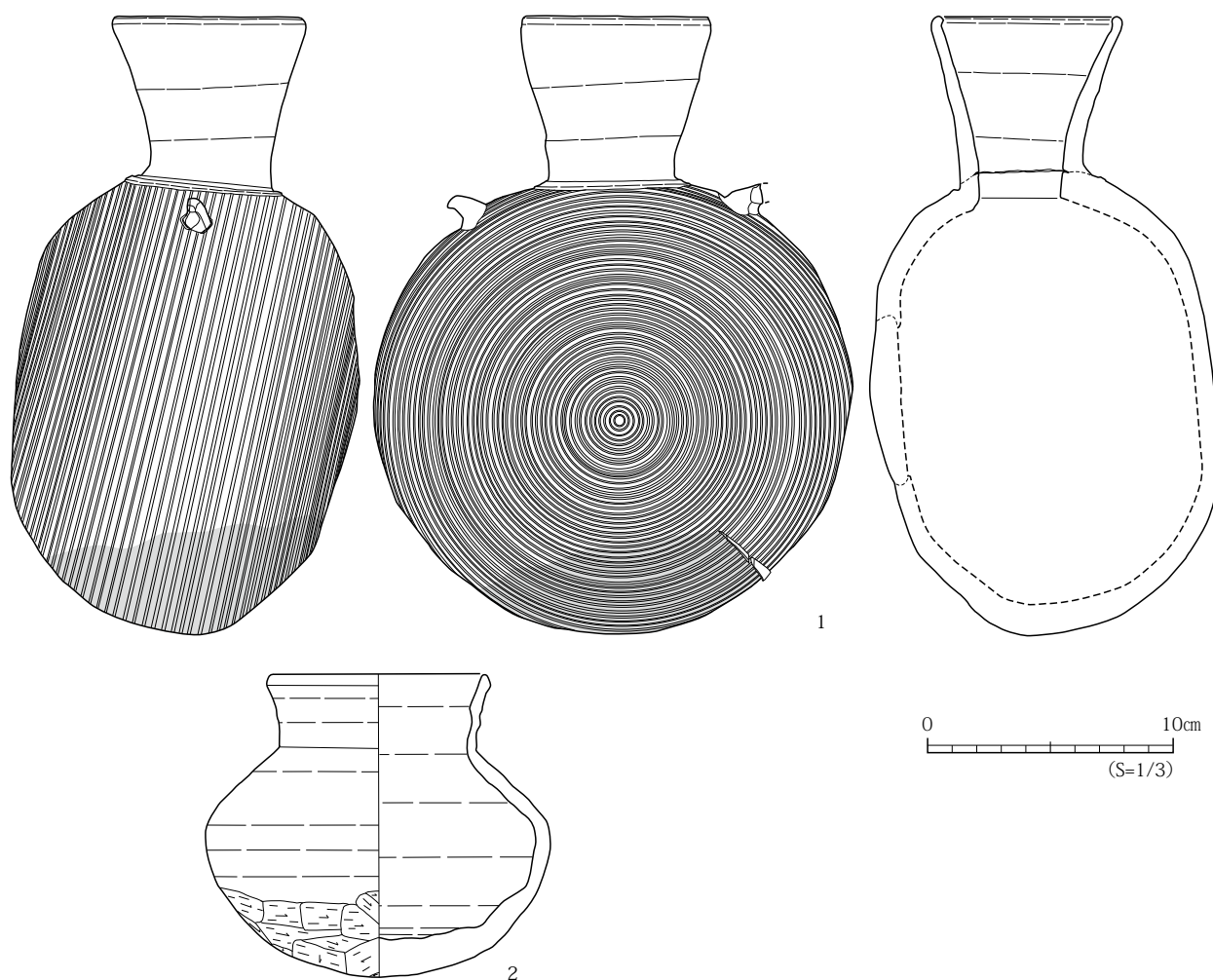
図版 115 SP2661 横穴墓_平・断面図

玄室床面から、土器、鉄刀、刀子、鉄鏃が出土している。このうち、鉄刀（図版 117-1）
出土遺物
は玄室奥壁沿いの北側、鉄鏃（2）は南側の床面から出土した。須恵器提瓶（図版 116-1）・
短頸壺（2）は玄門北壁沿いに立てかけられた状態で出土した（図版 115）。

鉄刀は全長約 90cm、身幅約 2.5cm の刀身がほぼ完存する直刀である。錆化が著しく拵えや細
鉄刀・鉄鏃
部は不明である。茎尻に目釘が残り、その片側に倒卵形で八窓の板鏢の破片が錆着している。鉄
鏃は長さ 15cm の長頸式の端刃箭で、茎部に矢柄の木質と糸巻きの痕跡が残る。

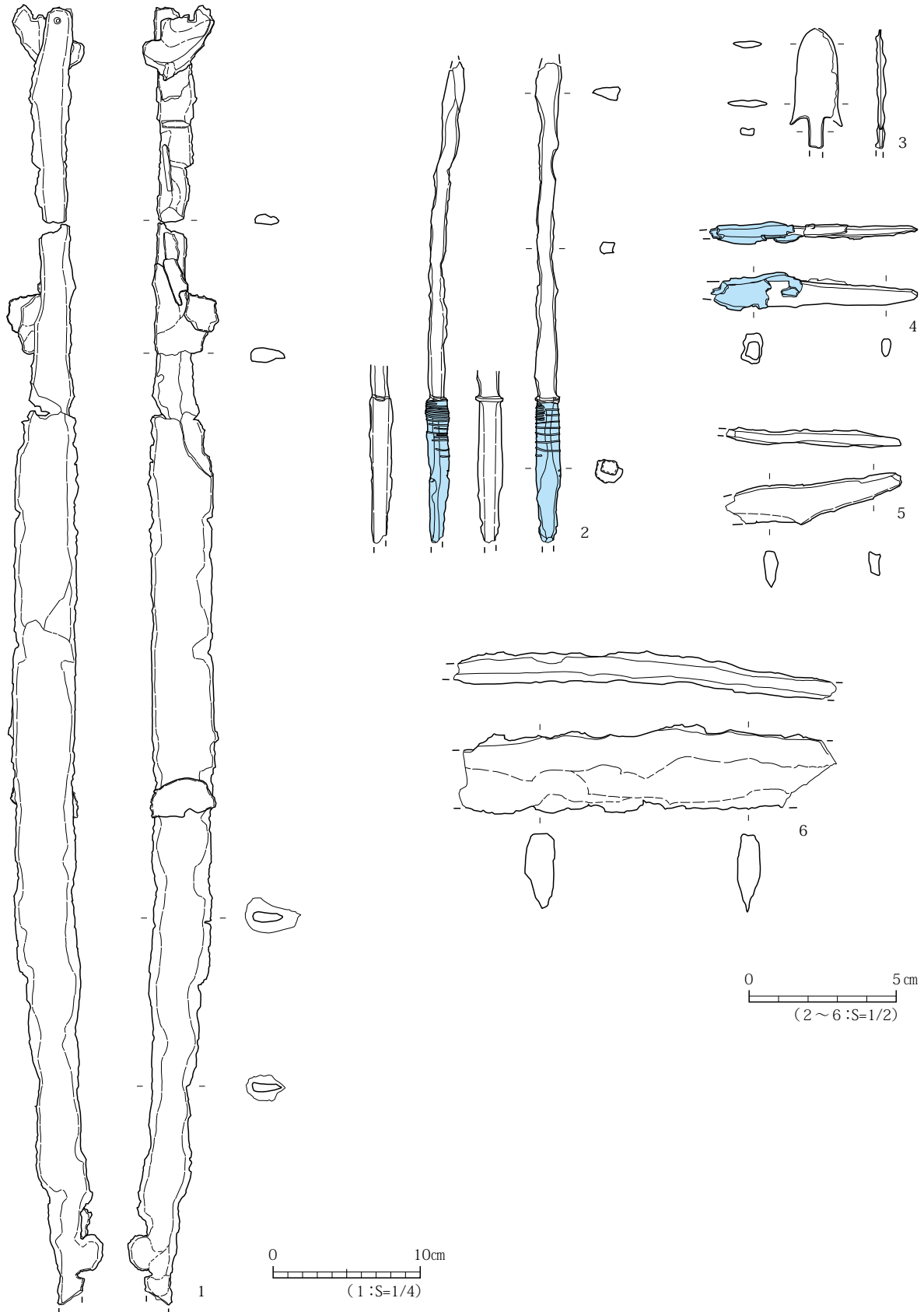
須恵器提瓶は、口縁部をわずかに欠くがほぼ完形である。単純に開く無文の口頸部で、口縁端
須恵器
部は内屈している。外面の胴部全体にカキメが施され、肩部に鈎手状の把手が付く。底部に残る
楕円形の焼台痕跡の部分を除き、ほぼ全面に黒灰色の光沢を帯びた自然釉がかかる。短頸壺は、
口縁部がほぼ直立し、肩の張る器形で、体部下半に手持ちヘラケズリが施されて丸底である。

この他、玄室床面もしくはその直上の 6 層から、鉄刀、刀装具の破片や鉄鏃、刀子の破片が
出土している（図版 117-3~6）。また、玄室内の 4 層には土師器有段丸底坏、陥没坑に堆積し
その他の遺物
た 1 層には須恵系土器がみられるが、いずれも小破片である。なお、1 層からは丸・平瓦も出土
しており、丸瓦では II・II B 類、平瓦では I A・I B・II B・II C 類が認められた。



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SP2661・床	72	須恵器・提瓶	ほぼ完形	8.0	—	25.2	焼成堅緻 肩部に鈎手状の把手 円盤閉塞 胴部全体にカキメ 底部に焼台痕跡	130-13	SP2661-R1	B 13235
2	SP2661・床	72	須恵器・短頸壺	完形	8.9	—	12.6	焼成軟質 丸底 底部に手持ちヘラケズリ	130-12	SP2661-R2	B 13235

図版 116 SP2661 横穴墓 _ 出土遺物 (1)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	刃幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SP2661・床	72	鉄刀	ほぼ完形	(90.0)	2.5	0.8	茎尻に目釘穴1つ 茎に倒卵形の八窓板鏝の破片が付着 関は不明	135-1	72RM-1	B 13242
2	SP2661・床	72	鉄鏃	5/6	(15.0)	(0.9)	(0.4)	長頸式の端刃箭 茎に矢柄の木質と糸巻きの痕跡が残る	135-2	72RM-2	B 13242
3	SP2661・床	72	鉄鏃	1/2	(4.0)	(1.8)	(0.2)	平根式の逆刺を有する鏃	135-3	72RM-3	B 13242
4	SP2661・床	72	刀子	1/2	(7.0)	(1.0)	(0.4)	刃部に木質が残存	135-4	72RM-4	B 13242
5	SP2661・床	72	刀子	1/2	(6.0)	(1.3)	(0.4)	刃部に木質が残存	135-5	72RM-5	B 13242
6	SP2661・床	72	鉄刀	破片	(13.0)	(3.0)	(1.0)	刃部のみ破片	135-6	72RM-6	B 13242

図版 117 SP2661 横穴墓_出土遺物(2)

v. 基本層序各層の出土遺物 (図版 118 ~ 129)

基本層序の第 I (表土)・II 層からは多量の瓦と少量の土器、鉄製品、土製品、石器などが出土している。第 48 次調査では、第 V 層 (旧表土) や地山 (第 VI 層) 確認面からも瓦類が出土しているが、これらは主に南門西側で大規模な削平・攪乱を受けている SF1556 築地堀跡の南側斜面から取り上げており、上位にあたる第 I・II 層からの混入と理解される。また、再調査の際に除去した旧調査の埋め戻し土や攪乱などから出土した遺物もある。これら遺物の主体は瓦類で、その分類ごとの出土量は第 11 ~ 15 表に示す通りである。ここでは、出土した古代の瓦のうち、代表的なものやこれまでに報告されていない種類のもの、赤色顔料が付着しているものなどと、土器、鉄製品を層毎に掲載し、特徴的な遺物につてのみ説明を加える。

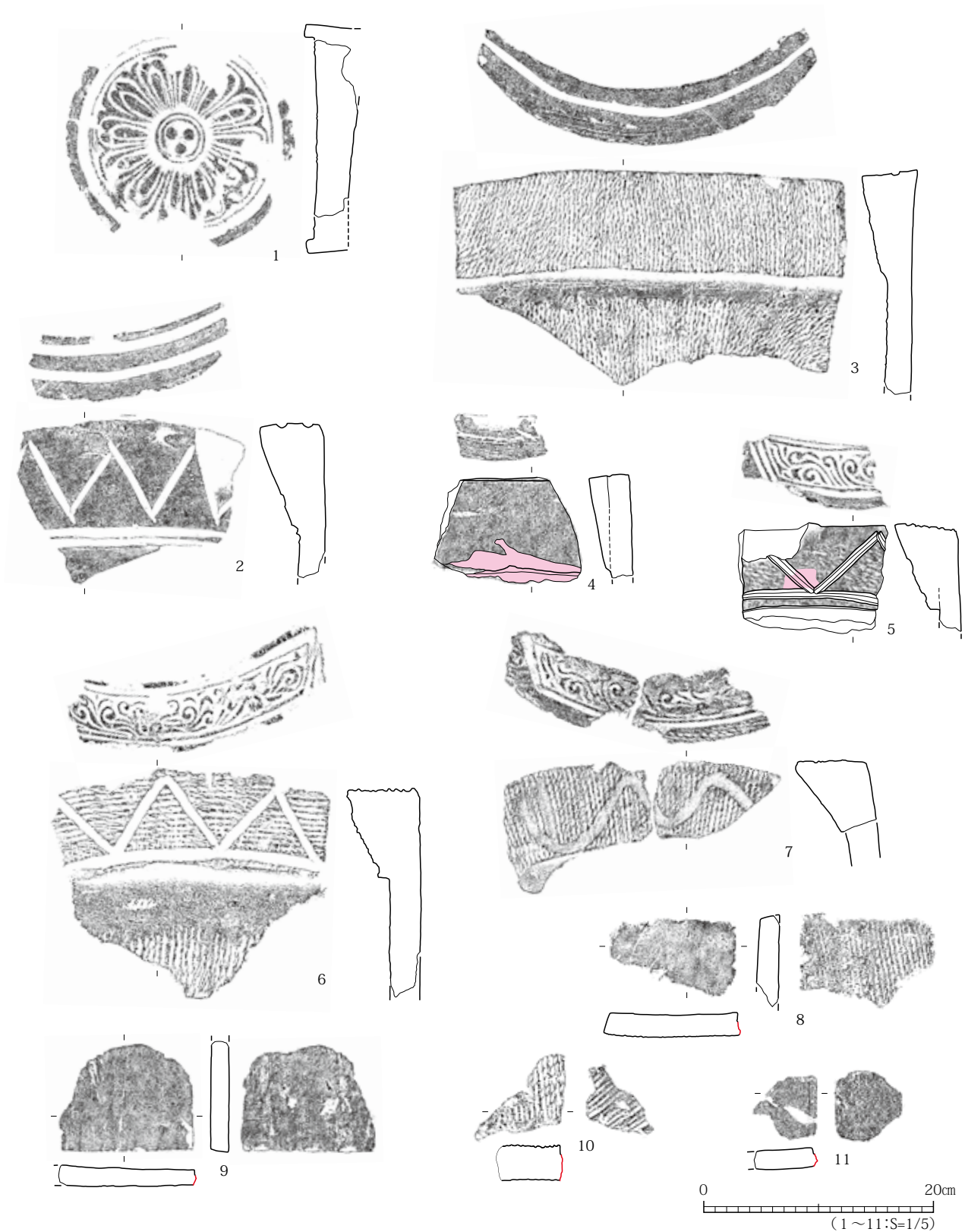
なお、第 I・II 層中には近世以降の瓦類や陶磁器類が含まれていたが図示していない。近世の瓦類は多賀城碑覆屋周辺から出土したもので、覆屋に用いられていた屋根瓦とみられる。いずれもいぶし瓦で、本瓦と棧瓦の 2 種類があり、本瓦には巴文軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、烏衾、鬼瓦の破片などの種別がある。巴文軒丸瓦は、大きな三巴文と巴文の周辺に連珠の巡るもので、後者はさらに巴の小さなものと大きなものに分けられる。烏衾の瓦当文様は梅花である。鬼瓦は右耳部分と顎髭の部分の破片である。

軒丸瓦は 131 点、軒平瓦は 249 点出土している。その中の図版 121 - 12 は軒平瓦の瓦当部小破片で、瓦当面全体の文様構成は判然としないが、側端部を彫り残した手描きによる太い横位沈線が認められ、新種の可能性がある。この 1 点のみの出土である。

図版 122 - 1 ~ 3 は鬼板 953 とみられる破片である。中央に配された大型の重弁蓮花文の周縁を連珠文と唐草文がめぐる文様構成で、裏面には篲の子状の圧痕がみられる。図版 129 - 2 も先の 3 点と胎土・焼成の特徴と裏面に篲の子状の圧痕が認められる点で共通しており、厚さもほぼ同じである。同様に鬼板 953 とみられる脚部破片で、唐草文? が配されている。図版 122 - 4 は鬼面鬼板 960 の目から頬にかけての破片とみられる。

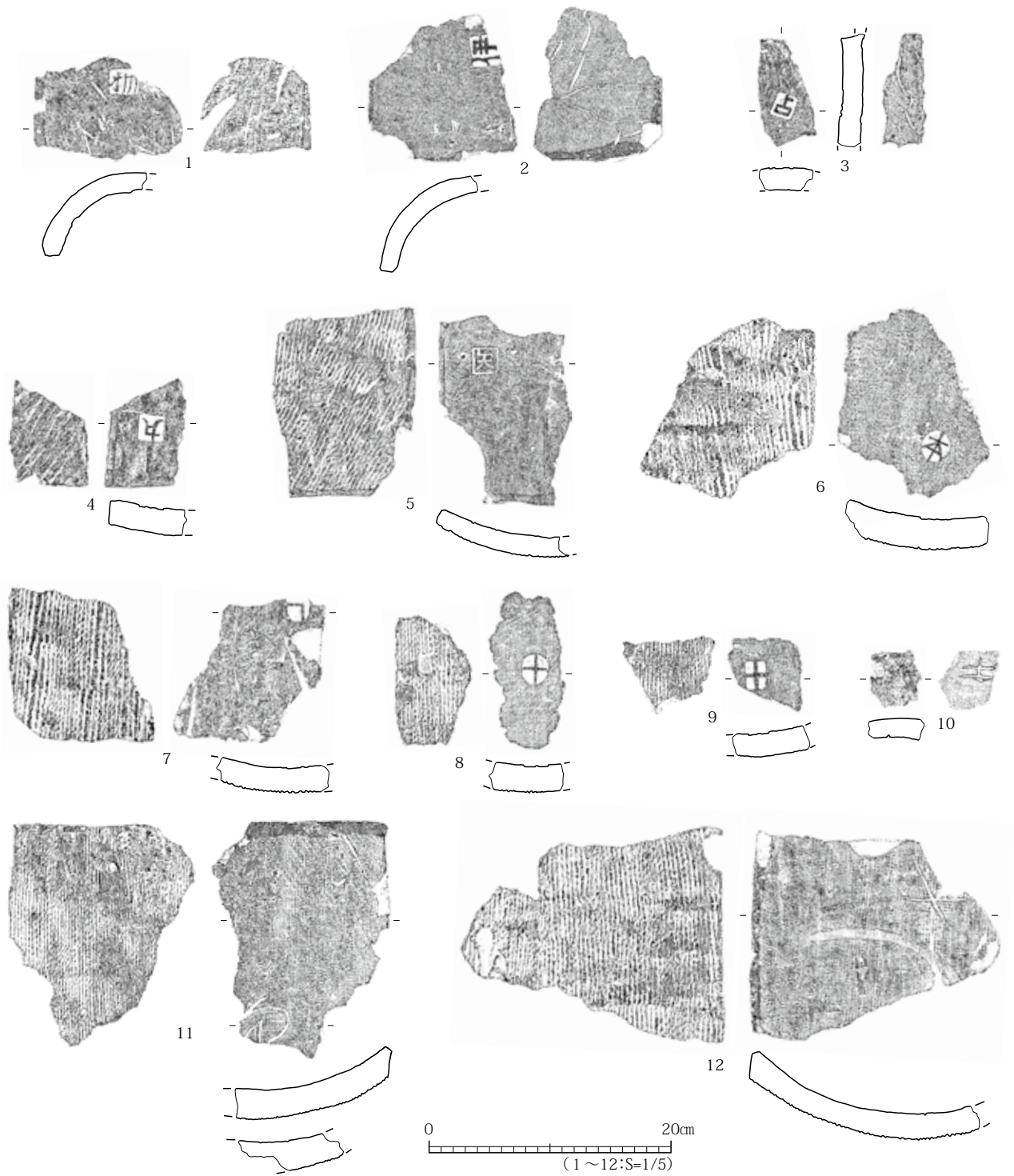
図版 122 - 5 は面戸瓦で、凹面に布目がみられ、凸面はロクロナデされている。凸面には前工程の縄叩き目が残し、端部はヘラケズリで加工されている。図版 118 - 8 ~ 11・122 - 6 ~ 9 は熨斗瓦である。表裏面ともに布目と縄叩き目が重複してみられるものと、一方の面にナデ、他方の面につぶれ気味の縄叩き目がみられるものがあり、後者が多い。分割線が認められるものは、すべて一側面に限られる。図版 122 - 10・11 は隅切瓦で、いずれも平瓦 II B 類の隅を焼成前に切り落としたものである。その他、用途不明の道具瓦として図版 122 - 12 ~ 17 などがある。

刻印瓦は 194 点出土している。この中の図版 122 - 18 は丸瓦 II B 類の凸面に「占」の文字が押印された刻印瓦で、字体がこれまでのものとは異なる新出 (「占」B) である。また、図版 123 - 13、124 - 6 で平瓦 II C 類の凹面にみられる刻印文字の「古」、「下」と、図版 124 - 1、125 - 2 で平瓦 II C 類の凹面、図版 124 - 7 で丸瓦 II 類の凹面にみられる刻印記号も新出である。図版 124 - 1 の刻印記号は『本文編』PL.104-11 に類似するが、印の形状が円形で、3 本線の間隔が狭い点で異なる。図版 125 - 2 は大型の円、124 - 7 は PL.104-13 の陰陽を反転し



No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第Ⅱ層	48	軒丸瓦311	瓦当部完形	—	—	—	(3.5)	細弁蓮花文 瓦当面径：20.0cm		R12	B6748
2	第Ⅱ層	48	軒平瓦511	瓦当部1/2	—	—	—	5.5	二重弧文 aタイプ		R11	B6749
3	第Ⅵ層確認面	48	軒平瓦640	瓦当部完形	—	—	29.5	5.0	単弧文 a1タイプ 平瓦部厚さ：(2.3cm)		R1	B6750
4	第Ⅱ層	48	軒平瓦641	瓦当部1/4	—	—	—	(4.0)	無文 顎面に赤色顔料付着	131-6	R4	B6751
5	第Ⅱ層	48	軒平瓦721A	瓦当部1/3	—	—	—	(5.5)	均整唐草文 顎面に赤色顔料付着	131-8	R4	B6752
6	第Ⅱ層	48	軒平瓦721A	瓦当部2/3	—	—	—	(6.5)	均整唐草文 平瓦部はⅡBa3類 平瓦部厚さ：2.8cm		R3	B6752
7	第Ⅱ層	48	軒平瓦721B	瓦当部2/3	—	—	—	(6.5)	均整唐草文		R2	B6752
8	第Ⅱ層	48	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	11.8	—	(1.9)	左面：布目→ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 分割線の深さ：0.7cm		追R44	B6690
9	第Ⅱ層	48	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	12.0	—	(1.5)	左面：布目→ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 分割線の深さ：0.5cm		R9	B6753
10	第Ⅱ層	48	熨斗瓦	破片	—	—	—	(3.0)	左面：縄叩き目 右面：布目(糸切り痕残る) 分割線の深さ：0.8cm 焼瓦		R34	B6753
11	第Ⅱ層	48	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(1.7)	左面：布目→ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 分割線の深さ：0.5cm		R32	B6753

図版 118 第Ⅱ・Ⅴ層および第Ⅵ層確認面_出土遺物(1)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第Ⅱ層	48	丸瓦ⅡB	破片	-	-	-	(1.8)	器面黒色 丸瓦部凸面に刻印文字「物」B		R26	B6754
2	第Ⅱ層	48	丸瓦Ⅱ	破片	-	-	-	(1.8)	凸面に刻印文字「伊」		R5	B6755
3	第Ⅱ層	48	丸瓦ⅡB	破片	-	-	-	(2.0)	丸瓦部凸面に刻印文字「占」A		R2	B6755
4	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡB	破片	-	-	-	(2.3)	凹面に刻印文字「丸」A		R20	B6754
5	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡB	破片	-	-	-	(2.0)	a タイプ2 凹面に刻印文字「矢」A		R6	B6754
6	第Ⅴ層	48	平瓦ⅡC	破片	-	-	-	(2.8)	凹面に刻印文字「本」		R5	B6755
7	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡC	破片	-	-	-	(1.8)	凹面に刻印記号（『本文編』PL.104-2）		R3	B6755
8	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡC	破片	-	-	-	(2.5)	凹面に刻印記号（『本文編』PL.104-9） 凸面に隅丸方形の窪み？		R4	B6755
9	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡC	破片	-	-	-	(2.0)	凹面に刻印記号（『本文編』PL.105-2）		R11	B6755
10	第Ⅴ層	48	丸瓦Ⅱ	破片	-	-	-	(1.8)	凹面にヘラ書き「土」？		R25	B6757
11	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡC	1/4	-	-	-	(2.5)	凹面にヘラ書き（不明）		R16	B6756
12	第Ⅱ層	48	平瓦ⅡC	1/4	-	-	-	(2.3)	凹面にヘラ書き「×」+指書き？の弧線		R8	B6756

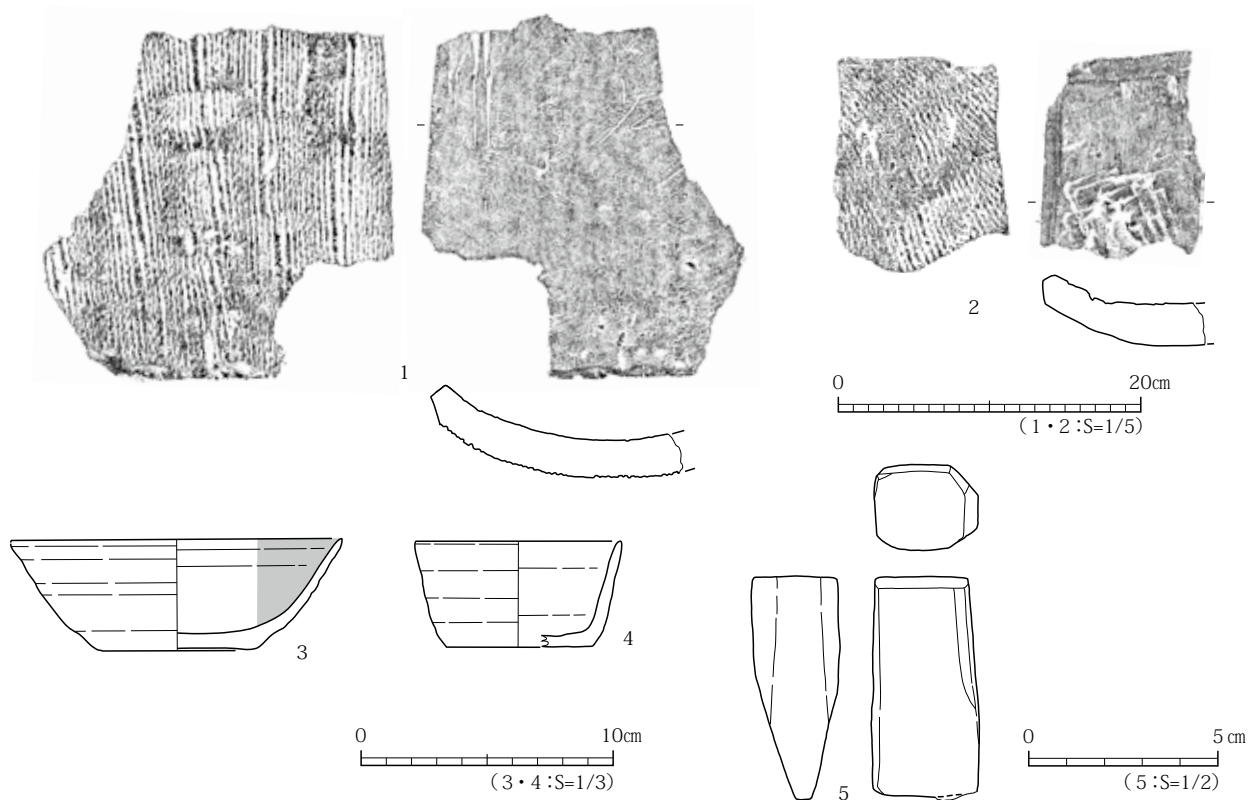
図版 119 第Ⅱ・Ⅴ層および第Ⅵ層確認面_出土遺物(2)

た形の刻印記号である。なお、図版 129 - 3 の刻印記号 PL.105-7 は平瓦 II C 類の小口に押されたもので、これまで知られていた平瓦 II B 類への押印とは異なる。

ヘラ書き瓦 ヘラ書き瓦は 362 点出土している。断片的な資料が大半で、文字もしくは記号の判読不能なものが多い。比較的残りが良く、判読可能なものを中心に図版 119 - 10 ~ 12、120 - 1、125 - 3 ~ 11、126 - 1 ~ 15、129 - 4 に示した。平瓦 II C 類の凹面にヘラ書きされたものが圧倒的に多く、次に丸瓦 II 類の凹面へのヘラ書きが多い。

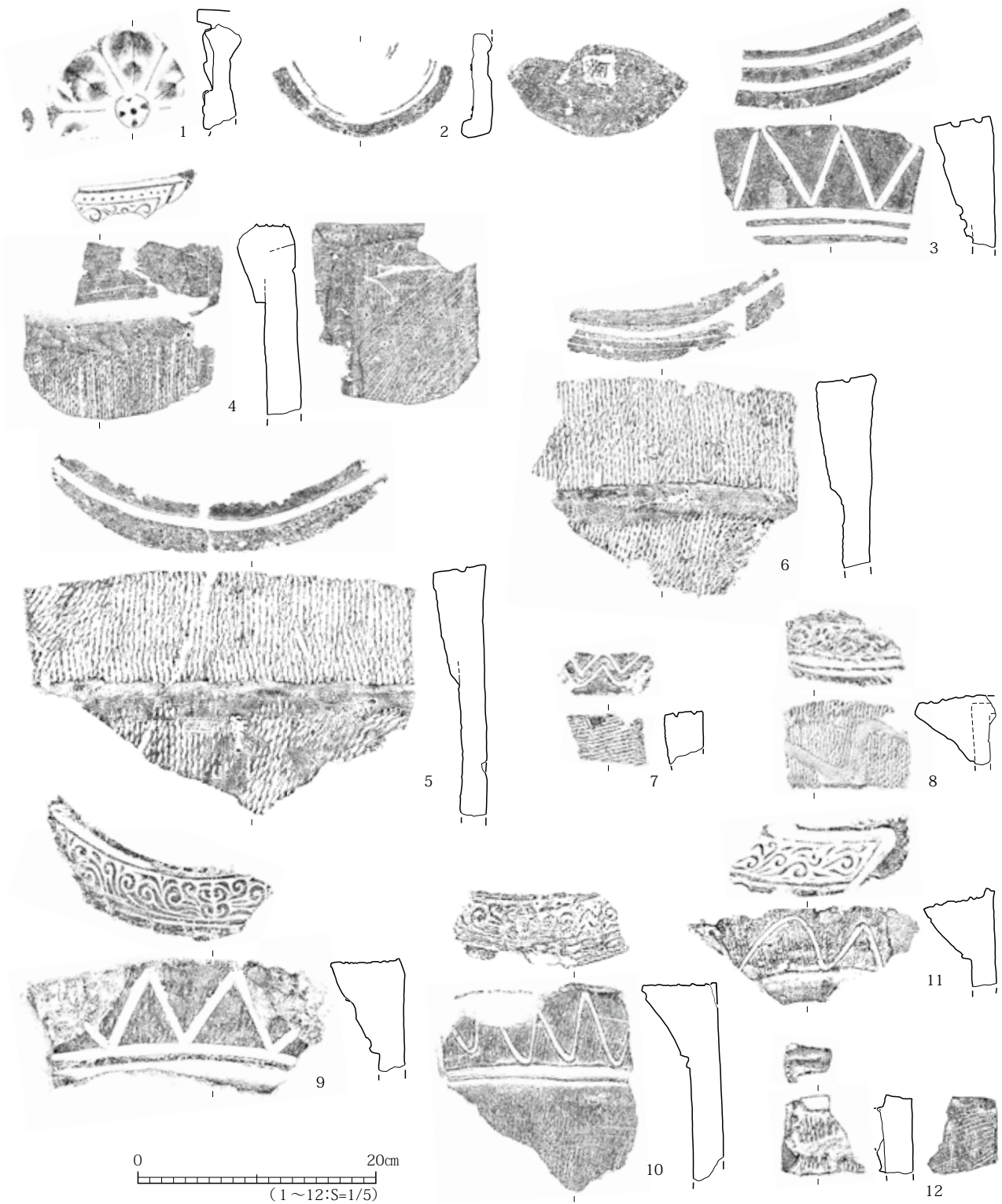
平瓦 平瓦では、図版 127 - 5 ~ 9 に示すような凹面に縄叩き目がみられる一枚作りのものが計 15 点出土している。図版 127 - 5 以外では、凸面にはつづれ気味の縄叩き目もしくは縄叩き目とそれを切る布目が残り、凹面では縄叩き目前の布目、後のナデが認められるものもある。図版 127 - 5 の凸面は布目後に粘土が貼り付けられており、さらに縄叩きが施されている。凹面には縄叩き目とそれを切る布目が認められる。いずれも破片資料で出土量も少ないため、道具瓦などの一部である可能性は残るが、これまでにみない種類の平瓦である。

土器 古代の土器類は土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器が出土しているが、ほとんどは小破片である。土師器には坏（図版 120 - 3）・高台坏・耳皿（図版 128 - 1）・甑がみられた。須恵器は坏（図版 120 - 4）・蓋・高台坏（図版 128 - 2）・瓶（図版 128 - 3・4）・甕がある。



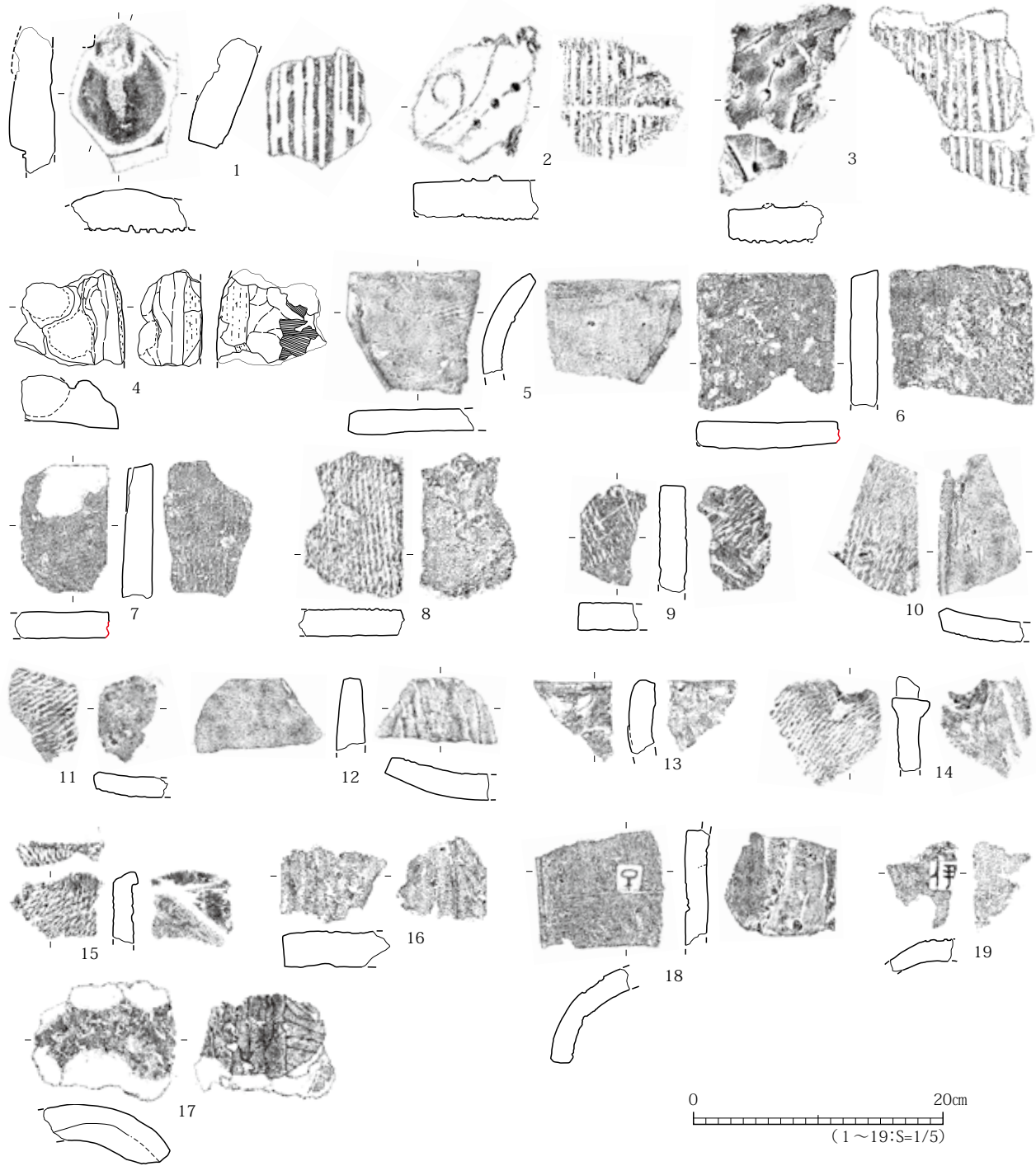
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第V層	48	平瓦II C	1/2	—	—	2.5	凹面にヘラ書き（不明）		R 15	B 6756
2	第II層	48	平瓦II C	破片	—	—	(2.9)	凹面に複数回押された刻印？（不明）		R 33	B 6753
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
3	第II層	48	土師器・坏	1/2	(13.2)	6.3	4.5	ロクロ整形 底部：回転糸切り無調整 内面：剥落著しく、調整不明+黒色処理？		R 30	B 6764
4	第II層	48	須恵器・坏	1/2	(8.3)	(5.8)	4.2			R 7	B 6764
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
5	第II層	48	甕状鉄製品	完形	5.8	2.8	2.4		135-18	RM26	B 13923

図版 120 第II・V層および第VI層確認面 _ 出土遺物 (3)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	48	軒丸瓦131?	瓦当部1/3	-	-	-	(3.0)	重弁蓮花文		R3	B6747
2	第1層	48	軒丸瓦240	瓦当部1/2	-	-	-	(2.8)	重圈文 裏面に刻印文字「物」A 焼瓦(瓦当面の剥落著しい)		R8	B6747
3	第1層	48	軒平瓦511	瓦当部1/2	-	-	-	5.0	二重弧文 aタイプ		R3	B6749
4	第1層	48	軒平瓦660	1/5	-	-	-	(5.0)	均整唐草文 平瓦部ⅡBa2類 平瓦部厚さ:(3.0cm)		R1	B6749
5	第1層	48	軒平瓦640	瓦当部完形	-	-	28.5	4.5	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:(2.3cm)		R1	B6750
6	第1層	73	軒平瓦640	瓦当部1/2	-	-	-	5.3	単弧文 aタイプ1 平瓦部厚さ:(2.5cm)		R17	B13577
7	第1層	73	軒平瓦650	瓦当部破片	-	-	-	(3.0)	二重波文 bタイプ 額面に横位縄叩き目		R45	B13578
8	第1層	73	軒平瓦720?	瓦当部破片	-	-	-	(7.0)	瓦当面文様が不明瞭 額面に指で書いたような波文(棟平瓦の可能性?)		R48	B13578
9	第1層	73	軒平瓦721A	瓦当部1/2	-	-	-	6.0	均整唐草文 aタイプ		R50	B13578
10	第1層	48	軒平瓦721B	瓦当部1/2	-	-	-	6.0	均整唐草文 aタイプ 瓦当面に范を2度押し? 平瓦部厚さ:(2.5cm)		R1	B6752
11	第1層	7	軒平瓦721B	瓦当部1/3	-	-	-	6.0	均整唐草文 aタイプ		R1	B3603
12	第1層	48	軒平瓦?	瓦当部破片	-	-	-	(3.0)	瓦当面に横位の太い沈線 新種?	131-7	R8	B6752

図版 121 第1層_出土遺物(1)



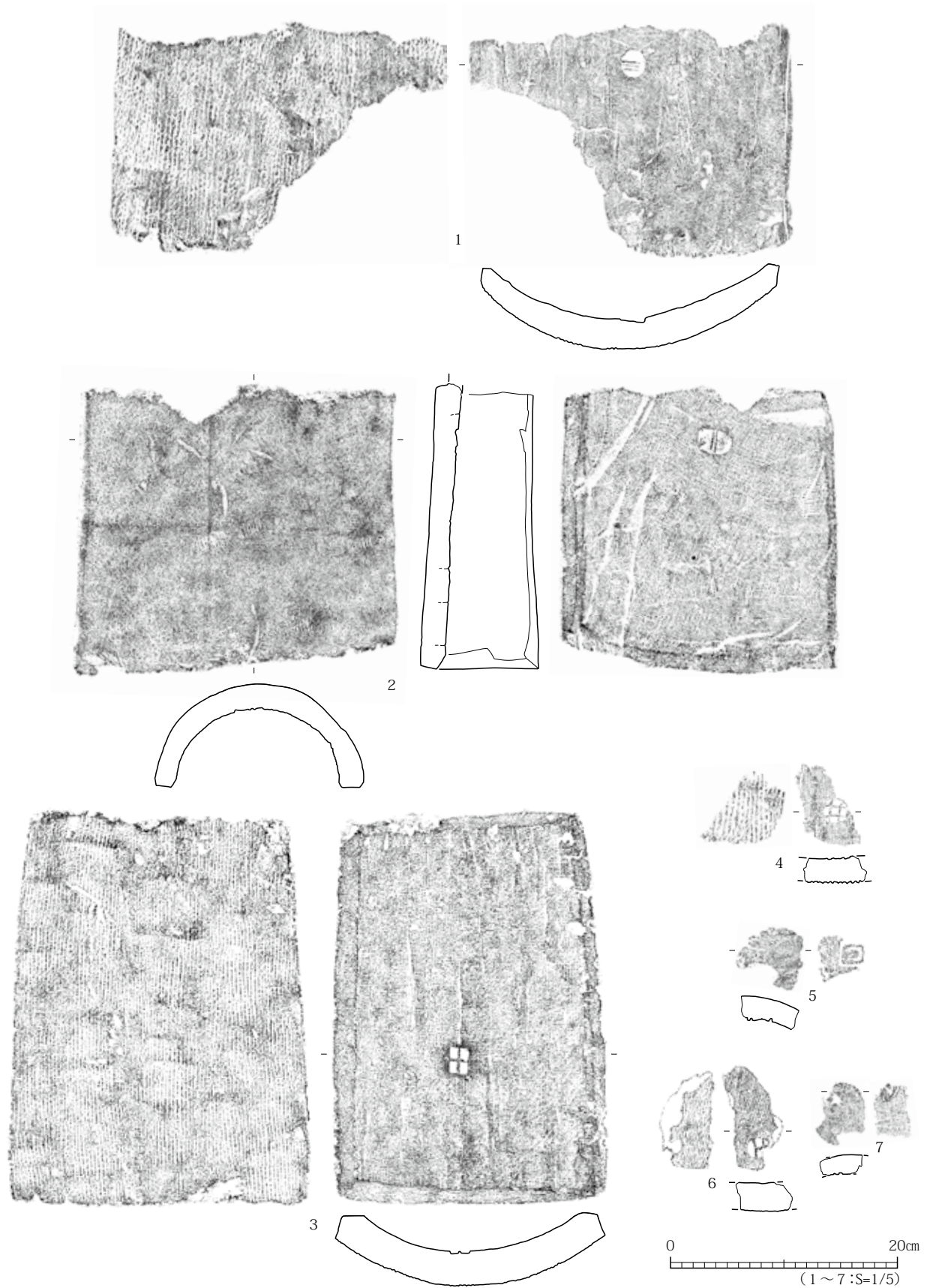
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		長さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	7	鬼板953	破片	—	—	—	(3.8)	右脚部付け根付近の破片 中心に大型垂弁蓮花文 釘穴は方形 裏面：鶯の子状の圧痕	132-4	R 1	B 15511
2	第1層	48	鬼板953	破片	—	—	—	(3.5)	周囲に連珠と唐草文 裏：鶯の子状の圧痕	132-1	R 2	B 15511
3	第1層	48+72	鬼板953	破片	—	—	—	(3.5)	周囲に連珠と唐草文 裏：鶯の子状の圧痕	132-3	R6+R1	B 15511
4	第1層	72	鬼板960?	破片	—	—	—	(3.8)	鬼面鬼板 鬼顔の目・頬の部分?	132-5	R 11	B 15511
5	第1層	48	面戸瓦	破片	—	—	—	(2.0)	凸面：縄叩き目→ナデ 凹面：布目 端部をヘラケズリ加工	133-3	追R 32	B 6753
6	第1層	48	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	11.5	—	(2.1)	左面：ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 分割線の深さ：0.7cm	132-10	R 10	B 6753
7	第1層	48	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.2)	左面：ナデ 右面：縄叩き目(つぶれ) 分割線の深さ：0.7cm		R 4	B 6753
8	第1層	87	熨斗瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.2)	左面：縄叩き目(つぶれ) 右面：布目(→ナデ) 分割線の深さ：0.7cm 器面黒色 桃瓦		R 190	B 15363
9	第1層	48	熨斗瓦Ⅰ	破片	—	—	—	(2.1)	左面：縄叩き目 右面：縄叩き目(つぶれ) 器面黒色		R 1	B 6753
10	第1層	72	隅切瓦	破片	—	—	—	(2.0)	平瓦ⅡB類の端部隅を切り取る		追R 22	B 13505
11	第1層	72	隅切瓦	破片	—	—	—	(1.8)	平瓦ⅡB類の端部隅を切り取る		追R 25	B 13524
12	第1層	48	道具瓦	破片	—	—	—	(2.5)	平瓦ⅠA類の端部をヘラケズリ加工		追R 33	B 6563
13	第1層	48	道具瓦	破片	—	—	—	(2.3)	凸面：ナデ+粘土の貼り足し痕 凹面：布目→ナデ		追R 41	B 6622
14	第1層	73	道具瓦	破片	—	—	—	(2.0)	端部に半円状の窪み		追R 12	B 13912
15	第1層	73	道具瓦	破片	—	—	—	(2.0)	小口もしくは側面に縄叩き目 凸面：縄叩き目 凹面：布目		R 216	B 13583
16	第1層	72	道具瓦	破片	—	—	—	(3.0)	厚みあり 表裏面：ナデ 側面：ヘラケズリ		R 10	B 13241
17	第1層	48	道具瓦	破片	—	—	—	(3.5)	全面をナデ調整		追R 36	B 6569
18	第1層	48	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.0)	丸瓦部凸面に新出の刻印文字「占」B	133-6	R 4	B 6755
19	第1層	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(2.0)	凸面に刻印文字「伊」		R 77	B 13579

図版 122 第1層_出土遺物(2)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第1層	73	丸瓦II	破片	-	-	(1.3)	凸面に刻印文字「田」A? 焼瓦(凹面の剥落著しい)		R 76	B 13579
2	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(1.8)	凹面に刻印文字「田」A 凹面黒色		R 6	B 6755
3	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(2.5)	凹面に刻印文字「田」C?		R 1	B 6755
4	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(2.0)	aタイプ1 凹面に刻印文字「物」A		R 2	B 6754
5	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(1.5)	aタイプ2 凹面に刻印文字「物」A		R 5	B 6554
6	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(2.3)	aタイプ2 凹面に刻印文字「丸」A		R 7	B 6754
7	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(2.0)	aタイプ2 凹面に刻印文字「丸」B		R 7	B 6754
8	第1層	73	平瓦II B	破片	-	-	(2.5)	凹面に刻印文字「矢」A		R 90	B 13282
9	第1層	48	平瓦II B	破片	-	-	(2.3)	aタイプ1 凹面に刻印文字「矢」B		R 3	B 6754
10	第1層	73	平瓦II C	破片	-	-	(2.0)	凹面に刻印文字「上」A		R 115	B 13580
11	第1層	73	平瓦II C	破片	-	-	(2.3)	凹面に刻印文字「上」B		R 116	B 13580
12	第1層	48	丸瓦II	破片	-	-	(2.0)	凹面に刻印文字「本」+ヘラ書き「×」		R 8	B 6755
13	第1層	48	平瓦II C	破片	-	-	(2.0)	凹面に新出の刻印文字「古」	133-11	R 4	B 6755
14	第1層	73	平瓦II C	破片	-	-	(1.0)	凹面に刻印記号(『本文編』PL.104-3?)		R 108	B 13580
15	第1層	73	平瓦II C	破片	-	-	(2.0)	凹面に刻印記号(『本文編』PL.104-6)		R 109	B 13580
16	第1層	73	平瓦II C	破片	-	-	(2.0)	凹面に刻印記号(『本文編』PL.104-2)		R 106	B 13580
17	第1層	73	丸瓦II	1/3	-	-	(2.0)	凹面に刻印記号(『本文編』PL.104-9)		R 97	B 13579

図版 123 第1層_出土遺物(3)



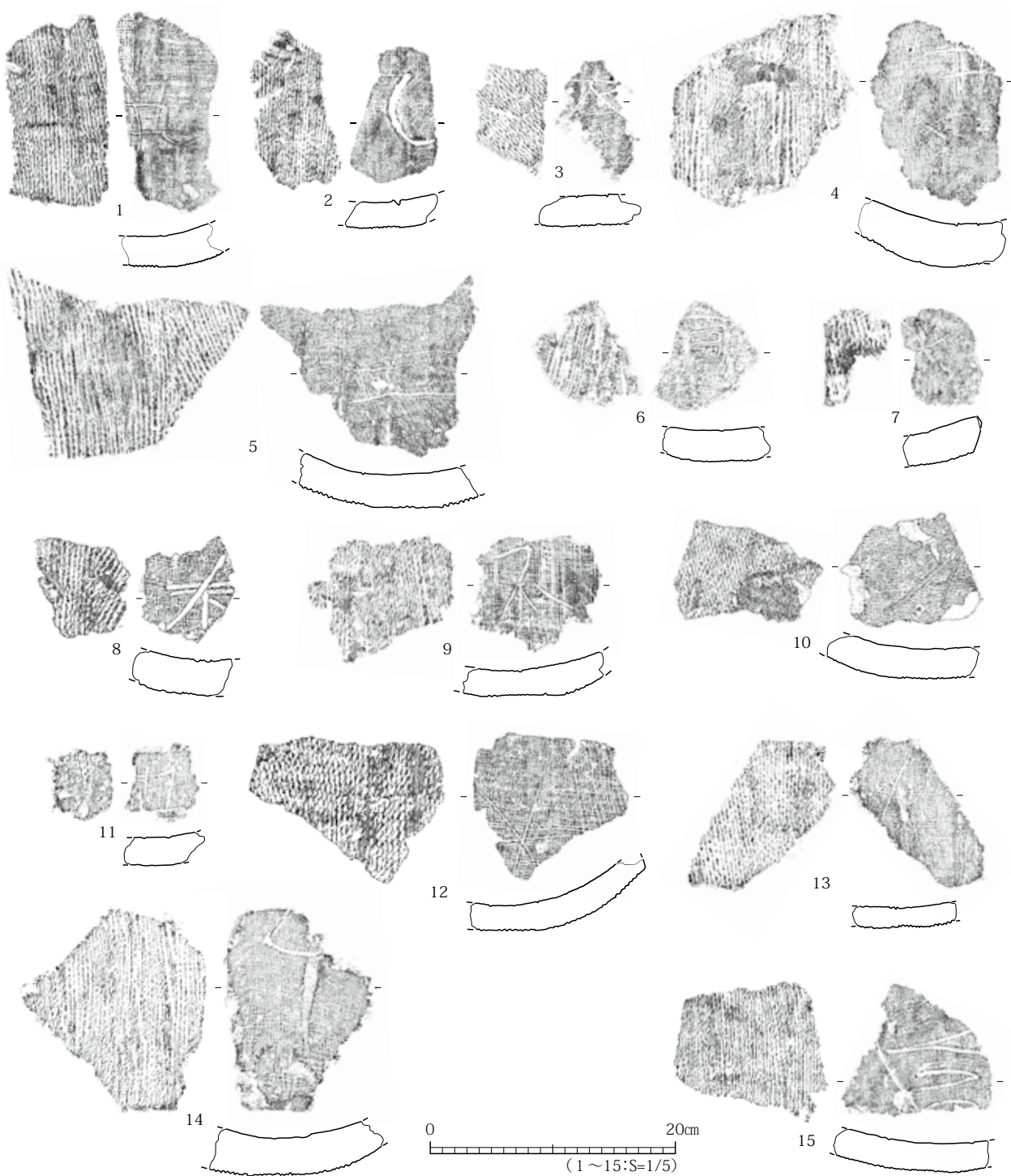
No.	出土遺構・層位	回数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特 徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	72	平瓦ⅡC	2/5	—	—	—	3.0	凹面に新出の刻印記号? (『本文編』PL.104-11に類似するが外側が円形で、3本線の間隔が異なる)	133-10	R 88	B 13282
2	第1層	7	丸瓦ⅡB	丸瓦部完形	—	—	18.8	2.3	丸瓦部凹面に刻印記号 (『本文編』PL.104-12)		R 13	B 6596
3	第1層	7	平瓦ⅡC	完形	34.0	21.4	23.9	3.0	凹面に刻印記号 (『本文編』PL.105-2)		R 101	B 3600
4	第1層	72	平瓦ⅡC	破片	—	—	—	(2.3)	凹面に刻印記号 (『本文編』PL.104-17)		R 89	B 13282
5	第1層	73	丸瓦ⅡB	破片	—	—	—	(2.0)	凹面に刻印記号 (『本文編』PL.105-3)		R 98	B 6554
6	第1層	72	平瓦ⅡC	破片	—	—	—	(2.5)	凹面に新出の刻印文字「下」	133-7	R 8	B 13241
7	第1層	73	丸瓦Ⅱ	破片	—	—	—	(1.8)	凹面に新出の刻印記号 (『本文編』PL.104-13の陰陽を反転した形態)		R 105	B 13579

図版 124 第1層_出土遺物(4)



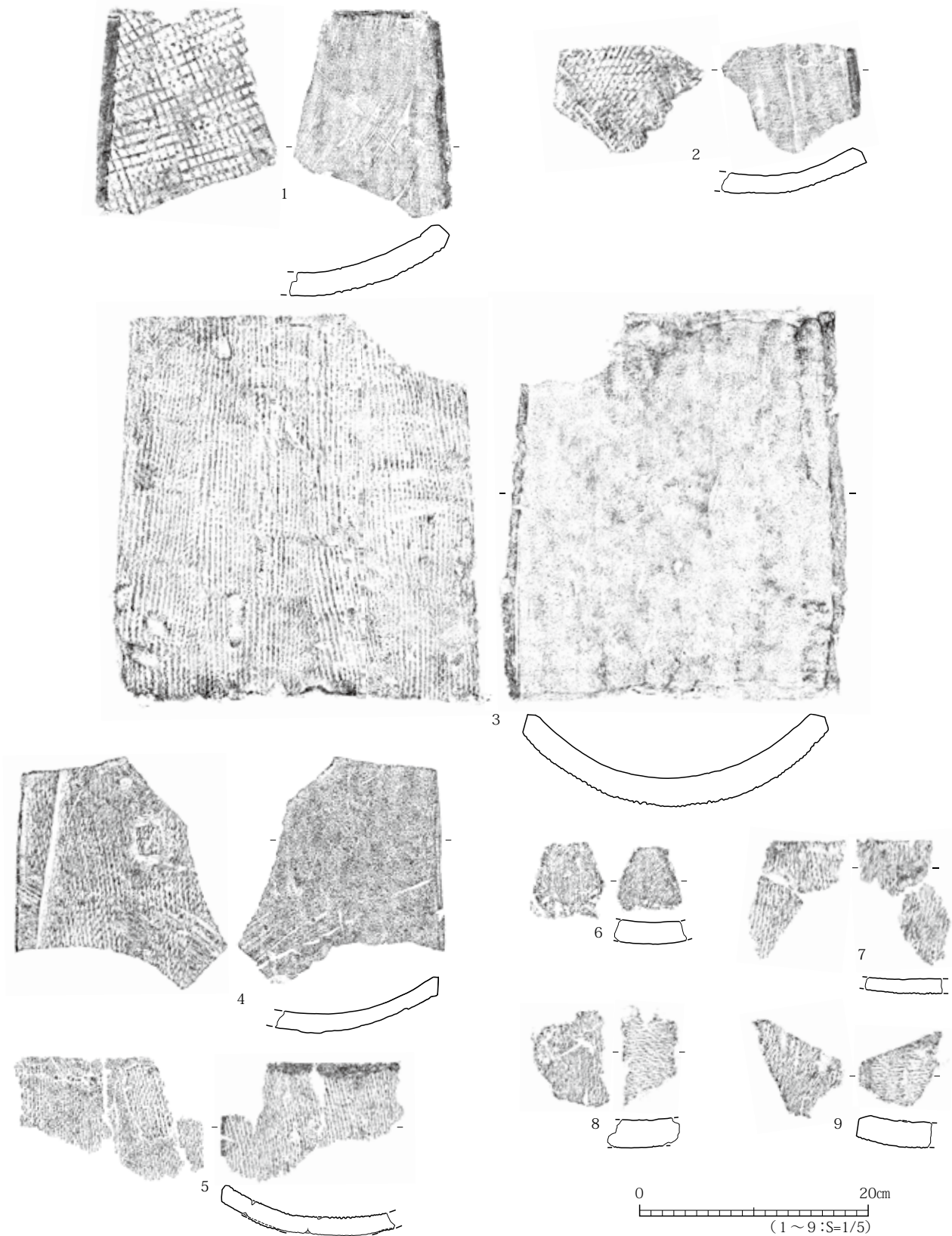
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	72	平瓦II C	破片	-	-	-	(3.0)	凹面に刻印記号(『本文編』PL.105-5)		R 87	B 13282
2	第1層	48	丸瓦II	破片	-	-	-	(1.5)	凹面に新出の刻印記号「○」(『本文編』PL.105-5より○の径が大きい)	133-8	R 12	B 6755
3	第1層	72	丸瓦II B	破片	-	-	-	(1.9)	玉縁部凸面にヘラ書き「富田」カ? 玉縁長: 8.0cm	133-13	R 9	B 13240
4	第1層	73	丸瓦II B	2/5	-	-	-	2.0	丸瓦部凹面にヘラ書き「≡」 丸瓦部長: 28.2cm		R 132	B 13580
5	第1層	73	丸瓦II B	1/4	-	-	-	(2.0)	丸瓦部凹面にヘラ書き「王」カ? 玉縁長: 7.5cm		R 126	B 13580
6	第1層	48	丸瓦II	破片	-	-	-	(1.8)	凹面にヘラ書き「大」カ?		R 29	B 6756
7	第1層	73	丸瓦II	破片	-	-	-	(1.8)	凹面にヘラ書き「Φ」カ?		R 1	B 6756
8	第1層	73	丸瓦II	破片	-	-	-	(2.0)	凹面にヘラ書き「○」カ?		R 136	B 13581
9	第1層	73	平瓦I A	破片	-	-	-	(2.0)	凸面にヘラ書き「百本」カ?	133-12	R 233	B 13583
10	第1層	73	平瓦II B	破片	-	-	-	(2.5)	凹面にヘラ書き(不明、文字カ?)		R 198	B 13582
11	第1層	72	平瓦II C	2/5	-	-	-	2.5	凹面にヘラ書き「七」		R 125	B 13283

図版 125 第1層_出土遺物(5)



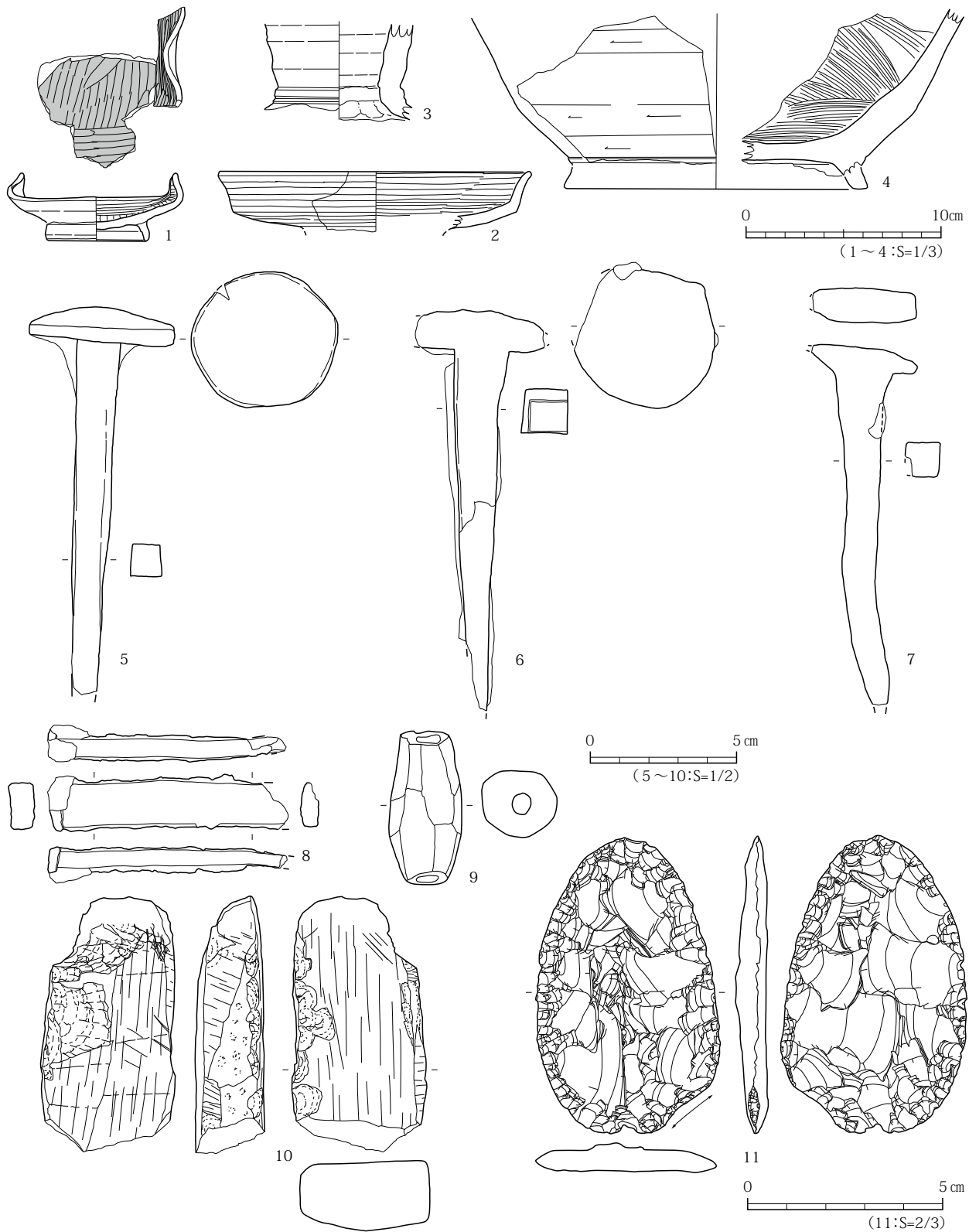
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.8)	凹面にヘラ書き「丸」		R167	B13281
2	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.3)	凹面にヘラ書き「丸」or「九」?		R169	B13281
3	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.5)	凹面にヘラ書き「大」		R172	B13281
4	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(3.6)	凹面にヘラ書き「井」		R173	B13281
5	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(3.0)	凹面にヘラ書き「工」か?		R168	B13281
6	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.6)	凹面にヘラ書き「日」か?		R174	B13281
7	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.8)	凹面にヘラ書き「米」か?		R210	B13582
8	第1層	48	平瓦II C	破片	—	—	—	(3.0)	凹面にヘラ書き(不明)		R8	B6756
9	第1層	72	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.8)	凹面にヘラ書き(不明)		R132	B13580
10	第1層	48	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.8)	凹面にヘラ書き「本」か?		R5	B6756
11	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.3)	凹面にヘラ書き(不明)		R206	B13582
12	第1層	48	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.3)	凹面にヘラ書き「*」か?		R5	B6756
13	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.0)	凹面にヘラ書き「×」		R182	B13582
14	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(3.5)	凹面にヘラ書き「L」か? +指書きとみられる太い直線1本		R186	B13582
15	第1層	73	平瓦II C	破片	—	—	—	(2.5)	凹面にヘラ書き(不明)		R187	B13282

図版126 第1層_出土遺物(6)



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
						狭端	広端					
1	第1層	72	平瓦 I Ca	1/4	-	-	-	(2.5)			R 214	B 13285
2	第1層	72	平瓦 I Cb	破片	-	-	-	(2.0)			R 215	B 13285
3	第1層	7	平瓦 II B	ほぼ完形	34.0	-	27.0	2.7	aタイプ2		R 12	B 3601
4	第1層	48	平瓦 II B	1/4	-	-	-	(1.8)	bタイプ 凸面に方形突出 狭端辺が斜めに切られているか?		R 100	B 6753
5	第1層	72	平瓦	破片	-	-	-	(1.9)	凸面:布目→粘土貼付→縄叩き目 凹面:縄叩き目→布目 器面赤色		R 187	B 13285
6	第1層	73	平瓦	破片	-	-	-	(2.1)	凸面:縄叩き目→布目 凹面:縄叩き目→ナデ		R 227	B 13583
7	第1層	73	平瓦	破片	-	-	-	(1.4)	凸面:布目→縄叩き目(つぶれ) 凹面:縄叩き目→布目→粗いナデ 薄くて扁平		R 221	B 13583
8	第1層	73	平瓦	破片	-	-	-	(2.8)	凸面:縄叩き目(つぶれ) 凹面:布目→縄叩き目		R 219	B 13583
9	第1層	73	平瓦	破片	-	-	-	(2.6)	凸面:縄叩き目(つぶれ) 凹面:布目→縄叩き目		R 220	B 13583

図版 127 第1層_出土遺物(7)



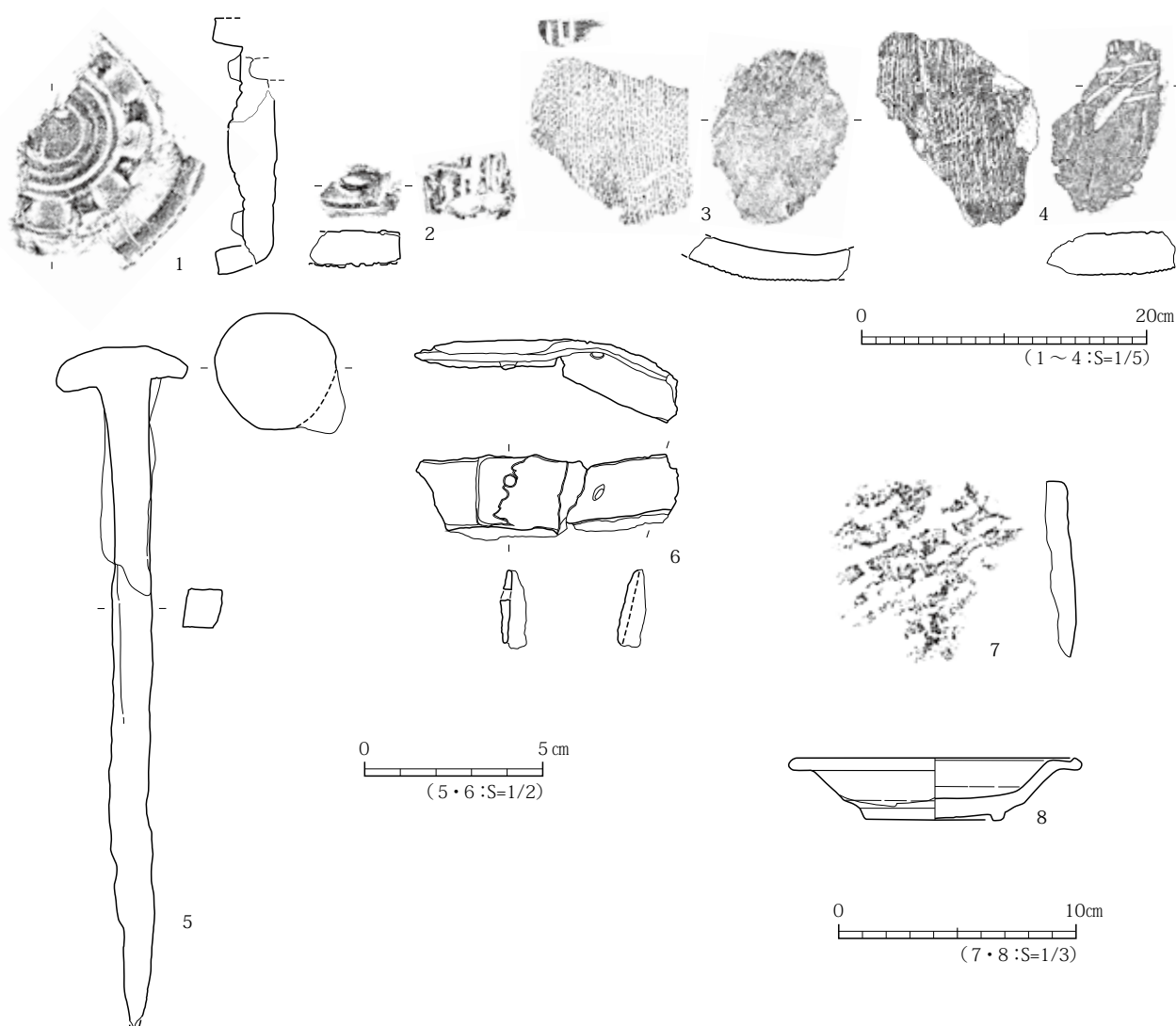
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第1層	73	土師器・耳皿	1/2	—	5.0	(3.6)	内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：静止糸切り無調整		R6	B13586
2	第1層	73	須恵器・高台杯	破片	(16.1)	—	—	内外面：全面ヘラミガキ		R2	B13586
3	第1層	73	須恵器・瓶	破片	—	—	—	頸部のみ 頸部と肩部の境に突帯 大戸窯製品		R4	B13586
4	第1層	73	須恵器・瓶	破片	—	—	—	体部下半のみ 外面：回転ケズリ 大戸窯製品		R5	B13586
No.	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
5	第1層	7	鉄釘	4/5	(13.2)	1.4	1.3	先端欠損 断面方形 頭部円形(径5.0cm)	134-10	RM2	B13918
6	第1層	48	鉄釘	5/6	(13.6)	1.6	1.4	先端欠損 断面方形 頭部円形(径4.7cm)	134-9	RM27	B13923
7	第1層	48	鉄釘	5/6	(12.3)	1.3	1.1	先端欠損 断面方形 頭部は長方形(「T」字状、3.6×1.2cm)	134-8	RM28	B13923
8	第1層	73	鑿	2/3?	(8.1)	1.5	0.7			RM14	B13567
9	第1層	73	土師質	完形	5.2	2.5	—	土師質 孔径：0.6cm		R7	B13586
10	第1層	73	砥石	1/2?	(8.8)	4.5	2.4	凝灰岩製		R9	B13567
11	第1層	73	両面加工石器	完形	7.6	4.7	0.7	珪質頁岩製		R1	B13586

図版 128 第1層_出土遺物(8)

須恵器破片の中には、内面が磨耗していることから転用硯の可能性のある甕・瓶の各1点、内面に漆が付着する坏・瓶の各2点が認められた。須恵系土器は坏・高台坏がある。灰釉陶器は瓶の破片が1点ある。

鉄製品には釘・鑿・鉄滓と2つの貫通孔をもつ小札状の鉄製品(図版129-6)がある。掲載した鉄釘4点(図版128-5~7、129-5)はいずれも断面四角形の角釘で、頭部は円形(饅頭型)のものと同長方形のものがある。この他に頭部が扁平につぶされて折り曲げられたものや両端を欠く角釘が計5点出土している。鑿は2点(図版120-5・128-8)あるが、図版120-5は断面が角の取れた四角形で厚みがあり、頭部のつぶれも明瞭には認められないことから、別の用途も考えられる。金属製品としては、近世土壙墓(SK2715、図版69)から出土したキセル、六道銭(古寛永:初鑄=1633年)などの銅製品もみられた。

鉄製品



No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	ピット	7	軒丸瓦451	瓦当部1/2	-	-	(3.5)	陰刻花文		R1	B3596
2	埋戻土	87	鬼板953?	破片	-	-	(2.8)	右脚部の末端か? 裏面: 簀の子状圧痕		R223	B15363
3	埋戻土	87	平瓦II C	破片	-	-	(2.2)	小口に刻印記号(『本文編』PL.105-7)		R201	B15363
4	表採	48	平瓦II C	破片	-	-	(2.9)	凹面にヘラ書き(不明、文字か?)		R3	B6756
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
5	ピット	48	鉄釘	ほぼ完形	(19.0)	1.2	1.1	先端欠損 断面方形 頭部円形(径:3.3cm)	134-7	R M23	B13923
6	攪乱	73	小札状鉄製品	-	(7.5)	2.3	0.2	両端欠損 孔径:0.3cm		R M13	B13587
No	出土遺構・層位	次数	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
7	SF202・崩壊土	73	縄文土器・深鉢	破片	-	-	-	縄文 結節文か?		R5	B13586
8	SK2715・埋土	73	施釉陶器・折縁皿	1/2	12.4	5.8	2.6	瀬戸・美濃大窯第4段階(16世紀末~17世紀初頭頃)		R1	B13586

図版 129 その他の出土遺物

その他の遺物 土錘(図版 128 - 9)は土師質のもの、砥石(図版 128 - 10)は凝灰岩製のもので一端を欠く。縄文土器(図版 129 - 7)はSF202 築地堀崩壊土から出土したもので、深鉢形土器の体部破片とみられ、外面に粗い縄文(結節文?)が残る。石器(図版 128 - 11)は表土出土の剥片を素材とした両面加工石器で、基部に浅い抉りが認められる。図版 129 - 8はSK2715 土壙墓底面付近から人骨片とともに出土した瀬戸・美濃大窯第4段階(16世紀末～17世紀初頭頃)の施釉陶器折縁皿で、副葬品とみられる。

註

- (1) 政庁南大路については、第43・44・50・74・78・79・89次調査(『年報1983・1987・2003・2006・2007・2015』)で対象区域の発掘調査を実施しており、実態が明らかになりつつある。これまでの調査成果を概括すると、以下の通りである。
- ・政庁南門と外郭南門を結ぶ城内道路(SX1411)で、東側の丘陵斜面を削り出し、西側に盛土をして造成されている。
 - ・道路幅は第I・II期(SX1411 A)が約13mで、第三期以降(SX1411 B)には約23mに拡幅されている。A・B道路東端では東側溝(SD1412・1363)が検出されており、A道路西端には石垣が伴う。
 - ・造成当初から政庁南大路の路心はほぼ南北の発掘基準線(政庁中軸線)上にあり、これを基準として造られた直線道路である。
 - ・南部の路面高が最も低くなっていたとみられるS306付近には造成当初から一貫して暗渠(SD1413)が設けられており、その改修や道路の嵩上げ状況からA道路をA1～3に細分している。暗渠出土の木簡からA1道路の構築年代を神亀初年頃(724～725)、A2道路への改修を天平9年前後(737)、A3道路への改修を第二期(762～780)とみており、東側溝ではこの改修に伴う溝の掘り直しも確認されている。
 - ・SB2776門跡およびこれと一連の南辺区画施設の発見により、第I期には外郭南門前面まで延びる道路であった可能性が高まっている。
- また、検出した道路跡・東側溝について各次の調査で別番号を付してきた経緯があり、『年報2007』(第79次調査)でその対応関係を整理し、番号を統一している。本報告書で対象とする地区の周辺では、第43・44次調査でSX1411道路跡、SD1363溝(23m道路東側溝)、第74・78次調査でSX2785道路跡、SD2771溝(23m道路東側溝)の遺構番号を付していたが、第79次調査でSX1411道路跡・SD1412・1363溝(13m道路・23m道路東側溝)に統一しており、今回はこれに従う。
- (2) 第79次調査(『年報2007』)では、SB2776門跡の方向を東妻の柱列でみて、南北の発掘基準線(政庁中軸線)に対して北で東へ3°程振れると考えた。しかし再検討の結果、柱穴掘方の各辺の方向が概ね発掘基準線に一致していること、柱穴の中心を結んだラインも同様であること、断ち割りを行い柱位置が確認できた棟通り下の柱筋も発掘基準線と同方向であることから、SB2776の方向は発掘基準線にほぼ一致すると訂正する。この場合、SB2776はSX1411道路跡(政庁南大路)に正対するが、東西両側の遮蔽施設との取り付きは多少斜めとなる。遮蔽施設の方向をみると、東西の発掘基準線に対して西側のSA3180材木堀は東で南に5°、東側のSX2909積土遺構は南へ7°振れており、これらの状況はSB201外郭南門跡とSF202・1556築地堀跡との関係と共通している。
- (3) 総掘込地業を伴う建物は礎石式であると考えられ、城内の検出事例からその地業範囲は概ね上部に築成される基壇の平面範囲を反映しているものと理解される。検出事例の詳細については第四章1-ii(a)で言及している。
- (4) SX1551掘込地業西脇の地山面に載る整地層を第48次調査ではC整地層としていたが、第87次調査で、この層は更に西側で検出しているSX1562基礎整地(SF1556a築地堀跡の基礎整地)と土の特徴や南北の分布域が共通することから、同一層であると判断した。同様に、D整地層としていたSX3240基壇築成土より新しい整地層についても、西側で検出しているSX3248整地層(SF1556c築地堀跡に伴う嵩上げ整地)と同一層であると考えている。
- (5) SX3250は南門より古い道路跡で、対比するとすれば北側の政庁南大路ではSX1441A道路跡、南側の南北大路ではSX3000a道路跡となる。SX1441AはS190～309の範囲で確認されており(『年報1983・1987・2006・2007・2015』)、路幅は13m前後で、路心はほぼ政庁中軸線上にあるとみているが、南部の西から沢が入り込む部分ではやや東の丘陵側へ寄る。道路は第I期から存在し、路幅は南へゆくほど拡がる傾向にあるが、SX3250とは路幅の値に多少の開きがある。また、SX3000aはS444以南で確認されており(『年報2008』)、路幅は概ね18mで、路

- 心は政庁中軸線上からやや西へ寄り、南へゆくほどそのずれが大きい。道路は第Ⅱ期以降には存在したと考えているが、第Ⅰ期の道路については判然としておらず、SX3250の路幅の値とも開きがある。これらのことから、SX3250・SX1441 A・SX3000 aは同一線上にある政庁南門から城外へ伸びる一連の道路と考えられるが、外郭南門の移動との関係を含めてその位置付けを再検討する必要がある、現段階では南門下で検出した道路跡にSX3250の番号を付した。
- (6) 第48次調査ではSA1538・3242の柱穴3個を合わせてSA1538柱列跡とし、簡易な門と部分的に設けられた塀の複合施設である可能性を想定したが、第87次調査で現在の見解に改め、別の遺構番号を付して扱っている。
- (7) 第48次では、SA1538柱列がSB201 A門跡の礎石掘穴より新しいとしていたが、第87次でその平・断面を再検討した結果、本柱列の方が古いと見解を改めた。SA1538の柱穴・柱抜取穴の埋土に焼土・炭化物粒が含まれていないことも重複関係を見直す一因となった。
- (8) SX3238 整地層は、第48次調査で主にSX205 築成土としていた層である。SX205 東辺の掘り残し部を中心に分布する南門の基壇築成土とみていたが、第87次調査でその東端は掘込地業の範囲を越えて約2.5 m東まで伸びることが判明し、土の特徴も明らかに掘込地業とは異なることから別番号を付している。
- (9) SX3238 整地層とSX205 掘込地業の重複関係について、第48次では前者が後者より新しいとみていたが、第87次の再調査では両者の前後関係を確認できていない。
- (10) 第73次調査では、東から続いてきた基礎整地(SX2742)がこの場所で途切れ、その上に積まれたSF202 a築地塀跡が更に西へ伸びるとし、SX3239を築地積土と捉えていた。しかし、第87次調査でSX2742のE 10.5から西側は一度削り取られた後に再び同じ高さまで嵩上げされており、その上に築地本体が築成されていることが判明した。そこで、この嵩上げにあたるSX3239を整地層と改め、別番号を付している。因みに、第48次調査では、SX3239 aをSF202 B 1築地積土の一部、SX3239 bをSX1539 整地層の一部としていた。
- (11) 第7次調査の際に南北方向のトレンチを入れた箇所はSD204 溝とほぼ重なっていた。この調査では、E 6付近のトレンチ東壁の観察からSD204は焼土層に覆われているとしたが、溝の堆積土中にも焼土が含まれることが記録されており、第73次調査で検出したSD2746 溝(SD204と一連の溝)でも同様に堆積土中に焼土が含まれていた。また、トレンチ東壁の位置はSD204の東壁近くで、その東側には焼土を多量に含むSX3245 嵩上げ整地層が分布している。これらのことを勘案すると、第7次調査の焼土層はSX3245の一部で、SD204の東壁に見えたものの可能性が高く、この溝はSX3245 整地層を切って掘り込まれ、さらに古いSX205 掘込地業まで掘り込んでいたと考えられる。
- (12) 第48次調査では、SK1547 土壌下の地山面でSK1548・1549の小土壌を確認していたが、いずれもこの土壌底面の浅い窪みを捉えたものであった。
- (13) 第48次調査では、SK1563 土壌について一辺約0.8 mの方形のもの(A)と、これを切る長軸0.7 mの楕円形のもの(B)がほぼ同位置で重複しているとみていた。この場合、Aが柱穴の掘方で、Bが柱の抜取穴となり、SA1564 柱穴と組んだ柱列の存在も想定される。このことも含めて第87次調査で再確認・検討したが、SK1563の埋土は明確にA・Bには分けられず、一つの土壌と理解することとした。また、重複関係でもSA1564 → SK1554 → SK1547 → SK1563の順に新しいことを確認し、SK1563とSA1564の組み合わせを考えることは難しいと判断した。
- (14) 第73次調査ではこの面をSH2748 広場としていたが、第87次調査で遺構の全体を再検出した結果、削り出された面に傾斜があつて平坦ではないことが判明したことからSX2748 削り出し面と改めた。
- (15) 第48次調査では、SX2748 削り出し面上に堆積した層を上からA 1～3層に大別している。この薄い自然堆積層はそのA 3層にあたり、削り出しの北壁際と削り出された地山面の部分的な窪みに分布することが確認されており、南半部で上面が焼けている状況が観察されていた。因みに、SX3245 嵩上げ整地層はA 2層に相当する。
- (16) 第73次調査のE 12～19区間で嵩上げ整地②としていた層のうち築地塀本体の南側部分は北側で検出されているb積土と類似し、同様に本体を削り取った後に対となる位置で積まれていることから同時期に行われたb補修の痕跡と第87次調査で改めた。
- (17) 第73次調査のE 42～60区間で基礎整地Ⅱとしていた層とa築地塀本体とみていた層の下部がSX3251 盛土に相当する。上下の遺構との間に間層は認められないが、この部分の特徴は明らかに上下層とは異なり、その違いは基礎整地Ⅱとa本体を分けた違いよりも明瞭である。その他、嵩上げ整地層と崩壊土の解釈には多少の変更が生じている。
- (18) 第73次調査では、E 42～60区間のSX3243 整地層をSX2742 基礎整地やSX3251 盛土とは時期の異なる嵩上げ整地(嵩上げ整地①)と考えた。その場合、SF202 a機能時には築地塀本体の南北両脇が溝状に大きく窪んでいたこととなり、雨水による基底部への影響などを考慮すると形態面でも違和感があつた。
- (19) これらの寄柱礎石とその掘穴については、第7・48・73次調査で部分的に検出し、その位置付けを行ってきたが、第87次調査でそれらを面的に検出することによって全容が判明した。いずれもSX3245 嵩上げ整地層よりも下位に位置している点でも矛盾しない。

- (20) SB201 B門跡の推定基壇範囲については、SK3241 土壌の性格も含めて第四章 1 - iii で詳細に触れる。
- (21) 第 48 次調査の所見では、柱穴 p 14 ~ 17 を含めた周辺 7 個の柱穴を SA1535 小柱穴群とし、SX3238・3239 整地層下（当時の SX205 築成土下および SB201 B 1 積土下）の地山面で検出したとしている。第 7 次調査で大半が掘り下げられており、整地層との前後関係の判別は難しかったと思われるが、所見通りであれば、柱穴 p 14 ~ 17 は SF202 b には伴わない。
- (22) 第 7 次調査では、焼土層から二重波文軒平瓦 650（第 III 期）も 1 点出土したとされているが、再整理ではその瓦を確認することができなかった。
- (23) a・b 積土と c 積土の間層となる崩壊土は、E 14.5 ~ 19 区間（図版 63）、E 24・45 の断ち割り断面（図版 62 の m-m'・67 の u-u'）で確認している。第 73 次調査では、この崩壊土中に灰白色火山灰（T o-a）の粒が含まれると報告していたが、第 87 次の再調査で含まれていないことを確認し、訂正した。灰白色火山灰はさらに上位とみている基本層序第 III 層に含まれるが、両者の直接の上下関係は捉えられていない。
- (24) この瓦列については、第 7 次調査の平面原図に記録されているが、種類の記載はなく、d 補修にあたる積土も認識されていない。平面図に記された瓦の形状と写真を見る限り、中央 3 枚目は平瓦もしくは軒平瓦で、完形に近いと思われる。『年報 1970』によると、この瓦列には二重弧文軒平瓦 710 が含まれる。
- (25) 掘込地業上の築成土下層とみていた土は掘込地業埋土の一部であることが判明した。
- (26) 第 48 次調査では、周辺で検出した 4 個のピットを SA1555 ピット群とし、SX3254 盛土より古く、SX1562 基礎整地の上面から掘り込まれているとみていたが、第 87 次調査でベルト断面や埋土の特徴などを再検討した結果、いずれも SX3254 より新しいと判断した。
- (27) 周辺で埋土に火災の痕跡を示す焼土が顕著に認められる遺構として SK1547 土壌、SB201 B 門跡の礎石掘穴、SF1556 c 築地塀跡に伴う SX3248 嵩上げ整地層が挙げられる。これらの遺構間には直接の重複関係がなく、相対的な遺構の前後関係や出土遺物（瓦）の年代観から同一の火災に起因する焼土を含むものとみられ、南門周辺が大規模な火災に遭っていることが窺われる。特に SK1547 の埋土には焼土および炭化物、瓦片が多量に含まれており、その瓦の年代観から火災が伊治公告麻呂の乱(780 年)によるもので、土壌は火災の後片付けをしたものと考えられる。また、SB201 B と SF1556 c は火災後に再建、補修された南門と築地塀ということになる。この火災の痕跡をメルクマールにすると、SF1556 a 築地塀跡は火災以前のものとなり、それに伴う柱穴は基本的に焼土を含まないことから、埋土に焼土を含むものを除外した。
- (28) SF1556 a 築地塀跡に伴う可能性があるとみた 13 個の柱穴は、第 72 次調査で寄柱穴もしくはその抜取穴とした柱穴とは異なるものが多い。それは検出面や配置、埋土の特徴を再確認・検討した結果で、柱穴が築地本体の南北両裾から若干外側に離れて東西に並び、南北の柱間間隔が 3.0 m 前後ある状況は、南門東側の SF202 a 築地塀跡に伴う添柱穴と考えている柱穴と共通した特徴である。但し、SF202 a では柱穴の内側で築地本体に半ば食い込む寄柱礎石が検出されている点、桁行方向の柱間がほぼ 3.0 m 等間で一定している点で、SF1556 a の柱穴とは異なる。
仮に SF1556 a の柱穴を寄柱穴とみた場合、築地塀の基底幅は 3.0 m 前後となり、門東側の SF202 a（基底幅 2.6 m）とは基底幅に約 40cm の違いが生じることになる。
- (29) SX3248 嵩上げ整地層は、第 87 次調査で W 26・32 の南北断ち割り断面を再確認・検討した結果、その存在が明らかになったもので、第 72 次調査で築地本体北側の「南第 7 層」と南側の「南第 5 層」とした整地層がこれにあたる。第 72 次では、W 39 の断面観察から築地塀の南北両裾に「南第 5 層」を設けて e 補修に伴う嵩上げ整地と捉えたが、その層の上面には築地本体を挟んだ南北で約 0.4 m の高低差があることや、この断面に e 補修の本体積土が認められないこと、逆に W 39 以外の断面では e 補修の嵩上げ整地層が確認できないことなどに違和感があった。また、「南第 7 層」は帰属が判然としない嵩上げ整地層として捉えられていたもので、W 39 の断面では、両者は地山粘土ブロックを多量に含む点で共通し、近似した土色・土性を示している（図版 86 の a-a'）。
- (30) SX3257 嵩上げ整地層は、W 39 の南北断ち割り断面にみられる築地本体両側の各層を W 26・32 の断面の各層と対比して再検討した結果、その存在が明らかになったもので、第 72 次調査では e 補修に伴う嵩上げ整地層（築地本体北側の「南第 5 層」）と認識していた。
- (31) 玄室部の天井崩落土上の窪みに堆積した灰白色火山灰を含む 1 層は、SP2661 横穴墓の平面プランを確認する際に除去したため、その分布範囲を平・断面図に示すことができない。

軒平瓦分類 出土遺構	第I期		第II期		第III期計		第IV期		第III期 or 第IV期		第IV期		第V期計		不明計	合計
	二重瓦 511 511-513	二重瓦 or 三重瓦 511 or 514	単瓦 621	単瓦 or 二重瓦 640 or 641	無文 640 or 641	無文 641	新瓦 630 652	二重瓦 650 710	二重瓦 720 721A	均整唐草文 721A or 721B	均整唐草文 721B	均整唐草文 721B	均整唐草文 721B	均整唐草文 721B		
SX3240	1 0.45		1 0.45													1 0.45
SX2742				1 0.07												1 0.19
SX2742・3243の間層																0.19 0.28
SF202 a 崩壊土				1 0.75												1 0.75
SX3245 (廃土層)	1 1.33	1 3.15	2 4.48	5 4.32												7 8.80
SX3245 (廃土層以外)				1 0.67												1 0.67
SF202 b 南側崩壊土 (一括)				1 1.05												1 1.05
SF202 c 以降崩壊土				5 5.18												5 5.18
SF202 崩壊土				14 8.93	1 0.06	1 0.67										15 13.11
SF202 北側堆積土				4 2.45												4 3.25
SF1556 e 本体				1 0.98	1 1.31											2 2.72
SF1556 e 以降崩壊土	1 1.05		1 1.05	17 7.64												2 2.72
SF1556 崩壊土				2 0.93												2 0.93
SF1556 北側堆積土				2 0.47												2 0.93
SX2664		1 1.38	1 1.38	2 0.30	1 0.32											2 2.17
SX2675				2 0.30												2 1.24
SK1547	1 0.31		1 0.31	1 1.18	1 0.11	1 0.94										2 3.08
SK1550	4 2.19		4 2.19	1 1.45												8 4.40
SK2774																1 1.12
SK2731	1 0.25		2 0.39													2 1.50
SD1565	2 1.12	1 0.10	4 1.30	0.04												6 1.76
SD2662				1 0.04												1 1.30
SD2728				2 3.79												2 3.88
SD2734																1 1.16
SD2739				1 0.21	1 0.13											2 0.34
第I層(表土)	18 4.08	1 0.05	25 6.09	2 4.04	84 40.14	4 3.14	7 44.26	2 0.23	3 0.43	13 2.55	2 0.56	7 3.04	2 0.59	9 0.59	1 0.18	58 68.04
第II層	3 1.78		3 1.78	1 0.26	5 2.19	1 0.45	7 2.90	6 4.58	6 4.58	6 4.58	2 1.61	2 1.61	2 1.61	3 0.50	3 0.50	21 11.37
第V層(旧表土)																1 0.76
第VI層(地山確認面)																2 3.66
埋戻土・掘削・表築	2 0.86		2 0.86	1 0.37	6 3.18		7 3.55	1 0.21	1 0.50	1 0.51	2 0.76	1 0.16	1 0.16	6 0.78	6 0.78	21 7.33
合計点数(点)	34	1	46	7	159	7	187	1	4	22	33	7	7	10	5	82
合計重量(kg)	13.42	0.05	20.28	3.42	88.61	0.83	100.69	0.10	0.07	0.73	1.63	4.81	0.35	5.16	0.18	172.72

※ 上段の数字は点数(点)、下段の数字は重量(kg)、橙色の数字はSX3245 整地層の遺物を表す(中層)で取り上げたものとそれ以外のものに分けて集計

第12表 南門地区_出土軒平瓦の遺構別集計

瓦分類	丸瓦 (点/kg)				平瓦 (点/kg)										不明 (点/kg)	合計 (点/kg)		
	IA類	IIA類	II B類	II類	I A類	I B類	I Ca類	I Cb類	I D類	II A類	II B類	II Ba1類	II Ba2類	II Ba3類			II Bb類	II C類
出土遺構																		
SA1538	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	0	0.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.06
SA3242	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	0	0.10	0	0	0	0	0	0	0	0	0.02	0	0	0	0	0	0	0.12
SB201B	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	0	1	13
	0	0.33	0	0.05	0	0.49	0	0	0	0	0.03	0.13	0	0.99	0	0	0.02	2.04
SB2726	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.14	0	0	0	0	0	0	0	0.14
SB2727	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	8
	0	0.02	0	0.13	0	0	0	0	0	0.05	0	0	0.13	0	0	0	0.09	0.42
SD1545	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.15
SD1565	0	50	0	17	0	23	0	2	0	2	45	9	9	7	3	19	4	192
	0	3.62	0	1.29	0	2.97	0.14	0	0	0.10	0.18	1.05	1.46	0.69	0.27	2.52	0	19.42
SD2657	0	157	0	18	0	15	0	0	0	52	0	89	14	18	5	23	0	341
	0	9.08	0	1.66	0	1.44	0	0	0	2.53	0	7.57	1.51	3.53	0.70	0.63	4.73	6.06
SD2658	0	28	0	3	0	7	0	0	0	2	1	4	3	0	1	5	0	65
	0	1.37	0	0.16	0	0.47	0	0	0	0.11	0.37	0.66	0.19	0.21	0	0.06	0.71	0
SD2662	0	65	0	5	0	8	0	0	0	29	0	19	7	3	0	1	5	211
	0	2.94	0	0.62	0	0.33	0	0	0	1.95	0	1.33	0.69	0.32	0	0.03	1.03	0
SD2663	0	153	0	12	0	24	8	2	0	78	0	83	8	16	3	7	20	536
	0	8.68	0	1.27	0	2.28	0.73	0.16	0	5.22	0	38.31	0.76	2.04	0.48	0.76	2.29	0
SD2667	0	20	0	2	1	6	0	0	0	4	0	20	3	12	2	4	5	86
	0	1.48	0	0.45	0	1.01	0	0	0	0.35	0	3.1	0.31	2.15	0.52	0.65	0.68	0
SD2667-2668 確認面	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	1	11
	0	0.16	0	0.27	0	0	0	0	0	0	0	0.17	0.51	0.05	0	0	0.39	0
SD2668	0	26	0	0	0	4	0	0	0	12	0	6	2	3	2	0	3	55
	0	1.12	0	0	0	0.37	0	0	0	0.55	0	0.28	0.58	0.86	0.13	0	0.69	0
SD2672	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	9
	0	0.54	0	0	0	0.13	0	0	0	0	0	0.2	0	0.07	0	0.25	0	0
SD2673	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	8
	0	0.09	0.33	0.09	0	0	0	0	0	0	0	0.04	0	0	0	1.15	0	0
SD2674	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
	0	0.02	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.08	0	0	0	0	0
SD2720	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	0	0	0	0.45	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD2722	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	1	5
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.32	0	0.25	1.02	0	0	0	0.03	0
SD2728	0	59	1	4	0	7	1	0	0	4	0	6	24	1	0	3	13	123
	0	6.4	0.39	4.33	0	1.54	0.26	0	0	1.35	0	0.63	3.47	0.04	0	0.40	0	0.35
SD2729	0	30	1	3	0	2	0	0	0	1	0	4	3	0	0	3	0	48
	0	4.61	0.57	0.55	0	0.74	0	0	0	0.14	0	0.67	0.26	0	0	0.25	0	0.05
SD2733	0	9	0	1	0	6	0	0	0	0	0	3	1	2	0	0	1	23
	0	0.67	0	0.28	0	1.15	0	0	0	0	0	0.39	0.15	0.64	0	0	0.03	0
SD2734	0	36	1	4	1	6	1	0	0	6	0	7	3	10	1	1	12	90
	0	4.50	1.06	0.39	0.07	1.54	0.08	0	0	0.59	0	0.81	0.28	2.59	0.4	0.72	0.21	0
SD2739	0	64	0	19	0	15	2	0	0	12	0	39	15	4	2	3	27	242
	0	4.69	0	2.87	0	1.58	0.10	0	0	1.24	0	3.53	2.27	1.75	4.02	0.36	7.64	0
SD2741	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.12	0.39	0	0	0	0
SF1556a 本体	0	5	0	0	0	2	1	0	0	1	0	1	3	1	0	0	0	0
	0	0.38	0	0	0	0.60	0.14	0	0	0.03	0	0.08	0.24	0.14	0	0	0	0

※ 上段の数値は点数 (点)、下段の数値は重量 (kg)

第13表 南門地区_出土丸・平瓦の遺構別集計 (1)

出土遺構	瓦分		瓦 (点/kg)								平瓦 (点/kg)								不明 (点/kg)	合計 (点/kg)
	IA類	IIA類	IA類	IB類	ICa類	ICb類	ID類	IIA類	IIA類	II B類	II Ba1類	II Ba2類	II Ba3類	II Bb類	II C類	その他				
SF1556a 崩壊土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	7			
SF1556c 本体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.33	0	0	0	0	0	0	0.66			
SF1556e 本体瓦積 以降崩壊土	0	0.14	0	0	0	0	0	0	0	0.07	0.11	0	0	0	0	0	0.32			
SF1556e 崩壊土	0	12	1	10	0	1	0	0	0	15	29	5	0	0	2	3	89			
SF1556b 崩壊土	0	4.21	0.86	3.98	0	0.27	0	0	0.93	2.88	13.80	4.02	0	0	1.42	0	37.43			
SF1556e 以降崩壊土	0.96	1670	2	246	7	93	4	378	3	415	492	213	41	52	451	0	4711			
SF1556a 崩壊土	0	475	3	81	1	37	5	102	3	156	158	81	15	9	138	1	1437			
SF1556b 崩壊土	0	46.91	1.03	14.73	0.11	5.84	1.46	7.10	0.49	19.28	28.34	18.80	3.64	1.94	29.94	0.05	189.55			
SF1556 北側堆積土	0	101	0	12	0	5	3	4	0	30	43	10	0	3	40	0	300			
SF1556 北側堆積土	0	8.03	0	1.46	0	0.55	0.60	0.53	0	2.88	6.71	2.87	0	0.66	5.09	0	31.07			
SF202a 崩壊土	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1			
SF202a 崩壊土	0	0.41	0	0	0	0	0	0.13	0	0	0.54	0	0	0	0	0	1.09			
SF202b 南側 崩壊土 (一括)	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	7			
SF202b 崩壊土	0	2.13	0	6.17	0	0	0	0	0	0.37	1.56	0	0	0	0	0	10.23			
SF202b 崩壊土	0	36	0	2	0	1	0	0	0	26	9	11	2	1	2	0	91			
SF202b 以降崩壊土	0	8.85	0	6.17	0	0.44	0	0	0	2.63	3.57	5.69	1.49	0.38	1.17	0	30.40			
SF202b 以降崩壊土	0	2	0	1	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	21			
SF202c 本体	0	0.08	0	0.01	0	0.09	0	0	0	0.08	0	0	0	0	0	0	0.42			
SF202c 本体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3			
SF202c 本体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.25	0	0	0	0	0	0.25			
SF202c 本体	0	17	0	3	0	0	0	0	0	3	2	8	0	0	14	0	47			
SF202c 本体	0	2.38	0	3.77	0	0	0	0	0	2.28	0.40	1.54	0	0	9.09	0	19.46			
SF202 崩壊土	0	2214	6	349	3	91	22	97	3	382	359	163	47	82	1000	0	6006			
SF202 崩壊土	0	209.94	2.86	60.84	0.35	20.03	3.27	9.84	0.53	52.00	74.38	47.82	10.30	27.06	210.27	0	759.51			
SF202 北側堆積土	0	168	1	35	0	7	0	0	0	70	108	36	3	13	98	0	555			
SF202 北側堆積土	0	24.82	1.07	9.27	0	1.19	0	0	0.19	11.08	28.88	17.49	1.62	3.56	33.32	0	133.24			
SF202 南側堆積土	0	71	1	22	0	3	0	7	0	33	32	25	5	6	44	0	269			
SF202 南側堆積土	0	12.92	0.24	7.89	0	2.81	0	0.54	0	6.34	7.18	15.15	2.20	4.34	20.83	0	81.70			
SK1547	0	54	0	8	0	35	5	8	0	41	20	24	1	1	0	0	221			
SK1547	0	4.79	0	1.81	0	4.80	0.63	0.27	0.84	3.85	2.60	3.53	0.10	0.05	0	0	23.51			
SK1550	0	293	0	48	1	38	4	42	1	137	51	46	10	6	21	1	748			
SK1550	0	24.61	0	8.78	0.03	5.72	0.39	1.98	0.07	15.78	7.55	13.67	1.93	0.75	6.56	0.06	88.78			
SK1553	0	23	0	3	0	5	0	0	0	3	2	0	0	2	6	0	52			
SK1553	0	1.65	0	0.62	0	1.21	0	0	0.24	0.09	0.22	0.38	0	0.20	0.89	0	5.54			
SK1554	0	4	0	0	0	1	0	1	0	7	5	6	0	1	0	0	28			
SK1554	0	0.64	0	0	0	0.04	0	0.04	0	1.05	0.46	1.44	0	0.86	0	0	4.61			
SK2665	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4			
SK2665	0	0.06	0	0	0	0	0	0	0.04	0	0.04	0	0	0	0	0	0.16			
SK2666	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1			
SK2666	0	0	0	0	0	0	0	0.02	0	0	0	0	0	0	0	0	0.02			
SK2715	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	5	0	13			
SK2715	0	0.22	0	0.09	0	0	0	0	0	0	0.14	0.10	0.63	0	0.76	0	2.03			
SK2717	0	31	0	6	0	1	2	0	0	3	5	5	0	4	8	0	68			
SK2717	0	4.48	0	1.48	0	0.10	0.37	0	0	0.46	1.34	1.64	0	2.02	1.52	0	13.54			
SK2718	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5			
SK2718	0	0.82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.82			
SK2719	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	6			
SK2719	0	0.24	0	0	0	0	0	0	0	0.11	0.17	0	0	0	0.05	0	0.57			
SK2724	0	54	0	12	0	2	0	1	0	19	18	12	0	2	23	0	154			
SK2724	0	5.90	0	2.30	0	0.09	0	0.07	0	1.98	3.88	2.16	0	0.44	3.20	0	20.31			

※ 上段の数値は点数 (点)、下段の数値は重量 (kg)、水色の塗りはSF202b 築地跡崩壊土の遺物を南側一括取り上げたものとそれ以外のものに分けて集計

第14表 南門地区_出土丸・平瓦の遺構別集計(2)

瓦分類 出土遺構	丸瓦 (点/kg)				平瓦 (点/kg)											不明 (点/kg)	合計 (点/kg)				
	IA類	II類	IIA類	IIB類	I類	IA類	IB類	ICa類	ICb類	ID類	II類	IIA類	IIB類	IIBa1類	II Ba2類			II Ba3類	IIBb類	II C類	その他
SK2725	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
	0	0.32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.27	0	0.12	0	0	0.71	
SK2731	0	181	1	54	0	74	57	0	0	19	0	58	49	28	8	28	51	0	26	634	
	0	18.13	0.81	12.37	0	15.99	10.33	0	0	2.48	0	9.01	13.22	7.28	4.17	8.37	9.24	0	1.07	112.47	
SK2732	0	13	0	1	0	1	5	0	0	1	0	5	1	1	0	0	4	0	3	35	
	0	1.63	0	0.08	0	0.42	1.52	0	0	0.13	0	0.8	0.30	0.16	0	0	1.02	0	0.16	6.22	
SK3256	0	7	0	1	0	0	2	0	0	0	0	4	3	1	0	2	1	0	5	26	
	0	0.17	0	0.52	0	0	0.11	0	0	0	0	0.30	0.28	0.28	0	0.16	0.18	0	0.09	2.09	
SP1559	0	15	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	5	0	3	32	
	0	1.04	0	0.24	0	0	0	0	0	0	0	0.34	0.37	0	0	1.00	0	0.16	3.15		
SP1560	0	9	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	0	10	0	1	28	
	0	1.12	0	0.29	0	0	0	0	0	0	0	0.77	0	0.22	0	1.90	0	0.02	4.32		
SP2661	0	146	0	26	0	8	3	0	0	40	0	24	13	11	1	1	24	0	73	370	
	0	10.40	0	3.24	0	0.85	0.22	0	0	2.04	0	2.05	1.36	1.09	0.05	0.13	7.23	0	1.77	30.43	
SX1562	0	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	7	
	0	0.10	0	0.11	0	0.03	0	0	0	0.13	0	0	0.10	0	0	0	0	0	0.01	0.48	
SX2664	0	77	0	16	0	11	2	0	1	43	0	27	12	9	3	3	19	0	107	330	
	0	4.7	0	1.36	0	1.15	0.11	0	0.08	3.46	0	2.45	1.39	1.64	0.43	0.23	3.55	0	23.97	34.2	
SX2675	0	177	0	36	0	24	7	0	0	69	0	90	15	27	3	6	36	0	97	587	
	0	11.61	0	3.13	0	3.37	0.77	0	0	4.74	0	9.27	2.52	5.92	0.37	0.55	7.08	0	3.81	53.14	
SX2748	0	9	0	1	0	2	0	0	0	0	0	6	0	1	0	0	0	0	0	19	
	0	0.23	0	0.19	0	0.08	0	0	0	0	0	0.24	0	1.15	0	0	0	0	0	1.89	
SX3238	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	0	0	0	0	0	0.12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.12	
SX3239	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	6	
	0	0	0	0	0	0.29	0	0	0	0	0	0	0	0.12	0	0	0	0	0.02	0.43	
SX3243	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5	
	0	0.42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.16	0	0	0	0	0	0	0.58	
SX3245	1	67	1	4	0	19	6	0	0	1	32	20	25	25	0	0	0	0	15	191	
	0.04	9.47	1.16	3.05	0	7.55	5.16	0	0	1.39	5.16	6.63	21.15	0	0	0	0	0	0.37	61.13	
SX3248	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.67	
ピット	0	46	0	2	0	7	6	0	0	7	0	29	41	15	0	0	13	0	15	181	
	0	4.67	0	0.2	0	2.52	1.07	0	0	0.43	0	5.01	13.54	8.32	0	4.44	0	0.32	40.52		
遺構確認面	0	73	3	10	0	17	3	0	0	1	4	30	36	21	8	4	7	0	11	228	
	0	10.72	0.83	3.17	0	6.02	0.48	0	0	0.03	1.07	4.86	11.31	9.11	1.35	0.71	1.55	0	0.31	51.52	
第1層(表土)	19	15583	30	2779	25	1264	263	48	1	1160	93	4637	3190	1997	468	723	8692	15	4278	45266	
	3.08	1514.05	9.75	397.50	2.52	200.62	43.73	10.98	0.24	0.09	115.11	13.76	589.33	566.89	411.49	85.83	150.59	1759.82	2.14	166.89	6044.41
第II層	0	2052	4	381	7	186	15	4	0	264	4	779	420	343	47	63	692	0	243	5504	
	0	202.79	1.00	68.75	0.57	30.53	1.82	0.47	0	22.51	1.10	103.41	78.12	79.57	8.17	13.09	172.62	0	7.93	792.45	
第V層(旧表土)	0	428	0	85	0	35	2	0	0	36	1	120	113	64	15	7	166	0	51	1123	
	0	37.53	0	13.74	0	4.77	0.25	0	0	2.39	0.15	16.31	16.66	11.93	1.92	1.92	38.19	0	1.31	147.07	
第VI層(地山確認面)	0	16	2	1	0	3	0	0	0	1	0	2	17	1	0	0	0	0	1	44	
	0	2.5	0	2.16	0.17	0	1.24	0	0	0.10	0	0.47	4.18	1.40	0	0	0	0	0.01	12.23	
埋戻土・撈乱・表採	0	1736	1	277	0	171	45	5	0	191	16	830	397	273	52	73	416	0	265	4748	
	0	138.15	0.35	33.32	0	28.00	6.43	0.92	0	16.45	2.37	93.00	54.06	50.83	9.12	12.53	76.13	0	10.26	531.92	
合計	26	31	60	4614	47	2284	488	77	5	2689	147	8364	5784	3561	763	1118	12109	17	8028	76782	
4.08	2539.51	25.49	741.60	4.47	387.99	82.80	20.09	1.25	0.24	234.75	25.22	1078.91	1056.09	819.38	148.20	244.17	2572.67	2.25	283.31	10272.47	

※ 上段の数値は点数(点)、下段の数値は重量(kg)

丸瓦I類計	31280	丸瓦II類計	331068	平瓦I類計	2906	平瓦II類計	3346775	平瓦IIB類計	19580	平瓦II C類計	82	平瓦II B類計	3346775	平瓦II類計	34525	平瓦計	37448
丸瓦計	33066	丸瓦計	331068	平瓦I類計	496.84	平瓦II類計	6179.39	平瓦II類計	6179.39	平瓦I C類計	21.34	平瓦II B類計	3346775	平瓦II類計	6179.39	平瓦計	6678.48

第15表 南門地区_出土丸・平瓦の遺構別集計(3)



1～3:SP1560、4～11・14:SP1559、12・13:SP2661、15:SK1550、16:SF202c崩壊土

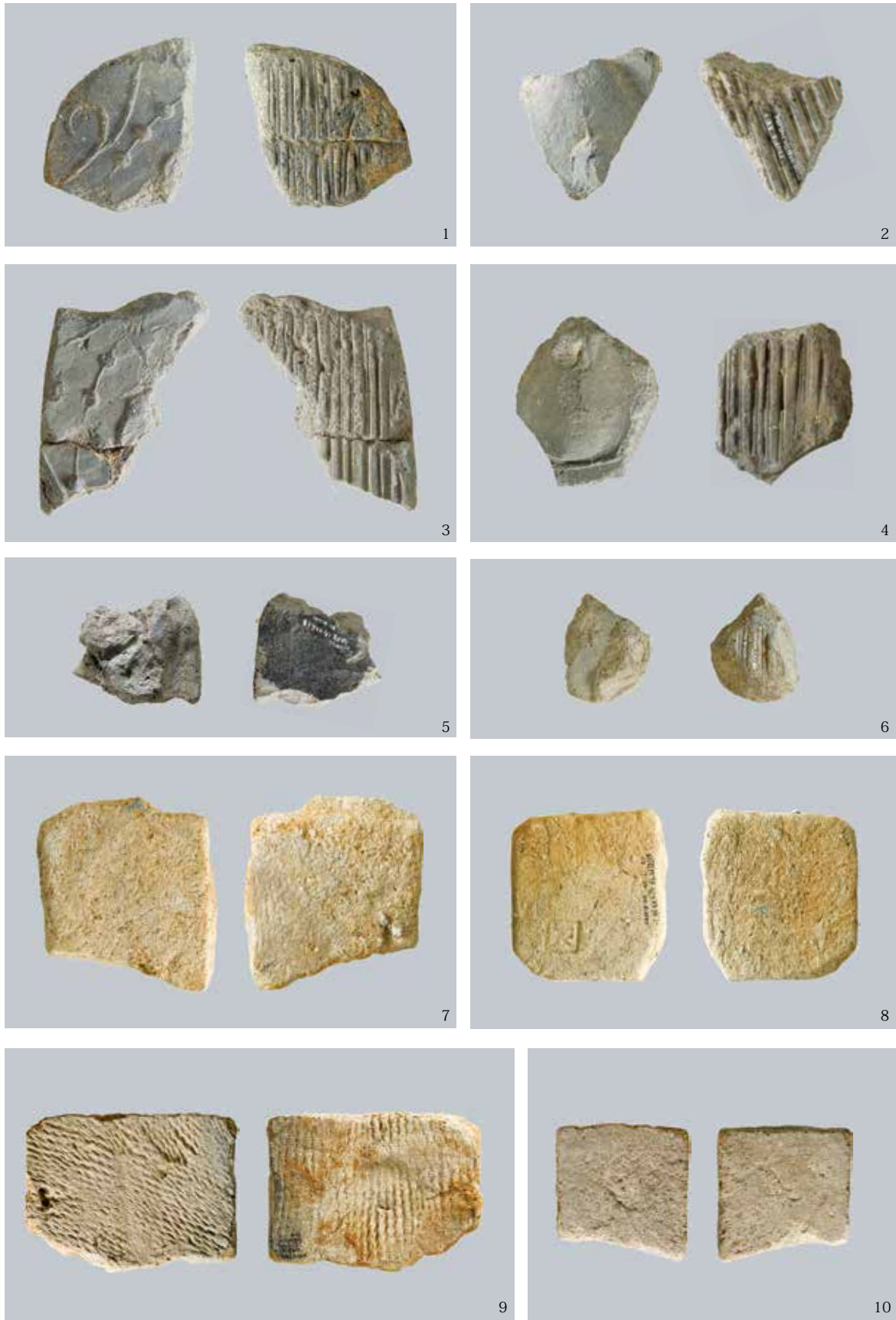
(縮尺:S=1/4)

図版 130 出土遺物写真(1)



1:SF202 南側崩壊土、2:SK1547 埋土、3: SX3245 中層、4:SF202 北側堆積土、5:SF1556e 本体瓦積、6・8: 第Ⅱ層、7: 第Ⅰ層 (縮尺:S=1/3)

図版 131 出土遺物写真(2)



1・3～5・10:第1層、2・7・9:SK1547、6:SF1556e 北側崩壊土、8:SF202c 崩壊土

(縮尺:S=1/5)

図版 132 出土遺物写真 (3)



1・2:SF202b 崩壊土、3・6-8・10-13: 第I層、4:SF202 南側崩壊土、5:SF1556e 本体瓦積、9:SK1550 上層 (縮尺 1-5:S=1/5、6-13:S=2/3)

図版 133 出土遺物写真 (4)



1・2：SK1547、3・4・6・11：SF202 北側崩壊土、14:SP1559、5：SD2734、7：ピット、8～10：第I層 (縮尺:S=1/3)



3～11 集合写真 前列左から：4,7,9,10,5,6 後列左から：3,8,11

図版 134 出土遺物写真 (5)



SP2661 横穴墓

(縮尺:1=1/6、2~6=1/2)



SP1559 横穴墓

(縮尺:1/2)



SX2664 整地層

(縮尺:1/2)



第II層

(縮尺:1/2)

図版 135 出土遺物写真 (6)